女人藝術



五月號

文學時代

五月號 創刊

▼新藝術新文化の母胎としてのアメリカとロシヤ……千葉龜雄 新居格

小說

佐藤春夫
横光利一
藤森成吉
岡田三郎
小酒井不木

私の愛するポーズ（寫眞と感想）……藤森成吉 三宅やす子 片岡鐵兵 佐藤春夫

私の十年前の回顧と十年後の豫想　文壇五十家

自己を語る（諸家の端的なる自己批判）……葉山嘉樹 龍膽寺雄

藝術の最尖端（トーキー、テレビション等）森岩雄

獨步の病牀に侍するの記……中村武羅夫

文學青年の社會的意義　大宅壯一

文學と社會の新 座談會

新居格　秦豐吉　淺原六朗　高田保　大宅壯一　勝本清一郎
楢崎勤　村山知義　北村喜八　室生犀星　○　佐左木俊郎

懸賞 文壇モデル小說（三篇）

この小說の中に描かれた作家は誰と誰か？懸賞にて讀者の解答を求める。

海外都會風物詩

□倫敦……野口米次郎
□巴里……西條八十
□上海……金子光晴
□紐育……堀口大學

▼夫婦隨筆……佐々木茂索 佐々木ふさ
▼取って置きの話……沖野岩三郎 長田秀雄
▼映畫の頁……村山知義
▼海外文學者の生活……堀口九萬一
▼海外文豪戀物語……小野浩

文壇時事問題批判

▼近代文學の都會……大宅壯一
▼文字の手品……大木雄三
▼興味的要素の問題……林房雄

一冊 參拾錢 ■ 東京 牛込 新潮社

田中清一氏著

詩劇集 戀の黄昏

四六版二百餘頁
用紙上質
装幀自装典雅
定價壹圓貳拾錢

最新刊
發賣

この闇黒の我が劇詩壇に吾等は強い光を持つた星を持つ！『戀の黄昏』一巻に充ち溢れる著者の氣品、そしてその精進から生れた光輝は、一讀して感嘆の聲を發せしめるを疑はない。「吾等の詩劇詩人」こゝにありと三嘆せしむるであらう。收めるところ『戀の黄昏』他五篇。いづれも著者獨自の境地を持ち、他の追從を許さない自信ある傑作、諸氏の一讀を俟つ。

内容＝戀の黄昏・修善寺の一夜・蟲の會話・他三篇

發行所　東京市外澁谷町金王八番地　振替東京七五六二四番　詩神社出版部

女人藝術五月號 目次

——[illegible]——

晩春行路

最近世相漫談會


爽快なる
初夏の御洋裝！
絹地
ボイル地 たくさん揃つてをります



初夏より夏のお帽子!!

船來もの豐富に
そろへて
皆樣をお待ち
申してをります

オリエンタル婦人帽子店

本店　東京市麻布區六本木町十六番地
電話　青山二八六一番
支店　東京市京橋區數寄屋橋通銀座交叉點際
電話　京橋三七四六番



去年の六月
吉林省の山奥に旅をして

ゆかしくも
鶯鳴くか奥山の
森のしゞきを
のる駒の行く

鳥居きみ子



遠い遙かな人よ

その人に見せたいばつかりに私は私の生活の一瞬をカメラに收めた。私がものを書くのもやつぱりその人に私を語りたいためでもある。

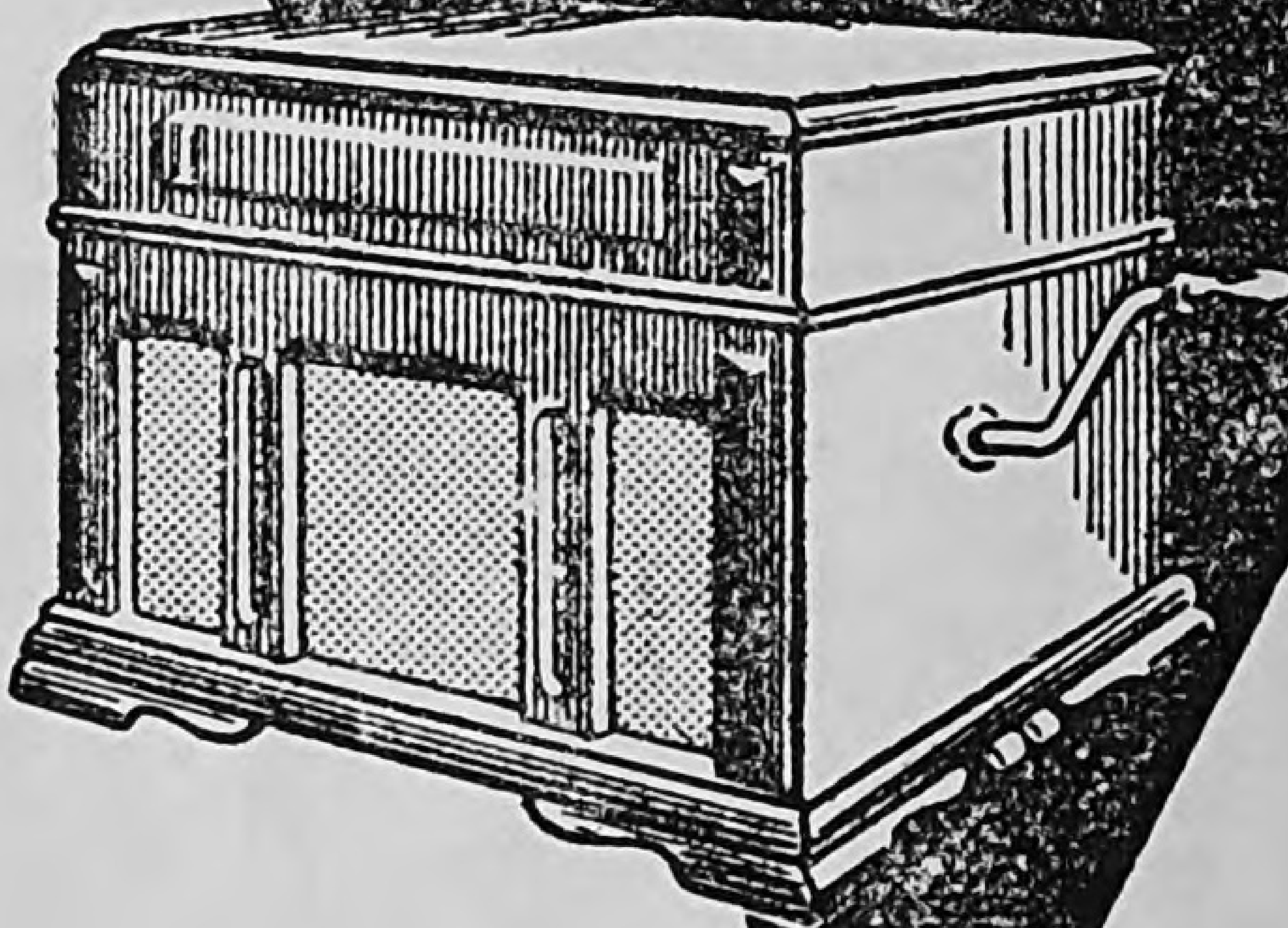
遠い遙かな人よ

生きてゐますか？それとももう私から更らに遠く遙かに此の世の外に去つてしまはれただらうか………

望月百合子

世界一を誇るビクター蓄音器

VICTROLA
NO.1-90-¥150

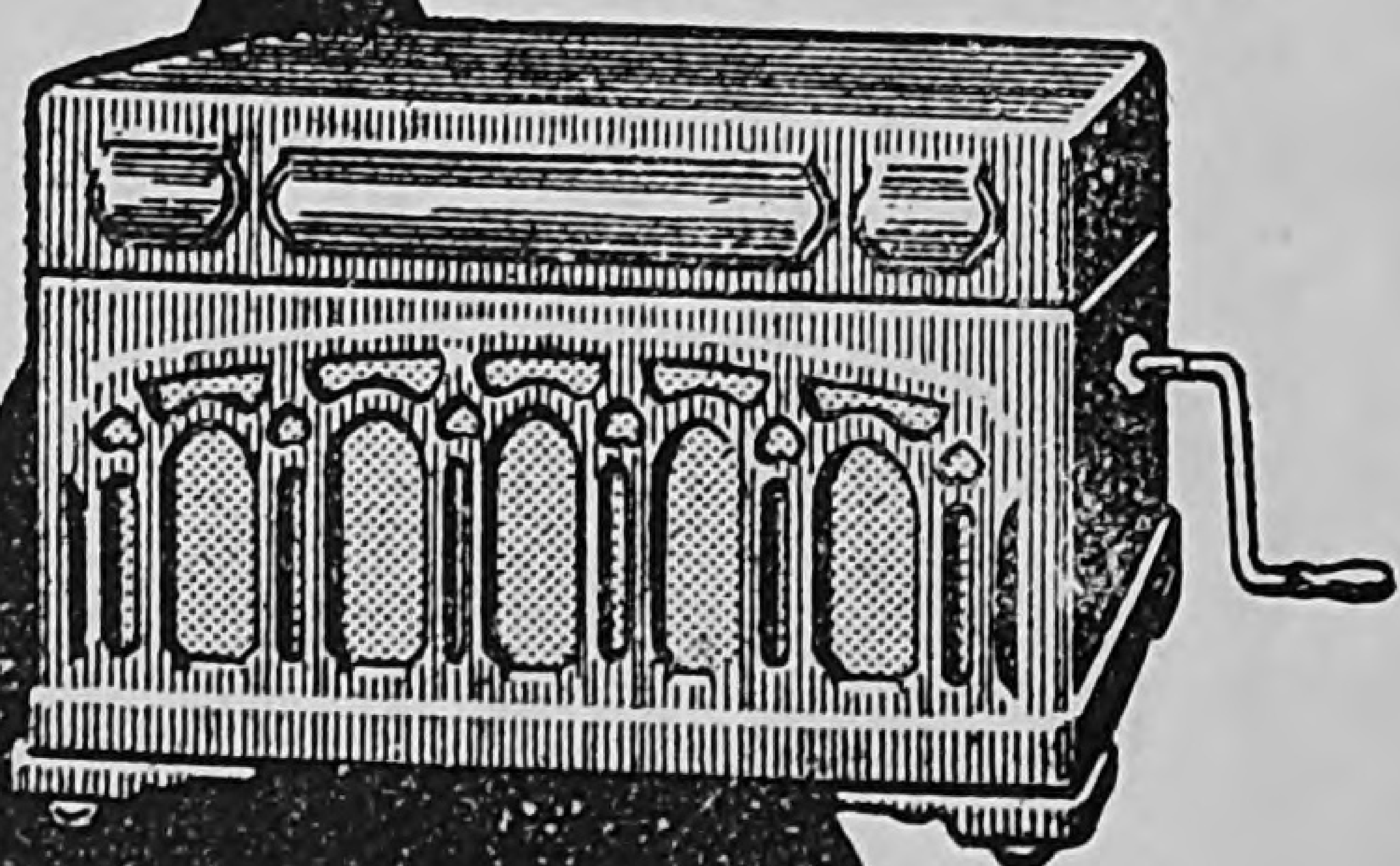


本器を試聴せずに蓄音器を求めらるゝは早計なり

目録贈呈

日本一を誇るマーヴェル蓄音器

MARVEL
NO. 2-¥75



ビクター大賣捌元

東京銀座三丁目

十字屋楽器店



デモストレーションの時の女軍——モスコー赤廣場にて



氣勢を揚げる東京・モスリン會社の爭議團本部

娛樂雜誌

プロレタリア

大衆

五月號が出た!!!

●自由勞働者座談會●

自由勞働者！と云へば世間の人々は、直ぐ、無智・亂暴・いやらしい等々と柳眉をひそめる。果して、無智か？亂暴か？いやらしいか？……生きた智識は體驗から或は生活そのものから生れないだらうか？力强い社會改造は、地下道から？土管の中から出發せねばならないのではないだらうか？自由勞働者諸君はさて、何を物語つたか？その純眞なる、眞摯なる、而して力强き叫びを聞け！

大長篇

自由黨秘聞 加波山

落合三郎

松山文雄畫

命を惜まない決死の志士が居ると云ふことを覺えて置け、正義と自由の爲めに身を捨てる同志は、日本全國いたるところに充ち滿ちてゐるんだ！……壓迫と反逆の鬪爭は、渦を卷き起し、事件は愈々展開して行く。

問題のプロ大衆小說

焚かれた武士　松本

（創作）闇のどん底！　江口

（自傳小說）世の中へ　山田

（探偵小說）フロレンス奇談　辻譯

現代世相スケッチ　堺

胃腑の感傷　本荘

澁い顔　岡本

◇時代の尖端に動く人々

―女人群像の卷―（三十錢）

△箔屋の丁稚から工場勞働者へ……そうして社會運動への過去十五年……　勞働者　青山義雄

追憶記（味の素・富士紡爭議）　勞働者　葛西辰雄

△小資本家のからくりは斯んなものだ！　勞働者　田所三四郎

岡辰老人と私の伜　白柳秀湖

△農民生活の實相―濱野信次　强訴徒黨竹槍蓆旗のモダン型・或る勞働者の獻立表・プロレタリアと新聞・露都モスクワにカブキ劇現はる

△新作プロレタリア落語　メーデー……横山芳夫

サラリーマンの憂鬱　和田隆

△感想　前田河廣一郎・藤森成吉・鈴木厚・山田淸三郎・落合幸太郎・芳雪散人

△海外モダン文藝　黑い目の蛇だ！ネウエーロフ・文化生活？ボ、フ

半ズボン團奮鬪記　藤枝丈夫　澤青鳥畫

芝公園十號の四

大衆社

振替東京八〇五〇一

女人藝術



五月號

メーデーを迎ふ

五月一日は世界に於けるプロレタリヤの安息日であり、全軍整備の日である。プロレタリヤは、男も女も老人も子供も仕事を休んでこの日を祝ひこの日を意義あらしめる。

この日は世界の歴史の上で、屢々プロレタリヤの闘士の上に血なまぐさい出來事を招來した。かうして此日は世界のプロレタリヤにとつては、彼等のために死んだ同志の尊い紀念塔でもある。

日本のメーデー、デモストレーションも年々盛んになつて行く。そしてプロレタリヤ婦人のこれに參加するものも逐年その數をましつゝある。

婦人解放運動は、その特性として從來は男性特權に對立して發生し、又發展して來た、しかし社會生活の上に新しく加はつて來た要素は、今やそれをブルジョア階級との對立の中に合流せしめてゐる。

今後の婦人運動は凡て全プロレタリヤ運動との合流を基準として準備せられ計畫さるべきであり、またさうされなくては所期の效果をあげることはできない。

完全なる婦人の解放はかくすることによつてのみ得られるからである。

婦人の解放に關心をもつ者は階級的自覺をもちこの日を祝ひ迎ふべきである。

市子

A.O.

最近世相漫談會

徳田秋聲
葉山嘉樹
林房雄
直木三十五
三上於菟吉
中河幹子
小金井素子
中本たか子
平林たい子
山田やす子

時雨　切抜を持つて來ましたから、皆樣のお考の儘に進めてくださいまし。

林　順を追ふて說明して下さい。

中河　文筆派出婦――大變難かしくて何時もハッキリ發音が出來ないのですが、あれ一日三圓づゝは隨分お安い。ぢやないでせうか。一時間三圓位でなければ、若し英語を敎へるにしても女子大學を出た方なら…

徳田　英語を敎授するのが本位ですか。

中河　さうぢやないのですけれど、たとへば英語を一日敎へて三圓。

三上　併し、大學出なんか毎朝九時から夕方の五時迄働いて五拾圓です。

中河　定收入になりますと、それはいいと思ひますが、派出婦といふ臨時に雇はれて行くので、少ければ一週間位しか行かないとすると、――三、七、二十一圓しか取れないといふことになりますから。

三上　併し是は實際問題が絡まると思ふが……理想論は色々あつて……。

徳田　私の家の小さい子供の家庭敎師は一時間二圓。一時間と言つても二時間足らずになるが…無論、それは他に何かやつて居るのでせうが。

中河　私は隨分安いと思ひまして、女のためにもう少し澤山。

葉山　所が男の家庭敎師はそれより澤山取つて居ますかね。

三上　文筆派出婦會ですか、あの人達の中にも、いろ／＼等級がおのづと出來ませう。中河さんが仰しやるよりも高い、一日十圓とか二十圓とかいふ方も、働きに依つて出來て來ませう。

葉山　一日八十錢から一圓二十錢位のがありますね。それは安いとは思ひませぬか。

中河　安いと思ひますよ。

葉山　それだつたら三圓を安いと思ふ前に八十錢の方から‥‥。

中河　やはり身に近いものを。

葉山　八十錢の方も餘程差引かれる、是も費消時間が多い。亭主は工場に出て働いて、女房は派出婦に出て、それで二人きりで巧くいつて精一杯、だから一時間二圓取つて居る者は、いろ〳〵の必要狀態もあらうが。

中河　それはさうでせうけれども、一つの教養技術を習得してゐるものと、してゐない者とが同じでは困ります。

葉山　それは資本家的の立場から言つた――第一生れると直ぐ貧乏な生活をして、さうして嫁に行つても亭主が食はせない。一日それこそ手の皮をたわしに代へて働いて、一日八十錢といふ派出婦があるから。

中河　其のことを若し論ずるとすれば根本的の問題に觸れなければならぬ。

三上　僕は餘り安いとは思つて居ないね。

中本　一般的の批評も安いとは思ひません。寧ろ高いと仰います。私も婦女界に四五日校正に參りまして三圓戴いて居りましたが自分でも高過ぎるやうな氣がします。三圓の値打をつけるためにはもつと職業的に訓練しなければ。學校出たての者が三圓では一月九十圓になります。さうすると普通の官廳などに較べると可成り高い樣な氣がします。尤もそれは臨時の仕事であるから高く取つてもいゝだらうといふので三圓と決めたのですけれ共兎も角仕事も少いので。

徳田　どの位校正が出來ます。

中本　校正の出る量ですか、十枚‥‥二十頁それ位のものでありました。

林　僕は決して高いとは思はぬのですが。それは別としまして、需要が多いのですか。

中本　相當に申込みがございます。

葉山　僕は併し中河さんが資本がかゝつて居るから文筆派出婦は高いと仰いましたが。

中河　資本といふと語弊がありますが、ぢや教養といひませう。あるものとないものと同じぢやをかしい。

林　だが今では電車の車掌及巡査は大學出と殆んど同じ俸給。而も大學出は最近の失業狀態を見ると五割から六割に及んで居る。

中河　ですからそれは今の教育制度といふものをすつかり變へなければならない――さういふ論をするとすれば。

葉山　けれども、それは女の優越感を求めて居る。女が小學校を出ただけで派出婦になる‥‥筋肉勞働‥‥‥是は八十錢で、一方女子大學を出た人や英學塾を出た人が一時間の勞銀が二圓ぢや安いといふのは、男子がこんな失業苦に脅かされて居る現在の狀態に女性にだけもつと良くしろといふことになりはしないか。

中河　勿論私は女性のみかたです。いつだつて女は男の下におかれてますもの。文筆派出婦人のはどうしても安いと思ひます。

三上　併し其の派出婦を離れて、文筆生活をするものを見ると私が知つて居る男が、相當教育のある人が飜譯を一つします。さうして今平均一枚一圓五十錢になつて居る人は少いと思ふ。

中河　一圓でせうか普通。

三上　それで而も一年の中に何册もらへるか派出婦がありつけないのと同じ位にありつけない。

中河　それぢや結局三圓で十分だとおつしやるのですか。

中本　さうぢやございませぬ。私は衝に當つて居りますけれども、能力と職業的賃銀を向上して行きたいと思ふ。今はポツト出ですからさういふことになりますが。

林　併し女學校出の事務員の給料は二十五圓から三十圓位でせう。

葉山　併し僕は斯ういふ立場にあるものが斯ういふ賃銀は少いといふことになると、例へば大倉喜八郎の夫人此の夫人が其の勞力に比して勞働賃銀と稱するには大きすぎる賃銀を受けて居る。斯ういふ敎育を受けた人間が斯く〳〵の賃銀以下では安す過ぎるといふことは、殆んど勞働賃銀の問題にならぬと思ふ。公爵の子供が千圓なければ生活出來ないから、是が正當である。平民の子供は乞食になつても構はない、といふならそれは問題でない、其の人が今迄受けて來た敎育といふものは、其の人が受けて來られるやうな事情にあつたからで、敎育を受けて來られないやうな事情にあつた人は、他の人が敎育を受けて居る間は、もつと悲慘な生活をして來た。



向つて左から三上於菟吉、林房雄、德田秋聲、直木三十五、長谷川時雨、素川絹子、速記者

中河　だから、學校を出た人はそれだけの働をもつて居る。例へば英語の圖書の整理を賴まれたやうな場合に、英文科を出た人と出ない人とが、もし其處へ行つたらどれだけ違ふか分らない。さういふ場合に平等は不公平である。

葉山　英文科を出た人は出られるやうな——

中河　併し、仕事が大變違ひます。

葉山　それであるから——總理大臣の仕事は非常に頭を使ふ仕事である、だから總理大臣は非常に澤山の賃銀を得る。だが、單なる……金板に孔をあけることは單純なる仕事であるから給料は非常に安い。といふことになれば、人間の生活といふものを問題外視して居る。勞働賃銀といふものは仕事、單なる仕事が問題でなくして、人間の生活が土臺とならなければならぬ。例へば僕が獨身で居る場合には一日一圓で暮らせる。だが僕が年をとつて、女房もある。子供が五人出來、老人を養はなければならないといふ場合には、今迄僕が金板に一つ孔をあけて居た時と仕事は違はないにしても、やはり僕の生活費といふものは向上する。であるから、勞働賃銀は增さなければならない。だから、僕の理想ですが、能力に於て、

働いて需要に於て取る制度にしなければ。其の人間が學校を出た、素養があるといふ理由で無制限にやつて居たならば、プロレタリアはプロレタリアとして搾取の――。

中河　さうなれば根本の社會の制度を變へなければならないことであつて、とにかく相當の賃銀を要求するとは働くものの權利ですわ。



向つて左から小池みどり、渡部清子、中本たか子、小金井素子、中河幹子、平林たい子、葉山嘉樹、山田やす子

葉山　そんなことはない。我々は絶えず最後のものを見つめながら、滿ちないものは制度の變革を企てゝ居る。兎に角現在のみの立場に立つて我々がものを論じた時には、現在から慣習されて居る將來我々の獲得する所の生活費、それに對してはものを論ずることは出來ないことになる。現在のみに立つて居ることになれば――。

中河　それぢやあなたの方から云へば仕事の量を澤山する人も少い人も同じ人間であるから、勞銀は同じで宜い……。

葉山　併しそれぢや反問しますが。

中河　私は御お聞します。

葉山　それではお答へしますが、家庭教師を受ける人はどういふ生活をして居る。

中河　ブルジョアだから澤山取ればいゝ。

葉山　御尤もです。併しさう簡單にいかない

中河　簡單にいく場合には……。

葉山　それは氣分の問題であつて、制度や組織を變革する問題ぢやない。

林　さういふ、根本の問題には觸れぬ……

葉山　だから從つて普遍的の問題に觸れるわけです。例へばこゝに八十錢の派出婦がある。是が大ブルジョアの所に派遣された。それから女房がお産をしていろ〳〵手が要る。八十錢しかないけれども、是で派出婦を雇はう。斯ういふ場合に、一方からは五圓分捕つて來い、片方に行つた時にはロハで働いて來い、さういふわけにはいかない

林　さうなつてほしい、

葉山　それは理想論であつて決して理論的ぢやない。

林　そうなると問題は少しも進まない。現在

の狀態として三圓は高いか。中川さんは安い、中本さんは高過ぎる。僕等の意見としては三圓位で十分であらう。

中本　尤も私が高過ぎると申しますのは、他の勞働をして居る人に較べて高い。それは私達もブルジヨアから澤山分捕つてやり、忙しくてもお金のない人のお手傳をしたいので、やはり狀態から割出した事です。

林　財產を澤山もつて居るから澤山ふんだくる、もつて居ないから少しにする、といふ道德的の理由で決意されるのぢやない。一定の社會的條件がある。現在では三圓は普通だらうと思ふ。普通といふことを認めて其の上で今度は、日給八十錢とか、月給二十五圓とか三十圓といふ、婦人の狀態に對してもつと高めたいといふ事は、少くとも進步的意見をもつて居る人は贊成でせう。それを今婦人派出婦といふ事ばかりに引懸つたものだから問題が混亂したのだ。

中河　それは葉山さんとか林さんとかいふ專門家のお話はうんと聞きたい。自分自身を敎育するためにも非常に聞きたいと思ひます。ですから後程にでも

葉山　今でもいい。

林　いや　三圓が高いか安いかといふことを決めて他の問題に移りたい。決を取りますかね。

葉山　さう問題を漫談的にもつて行かなくてもいゝ。眞面目の問題は眞面目で、現在二重の桎梏の下にある婦人の地位をもう少し眞面目に——もつと醉ぱらへば問題外だが醉ぱらつて居ない限りに於ては、二重の桎梏の下にある婦人の問題に就て論じてもよいと思ふ。(拍子)　二重桎梏が現在は取除かれて居ない。だから三圓で十分だと思ふ。

中河　所が今日私が來る時に話したのですが、ある人が派出されて一日働いて、非常に向ふも感謝して十圓あげなければならないのですがといふので三圓ですと云つた所びつくりしたさうですよ。

林　そりや向ふがくれゝばいくらでもいゝ。

中本　私達が行くにしても、斯ういふ眞面目な仕事をします時には正當な勞力に對する賃銀でなければ戴きたくないと思ひます。

林　異議なし。

德田　金持から澤山取つて來るといふことは金持の溫情になる。何時の場合にでも。

中河　それは理論としてさうなんでせうね。プロレタリアの方は安い方がすきなやうですけれど、たゞ私共の心持としてどうも赤ん坊をおいて一日朝から晩迄働いて三圓ぢや可哀さうだと思ふのです。赤坊のことを考へると……。

林　派出婦といふ狹い範圍の問題に就て、現在十人……二十人位あるかも知れませぬが、どんなものです。知識階級の婦人の失業者に職を與へるといふことは。

中本　需要に依りましては普通の派出婦程に擴張が出來ると思ふ。

平林　出來ないと思ひます。男の人は女の人の職業を見ると男の職業よりよく思つて居る。が、男の失業者が多い。それを女の人が……

林　併し、婦人筋肉勞働者の出現といふことは、婦人の賃銀が安いといふことが强みで、男子の方の勞働者が非常に脅威して居る。さういふ派出婦を若し擴張するものとして、一定の小い賃銀で滿足したら、隨分獲得し得る。併し現在存するやうなあゝいふ制度を其の儘採るかといふことは僕も疑問をもつて居る。

中河　そんなことは私はないと思ひます。

三上　併し常識論で云へば、一日十圓より二圓までといふと賴む方で考へますよ。

中本　私が三圓は高すぎると云ふのは、私は

お客樣然として仕事をしますが、ずつと下の、低い地位の人達が餘りに働きすぎるから。私は自分の働きに對して、自分の無力さに對して……。

葉山　勞働賃銀の高いとか安いとかいふことは、あなたは餘り働がないから高いと云つて居るが、働がないから高すぎるといふことが問題でないのです。一體搾取率はどの位高いかといふことが問題。一日に五圓なら五圓の商品を生產する。而も自分の與へられる勞働賃銀といふものは一圓か一圓八十錢といふのは、搾取率が多い。搾取率の問題にかゝつて來るのぢやないか。

林　此の問題は其の儘にしておいて、婦人の現在の失業問題に移つたらどうでせう。

葉山　進行係りが變つてしまつたね。

中河　私はお讓りしますする。

林　派出婦はそれだけにしてどうでせう。

中河　女はほんとうに慘めな狀態に居る。ですから同性に對するほんとうの愛情から女がもつと結束して女の幸福のためにほんとうに働かなけりやいけないと思ひます。

林　お聞きしますが、婦人勞働者は…職業婦人の數は、どの位あるか。

中河　そんなことは林さんの方が專門ぢやありませぬか。

林　それは平林君の方が專門家です。

平林　內務省と共調主義者とも違ふし……。

林　婦人勞働者の數、知識階級の職業婦人の數がどの位か、僕は詳しい數は知りませぬけれども、最近非常に增大して居る。又將來に於て增大する。さういふ問題から職業問題に對する婦人自身の意見が聞きたい。增大するといふことは、現在では結婚する迄の腰掛と思ふ人は……自分で思ふ人はあるかも知れぬが…段々なくなる。將來勞働しなければならない。そんな風になつて居る。それに對する婦人の意見…。

中河　話を元へ戾しますけれど、派出婦を雇ふやうな家庭は大抵良いうちですわね。

葉山　さうぢやないね。菊池さんの派出婦會には速記者は居ますか。居ないですか。もし速記者があれば僕は或は雇はないとも限らない。原稿が愈々間に合はなくなつて金が愈々要る時には。

林　派出婦の生れたのも婦人知識階級の失業から來たのでせう。其の方に入つたらどうです。

中本　先刻勞銀が高いと言つたのは、私共の能力が上つて參りましたら決して辭退しないのであります。段々高い賃銀を請求するのでありますが、今の所はこれで。

林　能力が上つたら賃銀も資本家的計算に依つて上りますよ。社會的狀態に依つて、個人の…向ふが金をもつて居るとか何とかいふことでは上りませぬ。

三上　僕は兎も角、話は違ふが驚いたのは此の頃の雜誌社、新聞社の人たちの給料の安い事だ。是はほんとうに彼等が働いたとすればあの給料は安すぎるよ。

葉山　所がもつと安いのがある。深川の富川町に居る自由勞働者。是は今彼等が働いて居て飯が喰へない。僕等の同志の岡下一郞。是は淀橋の水道の淨水場に居るのだが、一日の勞働賃銀が一圓二十錢。七十錢食費にかゝるから、一圓二十錢から七十錢差引いて五十錢殘る。每日仕事があつても月十五圓。所が、彼等が住んで居ろ所が八圓の間代、彼等もお湯に行かなければならない……。それに一月勤められない。恐らく平均二十日位、結局彼等は働いて見ても間代が拂へないといふことで追立てを喰ひましたがね。是は淀橋の淨水場ださうであつて、深川の富川町邊に行くととても酷い。それはもう實に全く慘憺たるものです。それは

どこに起因して居るかと云へば現在の反動的な田中內閣。あれがぶつ潰れてもつと良い、無產階級に對して社會政策をもつと徹底的にする內閣にならなければだめだと思ふ。

林　斯ういふ問題があるのです。職業婦人自身から、僕は三人位から聞いたのですが、二十五圓から三十圓位で働いて居る。さういふ人達が皆職業生活を續けるより結婚を望む。其の理由は二十五圓や三十圓では生活が苦しい。それに比較しても結婚の方が條件がいゝ。是は別に皮肉な氣分で言つたのぢやなくてさう痛感して居る。此の問題はどうですか。

葉山　併しそれはいろ／＼あるよ。結婚の方がいゝと言つても、岡下一郎の女房のやうになつたら……。是は別ぢやないかね。

三上　男の方も言つていゝだらうが、新聞雜誌記者といふものは腰拔けでだめだ。殊に下級の記者。あの人達はものを書く力をもつて居る。喋る力をもつて居るさうして五十圓そこ／＼の月給で朝の九時から夜の十二時、場合に依つては一時頃迄、それで默つて働いて居るといふに至つては言語同斷だと思ふ。

林　だからそれに對して根本的に……。

三上　林君と違つて、さういふ資本家といふことを知らないが、雜誌社なんかといふものは少くとも儲かつて居るのだから、どんどん月給を昇らしたら……

葉山　豫備軍が――

三上　前線に働いて居る人達が主張しなければ、月給をあげるといふことを……

林　憤慨して飛出してしまふことになると…

三上　出ないで內部に於てやるといふのは…

葉山　それが却々うまく行かない。

林　いくらさうでもどうにか工夫がある。組合を作つて內部に於て、新聞社なら新聞社の內部に於てやるといふことは大いに出來る。僕等も隨分努力するのだが。

三上　あなた方の努力は分つて居るのだけれども、僕は友達に慘憺たる人をもつて居るので不愉快だ。さうして幹部にならないと、どうしても百五十圓二百圓で止つてしまふ幹部になれば非常に金を取るやうだが。

林　僕等は先刻の問題だが、婦人が現在のやうな狀態から……苦しい狀態から皆が結婚生活……寄生生活を希望して居るが、其の原因は實に面白いと思ふ。少くとも現在の職業的參加と違つた傾向です。さういふ話を聞いてびつくりしたのですが……坊ちやんぢやないのですがね。……どうですか。

中河　でも、皆私達は働きたがつて居りますよ。私はほんとうに男と同じやうに口を開くためには、女が男と同じやうに經濟的獨立をもたなければだめだと思ひますよ。

林　婦人自身は參加することは喜ばない。結婚生活よりも非常に苦しい生活を經驗して來た人は、夫が三日あけても男の會社の生活、事務所の生活に較べて、自分は汗しなくても、其の間自分で氣儘にして居られる家庭ほど呑氣はないといふことを言ふ。

平林　全體から見て獨立して職業につきたがらないのは、やはり婦人の仕事に對する報酬が、婦人自身を養へないといふことが原因だらうと思ふ。

德田　前途を考へたら……

三上　併し、結婚問題だけれども、是は林君男だつて早く結婚したがる時はある。僕は通俗小說家だから話を通俗にして濟まないがさう思ふね。

林　僕は從來から職業生活の參加といふことを強調して居る。所が斯ういふ珍らしい事實に直面してびつくりした。

三上　職業するのも享樂、家庭生活するのも家庭享樂、家庭が自由で、亭主が家をあければ後はノラクラして居られる。さういふやうな自由の享樂を欲しい人は皆さうなつてしまふ。

葉山　併し職業に享樂はない。

三上　やはり多少そこに、怠けてブラ〳〵して居た、それが、今の時代になつて、大いにほんとうに人間の生活に參加出來るといふことは享樂である。

葉山　所が女の人は職業に携はることを人間の生活に參加するものと思つて居るかも知れないが、事實はさうでなくして、人間の生活を剝奪せられてしまふことになる。

三上　それはあなたの考は分つて居ますがね。併しさうやつてしまふと、今の問題は困る。

葉山　困つても全くさうなんだから……。職業婦人になると男より低い代償を與へられる。家庭にあると一切の實權は男にあるだから二重桎梏だ。僕は女性に敬服する。私のおふくろは女であつて、如何なる男と雖も女から生れて來ない奴はないのだ。だから僕は醉ぱらつて時々失敗するが、僕は女房に言つておく「ふんだんに醉つぱらつた時はどんな慘酷なことをしても宜い——正氣な時には祖先傳來の亂暴な所があるが——ぐでん〳〵に醉ぱらつた時には足蹴にしてもよい」やりますよ。寐床の中に轉がしてやりますがね。眞面目に考へて見て、我々が女性を二重の桎梏におくといふことは、我々の母性を輕蔑するものである。何故ならどんな人間だつておふくろから生れて來ない奴はない。女房なら女性として輕蔑し得るが、おふくろを女性として輕蔑し得た者はない。僕が赤ん坊の時に子守唄を聞いてすや〳〵眠つた氣持を考へたならば、僕の女房は是と同じ氣持で俺の子供に敬はれて居るかと思ふ時に、僕は女房に時々びくつ、とする。

三上　男といふものは……女を輕蔑して居る男があるか知らん。

林　それは非常にデリケートなんで、男と女が對立した時に。

葉山　對立しませんよ。

林　平林君の意見に贊成して僕は他の問題に移りたいな。

中河　專門化したものね。女は皆働きたがつて居りますよ。自由に明るくもつと。

林　それは貴女のやうな環境にある人でせう

三上　それで中河夫人の仰ることはやつぱり財産制度の問題から一切に觸れて、そこから一つやつて行かなければ却々問題が解決出來ないやうだから……僕はやはり財產制度だと思つて居る、今の根本問題は總べて。

林　次は××新聞の騷動。

平林　是は新聞には書かないけれども、それは新聞屋同士が協定か何かあつて書かないことになつて居るのでありませうけれども、可成り眞劍な爭議になつて居ります。配達夫の生活といふものは酷い。殊に朝日の配達といふものは酷い。他の新聞では新聞社から直ぐに配達所の方へ來ますが、朝日には東京市内外に岩月といふのがあつて中間搾取をやつて居ります。それだけに配達夫の生活といふものは酷い。今配達のストライキを起してますが壓迫がひどい。山本勝治といふ人は、新聞配達の此のストライキをやる前に從業員大會をやりました時に、餘り壓迫が酷かつたので興奮して「飽く迄闘へ」といふ樣な遺書を殘して自殺してしまつた。そんなことも一切新聞に書きません、暴力といふものを攻擊して居りな

がら暴力團を向けて來て、此方の人が負傷して居るけれども、一切さういふことも書かない。さういふ風な問題が今ある。…それだけなんですけれども．

徳田　配達といふのは時間が少くて割合に裕福ぢやないのですか。

平林　時間が少いのです。

三上　僕は新聞研究所といふものゝ所長が友達だから讀んで居るけれども、晝間通學なんていふけれども、それがさうでないらしい。時間もなければ休日もないらしい。

平林　朝四時から自動車の來る所へ取りに行く。さうしてそれをたゝんで配つて來ると九時位になる。それから一時間か二時間寢なければならぬ。それから今度擴張にいく。新聞といふものは唯配達して居れば必ず數が減つて行く。家が引越したり斷られたりして、始終それを補ふために勸誘していかなければならない。一軒殖すといふこともとても大變なこと。それをやらなければならない。集金もやらなければならない。皆いやがりますね。新聞の勸誘といふ事は嫌がりますけれども、しやうがないのです。

徳田　集金は別ぢやないのですか。

林　いや別ぢやない。

平林　なぜやらなければならないかといふと、大抵の新聞は給料は證券でよこす。受取でよこす。ですからもしお金を取るのを怠つたら自分のお小遣がない。いやが應でも其のお金を取らなければ小遣がない。だから取らざるを得ない。夜になると夕刊を配達する。少しも時間がない。それで食費だつて十五圓から二十圓位でせう。それで俸給二十五圓、大抵の人が新聞配達になつて居りますと、一月中働いて月末に受取るのは二圓五十錢、一圓といふのです。新聞といふ新聞の代理店は集金といふものが苦しいので、配達夫に給料を拂はない。給料を全部拂ふといふのは東京市内に一軒もない。今日の給料を三月も先へ行つて一圓か二圓くれる。ですからとてもひどい。

徳田　よく知らないが苦學生の仕事ぢやないのですか。

葉山　そこが問題、苦學生に就いて……

徳田　今は販賣政策が非常に猛烈になつて來たから仕事が殖えて來たのでせうか。

葉山　と同時に苦學生といふ一つの仕事に對する考へ方が變つて來た。昔は大學生ならば如何なる場合でも職業にありつけたが、今はブルジョアのお坊ちやんでも洋服に金を使つて大學を出て來るから、失業率が五割から六割。新聞配達をやつて苦學して大學どころぢやない。中學乃至は妙な學校を出てもとても就職の見込はない。そこで彼等は自分は苦學生であるといふプライドをもつてよしんば最後迄頑張つて見ても學校を卒業してどういふ職業につけるか分らないといふ一つの暗い陰がさした。そこで彼等は新聞配達も一つの職業である。紡績女工が嫁入前の職業でなくなつたやうに、新聞配達は一つの職業であるといふ觀念に到達した。そこで階級的の意識に入つて來た。

林　新聞爭議といふのは最近の現象です。それに對する僕は消極的なのですが、ストライキを起して居る間は新聞を斷はるといふ政策を採つて居るが、平林さん、問題を出された以上希望があるのでせう。

平林　多少もつて居りますが、今の新聞のストライキでは斯ういふビラを配つて居る．「爭議團が勝利になる迄は新聞を斷つてくれ」さういふビラを撒いて居りますけれども、それは營業妨害で禁止されてしまひます。そんな風な状態です。

徳田　新聞といふものが商業化された結果ですね。

平林　一番現代的な顔をして、現代的であるだけに搾取は一般よりひどいと思ふ。

德田　いろ〳〵な世相が現れて來る。

葉山　さうです。例へば新聞といふものは、横濱ドックの爭議といふものは大々的に書くのに、而も自分のお膝下に起つたのは書かない。田中内閣を倒せといふやうなことを大いに書いて居る。だが其の下に起つた中間搾取を倒せといふ新聞爭議に對しては一言も書かない。のみならず、新聞の折込み廣告には頻りに思想團體がなんとかして諸君にお迷惑かけたが、是もみな逡禁を喰つてしまつた。もう諸君にお迷惑かけることはないからどうぞ購讀してくれといふビラを插んで居る。さういふビラの入つて來た時に逡禁喰つた筈の人が出て居る。今でも爭議は擴大して居る。だから何と言つても神聖な報道機關といふものは、ある種の階級的立場に立つた人にのみ其の階級的立場に立つた報道機關が眞實であつて、別種の階級的立場に立つた所の階級人には別種の階級立場に立つた報道は餘り信頼すべきでないといふことは事實であります。

三上　新聞で思ひ出すが、僕が二十五圓もらつて入つて居た時分のは面白い。辭める時にはどうして辭めたかといふと、其の頃小學校の先生が生徒をどうかして、非常に靑山あたりで問題になつたことがある。其の話は納つた、さうするとどこか地方に同じやうなことがあつて、若い先生は前非を悔いて、東京へ來て何か職業に就いて居る。を用舍の新聞が摘發した。それを私に節面白く書けといふ。とても、困つちやつた。前非を悔悟したかしないか知らないけれども、兎に角東京で飯を喰つて居る男を、そこ迄追つて行くのぢや、どうしたらいゝか分らないから、あやまつてしまつたけれども――。

中河　新聞は今だつてあてになるものぢやありませんわ。不美人でも死んだら皆美人ですものね。

三上　併しそれはいゝ方になるのだからいゝけれども、悪い方にされちや困る。(笑聲)

林　社會の不公平に行きませう。

中河　社會の不公平といふのは、金持の人が萬引して捉つても、お金を出して許してもらつて歸つて來るのが澤山ある。さうして貧乏な人はお金が拂へないものですから牢屋に入る。つい私共の知つて居る範圍に起つた。魚屋とか八百屋とか、さういふものがやつて來て憤慨して居る。お上でも金持に贔屓するのだからと言つて居る。

直木　それは事實不公平でなく當然の約束なんだ。

林　それを利用して下足番が變なことをやつたぢやないか。

三上　世相百般だからいゝだらうけれども、僕の知つてるのに、お亭主はちやんと世間へ出て働いて居る。奥さんはその病氣で、お亭主の月給が皆あやまり金になつてしまふ。番頭さんが來て足代を出す、自働車代を出すとか何とかする。盗つて來た物は高く買はなければならない。男女色々の問題があるが、男の中には又さういふ辛棒人があるものですね(笑聲)

德田　金持の商家の奥さんですが近所から萬引して來る。さうすると後から番頭が斯〻〳〵いふ物を盗つて來ましたから拂つて下さいと言つてくる、よくある。

林　百貨店の構造といふものは萬引したくなるやうに出來て居る。僕等も入つてやりたくなるが、萬引すると社會的制裁があるから金を出して買つてくれといふ風です。

平林　萬引をやつた新聞記事を見ると幾度か

やつて幾度か目に捉つて居る。私は一度位なら捉らないだらうと思ひます。盗つたことはないけれども。

三上 一度では却てつかまらぬ。僕なんか中學生時代にアップといふことが流行つて、始終買ひに行く文筆屋に行つて盗んで來ないとはゞが利かない。僕は二度位盗つたけれども分らない。三度目に分つたやうだ分ると張面につけて來るから、結局自然と拂ふことになるが。

林 百貨店制度は萬引を挑發するにはうまく出來てる。さうして買はせるからうまい。

中河 それはさうですね。

林 男性と女性の不均衡といふ事はどうです

中河 それは大きな問題で……

林 それであなたは男性の缺點……

三上 先月の女人藝術で、女性缺點指摘座談會に、僕が喋つたことで、わざ〱先日中河さんがやつて來られたから、僕は一言もない。摘發してしまへといふなら德田先生の方を向いてやつて下さい。

德田 僕は缺點がある。

中河 女性の缺點摘發があつて男性のがないのは一寸をかしい。ないのかも知らぬが。

三上 男性は皆缺點だらけだ。

林 先づどんなものがあるか、ずつとやつてもらはふ。

德田 世界が丸で違ふ男と女の二つの世界が合致して一つの世界になつて居るのだから。男の立場からものを言つたつて、婦人の立場から見ては丸で違ふのだから、難かしいことです。

林 それを聞きたいですね。

德田 男女間は極めて妙だから、丸で別ののので、さうして一つのものだから。

三上 第一腕力が違ふ。

林 女に強いのがあるよ。

德田 是から強いのが出來ましよう。

三上 先達て主婦の友の座談會で言つたら消されてしまつたが、人類と云へば而も男と女は男類女類といふ風に分けなくちやわからぬ程わからぬものと思はれる。僕は一寸も輕蔑でも何でもないと思ふ。先刻葉山君が言つた通りおふくろから生れて居る。それに女がなかつたら働きやしませんよ。誰が男性だけで此の世に生きて居て、働く希望も何もあるものか。結局子供が出來るだらうし。

中河 私共だつて女ばかりだつたら隨分つまらない。

三上 たゞ恐ろしく分らないものがある。

德田 さういふ世界が實現して見なくちやはつきり云へない。

三上 女には分らない點がある。德田先生の言ふことだけれども、さういふものぢやない。男の世界女の世界が實現しなければわからないといふけれども……性的の一種の問題がなかつたら、我々は決して仕事もせぬ……

德田 つまりさういふことを想像して見ることは愚なることなんだ。それは月のない世界を想像して見るとか……折角世の中に生れながらに持つて居るのだからもう少し……

三上 それは違ふ。例へば男の社會から云へば女の人はきれいにしてもらひたい。

德田 女の方はきれいで居たいといふ希望はないですか。

三上 男だつてきれいになつてた方がいい。

直木 それは皆働きや違ふと思ふ。

葉山 いや大して違はない。

林 違ふといふのは嘘だよ。

葉山 例へば雛の牝雛が雄雛よりきれいだといふことに依つて、人間の牝雛よりきれいでなければならぬといふことは一般に云へ

ぬ。きれいですがどつちが樂かといふことが問題になる。飛蝗でも蟷螂でも交尾しながら死んでしまはなければならないことになる。そこで女のきれいだといふことが價値づけられる。

三上　いやそれで此の前の月にやたらに僕が喋つてしくじつた。コンパクトも使はないやうな女の働きは可哀さうだ…、盛んに使はないやうぢやといつたら、貴様は精神美を知らぬと盛に怒られて、きれいといふのは心にあるといふことになつて詫つてしまつたが、僕はやはりコンパクト位どんな忙しい時でも、工場に働いて居る人でも使はないと、男が働けなくなる。

林　そこは勞働階級の婦人はお化粧しますよ。知識階級の人は白粉使はないでなんだかんだといふ心理があるけれども、勞働階級の奴はしますよ。

德田　女をきれいにしておくといふには、遊ばしておくといふことになる。

三上　男が働いて居てもきれいだから女も……まあ此處へ並んだ人は別として……

葉山　僕は働いて居てきれいだといふことになると大いに抗議を申込む。例へば僕が船乘をやつて居る時に、上陸すると、顏こそ洗はないが、手は輕石でこすつて揮發油でふいて石鹼つけて洗はなければ、手の筋に入つた油が落ちない。

三上　所が葉山君さういふのを女は男らしいと云つて好く、所が女がそれになつたらだめ、(笑聲)

葉山　それは大衆作家が想像することであつて、決して現實で……

林　それは君が變な女を狙つたからだ(洪笑)

中本　唯今此處に居られる人を標準にしては話が違ひますが、實際の社會に於て、柔かい立場から觀た男子でございますが、さう云ふ所に於ける男子は、非常に自惚れが强くて、古い型の女性を好む。

葉山　柔かい立場と申しますと、どうなりますか？

中本　それは御想像に任せます。新しい女に對する理解が非常に少いと云ふことを殘念に思ひます。私が少しばかり切髮を下げてる、之に依つて異端視されますし、それから又、所謂さつき林さんが仰しやいました働かない女…家庭に入つて奥さん然と居坐つてゐさへすれば宜いと云ふ女を好む人が多い、知識階級で想像する程、開けてゐないと思はれる古臭い人が多い、男に…

林　切髮問題で思出しました。僕の知つてる女の人で、三人程殆んど同時に斷髮して、同時に伸ばした。理由を聞きましたら、一人は何か小さな出版社に勤めてゐて別に斷髮でも何でもなかつた、所が、其後に遞信省に入つたら、斷髮なんかして居る女はいけないと云ふことになつて、急に伸ばすやうになつた。もう一人は社會主義運動に入つて、同志と結婚した。所が斷髮なんかしてゐると非常に目に着く、一寸分らない處に越さうと思つても、髮切つた奴が裏店に來ると周圍がうるさい。スパイの目に着き易い――仕方がないから伸ばした。もう一人の人は結婚しやうと云ふことになつた。所がその亭主になる奴は別に斷髮を反對もしなかつたが、家の事情がどうしても斷髮の嫁なんかいかぬ――と云ふことで、結婚したいので伸ばした。僕は此の問題は暗示的だと思ふ。外で働くには斷髮が一番都合が良い。省線電車なんかで文金島田と云ふことを想像してみると分る通りに…それにも拘らず三人同時に切つて、斷髮して、三人同時に伸ばしたと云ふことになつたが、なか〳〵面白い。

葉山　いろんなこと知つてやがるな。

徳田　働くのには断髪した方が宜いでせうね？

中本　平林(同時に)それは断髪の方が宜いです。

三上　それから女の人への注文ですが、・・・此處にいらつしやる方は悧巧だが、あまり悧巧でない中加減の悧巧の人を標準にして云ふと、男の人は賢さに移りたいと云ふ氣持が強くつて、相手の人の事を口ぢや論戰しても負けるとペチヤンとする。併し女の人は、戰線を開くと倦まず撓まず拘はるけれども、それに特殊の興味があるのでせうが、低い知識階級の人に多い。もう少し自分を廣くして、いろ〳〵聽いて覺えたり何かする事は、かなり自分一人で威張つてるより面白い事ぢやないかと思ふ。低級な知識階級の家庭内の爭議と云ふものは、いつでもさう云ふものでせう奥さんの方が何か一寸覺えたり、考へたりすると、なか〳〵讓らぬが、男は猾いから向ふを立てゝは置くが男つてものはもう少し・・・

林　それは併し女は他に仕事が無いから、男はこだはらないでも・・・

中河　さう云ふ所はあります。女の人が頑固になつたら、迚も頑固になる、惡いと分つてゝもなか〳〵負けない。

三上　それにもう一つは、實に感じるのだけれども、私達の處に來る文章に直接に關係してる、新聞、雜誌の記者の人達、男達の間はいやな事もある、いろ〳〵な事があつても、調節を或點までとつて、自分々々を伸ばして行かうとする努力がかなりある。女の方は喧嘩してしまふとそれつきり——あれはつまらない事と思ふ。

中本　それは確にございます。

林　五月號も亦女性缺點摘發か——

三上　女性缺點摘發座談會になつてしまつたが、もう少し女の人が、何か考へぬといけないと思ふ。銘々の價値か何かあつて生きてるから、銘々の價値か何か認めたら宜いと思ふが、女が怒つたらきかぬから・・・

徳田　それは先天的のものぢやないかね、女は男と同じやうに働かして行けないものと、出來てるのぢやないか・・・

中本　今まではあまり女が世に出なかつたから・・・

葉山　それは違ふ、例へば僕が喧嘩する場合には、女房を倒してしまふ。所が現在の日本の無産階級の運動が不當なる勞働條件に就て反抗したのに對して、國家權力が組織的暴力を以て彈壓するやうに、女房が文句を言ふとブン撲つちやう。是がやつぱり根本的な・・・勿論諸君の中にはブン撲らない人もありませうけれど。

三上　それは君は健康な奥さんを持つてるから・・・弱い奥さんだつたら死んじまふ。それで殺人罪にならなければ宜いと思ふが。——僕なんかも昔喧嘩して、よくヒッパタイた事があるが、キウッと言つて紫色になると・・・(一同洪笑)

林　僕は釜の蓋で擲つた。僕なんかも頑強にやつたですよ、少くとも僕の經驗では・・・

葉山　そこへ行くと男の方が優れて、女が優れてゐないと云ふことは言へない。

三上　僕は男は肉體的に大いに腕力を持つて居るけれども、女の人は精神的に腕力を維持して居ると思ふ。なか〳〵理屈も何も知らないで・・・腹の中では分つてゐても、分らぬ振りをして居るんだから・・・

時雨　それはあるわね。

中河　えゝ。

葉山　それはさうです。(笑聲)

三上　してみるとそれは改善せんければならぬ。

中河　體力は男に負けても、精神力は女の方

が強い…

三上　強ければ良い方がうつりますかね。

中河　所が男は傳染らせないやうにしてゐるのぢやないかと思ふ。

徳田　つまり私等の見て居る作家でも何でも女の人はちやんと早く纏まつちやう。非常に優れて居る人でも早く纏まつてしまつてだん／＼大きくなつて行くと云ふ所はない。初めから一つの完成物として現れる。早熟的に出來て居るのぢやないかと思ふ。無論除外例はあるが…兎に角完全なる女性も無いし、完全なる男性もない。

林　省線電車に乗ると、女の土工が男みたいな恰好をしてるのを見るが、あゝ云ふのは仕事の關係で却つて男の方をはり飛ばしてしまふ。僕等が女を問題にしてゐるのは、知識階級、或は中間階級で、勞働階級の人は殘る形になりますが、いろ／＼な、自働車の運轉手とかそんな事をしなければならない人は、だん／＼男に對する意見が變つて來る、自分自身も變つてきますよ。女が男と同じ暴力を持つてゐるとすると、さう云ふ場合に、細君に貰つてもらつた所の女は逆にブン擲る譯には行かないが、實際に働いてる人はブン擲るやうになる。

三上　廣津は樂觀主義で、女だつて陽に當てれば伸びるといふが…

徳田　さう云ふ、女の人は早く纏まつて一つの線がちやんと出來てしまつて、それで伸びて行かない…

林　それはある、長い歴史を有つてゐた女性の相…

三上　今の、仕事をなすつていらつしやる女の危險は、珍らしがられて居るのだと云ふさう云ふ自覺が一分でも弛んだら…

徳田　併し本質的にさうでなかつたら、女の人は駄目になると思ふ。

三上　本質的にあるのだらう、仕事をして居る人は——。狹い所から出て來て多少好奇心で珍らしがられて、一般の社會から見られて、自分の仕事をして居ると云ふ點の自覺が、いろ／＼の良い意味に働けば非常に好いし、惡い意味に働くと、其女はひどく駄目になると思ふ。通俗小説的の感想ですがそこにあると思ふ。思想的に働いてる人は別と思ふが、普通の職業婦人……。

葉山　職業婦人にもいろ／＼あつて、僕が工夫をやつて居た時に、女の土方を見ましたが、是は考へ方が違ひますね、女とか男とか云ふ前に、先づ勞働者であると云ふことになる。だから迚も凄い。

三上　皆それになれば宜い。

林　男性の缺點如何と云ふことが、女性の缺點摘發になつたが…

徳田　僕の言ふのは缺點と云ふのぢやない。本質の如何…

林　女性の缺點と云ふことは、女の人が喋らない事にある。十分に喋る事をしない。

徳田　喋らないのを、缺點と云ふ言葉は可笑しい。

葉山　女が十分に發言權を持つて居りながら、男に對する不滿を十分に述べないと云ふことは、第一大きい缺點です。

林　而も御本人は、さう云ふ古い型の女は……なんて云ふことを言つてるんだから、天下太平だよ。

平林　男の人は女を擲るんですが、私の經驗に依ると男が自分を擲つたら、擲り返して御覧なさい、びつくりして擲りませんよ。

林　異議なし。

平林　だから男のやつた通りの事を女がすれば決してやらない。

三上　女の人に擲られるのを、嬉しいと云ふ感じを持つ人もあるかも知れない。

林　それはどうも普通の心理學ぢやない、そ

れは病理學の方だ。僕は進行係りぢやないけれど、仕方がない、プロレタリア解放の問題に移らう。プロレタリア解放運動に於ける實行者と援助者——

葉山　それは少し問題が眞面目になるが、眞面目になつて宜いと思ふ。今所謂プロレタリア解放運動は現實の分野に入つて來て、さうして我こそはプロレタリア作家である、我こそはプロレタリア解放運動の内助者であると稱する作家が、最も人爲的の事を言ひながら、實行者にならない場合が多い。さうして其の人間は恐らく、どんな決定期に入らうとも、その人間は單なる援助者であつて、決して實行者ではないと思はれる人間が、決定期に入らない現在に於ては、實行者であると云ふやうな風を裝はうと云ふことに非常に疑問を持つて居る。例へば君の方の（林氏に）連中、社會民主主義者と云ふものは、議會を通じて我々の地位を獲得するものだと云ふことが、社會民主主義の論質であるけれども、我々が皆さう云ふ風に考へて居るかと云ふと、決して考へてない、單なる看板に依つてナスリつけてしまふと云ふことは冒瀆だと思ふ。さうして又其のプロレタリア解放運動に携はつて居る所の過去、及び現在、及び未來に對する決意、それ等に對してよく考へてみたいと思ふ。我々が眞面目に考へた時には、我々は、本當に死生を共にし得る者は、如何なる罵詈讒謗も、しつかりした覺悟の下に活動して居る人間に向つて與へんが爲に、最も戰端に立ち得る人間さへも、戰端に立たせない傾向はある。さう云ふ事は同件者が、人爲的分子が同件者に立たしめると云ふことを、一ツの結合であると云ひたい。是は林君にしても、藤森成吉君にしても言ひ得るだらうと思ふ。

徳田　あの人達に就て言へる。

葉山　言へます。僕は斷言し得る。あの人達は社會民主主義の過去に於てした犧牲をも拂はなかつたし、現在に於ても拂つてゐない、恐らく將來に於ても拂はないと云ふことを、僕は見通しが出來る。

徳田　そこがむづかしいんだな。

葉山　斯う云ふ問題は、此會には適切でないかも知れないけれども、併し少くとも僕及び平林、及び林を選んだ事は、斯う云ふ發言の機會を與へてくれても宜いと云ふ考への下に來た。

林　どうですね、女人藝術には。女の方には餘り緣遠いとすれば、緣遠いやうではあなた方が新しいと云ふ一ツの事實がないことを・・・

中河　併しそれは大いに喋つて貰ひたいと思ひます。

葉山　無産階級が解放されるまでは——、婦人が現在の桎梏の下から解放される事は、無産階級が解放されなければ、單に婦人として理解されると云ふことはない。無産階級が階級的彈壓の下から解放される以前には、婦人だけが解放されない、單獨に解放されると云ふことはあり得ない。何故と云へば婦人の最大多數の者は、賃銀勞働の桎梏の下に苦しんで居るのだから、賃銀勞働の桎梏の下に苦しんでゐる婦人だけ解放すると云ふことは、解放の意味をなさない。だから無産階級が解放されないうちは、婦人解放と云ふことは問題になり得ない。

林　僕の意見を言ひますが、文藝家の中で殊に戰旗の作家、僕とか藤森成吉、江馬修とか云ふ人が、口に左翼的の言辭を弄して、將來に於ても、過去に於ても、現在に於ても、社會運動の實行に携はらない。將來は別として現在過去に就ては、それは見解の相違と云ふほかはないのですが、將來の豫

想と云ふことも、どう云ふ方から立てたのか知りませんが、それは答辯の限りでないと思ふ、文藝戰線の人達が、さう云ふ人達が指示されてる事はよく分らないと思ひますが、指示されたのと別に、政黨の方の流れが社會民主主義と云つて、僕等も云ふし他の方も云つてるが、僕等が先頭に立つてるのでなくて、僕等が政治家に指示して居る方が正しいだらうと云つて居ます。社會民衆主義であるかないかと云ふことは、實行が示すことであらう。それから文藝家の中の、殊に我々のグループに屬する者だけが、言葉と實行とが反對した――さう云ふ非難は、僕の方から云はせれば、文藝家である事が、社會主義運動に於ける隨伴者である。又今、運動を實行する事でなくて、隨伴者と云ふことは、社會運動から一歩離れて、第一戰線に居る者ぢやなくて、第二戰線に……

葉山 文藝家である事が……

林 文藝戰線内部の人が、文藝の自覺の上に於てする事でなくて、政黨者とか、現在の政黨の戰線、さう云ふ範圍に於て、發賣禁止とか、筆禍事件とか……

葉山 それは一ツの人間を、二體に確然と分けてしまふ事になる。一ツの人間はどこまで行つても一ツの人間だ、政治的に活動しやうと、文藝的に活動しやうと、經濟的に活動しやうと、一ツの人間が確然と區別されるものでない。片山潜が斯う言つた……

林 片山潜を批判するだけの自由は持たないが……

時雨 さう云ふお話も結構ですけれど、それは他日して頂くことにして、もちつとくだけた……今は漫談的な方が、座談會としては結構なんですから……

葉山 所が是は變へられない。

林 此處でしない方が宜い。

中河 あとで聞かして下さい。

時雨 ××の事を云つてはいけないかも知れませんか、大阪の河口署の××さんが同盟罷工をやつたと云ふこと、それから洲崎の花魁が日比谷×の××さんの援けで自廢したんださうで、さうしたら其の××さんが叱言を云はれたと云ふのですが、大變面白い……と言つちや悪いけれども、迚も人間らしい××で、好きな××……

三上 ××だつて人間と云ふことに變りはない。仕方がないから叱言を云ふので、人間になつた時には變りはない。併しさう云ふ××が居ると宜いな。ダンピラ、あれはどんな時斬つて宜いんです。

林 署長が命じた時に、向ふから暴漢が來た時に……

三上 そんなら徹底的にピストルの方が宜い……

林 もう使つてますよ。

三上 あのサーベルと云ふのは滑稽だね、ブラ〳〵下げて歩くのは……

中河 說敎强盜の時は××に賴りましたわ、三宅さんの近所でしたから、巡査がもつとしつかりして、澤山方々へ立つてくれゝば宜いと思ひました。

林 併し强盜の時に立つてくれないで、演說會の時だのメーデーの時なんか澤山立つてくれますね。

中河 山本宣治さんのお葬式の寫眞にも澤山立つて居りますね。

林 說敎强盜の時は××の給料が安くつて、氣の毒だと一生懸命思ひました。長谷川さんが興味を持つのは、××が××として現はれる場合でなくて、××が人間として現はれる場合を云ふんでせう?

時雨 別に興味を持つて云ふ譯ぢやないんです、私達子供の時分何か一寸悪い事をする

と、お×りさんが來ますよ…つて云はれたもんでした、で、怖い者つて云ふ氣持が泌み込んでゐるので、何となく不愉快なのが、さう云ふ同盟罷工したり、自廢を提げたりするのが出て來ると、何だか…

平林　國家眷族のカケラと云ふので、威張つて居るのだから、それが不愉快なんです。

林　××も人間なんだから、その××が××として現れる時になると…國家眷族として現れることになると…

葉山　面白い話がある。僕が皆てやられた時に、留置場の監守の奴に僕が聞いた事がある。君は一體安い給料で何でそんな事をやつてるか？斯う聞いたら、給料は安い、子供が二人も出來ればいよ／＼おしまひだが、併しそれにしても威張れるからやられるのだ、威張り賃五十圓でも百圓でも、威張りさへすれば金を儲けたつもりで居ると言つてました。さう云ふ風な程度の人間もある。又中にはまかり間違つて入つて、恩給期限がすぐ目の前にブラ下つてやつてるのもあるし、いろ／＼あります。

三上　併し高等係り、あゝ云ふ人達の中には讀書力のある人も居るし、話してみると、なか／＼よく話の分る人も居る。

葉山　無產階級運動を表面やりながら、スパイになる人がある。

林　スパイは馬鹿が多い。

葉山　頭の良いのが最高幹部になる。

林　本當に凄いスパイは冒険家的の人がなる。僕だつて葉山みたいな經驗があるのですが、僕がやつぱり未決監に居た頃、反則をやつた。×××筆を盗んで來て、その筆で書いたのを發見された。反則で嚴罰を受けるんだ。所がそれが筆を盗つて來る時に案内した奴が　自分の缺點になる。で、青くなつてしまつた　そして內々他から持つて來たやうにしてしまつて、××に言はずに濟んでしまつた。つまり是は人間的な方面が現れたんだ、自分の首の方が怖い、さう云ふ方面が現れた。××が人間的方面を現せば現すほど、現在の××××と云ふものは崩壞してしまふ。非常に××はあぶない事になります。

中河　それはさうですね。

三上　可笑しなもので、××も一人居れば何でもないが、大勢かたまつて來ると妙に怖くなる。

林　僕の親父は巡査した事がある。

三上　彼等にも階級打破の意識がある。市長でも大臣でも、小便なんかしてゐる時に捕まへれば叱られるのだ、そんな氣持ち、職業的の面白さがあつてやつてるのだらうが

林　それはさうです、隨分役得がありますよ。

時雨　それからもう一つは九州大學とか、京都大學でお聟さんの世話を始めたと云ふ新聞の記事があるんですが、結婚媒介所と云ふのでせうか、就職が出來ないから、お聟さんの口を探してやるやうになつた、それは皆なの氣持がある方面に運動して行かないやうに、失職しないやうに…

三上　そんな偉い氣持ちやないさ。

德田　學校でやつてるんですか？

林　女の學校には媒介所は出來ない。

小金井　事實はやつてます。

三上　大變ですよ。三輪田さんだの、宮田さんだのなんか半分は結婚式に臨むのが、一つの仕事になつてゐるといふ話だ。

林　或る運動に向くと云ふよりも、まア親心先生心と云ふんでせう。

時雨　つまり就職の途が無くて、學校を出た人がいつまでも何して居ると…

三上　そんな偉い氣持からぢやない、新聞が珍しがつて書いたゞけて、それ程の事ぢやないさ。

時雨　九州大學にも出來ると云ふので、各大學に出來て行くと、大學出の人はお聟さんに行けるが、他の者は行けなくなる。

中河　結婚の媒介は好い事ですね、好い人と〳〵と一緒にして上げる、良い事ぢやない……？　若い人は配偶が無くて困つてる人が澤山ありますから、本當の結婚指導者が現れて、一對にして行つて……

三上　女神だな、中河さん――

中本　學校で結婚媒介すると云ふのも、優生學的なら結構ですけれど、女の先生なんか階級差別の意識が非常に強くつて、ブルジヨアの方に肩を持つ媒介が多いから、非常に不愉快に思ひます。

小金井　官立の學校でも先生の內職になつて居ります。大學の事は存じませんが……

林　大學では最近の現象でせう、僕等知らなかつた。

時雨　優生學の立場からとか云ふんなら結構ですが、喰べられなくなる心配は無いと云ふやうな、足止策に、お腹をよくして置けばおとなしく……

中河　さう云ふのは困りますわね。

三上　學校商賣なんて云ふものは、官立も私立も殆ど同じもの。よく分るのは、此頃林君だの、葉山君だのゝ方の先驅者の方に彼等が向く。向いて行くなら追出せば宜いのに、なか〳〵追出さない。自分達の首にも拘るし、學校が矢張り新傾向が盛んになれば、誰もそんなに行き手がないから……いやな者は出て行けばそれで宜い、それを無理に止めて訓戒を加へたりいろ〳〵な事をやつてます、制裁だつてしてゐます、何も商賣で……

林　學生達の立場から云へば、勉強してゐる間は親から金を貰つて、社會主義を研究したいと云ふ考があるが、どつちかと云へば猾い、運動に入らない第二次的のものとしても、法學士とか何とか云ふ肩書があれば都合が好い、そんな事でへばり着いてゐるのもある。併しそれにも拘らず、非常に今澤山拋り出されて、七十％八十％落第及び放校されると云ふことを云つてゐる。學生の方はかじり着かうとして居るが……

三上　さうかと云つて別の學校を興したら壓迫されてしまひますしね。

時雨　本當は女の人達が、そんなのを皆な嫌ふと宜い。

三上　併し好い人もあるかも知れない、是は分らないよ。金持だから惡いとは限らぬ。

葉山　少し昔の話ですが、非常に貧乏な人で秀才があつた。新潟の地主に、敎師の紹介で養子に行つたが、其人は實に秀才であるし、社會運動は必ずするであらうと思つて居た。それが地主のお聟さんになつたら、敎授にならうと云ふ野心を棄てゝ目茶苦茶に放蕩をやつて、家の財產を使つちやつて現在では兎に角つまらない男になつてゐます。

中河　宜い指導が必要です。無理想でしては駄目ですわね。

三上　社會問題と云ふことを、さつきから承つてゐると、もつと根本にならなくちや話が何だし、根本になれば又むづかしくなるし、むづかしいですな。僕は通俗小說漫談家として、一生生きるほかない氣がするが……

葉山　早稻田文學で禁止されたぢやありませんか……

三上　二回やられた。處女作をやられてしまつた。其頃大杉榮が勞働運動史と云ふものを書いて居たから、早稻田文學ぢやそれでなつたと思つてゐたら、僕の一行でなつたと云ふので……馬鹿な事を、今から考へれば書いたものさ。

葉山　併し　三つ子の魂百までと云ふことがある。

三上　僕は自分を壞してしまつた方が早い……僕は最後はそんな傾向に行くだらうと思ふけれども分らなくなつて來た。人間の慾望の價値だとか、動きだとか云ふものが……

葉山　自分を單位にして考へ過ぎるから……

三上　いろ〳〵な問題を自分で考へると、どうも非常に恥しくなると、ブラ下るな。僕は死ぬんなら首縊りが一番宜いと思ふ。

林　三上さんなんか三ッ子の魂と云ふのがあるのです。變な風に、つまり違つた方向に行くと、直木さんみたいになる、高畠素之みたいな人になる。

三上　直木は變な男ですよ。

時雨　直木さんの淨瑠璃坂と云ふの、私愛讀してゐるんですけれど、あの切腹をしやうとする内藏之助の氣持が、非常に宜い氣持ち、二人の女に對する……

三上　此間も直木さんのフアンは少いのですかと聞かれたから、少いと云つた、フアンが出來るやうな顏をしてゐない……異論があるかね？　生きたる小平次のやうな顏をして寫眞に寫るが……禿の罪で人の罪ぢやないね。

直木　漫談化して來た。

時雨　――あの小説に出て來る二人の女へ對しての内藏助の氣持ち、廣くて深い――直木さんなか〳〵是で偉い。

直木　是で……ね。（直木氏失笑）

三上　先達て高崎の演説は、皆漫談的のお喋りを話したのですけれども、此男だけ本格に機械文明の社會と文學を論じた……

直木　大演説だ。

三上　なか〳〵大演説だ……併しそれをお爺さんの竝んでる所でやるんだから、大膽不敵なものだよ。おめず臆せずやるから……

直木　若い男も居た。其の向ふには女の讀者も居た。

三上　女に目を着けたな。科學が軍事若しくは遊戲化され過ぎると云ふ議論……あれ一寸面白かつた。

山田　――私遲れて參りまして失禮致しました。やつと皆樣のお部屋の空氣が分りまして、何かお話をさして頂きたいと思つて居りましたが、何も申上げないで失禮でございますけれども、今日は出席しなかつた事にして頂いて、さうお願ひ致したいと思ひます。

三上　今日は男ばかり喋つた……

時雨　やつぱり女性缺點摘發みたいになつてしまつて……皆さんが意氣込んで下すつたやうに、ちつとも男性の……

三上　初めつから別に誰も喧嘩してる譯ぢやなし、そんなに摘發なんかせぬでも宜い。いやもう中河さんの目付を見たゞけで閉口しました。（笑聲）

時雨　德田先生、何か女に訓戒を加へて下さるやうな事がございましたら……

德田　どう致しまして、そんな理想主義者でない……

中河　私は隨分理想主義者なんです。……こんな事思つてるのに間違ひでせうか？女は良くならうと思つて努力してゐても、それを男が壓迫してならせないやう氣がするの、僻みでせうか――？

林　事實でせうね。

中本　實際、家庭に入つてみるとさう云ふことがございます。

平林　男も壓迫するのぢやないと思ひますけれども、男が壓迫する形になるのぢや……

葉山　兎に角國家權力を現在に於て代表し得る者を、一人を出してみれば男性だけだ。つまり女性の中から國家權力を代表し得る

一人を出してみれば、其の女性が如何に全女性を解放し得るか。それはやつぱり試驗さるべき問題である。內閣の一員に一人送つてみれば宜い。其の女性が大日本の全女性に向つて、どう云ふ風の政策を採るか、どう云ふ風に解放するか？例へば中河さんが內閣の一員に列したとして、中河さんが今まで言はれたあの思想では、到底女性は解放されないと思ふ。

德田　さう云ふ問題は、今までは非常に愛護されて來たものと思ふ。それが是からやつぱり人世に立たなければならぬ女性の爲に非常にお氣の毒だと思ふ。

平林　併し是からはさう云ふ風に、今までのやうに愛護されると云ふことは、餘り有難い事ぢやない譯になります。

中本　愛護の事は、或種の事に利用されてるんぢやございませんか…

三上　一口に今の女性階級がもつと…惠まれない人の間は、男女が對立すると云ふと今日の知識階級みたいに議論無く、何か進む途はないかね。皆なで働いて…

中河　外に出て働きたいと思ひますわ、でも子供の事や…

葉山　働ける人はもつと忙しく働いて、報酬を澤山貰つて、やつて貰ひたい、それが出來ないから議論が出る。

德田　政治なんかして居る人間の型が大分違つて來た。別問題だけれども…やつぱり民衆的の政治家なんか、妙ですね、頭の問題から云へば、頭はさうでないかも知れませんが、加藤高明、原敬なんかから見ると今の田中總理大臣なんか民衆的な樣ですね、やる事が割合に正直で迚も人が好い。

林　野性があると云ふだけで、民衆とは云へない。

德田　非常に我儘かも知れないが、男らしいから…

葉山　結論から云へばあなたの言はれたのとあべこべになる。田中總理大臣の代りにアミーバーを持つて來て据ゑれば…

中河　其の位地を與へれば人間は割合にやつて行きます。私なんか若し送られたらやつてみますわ、出來ないと仰しやつても、あなたに送る力があつたら送つて御覽なさい。あなたが好きなやうな事位やつてみせます。

葉山　さう云ふ力は個人的には湧いて來ない。

林　それは併しやるよ、女流作家と云ふものが出て來て居るぢやないか。

三上　今月の「近代生活」の六號にひどい事を書いてるね、婦人執筆者と云ふものは、執筆權を持つてゐて、さうして少しも仕事は出來ない。だから果してどんなものかと云ふやうな事を、或る反動家が言つたと云ふことが書いてあるが、あれは女の體力が問題だらうな。

葉山　體力が弱いですからね。

中河　子供の事を考へます時、革命とかさう云ふ事に對して恐怖を感じます。結果から考へてそれはどうでせう…

葉山　僕は今まで子供を四人殺してゐます。

中河　慘酷なお父さんですね

葉山　一人は餓死した、一人は便所に逆さまに落こつて死んだ、日本の無產階級運動に携はつて、監獄に入つてゐる時…

中河　子供の事を思ふと悲しくなります。

林　早く××が來れば…

中河　それで子供が可哀想なんです。子供にはさう云ふ世界を見せたくないし…矛盾した氣持があるんです。

林　あなたの子供ぢやない、種々なる子供が、祈つてる子供もありますよ。

中河　私自身としては祈つて居る心持はあり

ながら、恐怖します。

平林　私は子供の事を考へると勇氣が無くて、勇氣があります。

林　僕はロシアの事を聞きますが‥‥。僕等が子供の時分は道端でよく遊んで居りましたね、あんなに速くなりたいと思ひます。

時雨　宮城に無産の少年團が出來たと‥‥

林　今は方々にあります。

時雨　本當は小學校時代から‥‥

葉山　もつと小さい時からやるんですね。

林　學校鬪爭と云ふことを、敎室であばれ廻ると云ふことを盛んにやるんです。先生なんかヒッパタイてしまふ。

中河　葉山さんのやうな立派なお方になると、よその子供と自分の子供と、全く同じ感じですか？

葉山　違ひますね、やつぱり幾らか自分の子供の方が可愛いです。

林　幾らか所ぢやないね。

葉山　階級運動をするだけで、自分の身に振返つて、子供を育てる爲に、子供の實を捧げて行かうと思ふ。銀座に子供を伴れて行かうとしたけれども、人にブッかつて、ブッつぶされる。幾ら子供に悲慘な生活を與へまいとしても、社會制度がさうでなければ駄目だ。手前の子供だけを寶物のやうにかうやつて捧げて行かうとしても、行けない。例へば滿員電車に乘るとする。子供が押潰されさうになる。それはあなたが惡いのでもなく、子供が惡いのでもない。滿員電車が惡い、交通機關が惡いんだ。僕の子供は恰悧で頑健であつたが、××××で擧げられた時に死んぢやつた。だから子供の憤りを、僕の憤りに加へて社會の犧牲にしたい。

中河　自分の子供が可愛くて、子供の事を思つてますけれども、自分の子供だけでなしに、もつと廣めて周圍、社會と云ふことを考へますわ、葉山さんのお話なんか聞いてると、自分の子供と、社會の子供とすつかり同じやうに聞えます。

葉山　すつかり同じとは行きません。

中河　自分が自分の周圍から推して、自分の命一ぱいの暮しをして、良い事をしたいと思ふので、消極的でなくて積極的‥‥

葉山　積極でなくて環境が僕等をさう云ふ風にしてしまつた。

中河　子供に對する愛情の爲に、社會運動に入りたいと思ふ。

時雨　その邊で――有難うございました。

讀者の希望

美點

プロレタリヤ文學、純文學を平然とのせかたよつたものにしないで大衆の批判をまたせる所に過度期における藝術の立場を賢くして居る。

缺點

男子の座談會の記事などいやな氣がする。女人藝術の存在の宣傳のための役割は認めるが、私等はもつと現在の立場を強調しつゝ女人としての集團の地方的團結を基とする一つのものへ向つて進行すべきまじめな座談會を見せて貰ひたい。

希望

女人藝術の名の下に婦人の精算された實踐的運動を政治的進出を希望す。

大分縣北海部郡大在村
波多野　代志子



百合の芽

金子せん女

夜もすがら降り來し雨や糸櫻

花曇り思はぬ事のつぎ〳〵に

昨日今日花の館となりにけり

ひもすがら花にとざせる別墅哉

春の人船と陸とに旅立ちぬ

年〳〵に葉がちとなりし椿かな

宿り木をもちて芽を吹く大樹哉

百合の芽にさゝやきやめぬ小雨哉

木の芽空へ鳥追ひあげし小猫哉

吹き晴れて又も曇りや木の芽空

全女性進出行進曲を募る!!

——すでに女性は重き足枷を蹴放して、暗き心の牢獄を脱出した。今やわれ等の前にあるのは陽光雨の如く降りそゝぐ街頭である。轟音耳を聾する工場である。屹立して天空を摩する思想の尖巓である。あらゆる人類に伍して、われ等はすべての生き動くものの世界へと前進する。友よ、かかる時われ等の爲めに、讃め、勵まし、歡こび、突き進ませる「歌」がなければならぬ。疲憊して路傍に仆れた「母」と「娘」とをも蘇へらせる「歌」がなければならぬ。激越にして而も優雅に、燦爛として而も素朴に、裸らはにして而も賢こき「歌」がなければならぬ。本社が「女性の歌」を偏ねく募る所因はここにある。全國同性の寄稿を待つ!

I　應募者女性に限る

II　歌詞隨意、但し群集の合唱に適するもの

III　締切　昭和四年五月三十日

IV　賞金壹等　金貳百圓　貳等五拾圓

V　附屬賞品　1　創作月刊三ケ月券二十枚・メヌマポマード三十個文藝春秋社　2　圖書券百枚　平凡社
3　同　改造社　4　同　新潮社　5　半襟百掛　高島屋呉服店　6　松屋呉服店　7　十字屋樂器店

VI　應募歌は七月號（女人藝術一週年記念號）誌上にて發表。

VII　當選歌詞は作曲を附し、全國女學校、及工場に寄贈す。

VIII　作曲者の選定を讀者の指定に待つ。各自推選せる作曲者氏名を別行規定の欄内に記し投票をこふ。

選者は知名なる各階級の女人を網羅す

女人藝術社

全女性進出行進曲	
推薦作曲者氏名	
推薦者	住所
	氏名

晩春雑詠

沼　蘋女

鶯の今朝も鳴きけり窓かげに

宇治川の洋畫明るし部屋の春

白足袋の輕く過ぎけり春の晝

子の試驗終へて母の土筆つみ

何鳥か頻りに鳴けり春の宵

白蓮女史苺抱へ來る

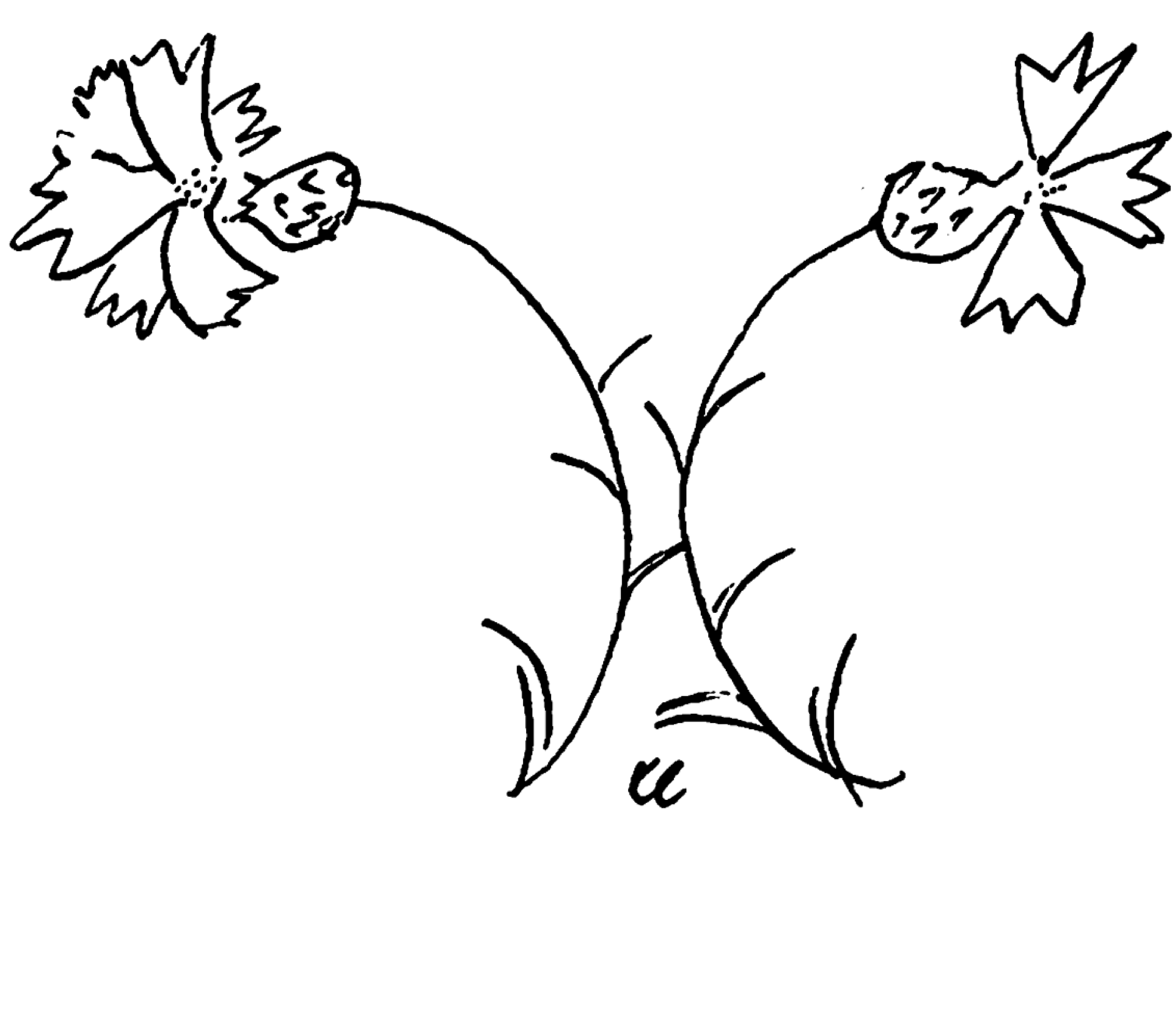
おとづれし友の笑顔や初苺

白蓮女史にともなひて

そさわれて蓬摘みつゝ物語り

白蓮女史と共に

打ち集ひ春待つ庭に寫眞とる



私共の研究旅行

鳥居きみ子



外蒙古車臣汗貴族の妻

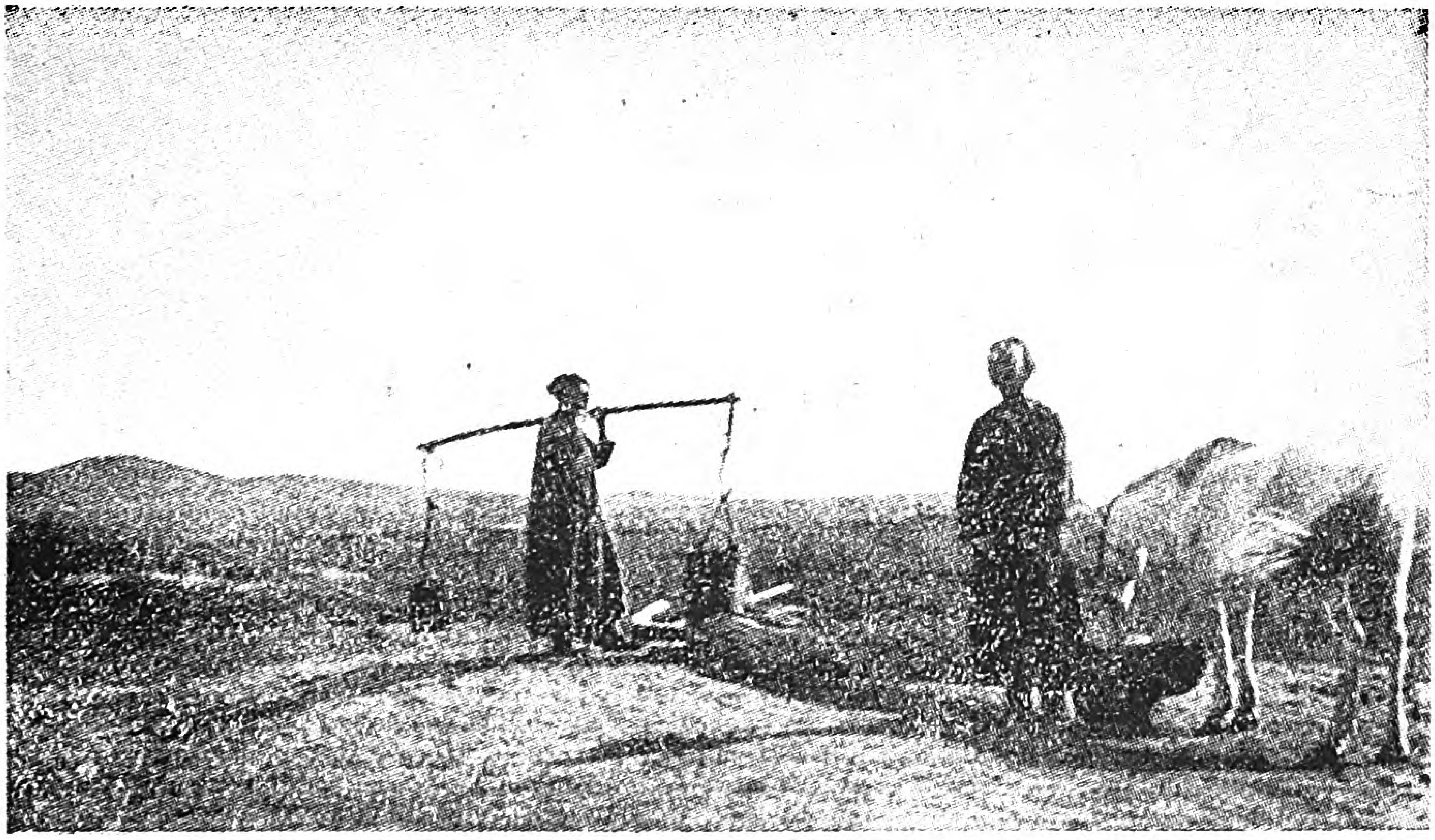
『マーお樂しみね』と云つて下さる、其が箱根とか熱海あたりの溫泉に浸る樂しみをもつ方の言葉であるから『何が樂しみでしやうか』と反問したくなる、それは研究旅行で大きな犧牲や苦心の伴ふ、學術上の發見と云ふ樂しみを御存じない方の『お樂しみ』は聊か疑問であらねばならぬ。

私は未だ單獨の調査旅行をした事がない、それはいつも私共である、夫の助手としてゞあつた。二十三年前の若かつた時の三年間の蒙古探險程、私共の生涯を通じて意義の深いものはないと思つて居る、それは夫の爲に博士論文となり大學紀要となり、世界の學界に有史以前の東部蒙古を始めて紹介したのは私共であつた。

私の當時の日記『土俗學上より見たる蒙古』は菊版で千ページに餘つた、單に毎日の紀行文ではない、絶えず何かを研究調査して居た總べてを書き綴つたもので、私共の命をかけた調査旅行であつた學士院の恩賞に預かつても然る可きでないかと思つて居る。

去年の旅『シベリアから滿蒙』をやつと書き終つて、今山東旅行の『齊の國を訪ひて』の日記を書きかけた處へ、長谷川さんからお便りで何か旅行に關することをとの御話、女人藝術から見た私共の方面はどんなにか無味乾燥なものかもしれない。でも書かないのも御使の方が可愛想だから、少しばかり日頃の不平や希望を漏らさして戴きます。私共の旅行は詩や歌をもとめあるく樣に、高尙優美なそして靜かに落着いて、旅の氣分を味つて行くことが出來ない、或時は其幾日を炎天下に曝らされつゝ、毎日朝から日沒まで調査を續けねばならぬ、又或時は雷雨を冐し吹雪と戰つて、次から次へと進まねばならぬ時もある。かくて一日の休養もしないで、目的地に向つて猛進して行く。

登山などして一寸した露宿などは、實に旅らしい氣分を味ふことが出來て、大變面白いものであるが、私共の旅は其が一ケ月二ケ月一年二年と續くのであるから、目的地に達した時の新らしき學術上の發見と云ふ樂しみがなかつたならば、屹度堪えきれない苦痛が伴



阿嚕科爾沁蒙古婦女の水汲

ふて來る事でしやう。

私共は困難な旅の時程、目的に向つていつも勇氣は百倍して來る様です、そして限りない樂しみや喜びが、此中に潜んで居るのであると云つてよい。旅の荷物は手輕な程愉快なものであるが、私共の旅は至る處で、遺物や土俗品其他の採集品で、荷物は殖える一方である、うつかり美しい景色などに見とれて居ると、肝心の遺跡地などを見落してしまはねばならぬ。自動車で走つてしまつても大切な史料を拾ひそこなつてしまふ。

馬上で一時間一里位の程度で、絶えず注意して眼を周圍に配つて居らねばならぬ。一寸した土地の高低にも其が自然か人工かを注意する。土地の斷面など最も注意を要する、其處には往々貴重なる史料が挾まつて居るのである、轉がつて居る石、立つて居る石、重なつた石其大小に依つて面白い結果を見出す事が出來る。丘や山の形にも注意しなくてはならぬ、砦になつたり山城があつたりする。

之等の何れでも一つのものに打突かつた時八方から寫眞を撮る測量をする、スケッチをする、發掘する、出た遺物の位置方向から其物の形、品質數量、色、など又精しく書き取つたりスケッチ寫眞にしなくてはならぬ。人骨の出た場合小さい骨の一つにも位置を狂はせない様に、掘り現はさねばならぬ、一掘りの土の中にも注意を怠ることは出來ないのである。

途中で採集したり掘り出したりしたものは、一々丁寧に其場所と月日を明記して、散亂しない様に整理して行かねばならぬ。趣味として私共はいつも傍ら植物の採集をして行くのを樂しみにして居る。

蒙古で採集した植物の如き、昔某植物學者に贈つて當時博士論文の一助となつた事を嬉しく思つて居る。

一地方に留つて居る時は、其地方の傳說神話から俚歌童謠迷信の様なもの、年中行事冠婚葬祭、風俗習慣言語文學とか、數に關する觀念などそれから衣食住、民族藝術、建築美術など、數限りなく調べなくてはならぬ材料はいくらでもある。

蒙古に於ける研究の時は、私が此樣な方面を分擔して實際に調べ

て來たのであつた。民謠の如きは蒙古人に就いて唱つて習つて、譜に直して來た、歌詩は蒙古語から日本語に譯して置いたので、之によつて、又民謠以外の古い風俗習慣を窺ふことが出來るのである。

それから何れの國に旅行しても、其國の言語に通じると云ふ事は研究調査を幾十倍の價値あらしめるもので、特に未開地などを旅行する時の大きな武器であらねばならぬ、

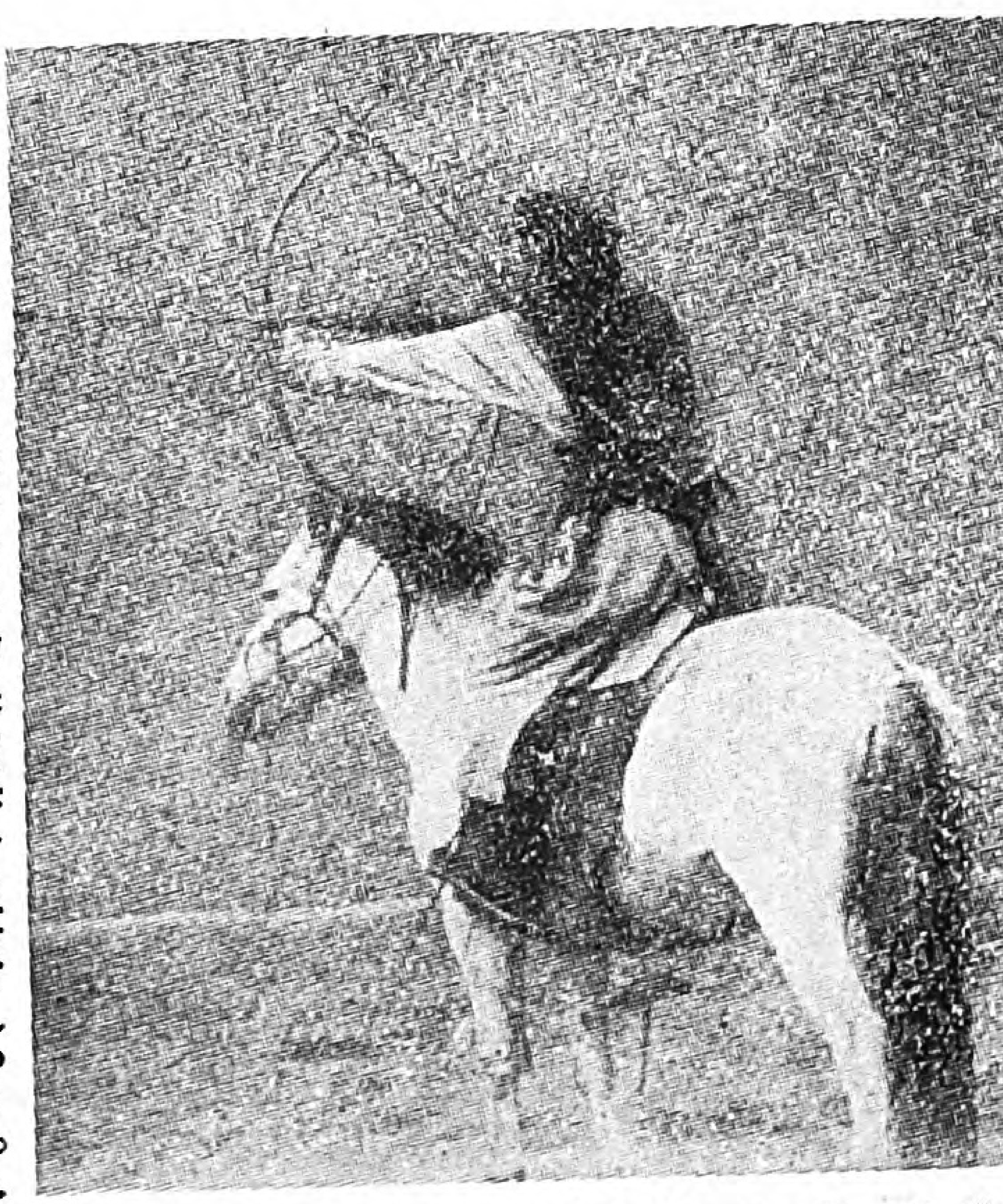
私共は夫の後繼者として期待して居た伜を巴里で失つて以來、伜と一緒にと思つて殘してあつた、まだ果しきれなかつた多くの使命を、今後十幾年間に或程度まで果したいと思つて居る。それはやつぱり此樣な研究調査旅行である。

研究調査旅行を終つた後が又大變なので、一寸の旅行にも採集品や買入れた參考品參考書で、ビール箱に十數個餘になる、之等の整理の爲に家内總掛りで幾月を費すのである。

スケッチを廓大して清書するだけでも大變な仕事になつてしまふ、そして先順席として論文より先に必らず旅行記の出版をする。之は歐米の學術研究旅行の如きも、必らず最初に其旅行記を出して居る。如何なる階級の人でも其專門の如何にかゝはらず、每日旅行の見聞を日記として書いて置かれたならば、後に至つて其は誰が見ても興味深く有益なものとして殘るであらう。特に婦人の觀察力は男子に勝るものであるから、必らず旅日記を怠らず書く事を御勸めしたい、

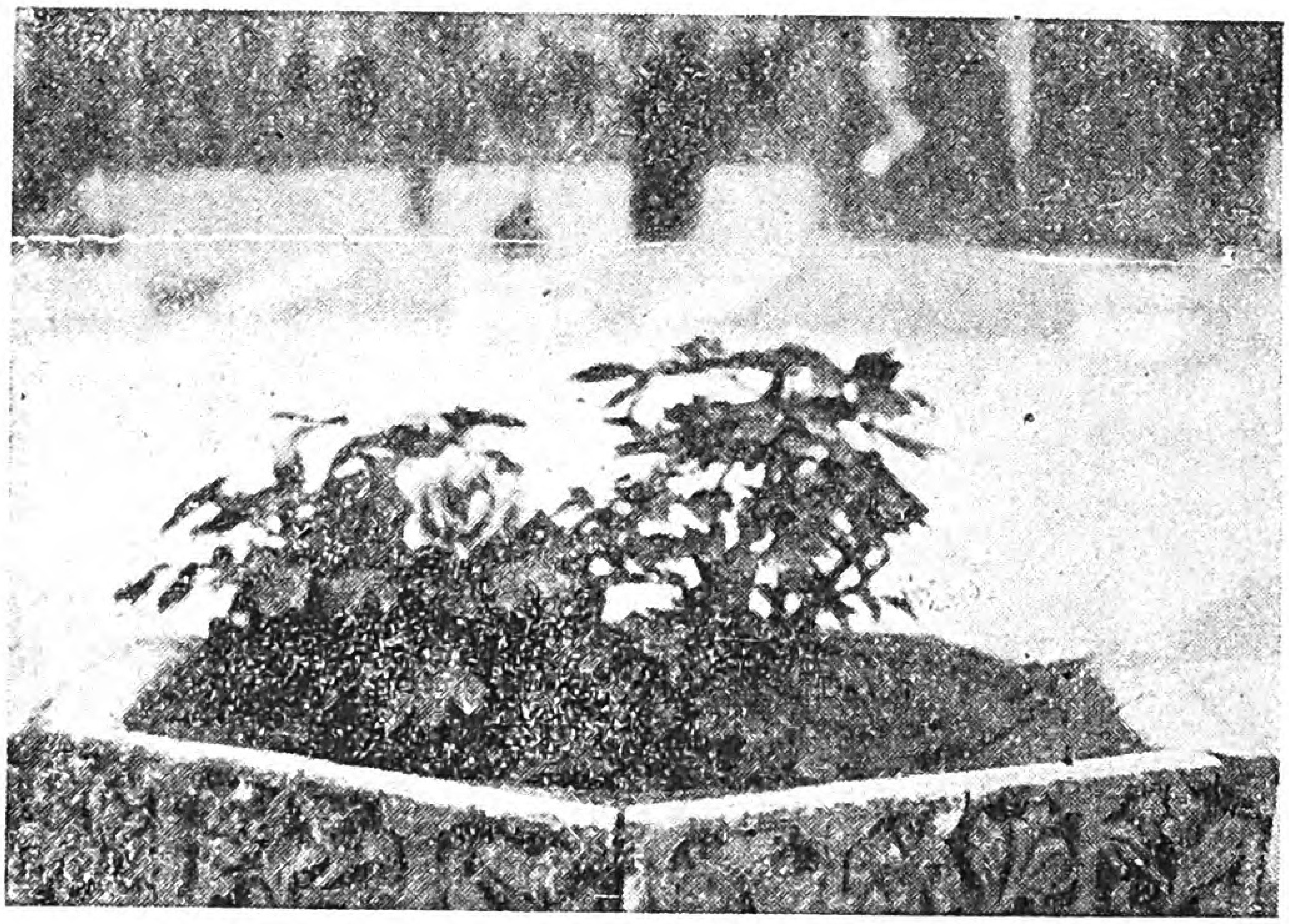
學者がお金の事を口にするのは賤しい事であらうが、旅から歸つた時の生活の苦しみを思ふと悲しくなる、一度調査旅行に出れば必らず大なる貢獻をして來るが、まだ思ふ存分の調査旅行をした事がないのが殘念である、其はいつも旅費の乏しい爲であつた。

然し今や日本も學術研究の貴さを知つて來たし、特に一般的に目覺めて來た折から、そんなに悲觀したものでもないと思つて居る。私共の樣な者の餘生を今一層有益に、學術の爲に貢獻さして下さる樣な特志家が、屹度あるに相違ないと樂みにして努力して居るのである。



馬上弓を射る西扎魯特蒙古人

終りに臨んで、將來學術以外何れの方面に寄らず、調査旅行などには忠實なる妻や娘が助手として働く樣にお勸めしたい、其は夫の研究の上に幾層倍の效果を與へる事でしやう。此樣な方の多く現はれる樣に祈つて居る。否たしかに近い將來に於て、此樣な方が續々と出て來られると信じて居る。



西太后遺愛の牡丹——萬壽山離宮

初夏の北平郊外

笙 千 鳥

白河の流

船は溏沽から白河を逆のぼる水のいろは硫黄鑛泉の白さに、いくぶん赤味を帶びてゐる。

この水の中に魚なんぞ一尾も居さうもないと思はれるけれども、白魚がとれるのださうだ、日本の白魚と形は同じで三四寸はある、はじめて食膳で見たときは、大層美ごとなものだとおもつた、大に食慾をそゝられて、喰べて見て驚いた、大味で脊中に軟骨があつて、似ても似つかぬものだつた。

小舟をうかべて漁どりして居る、汽船のあふりを喰つて、舟はおりおりひつくり返りさうになる。

どぶん、どぶんと、兩岸の土はくづされてゆく、土の家屋から泥燒の唐子人形が、澤山出て來て河の中へピヨイ、ピヨイ、飛び込む。

河岸の楊柳のもとに、端然と坐して、棕梠の團扇を手に長髯を撫す老爺など、まさに南畫だ。あこがれの北支那に、まだ一歩を踏み入れぬうちから、無性にうれしくなつた。

西山の曉

夏の曉、まだ夜は明けきらない、淡い月影さへほの白い。

城門は、いま開いたばかりだ、野菜うり、花うりが、詩趣に富んだ籠を肩に都會へいそぐ。麥粉を積んだ駱駝の一群がつゞく。

見わたすかぎりの街道、兩側は楊柳の並木、私達の一行も驢に乗つて居らねば繪にならない。春雨の朝、蛇の目の傘に吾妻下駄。竹屋の渡し場から見た、向島の印象、寺嶋あたりの花やから剪り出す花を、荷つて通る、日本はたしかに浮世繪だ。

北平から幾支里、西山の麓に着く。丘は露に濡れて爪さきが冷たい。

ばら色から紅に、緋に、紫に、白に、美しく尊くそして壯嚴な黎明だ。

山峽の庵からは一すじの白煙がのぼる、ブーブーと豚が鳴き出す、雄大に　靜寂に、朝のいとなみが始まる。本當に、何もかも大陸的だ、丘の上に立つ自分さへ、世間を超越したもののやうに思はれた。

玉泉山

玉泉山は、萬壽山の西にあたる、山の頂には高い石塔があつて、山腹のところどころには、佛像が刻んである。

かなり、嶮しい石段なので、足早の同行の人達はどんどん先に行つてしまつた。ころげ落ちて氣絕しても、誰れもあとを、振り向かなければ、氣がつきさうも無い。こんな、支那の山の中で、死骸となるのも情け無い、ままよ、と踵の高い靴を脫いで駈け下り、あたりを見廻してそつと穿いて知らぬ顏をして居た。

天下第一泉――と稱する靈泉は、この山の麓より湧き出てゐる。際涯(そこひ)も見えぬ深淵で、主といふものがあるなれば、こんなところにこそ、居さうな氣がする。

うす暗い淵に、大きな御坐船の朽ちたのがもの凄さを添へてゐる。泉は岩の間より、滾々として、吹き出してゐる。

かつて、いくとせかの春秋を、相模の箱根に暮したことがあつた。塔の澤の塔の峯は、支那の廬山に、その形が似てゐるといふので、その昔、頂上に阿彌陀佛を安置し阿彌陀寺を建立したといふことであつたが。その塔の峯の麓にある溫泉の名を、玉泉といつた、多分この天下第一泉より名づけたものだらうと思ふ。

だが、この支那の玉泉の水は硬水である、この附近の部落には、バセドー氏病が一種の風土病であつて、眼の玉の飛び出たのや、咽喉の太くなつた人が澤山居るさうだ。

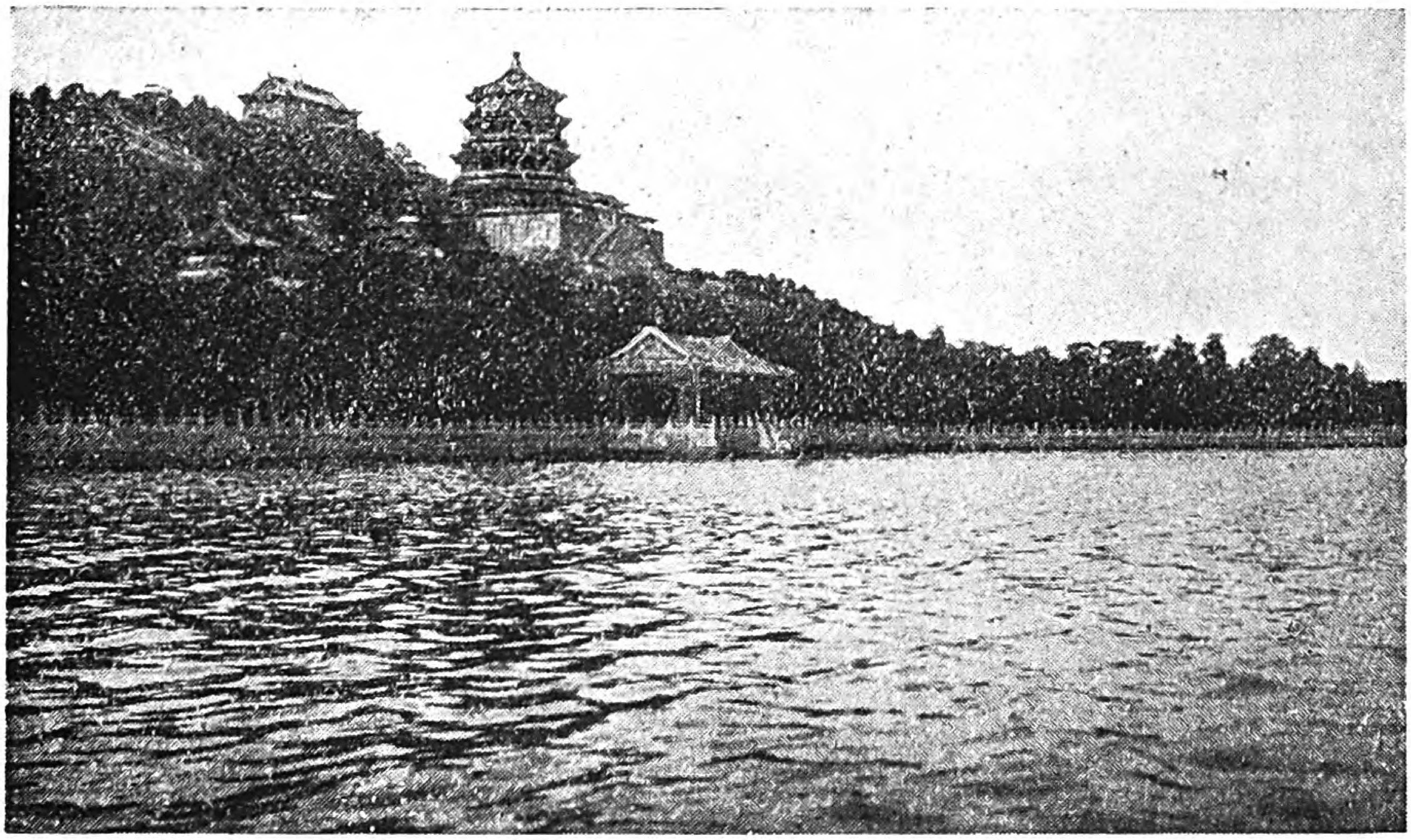
コップ一杯、銅子兒二文で汲んで呉れる。

私には、いくら靈泉でも、うす氣味がわるくつて、呑む氣にはなれなかつた。

一行の女の人達は、靈泉だから不思議な、效能でもあつて、たちまちにして窈窕たる、玉のごとき美人となるか、支那のことだから、不老長生の仙藥などの效目は、たしかにあらうと、喜んで召しあがつた、があとでこのバゼドー氏病のはなしを聞いて、悲観して居た。

北平市中の水道は、この玉泉の水だといふことである、そのせいか北平にながく住むと、一種の風土病に罹るさうだ、黃鯝魚(ほわちいゆうい)といふ魚を喰べるとなるとも言ふことだ。





西太后渡船所　萬壽山離宮

萬壽山

萬壽山は、西太后の離宮で有名な夏の宮居である。西太后が淫蕩生活をしたところで、いろいろのエピソードがある。

建築の美とか、壯厳とかといふような感じは、少しも無い、むしろ俗惡な趣味だ。

琉璃の甍、――畫燈籠の長廊――銅の亭――石船――芝居の舞臺。

この芝居の舞臺は、一寸壯厳なものだ、あまたの宮女にかしづかれた、臈たけた西太后を思ひうかべることが出來る。

昆明湖から見た全景は、蓬萊島か、夢に見る阿房宮の感じた。

しかし、小舟に棹して、自ら今西太后を氣どるのも、わるい感じじあない。

船人は、清朝時代の官人ださうだ、白髯を水の面の風になびかせて、ゆう然と櫓をうごかす、彼れも、革命を呪ふ一人であらう。

十三陵

十三陵は、明の陵墓で永樂帝の陵がある、北平の市街を離れると、荒漠なる高粱の畑がつゞく、五月雨のころだといふに、沙河は水涸れて、自動車で渡ることが出來る、畑にも、田にも一筋の水も無い。

一體、この北支那の地には、畑を耕すに、肥料などといふものは不必要で、かの有名な蒙古風が持つて來る砂塵が自然の肥料となるのださうだ。

どこから、どこまで耕して、どのあたりの家まで歸るのか見當がつか無い。

ところどころに二三人づつで、ぼつり、ぼつりと耕して居るのを見るが、辨當らしいものも持たないし藥罐らしいものも傍に見え無い、日本のお百姓とは大分樣子が違ふ、さうかといつて大農式でも無いようだ。

それでも幾里か行くと、一かたまりの村落がある、客棧と書いた土の家もある、馬もつないである。

もし、行き暮れたら吾々も、こんなところに一夜の宿りをもとめ無くてはならないかと思ふと、いささか心細くなる。

村落を離れると、おりおり支那名物の土匪に襲はれる、身ぐるみ脱いで置いて行けと言はれたら大變、昔の箱根山の雲助よりおそろしい、慘虐極まる支那の兵隊あがり、大ていはピストル御持參だ、昨年も何處かの公使が、おそはれて命からがら逃げ歸つたのも、このあたりだと聞いては、そぞろ怖けが立つ。

佐々木信綱先生が、かつて支那に旅行せられたとき、戴いたお端書に、寸馬豆人なにとかいふお歌があつた、こゝでそれをしきりに考へた。

兩側の石人石獸は、昔のまま旅人を睥睨してゐる。

陵はあれ果て、陵門は壞れ、樓は風雨の荒すにまかせてある。

それでも番兵が居て、門錢といつて、觀覽料をとつて居る。

くづれ落ちた甍の缺片を、二弗(ドル)で買へと番兵がいふ、あさましき限りなれど、東陵を擯きて、西太后の遺骸を持ち出し、あまたの寶玉を盗み出す軍隊のある支那のことだから、瓦を賣る位のことは、朝飯まへの仕事だ。

駱駝のむれと屠所の羊

僅か道幅一間か一間半位の、細い胡同、日本で言へば横町とか、新道とかいふようなところの、門の前や、繁華な大街の店先に、こげ茶色の小山が重つたように、十頭ぐらゐの駱駝が、坐つて居るのにビックリさせられる。

自動車、自轉車、物賣りなどの、ざわめきの中を、首をのばして、平氣にすました顏をして居る。

大てい、田舍から物を積んで來て、一夜を都會の軒下に明し、また荷物を背負つて田舍へ歸るのだ。お上りさんにしては落付いて居る。

街でよく羊の群れに會ふ、一すじの鞭に追ひ立てられ、驅け出しては、またとぼとぼと行く、所謂、屠所の羊だ、自動車などにおびえて、塀ぎわに、かたまつて、一緒に寄り添ふいぢらしげな樣子、ヂンギスカン料理などといふ、羊の料理に、舌皷を打つ人は、この屠所の羊を見たことの無い人だらうと思ふ。

年老ひたる乞食

到るところで乞食を見たが、顏のくづれたのは殆んど見ない、よごれては居るがよく見ると、上品な顏立のが多い、まつたく腹からの非人でも無ささう、身の上話もまた一興、世が世であらばと言ひさうなのが多い。そして、物乞ふ聲に、ユーモアがあつて、快活で面白い。

日本で、お寺參りの途中などで乞食にあふと、眼をつぶつて驅け出したものだが、支那の乞食は、汚いけれど人相が良いので、ぢつと觀察することが出來る。

農事試驗場へ行くみちで、お婆さんの乞食が、大きな團扇で、車上の客をあふぎながら、車と一緒に驅けて行くのを見た。

私も、植物園の入口で入場券を買つて居たら、うしろから頻りにあふいで與れたので、感謝しながら銅子兒を彼の女の手に渡した。

街路の夏の、日中の暑さは、立止まつて居たらば、呼吸が止りさうに苦しくなる。だから、美人がおくる扇の風で無くとも、かたゐの媼がくれる風でもうれしいと思つた。

星加



波浮の人々

——表紙のない日記帳より——

素川絹子

船

——これでも二十四人へえつたぞ——

誰の聲とも知れないが、大島通ひの薄暗い船室の硝子窓が、はるか右手に横濱邊りの街の灯を明滅させてゐる。夜は闇で、波は靜かだ。むつとする人いきれの中に、顏に手拭ひを掛けてねてゐる年寄りがある。

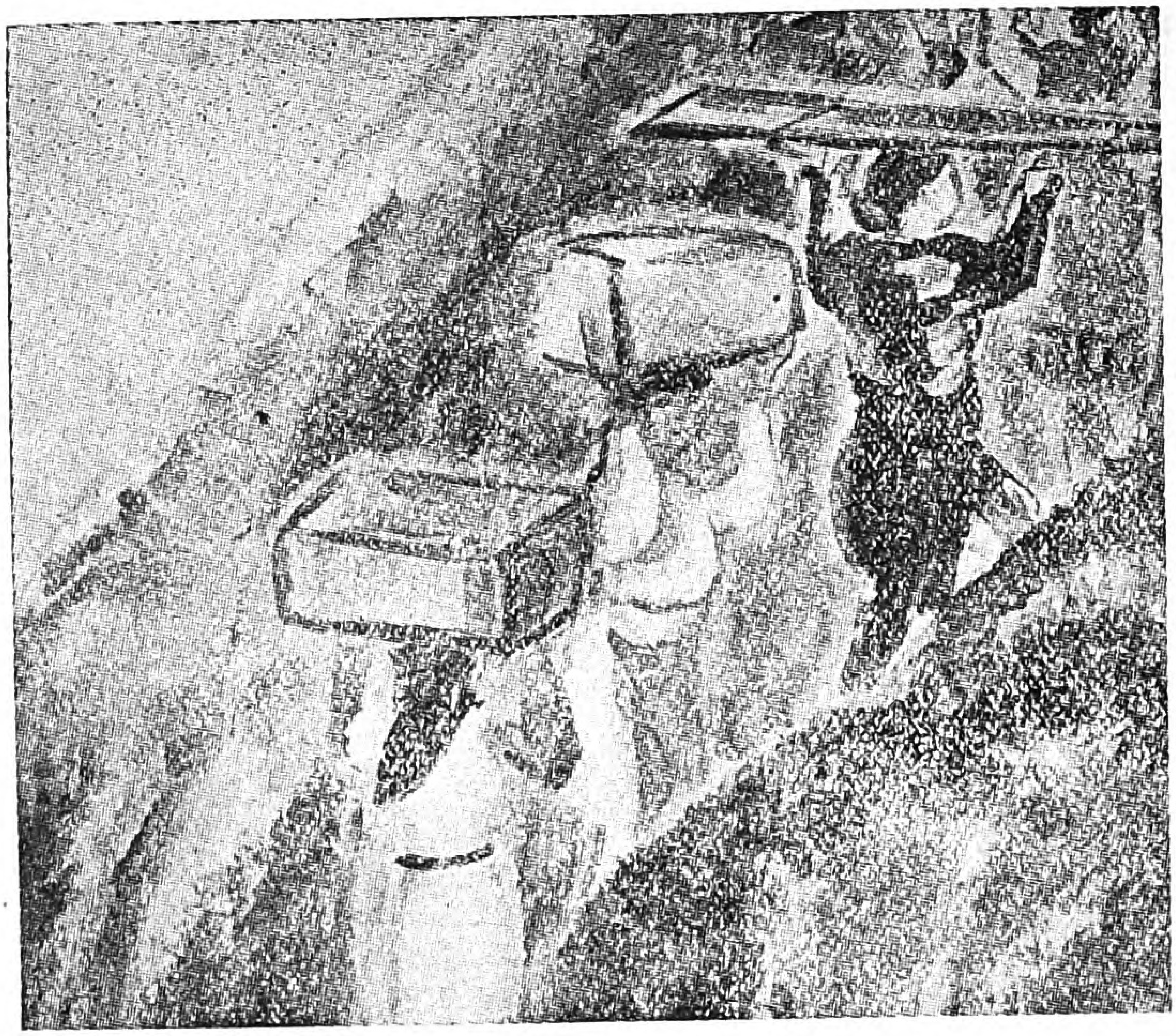
私は一人だつた。生活の雰圍氣を離れてみて、一層疲れた、氣重い、その癖何となく放縱な氣持だ。自分と自分の性質に束縛されるやうな恐劣はもう眞平にしたい。私の横には十二三の瘠せた白痴の娘が座つてゐる。可愛らしい口をぽかんと開けて、編んだ下げ髮がひどく可憐らしい。父親と女中らしい女とが附添つて、大島へ置いて來るのだと話してゐた。元村にはたしか白痴の收容所がある筈である。父親は娘を視られるのを嫌がつて、娘が身動きする度に焦燥を額に現して引寄せる。

いつの間に眠つたものか、ボーイから借りた毛布を被つて、ひよいと氣がついてみると、外は夜が白々明け初めて、客はまだ眠つてゐた。五月の海の上、明け方の大氣の何と爽やかなことよ。目の前にはうつすらと靄を被つた陸がある。もう大島ですかとボーイに尋ねたら、昨夜は濃霧のために浦賀沖に錨を下したのだといふ。道理で夢が靜かだつた。

漸く船が動き初めた。霧が霽がつて、綺麗な日影が波の間に躍る。東京灣を離れると、水は一層澄んで靑く、ふなばたが幸福な波の唄を唄ふ。ひる近く元村に船がついた。この邊は波の荒いところで、船は横波のあほりを喰つてゆれが劇しい。乘客は殆んど傳馬で上陸してしまつたが、氣分が惡いのでものぐさに殘つてゐると、海馴れた漁師らしい老人は、齒のない口をもがもがさせて船の辨當を食べてゐた。その老人が重い口調で波浮の話をしてくれた。

——そりや東岸だから海は大きい——

といつた言葉に引かれて、そこまで行く事にする。東京の奉公先きから、兄と一緒に歸る髮の黑い娘もゐた。波浮へついたのは三時頃だつた。巾着の樣に口の狹つた港で、以前は滿潮の時にわづかに潮



が乗り込むくらゐの池にすぎなかつたのを、今土地の郵便局の先代が、明神様のお告げを夢にみて、堀りひろげたのだと老人は話した。大きくはないが、鰹船が入るに不自由はないくらゐの波風に安全な港として、入江の岸一帶に怪し氣な家の立並ぶのも決して不思議ではない。教へられた港屋といふ宿屋の二階に落付くと、髮の艶々した、目のきつい島の者らしい若い女中が火を持つて來た。客はないらしい。障子を開けると、入江の周りは深々と綠の盛られた斷崖で、鶯や、頰白の聲が間近かに耳につく。窓まで差し伸べられた櫻の枝には大粒な赤い實が熟れかけてゐる。

水汲みの女

哀愁にかり立てられて、暮れ近く廣い海を見に出て見る。宿の前を半町程上ると、港とはがらりと空氣の違つた波浮の村があつて、家毎に丸い石を積んだ圍ひと、牛の鳴聲がする。海に向いた斷崖の緣には、大きな椿が風屛風をしてゐる。その後、しば〳〵荒い東風が礫のやうに小石まで卷き上げる日があつて、その度に繁つた椿の枝や葉が、思ひ切り風に苛なまれてゐるのを見たものだ。その時、岩にくだける怒濤のしぶきは、十間もある斷崖の上までかけ上るかと思ふ程物凄い。

やゝ西にまわつた危い崖の中途に、コンクリートで固めた村の水汲み場があつて、頭に桶をのせた女たちが夕餉の水を汲みに集まつてゐた。椿油でねつとりした髮を無雜作に束ねて、二幅の紺絣の前垂の紐が、彼の女達のがつしりした腰をきりつと結ぶ。廣い帶を結めることは殆んどなくて、葬式とか祭禮とか、何事があつても大抵毛繻子の紐をやゝ幅廣く絎けた新らしい前垂さへあればすむのだ。

おてるさんのお母さん

雨の霽がつた朝、舟の中で知り合ひになつたおてるさんといふ娘が誘ひに來た。宿の人が、自分を置き忘れたやうにぼんやりして、港の雨を一日眺めてゐた私に氣を利かしてくれたものらしい。

今大島は五月の陽光を浴びてすべてものが艶やかに盛んである。淡紅い櫻んぼ、椿の葉、女の髪、頬、土も空も海も、波のはる〴〵と光つてゐることよ。

おてるさんの叔母さんも、祖母さんもみんな村でそれ〴〵家を持つてゐて、世話好きな叔母さんは、草餅など燒いてくれ乍ら、宿屋はつまらないから村へ移つて來いとすゝめる。ここに居据る氣はないが、港の空氣より素朴な村の屋根や、石垣が私を誘惑する。小さな駄菓子屋を出してゐる祖母さんの家では、若い女の獨り旅が村中の噂になつてゐるといふ。話の樣子から押すと、こゝへ來る人たちの大部分が、心身いづれかの不健康者で、來ては間もなく死んでゆく事が、素朴な人達の氣持を寂しくするのであらう。

港から村への上り坂で、島の人特有の頭上に米俵をのせて身輕に上つて來る三四人の荷役の女の中に、脊の高い細面の、おてるさんのお母さんがゐる。おてるさんが娘らしく堅肥りの色白なのに似ず、お母さんは身體つきのがつしりした、鼻の細い人で、若い頃は美しかつたに違ひない。今は退職して遊んでゐる海軍の軍人と結婚して、横須賀にゐた頃、髮の毛が、脊丈に餘つてうね〳〵してゐる寫眞があつた。祖母さんは六十幾歳なのに、眞黑い髮がゆうに腰の下まであつて、若い娘のやうに美しい。この一家は純粹な大島女の型である。

ある晩、大島節を聞かせるからと、おてるさんの家から呼びに來たので、行つてみると、お祖母さんも、叔母さんも來てゐて、風呂を貰ひに來た近所の唄の上手な人とが、焚いてないゐろり端に坐つて、酒の氣もなく聲を合せて唄ふ。

わたしや大島御神火育ち
胸に焚く火は絶やしやせぬ

この唄は大島女の劇しい情感をうたつた代表的なものだ。ふだん物云ひなどの落付いたおてるさんのお母さんが、よく透る聲で手拍子を打ち乍ら情熱的に唄ふ。妹の叔母さんの方はやゝ瓢輕で、浮氣つぽく唄はないではゐられないやうに唄ふ人だ。父親も、息子も、祖母さんの連合ひも唄はない。こゝは純然たる女人王國だ。灯の暗いゐろり端で、何となく原始的な豐かさが胸を打つ。島の人でもほんとに唄へる人は少ないといふことである。

村

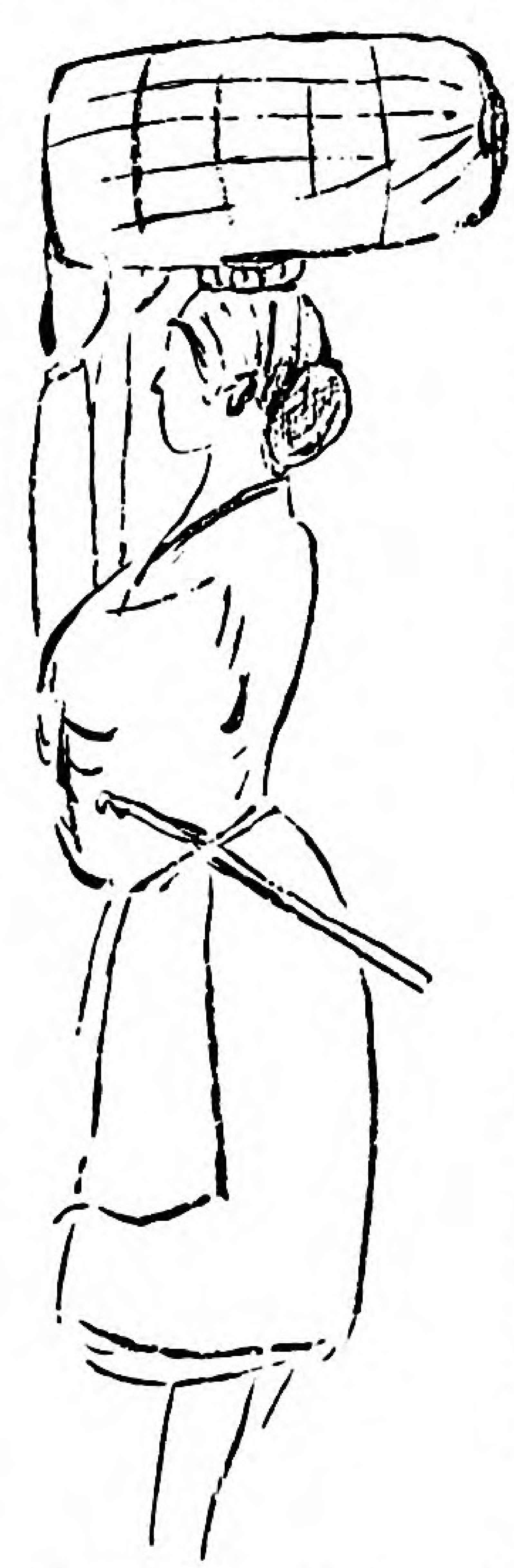
村一番の資産家で、村には不似合な鐵格子の門と、コンクリートの池のある大きな家の奥の八疊が借りて貰つた私の部屋だ。父子共に横濱に出て、物持ちに有り勝ちな汚い老婆さんと、貰ひ子の娘とが留守を守つてゐるのだが、ひるまは二人共畑へ行つて、門口十間もあるひさしの深い家に、私一人つくねんと坐つてゐると、庭の紫陽花が一面の仄紫を散らす。夜は五分芯のランプだ。

おてるさんは氣質の素直な娘で時々誘ひに來て、種牛を見せてくれたり、學校や、見晴らしのいゝ燈臺所の建物に案内してくれたりする。椿のトンネルと紫陽花が村中をうづめる。私が野バラを摘んで來たのを見て、庭に咲いた赤いバラを持つて來てくれた近所の人がある。こゝへ來てから、鰹船が澤山入つて來た時か、港の渡し舟に乗りたい時の他は滅多港へ下りて行かなくなつた。併し馴れるに随つて思ひがけない文化の素つ氣なさな感じる事がある。鐵格子の門と、夫も子供も行つても土地の離れられない老母との不調和な交錯は村の隨所に浸透してゐるに違ひない。常春で、豐かである可き

筈であるが、水の不自由と、鹽風に荒された僅かな畑とは決して豐饒を約束することは出來ない。櫻の木で厚く風をさへぎつた畑に耕されるのは豌豆と馬鈴薯と僅かな麥だ。漁船も、本當に沖へ出て働く鰹船は大抵九州邊の出稼ぎ船で、土地の人達が操るのは飛魚のやうな魚に限る。どこの田舍にも起つたやうに以前の共同的な平和な生活が破れた時に、物持ちは山や畑を抵當(ていたう)にして都へ出てしまひ、若い者は村を捨てた。女の人の稼ぐ一頭の牛の世話と、荷役の賃金、男の人の海の稼ぎが主な生活費らしい。

——郵便局の旦那は東京へやつた息子の學資にまた山を賣つたさうな——などといふことが自分達の生活の苦しさと一緒にまた村の大變な話題にされる。その筈だ、かういふ場合土地を買ふのは村内の人ではなくて、他處から來た人間だ。その上、港の家には毎晩口紅と安白粉の臭ひがする。村の人達も質朴ばかりでは暮らされなくなるのだ。

獨りで松林の向うの岬へ行つて足を伸ばす。岬は太平洋へ向つてなだらかに突き出した傾斜の芝原で、風さへなければ、夕方最後まで日光と遊ぶことが出來る。一日ゐても、たまに蓬つみの子供の聲を聞くくらゐなもので、後の松林では磯ひよとやぶ鶯が盛んに啼く。寢そべつて目を閉ぢてゐると、まわりの青草の上に漲り溢れた陽光が、まぶたの内側まで熱くする。まき返す波の、單調な底深い音が、物凄く胸にひゞく。



まつ

まつといふ娘がある。宿のお婆さんが十二の時から育てゝ今二十歳だといふが頭の働きが鈍くて十五六にしか見えない。私はまつの機嫌の惡い顏も、腹を立てた所も見た事がない。畑から歸ればお茶を沸かしたり、庭をはいたり、何をさしても嫌(きらひ)はいはないし、お婆さんにはなくてはならない娘だ。

舊節句の朝、岡田村の親類から來たはがきを讀んでくれ、といふ。見ると初節句に誰か來るやうにといふので、日附から押すと五里たらずの道を三日がゝりで來た事になる。お婆さんはしきりに殘念がつて、今一日早かつたら、と繰り返してゐた。やがてまつに親類の方へ斷りの電話をかけるやうにお金を持たして、濱まで使ひにやつた。まつはそのまゝ電話のお金で飛魚を買つて、それを土産に岡田村まで山越し歩いて行つたことを夕方人が知らせてくれるまで知らなかつた。

二日目の晝頃船で來たといつて、——おつかさんえ——と家の外から聲をかけて歸つて來た。暫らく初節句の賑かだつた事を面白さうに話してゐたが、やがて晝からになると、手拭ひを被つて畑へ出て行つた。

毎日ひるに歸つて來ると、私の座敷の縁側に腰かけて遊んで行く。お婆さんが、雜巾が上手にさせるやうになればお嫁にゆけるといつた、といふ位で格別話をするわけでもない。

ある日、誰に敎はつたのか、假名だけ覺えると手紙が書けるんだが、と云ひ出した。習ふ氣があるのと云ふと、學校へ行かないから便利が惡いだねえ——といふ。それで、一年の讀本をおてるさんの

所から借りて來て、毎晩ランプの下でハタ、タコ、を初めて見た。幾晩かゝつてハタ、とタコが書けるやうになつたが、ハコといふとわからない。幾度やり直しても書けない。その上まつが行つた後は臭いのと、蚤が澤山でねむられなかつた。

みはら山

土地の人達の山が――みはら山の事――よく晴れたからと、朝早くおてるさんの家から迎へに來た。おてるさんは具合が惡くて行かれないので、お父さんが案内してくれることになつてゐた。

一里程はひどい崖の上り道だ。この道でも三原の麓の炭小屋から、炭をつけた馬が通ふと聞いて言葉がない。途中で振り返つてみると海が見え汽船が見える。波は穩かだ。一息ついてゐると雉子が啼く鶯がなく。山は端木と椿で、その外は低い松と、雜木の濃淡入り亂れた若綠が鮮かに光る。綠の間には、やゝ暑い春光を浴びて、つゝじの花が火のやうに燃え立ち、炭燒きの煙が一筋空に消える。

三原の麓へ出ると所々、樅木と、小草の生えかたまつたのがあるばかり、一面の燒け石と灰のざら／＼上りで、ひどく歩き惡い。初めの峰へ出ると、海が霞んで、風が冷たい。袷の肌で、汗がさつとひいてしまつた。廣漠とした山の肌を、雲の影が鷲の翼のやうに大きく落ちて風に流れる。かういふ所にも、山を横切つて僅かに人の踏みしめた細道の跡があるのも不思議だ。次の噴火口への上りは一層嶮しくて、ともすれば下までずる／＼と辷り落ち相だ。珍らしい燒石を見付ける餘裕など全くない。杖にすがつて、精一杯登らうとする許り、瞬間、煩ひのない朗らかな氣持だ。一足一足に力を籠めるより他に思ふこともない。

噴火口の周圍は半町もあらうか、今噴煙を上げてゐるのはその中央に新らしく出來た小さい口である。地震の名殘りの地裂れを覗くと、底は地獄へ續くかと思ふ程暗い。南寄りの砂の中に小さな鳥居と石の祠とを見付けた時は、他愛もなくエジプト邊りを想像した。

歸りは海が間近に見える方へ降る。海岸まで一直線の燒石と灰の坂は一望凄まじい勾配だ。道らしいものはなく、海に近づくに隨つて、大きな岩石や砂山が所々に散在する。歩くのはその間で、雨の時には山の水が瀧をなして流れ下る所にちがひない。岩山には低いぐみの木や、木苺が繁つてゐて、熟した實が素晴らしく甘い。

巫子

道を三丈もある斷崖の上で失くなして、濱邊へ下りる事が出來ない。一時間もさまよつた末、漸く崖を傳つて村の近くへ出た時には、山で履き直した時に大したほゝけもなかつた藁草履がぼろ／＼に切れて、足袋の底まで裂けてゐた。

野增といふ村はさぼしを生業にしてゐると見えて、家毎に干してある。案内のをじさんは島中で評判の巫子の話をした。

一週間程前であつた。沖に出てゐた漁船が夕方の俄風で轉覆して、人々は行方不明になつてしまつた。高所では島から見える程近かつたにも關らず突嗟の事で救助の船が出た時には何にも見つからなかつた。村の人達は巫子のお婆さんの所へ行つたら、生きてゐるといふ。遠くへ行つたからやがて歸つてくるだらう、といふ占ひだつた。不思議なことには、通り合せた外國の貨物船にみんな救はれて、神戸へ連れてゆかれたといふ電報が入つて、家族の人達は蘇再し、村中がざわめいた。

私はその人に逢つて見度い好奇心を抑へることが出來なかつた。どうせいたづら……と自分に云ひわけし乍ら、決していたづら氣ばかりではなかつた。道端にゐた赤い綿ネルの着物を着た、髪をモジャ〳〵した五つぐらゐの子が、教へてやらうといつて馳け出した。窪んだ細い道の奥に、古い草ぶき家があつて、四十五六の口唇の反り返つた、猿に似た大男がふんぞり返つて寢てゐた。

婆さんは畑にゐるから呼んでこう、といつて、起きて前を直し初めた。畑でも出來るならそちらへ行つてもいゝと云ふと、婆さんはどこでもいゝのだといふ。後について行くと、草籔に圍まれた畑の畔で草を刈つてゐる小柄なお婆さんを見つけて、大男は耳の側で叫鳴つた。ひどいつんぼらしい。七十と聞いてゐたが、腰も眞直ぐで、笑ひじはの柔和な、如何にも田舍の年寄りらしい、さつぱりしたお婆さんだ。易者とか巫子とかに共通な陰險な影はこの人のどこからも見出せない。

——當りやしませんよ——と私の顏を見て笑ふ。少なからず見當の違つた氣持で、最一度占つて貰ひ度いと云ふと、聲が聞えたとは思はなかつたが、卒直に

——この人は何をしても身につく——と眞顏で云つて、鎌をおいて私を後向きに座らせた。簡單に、年と結婚の有無を聞いてから、側の草葉を摘んで、それで私の脊を輕くたゝき乍ら、神祠に似た祈りをした。すむと、葉つぱで氣輕にぽんと私の肩を打つて、

——この人は胸の深い人だ——とにこ〳〵してゐる。

——男ならば放蕩で親を困らせる人だが、今この人の胸の中はこんなだ、(といつて兩手でこねかへす樣子をして見せる) 夫は一人では濟み相もないが、初めの人と一緒にゐれば扇のやうに末はよくなろばかりだ——といつてアヘ……と大聲で笑つた。

——この人は仕合せのいゝ人だ——とも云つた。

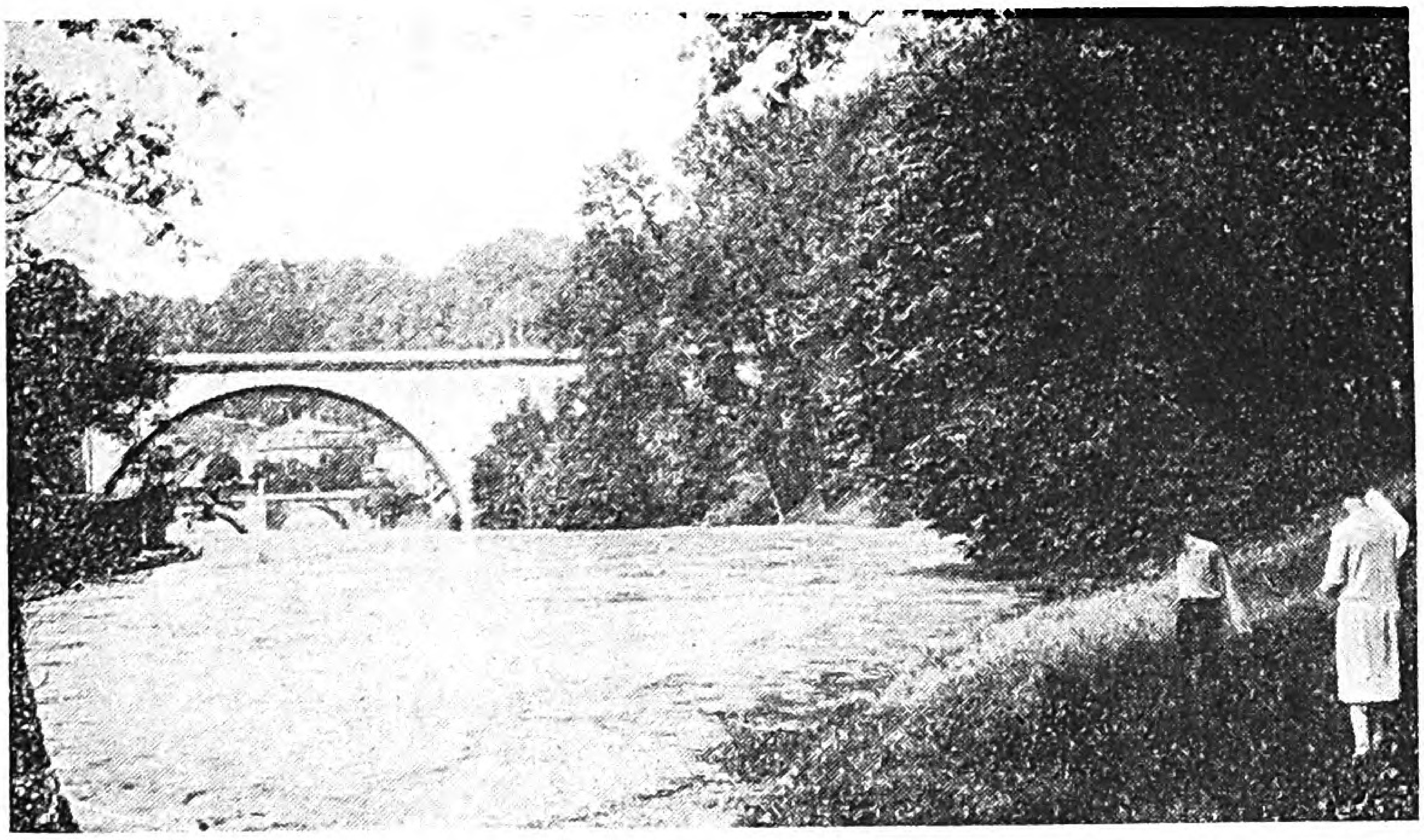
——今心が三つに分れてゐる。これまでやつて來たことを止めやうかと迷つてゐるが、それは止めない方がいゝ。心が大變動いてゐる——

と二度目には云つた。二三日前おてるさんのお母さんが、醫者にも病名の判然しないおてるさんの病氣と、息子の徵兵檢査の首尾を見て貰ひに來たら、病氣は脚氣で、檢査は不合格だといつたといふ。私のやうに漠然とした運命を具體的に聞かうとする方が間違つてゐる。知らず〳〵老婆の言葉に頼らうとしてゐる自分が無責任で淺ましい。耳が遠いので尋ねるのは骨が折れる。大男が一々耳の側で叫鳴るのだが、二三度云つても解からないと、もどかしがつて、唇を尖がらし、手を振つて叱りつけるが、お婆さんは平氣で機嫌がいゝ。

後で聞いたところでは大男は六十幾歳でお婆さんの連合ひだつた。おてるさんのお父さんが、自分は誰の連合ひで、誰のむこだと名乘ると、お婆さんは、ほうと目を圓くして——知らないでまあ、勿體ないことをした、と云ひ乍ら手を合せて拜む眞似をする。このぢさんは、土地の人々の云ふ内地の軍人さんで、昔は分にすぎたおむこさんだつたらしい。お婆さんは、駄菓子屋を出してゐる祖母さんとは昔馴染みなのだらう、いゝおむこさんを取つて、と二十年も前の事を感心してゐた。

お婆さんのいふ幸はせと、私の考へる幸福とが同じかどうかは永久に疑問である。必要なものは判斷ではなく勇氣だ。

波浮へ通じる道まで出ると夕映えの空が明るくひろがつてゐた。私はまた、このまゝふらりとどこかへ動き度くなつた。



アール河の岸（ベルン）

瑞西風景

小金井素子

◆

リヴイエラから

プロヷンス。

地中海は八月のるりに輝き、岬は赤き肌を見せ、並木は陰を黒く茂る。廣い散歩道の白い反射、木がくれのヴィラの赤い屋根――道が一度町をはなれると、畑の乾いた土に黒い實をたわゝにつけた葡萄が喘ぐ。黒いつば廣帽子の農夫は、後期印象派のなつかしさだ。

ニイスから再びマルセイユに歸り、PLMの夜行でベルンに向ふ。

◆

ベルンの街。

十四時何十分。白い建物にまぶしい陽。カスタアニユの木かげをはしるくるま。仰げば山國の澄み透る空。

リヒチ家。

二階の窓にゼラニウムの鉢。プラタナ並木の葉ごもりに暮れなづむ夕陽。伊太利米のもてなし。ゑくぼをつくつてすゝめる、二番娘オルギ。食後のまどゐ。夜の衣裳に着更へた姉妹が抱きあらそふ、遠來の純子。やゝ不安に、やがて一緒に笑ひ出すお河童の黒い髮。（オルギはいつ迄、彼の日本の紳士を待つてゐるのだらう。姉のソフィヤは山の彼方の湖の岸にホテルを營む男と婚約してゐる。）

夜。

カスタアニユの茂り合ふ公園。四圍の靜寂に稍々かけはなれた想ひを、照らし出す街燈。見晴らしに登る道の暗の中の青葉の匂。灯をともしたまゝ眠る街。

朝。

うつはからあふれさうな、朝餉の卓の、よき牛乳。(シュワイツの朝は讃むべき哉。)ソフィヤの赤い部屋ぐつが、フランス語の朝のあいさつをさせる。

アール河。

アルペンの雪を母として流れて來る河。あこがれは、見はるかす空の彼方に浮く、山なみ。(幸福とはこんなものか。)

氷がそのまゝつくる急流。(あたしは、上高地の梓川を知つてます。あそこの岩魚は、來る朝も來る晩も食べさせられたが、忘れられない味。)流の岸のカスタアニユのみどり深いかげにいくつか並んだ卓は、名物川魚料理。そへた茸は、議事堂の裏の、日盛りの街角に並んだ女達の、かまびすしく賣つてゐた、それと同じもの。

崖下のみちの土のしめりがほの匂ひ、搖れてゐるがくに似た花。(あらし山の裏みちが、幼ごゝろに植ゑつけられてゐるあたし。)

ベルンの小熊。

ベルンは、熊の意。註(伯林は女熊です。)熊を象徴する街。深いコンクリートの穴の底で人參をねだるベルンの小熊は、世界の愛嬌者。(この穴に子供がおちて、怖しい血を流したと云ふ。默つて、そんな話には眼をつぶつておいで――。)

テューン湖風景。

(極彩色の、瑞西風景の畫はがきを御存じでせう。あんなもの、と輕蔑しちやいけません。せんじつめればあゝなつて了ひます。それ程、そのやうに瑞西の湖と山は、不可思議な色をもつてゐます。)

船を下りてケエプルカア。(瑞西一國だけにまあ、いくつケエプルカアがある事だらう。)

頂近い草生の上。タンネンの木の間の底に光るエメラアドの鏡。波の尾を殘して行く一艘の白い船。草原におちる雲の影。くさむらのクローバ、(四つ葉を、あたし二つも見つけたのよ。)

斜面の牧場に咲く桔梗に似た花。

湖をへだてて、山の三角の尖が空につき入る。(何だか、不安でたまらないの。)

下り道の岩かげに群つて咲くつゝましいエリカ。(ばら色の細い花こゝではじめてこの花を知る。物語に出て來るスコットランドのヒースであり、あたしの大好きなフランスの小說、マリイ・クレエルはフルイエールの生ひ茂る曠野に羊を追ひ乍らさ迷つた。オランダの眞赤な入口の野を埋めて咲いたその花を、あたしは伯林郊外、テーゲル湖畔の赤松林で抱へきれないほど摘みました。嬉しくつて、泣き出しさうに嬉しくつて。)

つや〱しいこけものゝ實。(これは、燕岳のAさんの茶いろのジヤケツを想ひ出す。)

◆(ユングフラウ行)

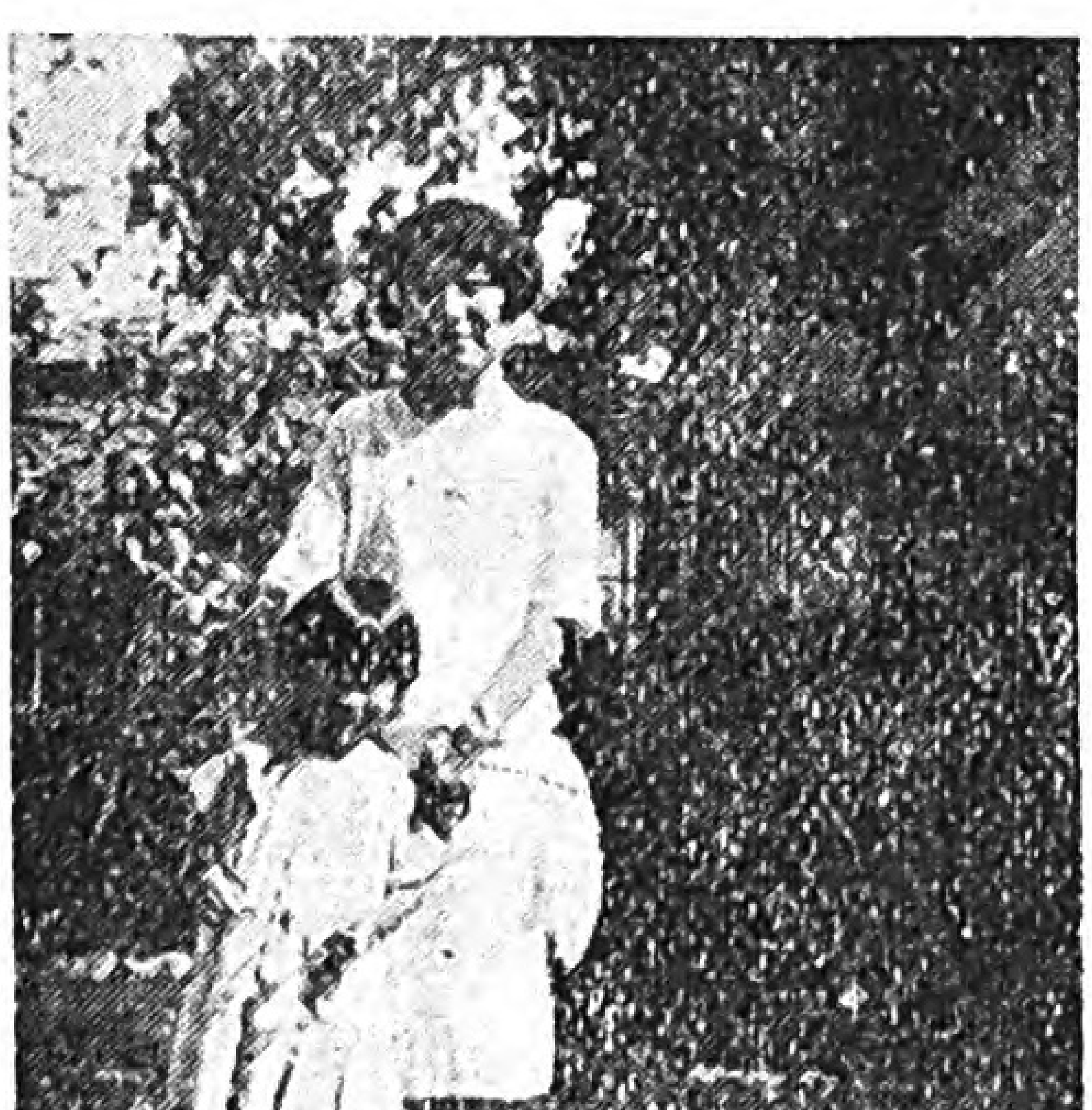
朝。

朝六時の並木道。山國の街の朝の紫の霧。停車場をあるくリユックサック。白い汽車の煙。(ある十月の夕、碓氷の山間の驛に汽車を待つた。その時吐く息の白かつたこと。)

ねむりからさめた綠の野邊。頭をちよんぎつた楊の樹。もう草を食んでゐる牛。牛。牛。汽車の窓。

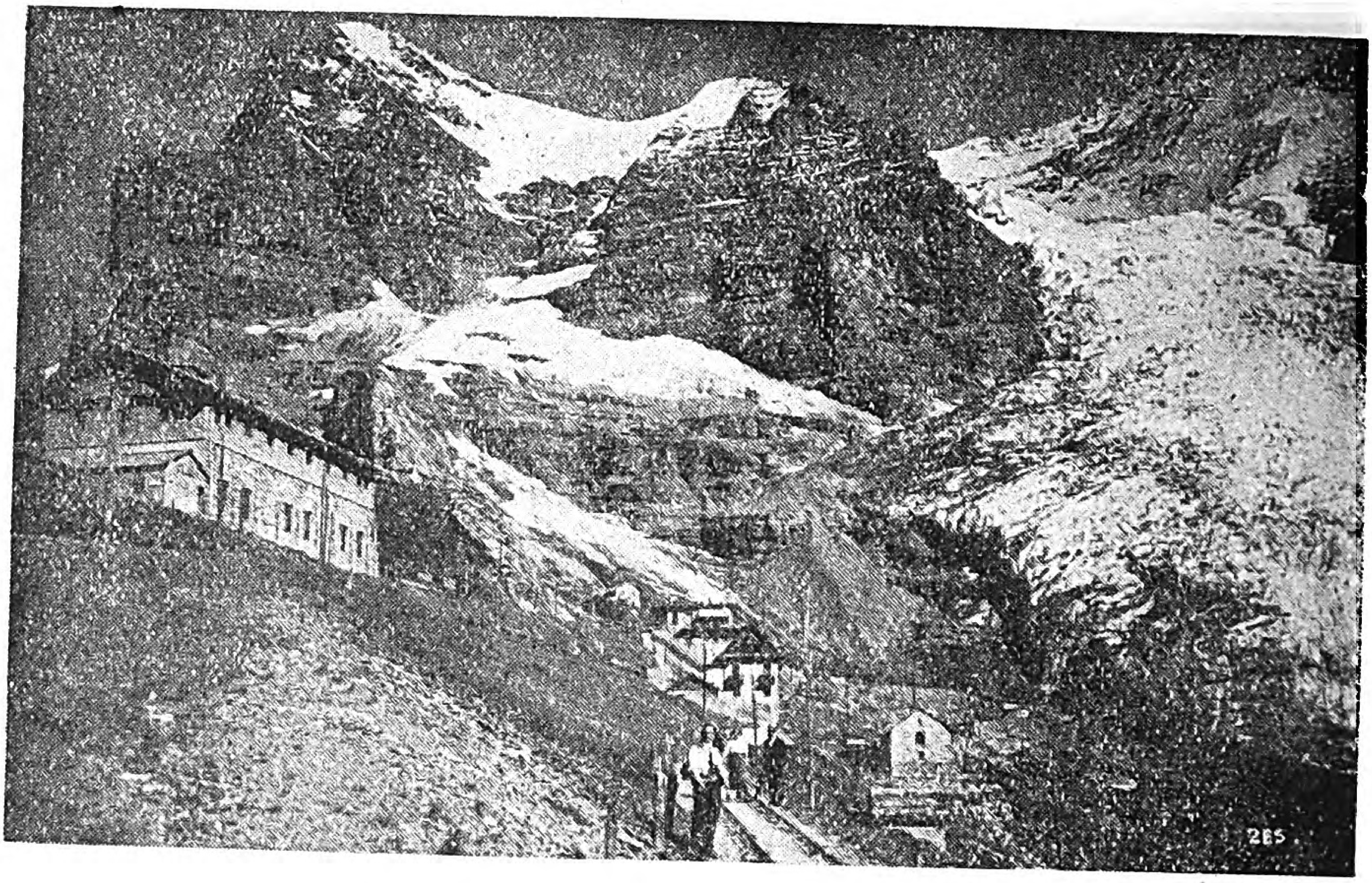
左の窓は鬱蒼たる森林。たどりつゝ登る汽車のあゆみ。尖り立つ黒いみどり。窓のガラスにあてた頰のつめたさ。ふかく、ふかく行

く山峽。
ひともする心安さ、シンケンブロートの車中の晝餉。甘く舌にとけるぶどうの房のうすみどり。
(山の彼方の空とほく幸住むと人の云ふ。)
雲の彼方に陽をうけてかゞやく雪の峯。
見下す淵にまきかへす氷の急流。山あひに光る村の屋根。
ぱつと展けた雪の連山。
氷河の堆高さがまねく。(この憧憬は、餘りに久しいものであつた。)
アイガアの尖り。紺碧の空から切つておとした左の肩。
エングフラウのなだらかな斜面。メンヒの影がうかぶ。
(こゝで登山電車をのりかへる爲に休憩。アイガアの岩を貫く軌道は、ユングフラウの頂にみちびく。)
ユングフラウバアン。
斜面の線は四月の衣裳。半ば崩れた木柵のむかふに坐る牛。動かした首になる鈴の音が、カランコロン。
斜面の線に投げたふくら脛にふまれさうなマグレッの花。お好きお嫌ひ――グレエトヘンであり得る瞬間。――日ざしがまぶしすぎる。白のソフトが、顏を紫の影にする。(シクラメンはこの山つゞきの岩かげに、いくらでも咲いてゐます。エーデルワイスを摘らうとして、年にいくつの魂がこの谷底に消えることでせう)
何と幸福な、こひびとたちの限ない群。(花占ひなんぞして見なくつても分つてるくせに――。)
無言を撫でる微風。斜面から遠く展ける谷間。そしてその果の陽をまともにうけて連る紺青の山。(赤倉から見た信州の山なみを、忘れてもいゝわ。もう。)
(空を忘れる。うしろに聳へ立つ屏風の山の雪の白さを忘れる。花に迷ふこゝろの方が、お前には、ずうつとふさはしいんだよ。)
岩のトンネル。
段々になつた座席。ぎい、ぎい、がつたん。闇を喘ぎのぼる車の歯止。くりぬいた岩にしたゝる水が、窓を通す冷さ。並んだ人の顔をぼんやり照し出す灯。(あたし、チョコレートを食べるわ。何だか氣が滅入つてたまらないの。昇天する時にも、こんな暗い道を通るのかしら。)



ベルンの家

カンテラの灯。どや〱と車から下りる人達。(おゝあたしつたら、本當にこんな所へ、來ることが出來たんだわ。カメラ。カメラ。カメラ。あたし、天國へ連れてかれるのぢやないかしら。あれが、底からみんな雪なんだつて。あの空のいろ。――息ですぐ曇るガラス戸越しに岩にくりぬいた見晴しの穴からのぞく。おゝ。下の深い深い谷間。そこには人間の世界がある。)
再びトンネルの闇。あたしはベルンの街で買つた毛絲のジヤケツを着ました。何だか少し息が苦しくなつて來たやうね。不二へ登つた友だちが、下りて當分、酸素の匂がして仕方がないと云つたこと



ユングフラウパアン(左アイガア峯)

がありましたつけ。)

再び見晴しの岩の窓。細い絲につながれた三つの黒い點が動く雪の上。双眼鏡をもつて忙しく動く手。――クローズアップ――(あれ、きつと日本の登山家よ。妙な所に愛國心を發揮したもの。――だが数日後の新聞に、M氏、U氏、二人の若い日本の登山家の名を見出した。)

ユングフラウヨツホ。

そこに群がる人々。記念ストツク。記念畫はがき。スタンプ。凡そありとあらゆるお土産類。レストラン。ポスト。着ぶくれた人々の靴の音。そしてストオヴの火のなつかしさ。(要するに人間社會の所謂、名所氣分。天上の下界。)

深い霧に包まれて、浮び動く灰色の影。幻と影の錯雜。冷い呼吸。息の白さが、息の大きさだけを明るくする。(呼ばれて振りむけばたゞ眞白な濃霧の中に一人ぼつち。頬べたに霧の流がふれて行く。一歩外せば無が待つてゐる。何も彼もみんな消えて了ふ。波が裾を洗ふ岬に立つた時。足もとに雲の海のたゞよふ時。――そしてこの山の霧にとりまかれた時、隣に死を感じない人があるなら―― あたしはそんなひと、大きらひです。――徒らに死を口にする女は、さつさと雪に埋つて終ふがいゝつて?。)

虚空の灰色に二つ倚つた影。吹きよせる霧は一そう濃く、二つの影を無にかへす。――次の瞬間、限られた雲の上に散らばつた存在がかたまつて現はれる。

ポストの前に、山上の便を書く手が凍る。スイスの旗。

赤地に白の十字はスイスの旗 五千尺の草生に建つ四角い家のガラス窓の反射と白壁と赤い屋根。チユーブのコバルトを押し出した

まゝの空。玻龍の住んだ歴史以前の氷河を底に祕める光と影の山脈。――スイスの旗のひるがへる美しさには、背景を必要とする。

再び座るユングフラウバアンの草生。（何かあたし忘れて來たのよ。雪の上に。霧の中に。いのちつて、そんなに大切なものかしら。誰の瞳もあたしにかゝはりないんだのに。）

再び霧のはれたうしろの山。メンヒ・アイガア。さうしてユングフラウ。（あたしの足は、その雪を、固い冷い雪を踏んで來たのよ。まあ、ワルツが聞えて來るぢやないの。三つ編みのブロンドのお孃さん。嬉しさうな笑ひ顏。あたし、あなたにいま見つけた四つ葉の幸福を、すこうし分けて上げませうか。）

グリンデルワルトへ。

男の左に女。女の左に男。男のむかひに女、男、男、――下り道はすべて疲れた瞳。岩かげのアルペンローゼ。――無言。（いつの間にこんなにも天候が變つたのだらう。）

窓硝子の鉛色にさえぎられて、斜に走る雨。雨に消された山脈に代る灰色の無限の虛無。窓硝子と人々の神經へ罵詈讒謗を投げつける雨のつぶて。

不安な瞳で見る腕の時計。雨と風に追ひまくられて迫る夕暮。こゝろに入り込んで來る山の冷氣。（ベルンから來る終列車は、インタアラケンを通過して、ルッェルンに走せ去つて了ひはしないか。――）

インタアラケン。

雨の暮の中に並ぶホテルの自動車と馬車。空を見上げた人々のつぶやき。（汽車は一時間前に行つて了つた。）

雨に暮れた並木。赤い停車場の灯。

グランドホテル、ヴィクトリア・エ・ユングフラウ、これは華やかな夏の社交界。マドマゼルの夜會服とちりばめた寶石。スペイン風のぬひのショールと、露はな肌に唇づける狐。――赤狐。白狐。銀狐。サロンから食堂へ流れる極彩色の談笑。

毛足深いペルシヤ絨毯を踏みしめる銀の靴。タキシードの脚に組まれたダイヤの輝く指。とき色花を肩につけたマドマゼルの認めた幾通かの手紙。――吸取紙に殘る逆字。

ブリッヂの卓。吸ひさしの葉卷。（疲れた身體にワインがきゝすぎた。ばら色のあたしの部屋で、早い宵なソファでうたゝねする。）

窓。（窓と云ふものはなつかしいものだ。）止まない雨。前をさへぎる黑いものは山。

みどりの木々がおとす朝の雫。ホテルの前に用意の出來た馬車と御者。世界はみどり。ルッエルンに向ふ。

湖に展ける道に低く下りた雲。木々の底から水明りを見せる湖。

山間の小驛。汽車の窓から見つけた四つ葉。（そこの驛で、兩手に白い暖いコップを捧げて牛乳をのんだ。牧場のゆめがまだ溶けきらないやうな牛乳を。）

ルッエルンは橋ではじまる街。水の匂のたゞよふ街。女のきなざしの朗らかな朝。四林湖。（フィヤワルトステッタアゼエ）

船の名は、ウイリヤムテル。雨になつた湖の色。雨に消えて遠い遠い周りの山。（風に向つて外套の襟を立てる。）

スイスの湖上で折つた鶴。

嵐にもまれたテル。

テルスカペルの裏山に咲いてゐたあざみ。湖ぞひの道の雨の小止み。あざみに傷けられた指。

右の岸のプラタナの茂り。船の動きにつれて遠のく樂の音。
夕ちかい湖の岸。ポプラにかこまれたワグナアの家。（ニイチエとワグナアの仲の好かつた時代は、さぞや幸福だつたらう。）
夕日さすルッエルンの街。縫ひわくを据ゑて店先に坐る女たち。時計店のあでやかさ。おみやげ物の店——飾窓の日本製陶器。
旅のつかれ。
庭の木かげの卓。うすものゝ肌を透す、暑い陽。（オルギが笑つてお菓子をすゝめる2スペード、ノウビット……）
陽を浴びるばらの花。ノルマの長いブロンド。（末むすめノルマは、チユウリッヒの學校から休暇で歸つて來た。ピアノは、ソナチネをやつてゐる。）左の腕にかけたかご。花園に身を埋めてばらを摂る。
垣根ぎわの林檎。むかふの椅子に、桃色のキモノを着たウキーン生れの女。無言の笑。——その夜のダンス。

◆

ベルンからパリへ。
山を越へ、湖の街を過ぎ、國境に近づく。汽車のゆれに身は任かせて、想ひなきに似たうつろ心は、しかしあとへあとへとはせられる。小川の岸のポプラのさゆれ。野に咲く、赤いポピイ。——やがて、それはフランス小景に移る。
山はうすれて遠ざかる。だが瑞西のゆめはあたしの心に、夕日を負つた山のやうに、くつきりとする。——闇の野の遠の果に、パリが待つてゐようと云ふ、そのいまだのに。——

船中より

長谷川春子

いきなりこの河岸にランチがつきますと、忠實な印度巡査、人がよささうでづるさうな支那人、乞食、ごうまんなアメリカ人、眞面目なイギリス人、やゝ呑氣なフランス人、日本人、無軌道電車、リキシヤ、バス、荷物、クーリー、雜然混然としてゐます。いつかのあの蒸熱い天津の日をおもひおこします。あれをもすこし明るく大きく國際的にしたのが、こゝ、上海でした。セルロイド、メリンスの如き町です。アメリカのビルデイング式以前の建築は、明治時代の西洋の銅版畫です。
途上の商品、人間すべて藝術、精神美に緣なきともがらなり。さうして、さて一歩いづれば黄浦江岸、春風たいとう、唐人はうつらうつらと堤上をゆきます。
船人はイギリス人ばかり、たゞ一人フランス語をはなすといつてやつて來た若い船員のフランス語は私と同程度。下級船員、ボーイ、コックはインド人。中黑ばかり・AAAAHHH!!

上海より

内山みさ

上海のことは有名な文士方によつてすでに紹介されて居りますから今更申上るまでも御座いませんが、中國の人は一般に食物に注意をして居られます。ボロを身にまとうて居る苦力でも滋養價のあるものを食べて居ります。勿論安價ではあるせいでもありますが、日本人とは比較になりません。節約とか儉約とか申しますと、すぐ粗食をすることのように思ふ日本流の考へ方は大變まちがつてゐるように思はれます。着物よりも先づ食物を考へてゐるようです。

日本の山

キラ・バナシンスキー



私はポーランドに生れましたが、小さい時に故國を出てシベリアに行きました。そしてそこで大きくなりました。長い〳〵雪の季節が過ぎると、すぐ原には忘れな草の空色の花が一面に咲きました。けれどもシベリアの生活は淋しうございました。ロシアに革命が起つて、ポーランドが獨立した時、私はハルビンにまゐりました。そこで故國獨立のために献身した、バナシンスキー博士と結婚いたしました。それから暫らく經つと、夫が日本領事館領事主事として赴任することになりましたので、始めて、私も久しく憧れて居りました、日本へまゐることになりました。その時はクリーと申す女の子も生れて居りました。東京に住むことになりました始めは、子供がまだ小さうございましたので、どこに行くことも、何をすることも出來ませんでした。ですがそのうちに子供はだん〳〵大きくなつて、私の手を放れてもゐられるやうになりましたので、そろ〳〵日本の勉强を始めました。私は始めから日本が好きで、家も日本建の家を借りて住んで居ります。着物もよく日本服を着ます。いつか逗子に避暑に行きました時などはすつかり日本人の生活をしました。濱へ散歩に行くのも浴衣がけに下駄をつつかけると云ふ風でした。私は此袖の長い美しい着物が好きです。それから私は日本の音樂も繪も大變に好きです。子供が幼稚園に行くやうになりましたので私も一昨年頃から琴を習ひ始めました『さくらさくら』から始めて六段だの四段だのもうよく彈けるやうになりました。故國に歸る時は琴を持つて行きます。そして私は習つただけの曲目は自分流の符にしておきましたので、若し忘れても心配ありません。繪も昨年の秋から先生に就て習つて居ります。まだよく描けませんけれど、私は一生懸命に勉强して、故國へ日本の藝術を紹介したいと思つてゐます。それから私はもう一つこれは是非勉强して歸りたいのですが、それは日本の養蠶法です。いまポーランドではやつと養蠶を研究し始めたばかりの處で、蠶種試驗所も出來てゐて、いま盛んに山繭の飼育をして居ります　私もせつかく養蠶國にまゐつたのですから、これを勉强して歸つて故國の婦人達と一緒に働きたいと思つてゐます。

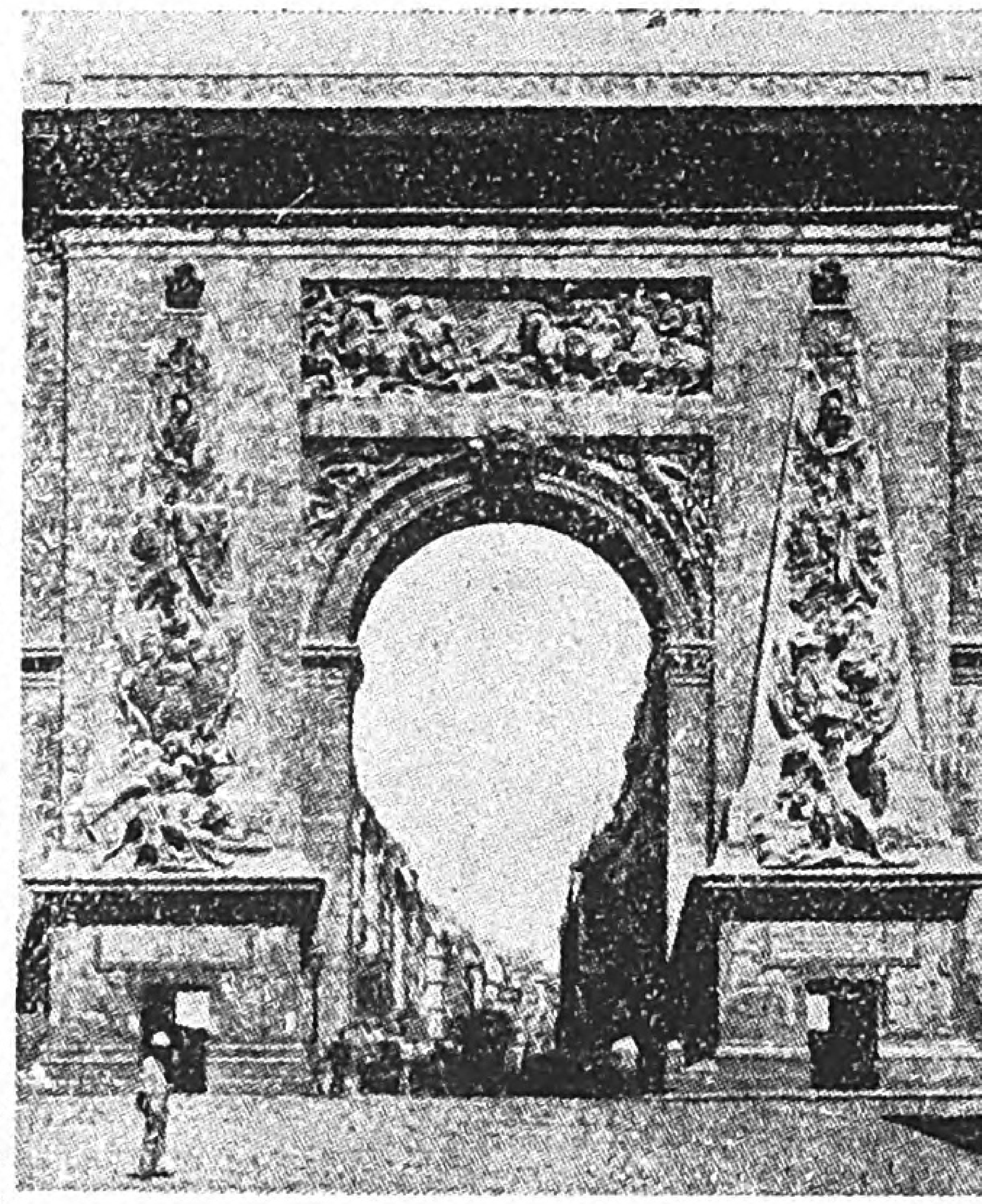
　これ等の勉强の外に私は山が好きでよく夏になるといろ〳〵な山に登りました。私が山に登つたのは日本の山が始めてです。印象が殊に深かつたのは淺間に登つた時のことです。

　それは昨年の五月の末、私が輕井澤に行



つた時でした。五月の來と言つても輕井澤はまだ春で、その上天氣が惡くて大變寒うございました。三日しか滯在しませんでしたけれど、最初の日と次の日は雨で、三日にはカラリと晴れた淸らかな空が白い雲を浮ばせて輝やき出しました。私達はその朝出發して淺間登山を企てました。案內人は一日では押出しと火孔をみるのはむづかしいと申しますので、私達は近道をとることにしました。それで汽車である小さな停車場まで行きました。その汽車は昔の文明の名殘りのやうに小さな汚い箱のやうな汽車でした。この停車場から眞直に徒歩で押出しに向ひました。山道にかゝると、山頂までの長い間が、一面に火山岩に掩はれてゐて、凡てが死んだやうな有樣、木もすつかり燒けてゐて、赤と灰色の生氣のない色彩ばかりで、それにはうんざりとしてしまひました。押出しに着くとそこに一軒のお茶屋があつたので、休んで日本茶とお菓子を食べて、二足のわらじを買つてそれを穿いて、今度は山頂に向ひました。いくら登つても登つても果てしがないやうに思へて私はすつかり疲れてしまひました。そして頂上にやうやく辿りつきましたのに煙が非常に多くて、火孔も火孔の向側も見渡せませんでした。そして風が吹く度に煙が私の方になびいて來て同時に激しい臭氣がやつて來て、辿も恐ろしい氣持ちがしました。けれども偉大で、何んとも言はれない壯嚴な氣分にみたされました。そして噴火孔の異樣な恐ろしい音をきいてゐると、若しもう一度激しい噴火が起つたなら、どんな恐ろしいことになるだらうと思つて、思はず戰慄いたしました。そんなことはもう決して決して起らないやうにと祈り乍ら、夕方輕井澤に下りてまゐりました。

今年もまた五月が近づきました。秋までもうやがてお別れする日本の山々を渡り歩きたく思つてゐます。



聖ドニ門

巴里の寺院と博物館見物の記

鳥居幸子

昔の巴里はセーヌ河の中央に建てられたシテーと云ふ小島に築かれたものである。現在の巴里はセーヌの兩腕で抱かれた昔のシテーを中心に著しい擴張をしてゐる。然し今の巴里にも昔のスヴニールは豐かに殘つて居り、巴里の魅力は決して失はれてゐない。

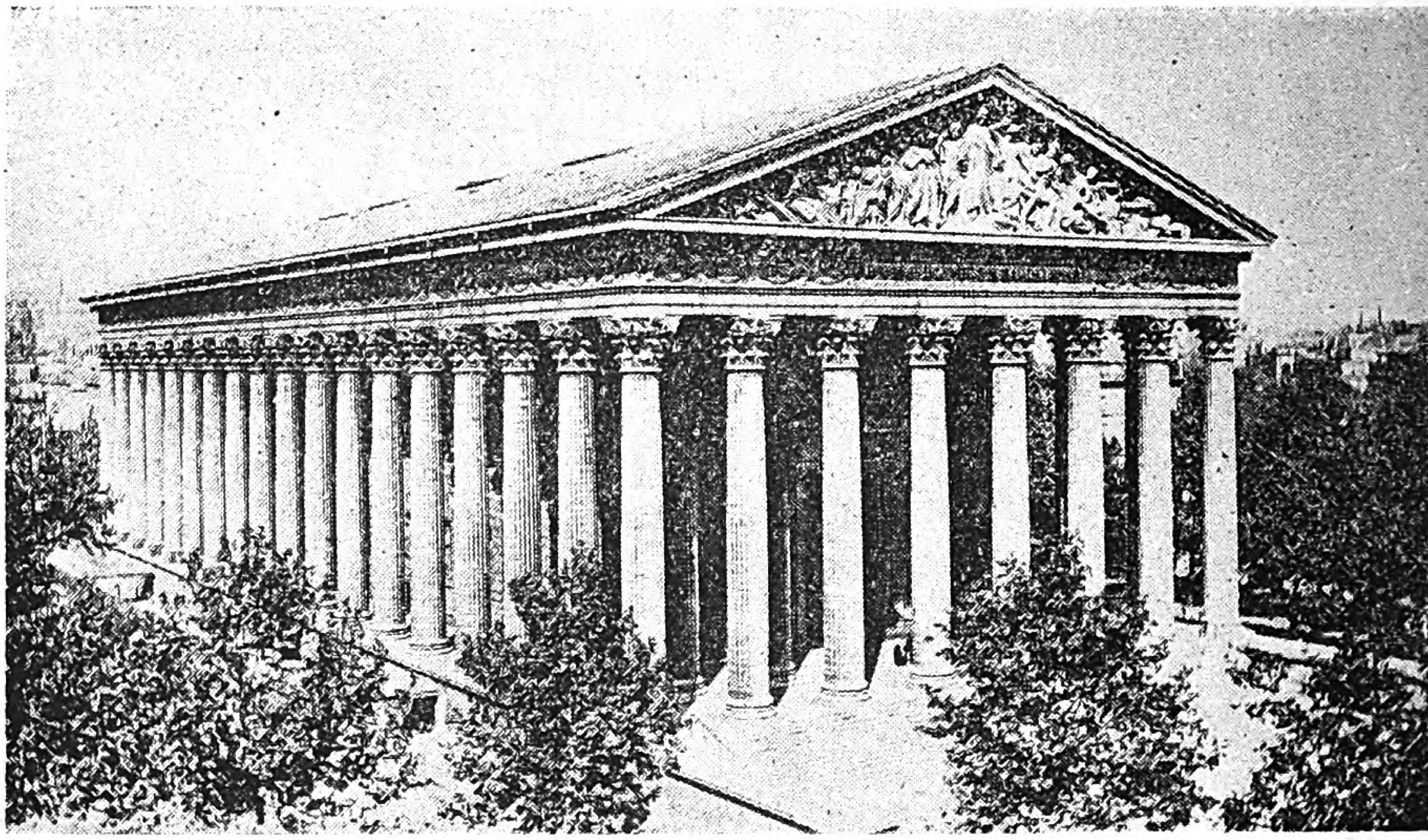
私が始めて巴里に着いた時、今は亡き父に手を取られながら巴里市中を見物したその日から、私はどんなにか此の古い都の歴史を物語る建物を愛し、幾度となく方々の古い建築物を見に行つて、其の歴史、由來、裝飾等を研究する事を樂みにした事であらう。

巴里の搖籃地とも云ふべきシテーの小島には、あのゴシック式の美しい線で刻まれたノートルダム寺院が聳えてゐる。寺院の前面の美しさ、均調の取れた線、大きなガレリーに太い柱、數多の聖人等の彫刻で圍まれた三つのポーチ、アーチ形の窓等は今でも忘れる事が出來ない。雨の日など霧の中に此の高雅な寺院の突き立つてゐるのが見える時は、まるで墨繪を見る樣である。

此の寺院は十八世紀の始め、まだ重々しいローマ式の建築が盛であつた時代に、最初に建てられた優美なゴシック式の建築物である。寺院内に赫と蠟燭が點されて、壯嚴な式が行はれる時は、現代の生活を忘れて當時のフランスのフイリップ　オーグストや聖ルイ王の事が忍ばれる。

ノートルダムの塔に上ると屋上の處々に突出した怪物の頭が先づ目につく。塔からは巴里全街がまるでパノラマの樣に見渡され、眼下にエムロード色のセーヌ河が靜かに横たはり、灰色の建物の間々を點綴するボア　ド　ブローヌやルクサンブルグの綠の公園が見え遠く北方にはモンマルトルのビザンチン式の寺院の圓屋根が白く浮んで見え、西の方にはエッフエル塔が高く聳えるのが見える。

塔の上には大きな釣鐘があるが、クリスマスや復活祭の日に街中



聖マドレーヌ寺院

を鳴り渡る厳かな鐘の音はこよなく床しいものである。

　ノートルダムは巴里で最も大きい寺院であるが、此の外に澤山のゴシック式の寺院がある、其の中でも聖セヴラン寺院は、輕い圓天井、優美なアーチ形、すんなりとした柱等は仲々立派で、宗教の盛であつた中世紀を偲ばせてゐる。

　十二世紀の古塔が二十世紀の今日までまだ、昔のまゝ聳へてゐる聖ジエルマン　デ　プレ寺院、ポーチの彫刻の細かいので有名な聖メリ寺院、ローマ式の奥殿を持つた聖マルタン　デ　シヤン等、ゴシック式の寺院は數へるに暇がない。

　聖ジエヌヴイエーヴ丘陵に建てられた聖エチマン　ド　モン寺院と、大市場の近くの聖ユスターシユの二寺院の様に、ゴシック式のアーチ形に復興式の装飾を施されてゐるものもあつて大變面白い。

　此の様なゴシック寺院のまだ現はれなかつた十二三世紀の間に建てられたものに、ヴアル　ド　グラース、ソルボンヌ、アンヴアリッド等のローマ式の寺院がある。

　聖ジヤック街にあるヴアル　ド　グラース寺院は、昔ルイ十三世の王妃のオーストリアのアン女王が王子の誕生の後に願を立てた所で、しばらくの間ベネヂクト會員の構居とされてゐたが、ナポレオンの世になつて軍事病院とされてゐたものである。ソルボンヌ寺院はカルヂナル　リシユリウによつて建てられたもので、院内には今までも建設者リシユリウの墓が保存されてゐる。

　セーヌ河畔に建てられてゐるアンヴアリッド寺院は巴里のローマ式寺院の中で最も立派なもので、重々しい正面と大きな圓天井の美しさは、ゴシック式寺院には見る事の出來ない壯觀である。此の寺院はルイ十三世の下に建てられたものだが、院内の圓天井の下に彫られた墓には、聖ヘレナ島から持ち歸られたナポレオンの骨灰が納められて居る。

フランス革命後に建てられたものは、ギリシヤローマの寺院に模倣してをり、パンテオン、マドレーヌ等の寺院が數へられる。ノートル　ダム　ド　ローレッド寺院等は、ローマでよく見るラテンのバジリックである。

パンテオンは巴里の聖ジユヌヴイエーヴ丘陵の左方に建てられてゐるギリシヤローマ式の堂々とした寺院である。此の寺院は昔は巴里の保護者、聖ジユヌヴイエーヴに捧げた御堂であつたが、現在の寺院はスーフロによつて增築されたもので、やはり聖ジユヌヴイエーヴに捧げたものである。

此の寺院のコリント式の大きな柱、三角形の長押、圓屋根等はギリシヤ風でどつしりとしてゐる。院内にはフランスの有名な畫家グローやジエラールによつて描かれた多くの立派な壁畫があるが、中でもジユヌヴイエーヴが闌干によつて巴里市街を守つてゐる壁畫は最もよい。

十九世紀に建てられた寺院の中には、トリニテや聖オグステン寺院の樣に復興式のもあり、聖クロチルドや聖ベルナルド寺院の樣にゴシック式のもあり、聖ピエール　ド　モンルージユ、ノートルダム　ドートイユ、聖ヨゼフ、聖アムブロアズ等の寺院の樣にローマ式のもあり、モンマンマルトルの寺院の樣にビザンチン式の丸屋根を持つたものもある。最近に建てられた寺院には、現代風にコンクリートや金屬が用ひられてはゐるが、皆過去の面影は失はれてゐない。

此の樣に、巴里には多くの寺院があるが、その一つ〳〵を歴史的に詳しく調べ、その裝飾を學ぶには、どうしても何度も同じ所へ行つて調べなければならない。私は巴里滯在中、華やかな巴里は少しも見なかつたが、古い寺院を行脚して昔の巴里を見る事を唯一の樂しみにしてゐた。



寺院の側、私が度々樂しみにして見に行つたのは巴里市中にある有らゆる博物館である。中でも一番私の好きであつたのはルーブル博物館である。

ルーブル博物館は昔のルーブル宮殿でフイリップ　ル　ベル王がセーヌ左岸の宮殿を議會に開け渡した時に、對岸のルーブル宮殿には君主政治が行はれたのであつた。此の宮殿が世界で最も壯麗な博物館となつたのはフランス革命後の事である。

巴里の中心のリヴオリ街とセーヌ河の間に建てられた壯大な博物館の建築は通行人の眼をひく。

現在のルーブル博物館は、フイリップ　オーグストの下に始めら

れたもので、ルイ十三世、十四世は此の建築を四方形に造つて、中央に中庭を設けた。次にヘンリー四世はセーヌ河に面した大ガレリーを築き、最後にナポレオン三世はリヴオリ街に面した一翼を增築したのである。

ルーブルの名は、多分昔の狼の獵人の會合所であつたラテン語のルパラから其の名を取つたらしく、それがルヴリーとなり、ルーブルとなつたと云はれてゐる。

館内の一室々々の目も綾な裝飾の華美は云ふまでもなく、其處には美麗優雅な古典家具、美術品、古い名畫彫刻が保存されてをり、中でもミロのヴイーナスの石像や、レオナール　ド　ヴインチのジヨコンドの名畫等は何度見ても飽きない。

ガラスの中には昔の王冠の寳石、中世紀や復興時代の得難い七寳燒のコレクション等が納められてゐる。

その他有名なイタリーの彫刻美術もあり、カルデア、アッシリア、古代エジプト、日本、支那に至るまでの東洋の美術も立派に保存されてをり、一室として見物の目を驚かさないものはない。誠に此處には世界中で最も豐麗な寳物、美術が集められてゐると云つても過言ではない。今でもルーブルは世界で最も見物客の多い博物館として有名である。

館内を見物するものゝ中には、パレットを手にして昔の名畫を模寫してゐる者もあり、彫刻をスケッチしてゐる者もある。私の此の上ない樂しみは幾度も此處へ通つて、各時代に渡つて家具裝飾の研究をする事であつた。

巴里にはルーブル博物館の外に、多くの博物館がある。多くは十九世紀に建てられたもので、歴史と美術の遺物を保存してゐる。

マルザンの博物館には、昔のフランスの華麗典雅な生活を聯想させる多くの裝飾美術が陳列されてゐるが、ルクサンブルグの博物館やシヤンゼリゼーの小宮殿ではフランス現代の美術に接する事が出來る

セヴイニエー街にあるカルナヴアレー博物館の樣に、巴里の歴史と革命を物語る多くの美術や記念品が陳列されてゐるものもある。モンソー公園のセルヌシ博物館の樣に支那美術を立派に保存してゐるものもある、レナ並木街のギメー博物館の樣に日本、支那、印度古代エジプトの宗教美術を廣く集めてゐるものもある。

シヤイヨー丘陵に建てられた、トロカデロの宮殿の博物館は、一八七八年の博覽會の際に建られたもので、壯大な正面とその兩側に控へた鐘樓は、セーヌ河の對岸に聳えるエッフエル塔に相對してゐる。宮殿の中央部は民衆戲場と、人類學博物館に當てられ、印度、アフリカ、ニウジーランド、マレー、メキシコ等の諸國の土俗の標本が廣く集められてゐる。兩翼の建物は、フランスの中世紀と復興時代の名彫刻の模造と、カンボジアと印度支那の美術の陳列に當てられてゐる。その他フランス各州の固有の服裝をさせた人形等も陳列されてをり、仲々有益な博物館である。

又サン　ミシエル並木街にあるクルニー博物館は、その美麗な建築と、館内に保存されてゐる中世紀や復興時代の美術品の數々は、古典の建築物や裝飾を歴史的に研究するものには何度見ても飽きないものである。

巴里市中では此の外まだ澤山の博物館を見て歩いたが、餘り長くなるのでこの位にして置く。此の樣に巴里で多くの寺院や博物館を見て、私は非常に有益な研究が出來たのであつた。

船室より

長谷川春子



熱帶

香港へ入る夕方まで人々は暖春を待つ心であつた。寢床も折々冷めたい。船室女中や老婦人たちはゆたんぽを入れてゐた。所で香港へ來た。

着いた其の晩、棧橋から若い連中はシャポーを被つて、ぞろぞろ町へ行く。船室女中もデッキ給仕と出掛けてゆく。この二人はこれきり駈落でもしやしないかと思つたが、それでも歸つて來た。大男でドラ聲で猥談屋でさて人の好い給仕頭の眼を忍んで、部屋へ忍んだり、サロンの地圖の前でそつと相談したり大分せつない氣持らしかつたが。翌日半日、今この香港の一番いゝ季節だといふ、秋の落葉と春の芽出を一緒にした樹々の凋落の溜息と、萠え出づる喜びと、それから海霧の深い暑い半日の息を吸ふと、忽然として、人々は樂しい、せつない熱帶の情感の中へ流れ込んでしまつた。

あゝ我等は今や熱帶に住む哉

そのあくる日の航海には、甲板にはテントが張られる、あの默んまり屋の黑裝のアイルランドの脊の高い男が明るい上衣に白つぽいズボンを穿く。牧師だといふメフィストの小使の樣な、とんがり頭のはげ頭の頂邊へ赤茶の毛が地獄の落し火のようにチョロ〱燃えてゐる、怒りつぽい先生が「今日は歩きやうが男のやうですな」などゝ私に話しかける。そしてそれからお說敎に出掛けてゆく。時間が惜しくてピアノはひけぬと云つてゐた。キリスト敎聯盟の老婦人が、今朝日曜のお祈りに、ピアノの彈き手に猥談やの給仕頭に賴まれて、忽ちアウルライトとなつて、何年ぶりの敎會唱歌をカチン〱とさらけ出す。そして今日はおそろしい短い明るいきものに頭へどういふつもりか、シレタキレイをちよつと粹に結んで見る。

お爺さんがピアノを彈き出す。食堂では煽風機がうなり出す。

甲板はキラ〱白い、海はギラ〱光る。日が暑い風がすずしい。

俄にきた夏の流れはまだ溶けきらない。丁度水の中へ慾を流した時の木目のやうに空氣の中へへんな波紋と流れをしてゐる。

故に、人々はなほせつない。若いものは尙更。あゝ熱帶なる哉。

雲や、靑空や、星や月――私の眼が明いてゐる限りの見飽かないものであるけれども、この船へ乘つてから割合にそれ等のいみじき顯現に逢はない。從つて興味は人事に、人間の顏に持つやうになる。

上海の二日の街上所見では共同租界の四ッ角に立つ古武士のやうに眞直目で立派な印度巡査の顏が眼に殘る。まつたく彼等は忠實ださうである。事變の時いつもピストルな恐れずに進むのは彼等ださうな。お隣り佛租界の交趾（コーチ）支那人の滑稽な巡査に陣笠と饅頭笠の合の子のやうなのを被せたのは皮肉な佛人らしい。

あとは歐羅巴人も東洋人も皆で寄つてたかつて拵え上げてしまつたこの荒唐無稽の騷々しさに思索も顯智も、いづれも失つてしまつた樣な顏をしてゐる。この町に遠く深く慮ろやうな人が住み得られるかしら。さうした群集の中に一脈の寂しさを微に流すものは雜然たる人種の混合が齎らした混合の血の子等が兩親の何れの方の生活にも歸し難くて、買子等してゐる哀れさや、故國へ歸り度くても最早や歸ることもならずに、せめて空想に乏しい彼等の頭の中に、これ丈は絕へず空想に二十五萬弗、せめて最下の――萬弗でさえも競馬でかち得たらばと願つてゐる種の各國の人々である。

比べると香港は大分いゝ。香港は中々いゝ所である。大分これは英國人の作つたフエアリーランドとして傑作の部に屬しよう。町を一緒に步いた例のキリスト致婦人もそんな意味のことをいつた。この人はオーストラリア生れで、シンガポール在住で、すこしセンシビリテイの强い、だが仲々賢い、小柄の細い品のよい高い鼻を持つ婦人で、現在私の質問に應答係りである。すこし脇道へそれるが日本の中學生や女學生の上級位の中から賢い建設力の强さうな子供達を選んで香港ぐらゐ――へ旅行させることは必ず有益だと思ふ。彼等の創る明日の日本に――日本に在ては思想上の影響ばかりが多く傳はるのみだが――他の方面の建設もあつてほしい。英國人でさえこのくらゐのフエアリランドを作るのですから。

さて香港の人々はイギリスの匂ひが强い。上海は一見したところでは人間の顏も性格も汎國際的すぎるが、此處ではほつと落ちついて、イギリス人の好みのまゝの營みがある。それから支那人達も――苦力や車力でさへ上海、天津、北京――これきりしか私は知らないから――のそれ等より苦役と生活の痛ましさが薄らいで見える。國が落ちつかないといふ事は災ひなる哉。印度の商人達はこの町に至つて初めて堂々として商賈を張つてゐる。丁度夏の動物園の獅子のやうに元氣だ。千一夜物語の中にでも出て來さうな商人がゐる。

ところが、以前私は海外へ良人や家族に從つて行つてゐる日本婦人諸姉が、彼女等の內面敎養に勉めること薄くして、閑日月を過すことを嘆いたことがあつたが、これは强ち日本婦人ばかりではなさゝうだ。上海では勿論香港でも人妻も娘達も皆大分呑氣らしい。彼女等は殖民地にある人の慰め喜びであれば、本國にあるより人間關係交渉に有利であるせいかもしれない。多分商店などへ買物あるきすること、其處でまたは他の場所で品定め噂話が生活の大部分らしい。

そこで最後に香港の支那娘――キリスト靑年會を訪ねた時ゐた二三の若い女達は賢いよい顏をしてゐた。多少フランクな態度の中に樣々の事を考へてゐる顏である。恐らく宗敎ばかりを信じてゐる顏ではなかつた。その一人が私を日本人と知つた時、瞬間にある表情が影のやうにかすめたのを見た。それから香港娘は西人（アメリカ

人に非ず）の好みをよく生かして、落ちついた品のあるよい色の好みを持つてゐる。珍らしくも灰色でない。間色の單一調で服裝の調子をつくつてゐた。



御乘船客名簿

さてまた私は今の私の周圍の西東の漫畫を讀者に送りたいのであるが、殘念なことには最早や西向の私の船室（キャビン）では、赤道にもう二三度しか離れないのでとても出來ない。で仕方がなく文字の名簿にかへる事にしやう。これは船中誰一人讀めない言語だ。可愛い七歳の男の子が、兵隊を描いてくれ、この字は何だと開きに來る外は、牧師先生が眼を光らせて何と書いてあるのか、話して見よといふ。一週間ほど前からスティブンソンといふお爺さんと毎日口をきく。紅ら顏の太つた眉毛が少し老僧のやうに垂れ下つた人のいゝ紳士である。アメリカ、西貢、支那、日本と持ち廻つてやつと大阪で古い古い持船を解體して買つてきたといふ田舍なまりで、東洋人の心理などゝは絶對に交渉のなかつたこの老人の言葉を解せるやうになつたのは中々な骨折りである。それから例の牧師先生、前頭の茶の毛の煙を無線の火花に見立てゝ、たうとうミスタ・スパークス（ワイヤレス）と名がついた。名は知らない。スパークス、とやられてゐるが、中々感傷家だからあまりからかつてはいけないと老婦人から注意された。

この連中の食卓には、他に若い男が四五人、むつつりやのアイルランド人もその内で、あとはブロンドの典型的英國種ばかり、程よく美しい上つた毛、整つた顏、英話讀本の口繪の勉強してゐる靑年のやうなのがゐる。面白くもおかしくもなきロンドン行の連中である。口數もきかずに默つて、何時もさつさと物を食べる。此の若い連中一組となつて、中々他の若い男とも一緒にならない。

我々のテーブルは向側が稀れにやつて來る船長の席と、隣りがエンジニーアだといふ男、大分氣取つて、金鎖りの鼻眼鏡をかけた藪睨（やぶにらみ）らしい男、ふくれた鼻に、口唇が厚く綿の入つた紅絹の衣のふきのやうに持ち上つてゐる。お人好の様で中々食へないらしい、其次が感傷的な臆病な眼をしたやせた靑年、ロマンティックな顏をして海をみてゐたりする。然し又よく䁨てゐる。——食卓では口も開かない。それから頭にも顏にも、所嫌はず白い杏毛のもぢやもぢやと赤味の皮膚（ひふ）に生へた、毛剝き半ばの白い軍鷄のようなおぢいさん、それと對立して居るのが又怖ろしく下品な、手に愚（イレズミ）入のあるずんぐり男、此男は、にこにこ人々のする事ばかり見て居るが、決して口を開かない、隣りの鷄のやうな聲のお喋りの鼻眼鏡の女ともさて口をきかぬ。この婦人はサロンへは座布團と大きな手さげと足布

圓、食堂へも足ぶとん。腕輪を五つばかりづゝも片腕に穿めて居る、よく金と云ふ字が口から飛び出す。又實にホラを吹く。皆が少し閉口してゐる點と、女中とよく口をきく點に於て如何なる御婦人でせうか。その隣りが私で例の氣取りやのユンジニーアと對立してゐるわけ。首席がキリスト婦人。そこでやつて來る船長がこれは怖ろしいプルータルな、アメリカ映畫か、スペインの闘牛の畫にでもゐさうな、眼の下にお酒か何かのたるみと隈のある人物、でもネルソンの夏の裝ひといつたような、お腹から胸高くスパイン人のようにズボンだか何んだか、黑い布が卷き上つて、眞白な上着、白く光るシヤツ、金の肩章きちりとした裝ひである。遠慮なく怖ろしい聲で話す。――ジヤズより外俺は解らんと威張つてゐる。

向ふの方の食卓はよくわからないが、佛蘭西人のような男が居るおだやかな氣の柔しさうな人だが、餘程ある補の病の進んだ病狀らしい。眞白な、下穿きのような短いパンツに膝を出してる連中がある中で、ひとり冬のきものに、黑毛のくつ下、暖かさうなフエルトのスリツパを穿いて、すこし足が不自由らしくびつこを引き〳〵出て來る。折々ソフアに腰かけて足の痛みを堪へる細い苦悶の響きが顬谷に動く。柔い毛は病氣のためか生へ際の邊りは白つぽくぼけて居る、淡い灰藍の點が――眼玉が――ぽつりぽつりと二點薄い色のあるかなきかの眉毛の下に點在する。白い顔にはくびには赤い班點が浮き上る。傍へ來ると異臭が鼻を掠める。聲はしは枯れて殆ど出ない無論惡性の病にちがひない。丁度水蜜桃の熟し過ぎてぽつぽつ痛みが出たかのようだ。私は此の人を見る度に冷い所へでも置かなかつたら、熱帶を越す前に腐つてしまひはしないかと案じられる。

それでも淡い幽かなニユアンスのある風味を持つ人は船中この腐れかゝつた病人だけしかない。二等船客に、女は前に云つた人と私と中老の夫妻と――厚い胸と太い尻と腕のお婆さんだ、良人がガチヤ〳〵とピアノを敲いて唱ふ時、それでも此のお婆さんはうつとりとした眼付きをする皆は遠慮なく大笑ひをするけれども、この夫婦は先づトオミエの劇場の觀客といふタプロオを想ひ出して下さればいい。

子供を連れてエヂンバラの里へ一寸歸るといふ柔しい愛らしい若い母は「寂しき人々」のオツケラアトの若い妻のような人である。

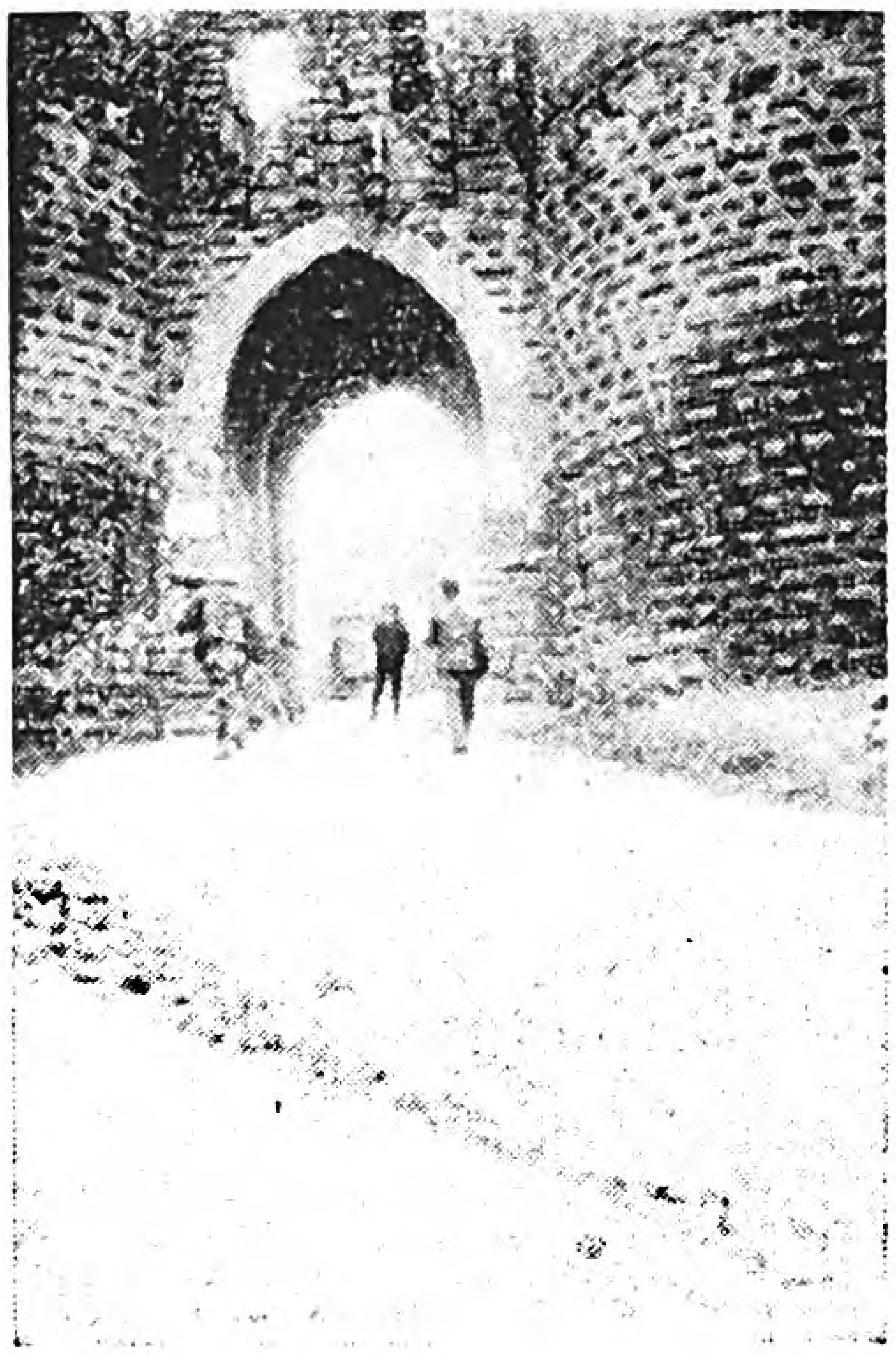
もうゐないけれども、畫家の眼を引いた男は上海から香港がへりのスポーツの連中らしい一團の中に、あのゴヤの黑い三角帽を被つた白いくび卷きの男の肖像あの通りなその男只一人、濃い眉毛の下にスペイン猫の大きな眼をしたのが居た、この連中はアメリカ人のように大陽氣で、船中に在る間一字も讀まなかつた。私が映畫の監督なら、この男と癡人丈拾つて使ふだらう。畫に描きたいのもこの二人だけである。

現在只一人殘つて居る李某氏は勇敢な人だ。一細人と語らず李何々と云ふ札をぶら下げて、椅子にひねもす寢て暮す。この男の圓い黄色い顔にとじた眼は常に見るが、眼をひらくのはまことに稀らしい。その眼玉を私はまだよく見たことがないほど。

其他わが異彩ある人物は大層小造りの白髮の黑ん坊の床やさん、小さなカバンをぶらさげてやつて來て私はこれにがり〳〵襟を剃られ、もみくしやに洗髮されて命を縮めた、止めさせようと其手を見ると黑い蛙のような皮膚の手でまつたくまゐつた。

旅の一頁

望月百合子



私の長い、ヨーロッパ放浪の旅は、戀愛に始まつた。と云つてその旅が甘い、愛と涙の旅でなかつたことは申すまでもない。乙女の凡てを捧げて愛し且つ信じてゐた、予言者のやうにも尊く思はれてゐた私のフィアンセが、實は僞善者で、下らないまやかし者であることを私は知つた。彼には私と同時に、もう一人他の、彼よりも四つも年上の女があつた。彼にとつては、私とその女とは二人で一人分の役割を演じてゐたのだ。私は一緒に郊外の野や森を散歩したり、抽象的な話をしたり、泣いたり、慰さめたり、レットル・ダムウルを書いたりする相手で、その他の女は彼の腕に抱かれる相手だつたのだ。私はその點ですつかり彼から裏切られてゐた。それからもう一つは彼は牧師の家に生れたので、私が宗教などを食べ物にする生活は最も卑しむべきものだからいやだと云つて反對したのに、教會の留學生になつてアメリカへ行つてしまつた。私はこの二つの打擊を殆んど同時に受けた。私は苦しんだ。怒つた。叛逆した。そして私も彼の期待を裏切つて、他の誰かに私をやつてしまつた—

この整理に私は日本を逃げ出したのだつた。そしてフランスの片田舍に避難所（アブリ）を求めて行つた。

一月十日の朝未明に、私とパパとは巴里を距る五百哩許りの或る小驛に着いた。そこはツウルーズ線からサルラ線への乘換え驛で、私達は一時間許り、暗い狹い待合所で乘換えの汽車を待たねばならなかつた。待合所にはストオヴが赤々と燃えてゐて、その傍には百姓の爺さんが大きな赤い鼻の頭をピクピクさせ乍ら居眠りしてゐた。室には電燈も蠟燭もついてゐないので、ストオヴの明りで、邊りが見える許りだ。私も默つてパパの胸に頭をもたせて眼をつむつた。

そして私達が小さな、それこそ昔の文明の名殘りとでも言ひたいやうな眞黑に古ぼけた汽車に乘り込んだときは、遠くの空の方が、やや白みかゝつてゐた。だん〳〵小高い山や畑がそれと分るやうになつて來た。小驛を三つ四つ行つた處が終點のサルラで、驛前には、ドムの家から馬車が私達のために廻されてあつた。馬車と言つても、屋根もない箱で、始め、私はそんなものに乘るのは恐いなと思つ

た。けれどパパに抱かれるやうにして乘つてみると、さほど不安心な乘物ではなかつた。馬車は、タツ、タツ、タツと音を立てながら、深い〳〵霧を割つて進んで行く。雨のやうな白い雫が冷たく顏や、頸筋に襲ひかゝつてくる。御者はパパの顏なじみなので、しきりにドムの村の話をする。パパにとつては一年ぶりのドム訪問なのだ。しつかりと毛布で脚を包んでゐるのだけれど、感覺がない程冷たい。霧を透かして、みつめると、丘があつたり、林があつたり、小川があつたりする。小川の岸にはポプラのすつとした木立が帳のやうに並んでゐる。丘の上には壞れかゝつた圓い塔のやうな風車の石臺が處々に立ちくされてゐる。やつぱりフランスの田舍だなあ！と私はまだそんなぼんやりした意識をもつてゐる。しみじみ遠く來てしまつたやうにも思ふし、さうではないやうな氣もするし、まだどうやらほんとの旅心ではないらしい。太陽がのぼると、霧はだん〳〵薄らひだが、それでも、ちつとも光がキラ〳〵しないで、太陽は眞珠のやうに見える。ドルドオニユ河の長い橋を渡つた處で私達は馬車を降りて、坂道にかゝつた。その頃はすつかり霧も晴れて、三月のやうにポカ〳〵する陽がいつぱい道にも家にもみなぎつてゐた。道の途中で會ふ人はみんなパパに『暫らく』と言つて親しく挨拶した。日本の田舍のやうだと思つたが、只こゝの女の人達には鼻下に黑い髭が生へてゐるので、どうしても私にはをかしい。

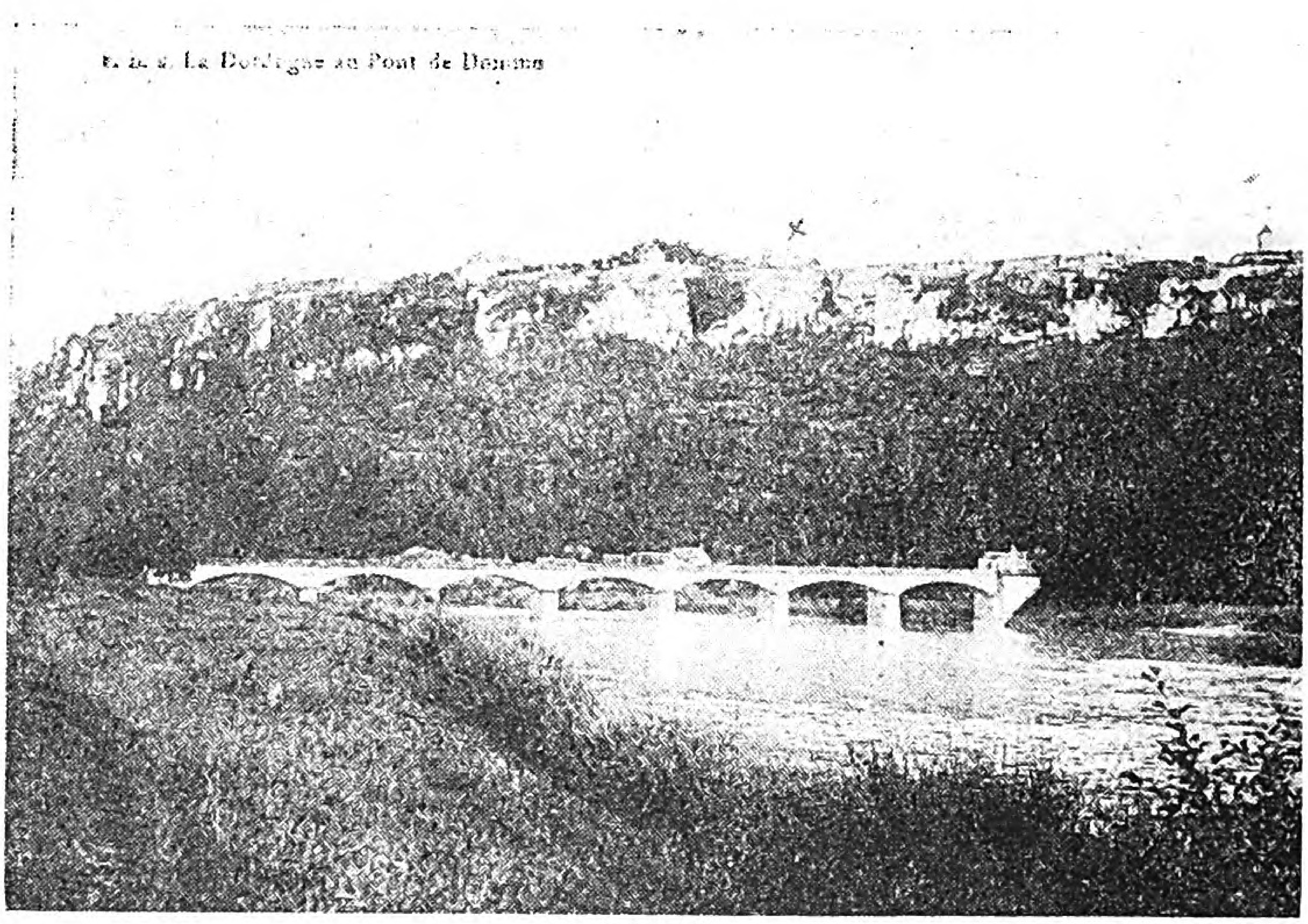
『パパ、女が何故髭を生やしてゐるの？　あんな髭、飾りか知ら？』

　私は不思議でたまらなくてパパに聞いた。

『西洋人の女は剃刀を顏にあてることを野蠻だと思つてゐるから、生へたまゝにしておくんだよ。都會の女なら剃刀はあてなくても何んとか手入れする處だが、田舍の女はかまわないと見える』

　私は會ふ度の女に目をみはつてみた。坂の段々畑には、アマンドの花が陽を一杯に受けて桃色に咲き誇つてゐる。その下では羊の群が遊んでゐる。

『これは太陽の家と云ふのだよ』とパパが、一軒の壞れかゝつた家



ドムのドルドオニユ河　×印がコードン坂

を指さした。それは朝から日暮まで一日中陽がさしてゐるから、ここに住んだ人がさう名づけたのださうな。その名や、さう云ふ名をつけた人々を美しいと思つた。

坂を登り切つた處に、素晴らしく大きなアカシアの木があつて、その枝の下に私達のドムの家があつた。半身不隨の夫人も女中に助けられて門まで出迎へてゐて下すつた。パパはしきりにこの夫人や、夫人の夫のルクリユ老人と頰つぺたに接吻したりされたりしてゐる。私はフランスの挨拶はいやだなと思つた。幸ひ私はその接吻だけは免がれてほつとした。

さて私はこの家のことを少し書かねばならない。これは有名な社會學者で、實際にもアナルシスト運動に身を投じたルクリユ老人の家で、家には半身不隨の夫人と、近所から手傳ひにくる婆さんと、ロシア人の夫婦者とがゐた。これに私とパパが加つたのだ。三階建ての、壁の厚さが二尺もありさうな家で、階下が食堂と臺所で、二階がルクリユ夫妻と、ロシア人夫妻の部屋で、三階が私とパパの部屋になつてゐた。私の部屋には西と南に窓があつて、南の窓の外は一面のアカシアの枝で、西の窓外には菩提樹の花が初夏の頃には甘く匂ふのだ。そしてその窓からは遠くの山の輪廓や、その山の端に沈んで行く太陽やが實に素晴らしく見えた。南の窓からはルクリユ家の菜園を越えて、段々畑や、谷や、向ふ側の山や、その向ふの山々等が見えた。私はこゝで勞働もしたり、勉强もしたりする生活を始めることになつた。

毎朝コーヒーの强い香りにめざめて起きるとすぐ食堂に降りて行く。そこにはパンと、一杯のコーヒーと、たまにはフロマアジ・プランと稱する脫脂牛乳を固めたものが出る。始め私はその大形のパンを二切れも食べるともうお腹一杯になつたものだが、暫らくすると五裂れも六裂れも食べるやうになつた。そして私の健康は目立つてよくなつた。始めは階下から三階まで登つて行くと、どんなにゆつくりしても胸に動悸がして困つたけれど、終ひには平氣でかけ登ることが出來るやうになつた。

朝のコーヒーが濟むと私は疲弱な夫人を助けてお庭の散歩をした。一月だと云ふのに、パークレットと云ふ、デージーに似た、可愛らしい花がお庭の道一面に咲いてゐた。この花は霜の下にでも咲くから、復活祭（パーク）にちなんでパークレットと呼ぶのださうな。あんまり澤山の花で足の踏み場もないやうに思はれる。夫人の散歩が濟むと、暖かい日は外で、寒い日は食堂で、私は夫人からフランス話を敎えて頂いた。それから私は畑に出てパパと一緒に働らいた。けれど雜草をがり〳〵引つ搔いてゐながら、『草だつて生きてゐるのに、何んだつて人間がそれを殺す權利があるだらう？これも人間のエゴイスムぢやないか？』とそんなことを考へると、私は草かきを投げすてゝしまつて、パークレットの上に腰を下ろして靑い空を見上げるのであつた。そこでは小鳥が、我世を得たりと云ふやうに誇らかに唄つてゐる。私は鷄小舍に行つて朝、パンの中味を食べ殘してポケットにしまひ込んでおいたのを投げてやる。みんなが競爭して集つてくる。そしてこの鷄の社會にも意地悪者や、弱い被壓迫者があるのを觀察する。ある日ルクリユ老人が他所から白色レグホンの大きな雛を四羽買つて來て、前からゐる鷄達の仲間に入れた。それが純白でいかにも美しく、氣高くさへもあるので私は勿論、雄鷄もことの外愛した。すると他の雌鷄達はやきもちを燒いて、餌もその四羽の美しい新入者達には食べさせないやうにし、出逢ひさへすれば

隅つこの方へ追つ拂つてしまふ。そして夕方になつて鷄が小舍に入る頃になつてもこれ等の新しい鷄は執拗に古參鷄からつゝき出されて、どうしても巢に入ることが出來なかつた。そしてたうたう無花樹の枝にとまつて、不安な夜を明かすやうなこともあつた。私は夜になつても彼女達の仄白い姿を窓からみやつて心配して、その夜は、その鷄達と同樣おちおち眠らなかつた。

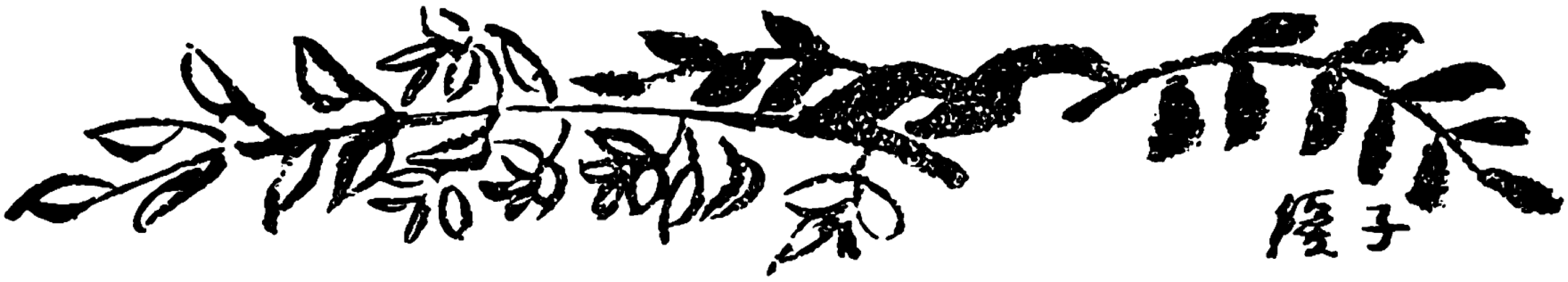
午後になると、私はパパとよく散歩に行つた。このドムと云ふ村は大岩石の山の頂上にある極小さな村で、どちらに行つてもすぐ下り坂になつた。そして昔イギリスとの古戰場だつたので、村の周圍には中世期の城廓がそのまゝ壞れかゝつて殘つてゐた。この城門のところには恐ろしい圓塔形の昔の牢獄もある。私達はよくこの城廓のところに散歩に行つた。そこからはドルドオニユのゆるやかな流れと、その岸の多くのお城や、牧場や、牧場に遊んでゐる白い牛や羊や、リボンのやうに綠色の牧場を走つてゐる道等が見えた。昔お城があつた跡に行くと、そこには風車の石臺だけが廢墟のやうに立つてゐた。そしてその下の岩室には、今もまだ太古そのまゝに岩窟住居をしてゐる人々が眞黑な顏に、にこ〳〵微笑を漂えてゐた。

『パパ、あれは黑ん坊?』

『いいえ、この土他の人だがお湯へはいらないのと、日に燒けたのとであんなに色が黑いんだよ』とのことに私は肝をつぶしてしまつた。また私達はよく附近のお城（シャトオ）を見に行つた。風光明美なドルドオニユ河の沿岸には實にこのお城が多い。シャトオ・ド・コードンといふ侯爵領のお城を見に行つたときは、大きな胡桃の枝でリスが澤山群れて遊んでゐた。そしてそのお城の傍の、岩をくりぬいてそのまゝ禮拜堂にした苔むした教會があつて、丁度結婚式があつた後と見えて、一面に野の名も知れぬ花が飾られたり花門がしつらえられたりしてゐて、美しい夢を私の心にふりまいてくれた。シャトオ・ド・モン・ルウといふお城には面白い話がある。これはドルドオニユ河岸に聳立する素晴らしく高壯なお城で而も十八世紀位のものなのでまだ立派に住まへるのに、今は誰も住んではゐない。このお城にかつて大戰中石油を買賣して成金になつた男が住んでゐた。そして一週に一度位、巴里から飛行機で、美しい女達をつれて遊びに來るやうにしてゐた。附近の村にも盛んに機行機で出沒しては、二錢の夕刊を買ふのに百法の紙幣を拂つて、おつりは要らないと云ふ風であつた。一日中羊の番をしても一法しか得られない村人達にとつて、これはまつたくの大事件であつた。村人達はだん〳〵媚ることを覺えて、働らくことを怠るやうになつた。村のブルジョアの女達は今迄よりも身だしなみに心を使ふやうになつた。そしてこの石油成金に接近することを無上の光榮とするやうになつた。シャトオ・ド・モン・ルウを中心にしてこの靜かなドルドオニユの谷間に一大旋風が起つたのだ。ところがある日の新聞は、彼が不正を働らいた故に逮捕されて牢獄に投じられたことを報じた。そして同時にモン・ルウの城も閉鎖されてしまつた。村人達はポカンとしてしまつた。だがやがて、村人達はまたもとの靜かな素朴な生活を見出した。散歩の話をしてゐるときりがない。何故ならこの邊は有史以前の遺蹟に富んでゐるから。

夜になると、晝間パパと二人でひいておいた薪を、大きなストオヴにくべて、ランプの光りで本を讀む。靜寂な世界を、アカシアの梢で鳴く梟の聲がホウ・ホウと破るお寺の鐘がピンパン！ ピンパンと清澄に響き渡る。....

これは私の旅の第一頁だ。



與謝野晶子氏 生誕五十年祝典講演會

與謝野晶子氏は近代日本が持つた、最も熱烈で優雅な「處女」であり「母」であります。彼女がその青春期に於いて歌ひ殘した、あの奔放瑰麗を極めた詩歌が、長い間壓迫と桎梏とに惱みつゝあつた全女性の憂愁悲哀の代辯が、同時に過去の我々に、自我擴張の自由と歡喜とを教へたことは何人も否定することが出來ませぬ。その上彼女は優麗な詩の世界にのみは安住せず、女性の先頭を切つて恒に思想的嚮導の役割を力めることも忘れませんでした。今後も亦彼女は十分に全女性への貢獻を怠りはせぬでせう。然し、我々が彼女生誕五十年に際し、彼女の過去の業績を思ひ出して、聊か感謝の微衷を表はすのは、當然の義務であるかと思はれます。祝典期日その他は改めて發表しますが、豫しめこの企への御贊同を祈つて置く次第であります。

會場　丸の內・帝國劇場

時日　五月三十日・午後一時

講演者氏名　次號發表

餘興　舞踊・音樂（次號發表）

發起人

岡本かの子
片山廣子
中原綾子
大倉時子
茅野雅子
山本愛子
美濃部民子
河崎夏子
千葉千歳
山名敏子
丹羽あさ子
伊藤伊三郎
山本直良
高村光太郎
眞下喜太郎
平野久保
十一谷義三郎
下中彌三郎
加藤雄策

平沼亮三
三宅磐
中村作太郎
渡邊金左衛門
賀川豐彥
德富猪一郎
正宗得三郎
茅野儀太郎
竹友虎雄
梅原龍三郎
有島生馬
石井柏亭
尾崎行雄
山崎小三
小林政治
内山英保
高濱清
本美鐵三
川上賢三

三樹退三
高造寺齋
太田正雄
高田保馬
白仁勝衛
正宗敦夫
北原隆吉
野口米次郎
新居格
關戸信次
山本鼎
薄田淳介
山内英夫
川勝堅一
藤田長和
松永周二
增田宇兵衛
西村伊作
山本實彥

鈴木利貞
江寸文三
堀口大學
佐藤春夫
馬場勝彌
日夏耿之介
下村宏
土岐善麿
廣川松五郎
太井一郎
吉井勇
田中松太郎
山下新太郎
戸川明三
森田草平
中根駒十郎
菊池寛
沖野岩三郎
三上於菟吉

主催　女人藝術社



長流記（その十）

山田邦子

佐千子と由井氏、お慶さんと川端氏、は前後してさゝやかな結婚式をあげた。

佐千子は自分の結婚の髪の飾りの爲に、小さい菊の花の銀のかんざしを一本「白牡丹」で買つた。……髪は束髪で、それも自分で結ふて此かんざしをさしたゞけであつた。……國の母親からたゞ二百圓送つてよこしたお金で、自分一人松屋に行つてみたてゝ來たかうほねの花の裾模様の着物を自分で着て、寺井さんといふ女子文壇の婦人記者であつた友人の小さい家から車に乗つて日比谷に行つた。丁度お慶さんは自分の結婚の事で國に歸つてゐたし、佐千子は番町の家を引あげて、世話ずきな寺井さんの家から日比谷に行つて式がすんだら由井氏が借りておいた麻布谷町のさゝやかな二階建ての家にすぐにはひる事になつてゐた。寺井さんは神田三崎町の路地の奥に、三疊と六疊の二間建の小さい家を借りて自炊生活をしてゐた男まさりの婦人であつたが、世話ずきで親切者で、佐千子たちの年輩の文學をやらうとする人とか女醫の試驗を受けやうとする人とか、婦人記者とかさうした獨身婦人が此家に家族のやうに集まつたもので、寺井さんは外出の折に玄關の戸をしめて鍵をかけ、その鍵を戸袋のサンに隱して出かけるのをいつかみんなが憶えてしまつて寺井さんの留守に平氣で戸をあけて上りこんでゐるといふやうな呑氣な家であつた。——婦人記者のTさんが、寺井さんが瓦斯代の拂がたまつてお金がない處から外出のふりをして玄關に鍵をかけてこつそり家のなかに隱れてゐる處を鍵をあけて上りこんで「オヤ居たの」…

…など言つてゐる處へ瓦斯やが這入つて來てどうしてもお代を拂はなければならなくなつてTさんに罰金を出させたなどいふおもしろい話が生れて來た――。佐千子の結婚式の朝、寺井さんは早く起きて佐千子の爲にお赤飯をたいておかしらつきで祝つてくれたが、佐千子はそのお赤飯の出來るあひだ六疊の奥に据えてある、家に不似合な大きなオルガンで子供の頃におぼえた唱歌をづか〳〵ひいてうたをうたつてゐた。

「此人はしやうのない人ね、お嫁さんになるといふのにオルガンなんかづか〳〵ひいてゐて……」

寺井さんは笑つてたしなめた。

「こゝに來てまあお膳でもおこしらへなさいな」

さうさしづされなければ何事も氣のきかない佐千子であつた。……寺井さんは佐千子の親戚側の一人となつて式にのぞんでくれたたゞ一人の人であつた。

麻布の家はだら〳〵坂に向つた家で、高い二階の窓から西日の深くさし入る家であつた。佐千子の新らしい生活はそこの家からはじまつた。

まだとざしてある二階の片方の窓から朝日の光がすき入つて來る、その頃表の坂を「あさりあさり」と流してくる子供のあさり賣があつた。下ではばあやが時折此あさり賣をよんで、おそく起きてくる佐千子たちの爲に、あさりのお味噌汁をこしらへておいた。……夕方流してくるうどん賣の聲……その聲にも一日一日となじんで、町に、家に、住みついてゆく佐千子であつた。表の門の戸はめつたに外の人の出入る事はなく、朝は夫をおくり夕べに夫を待つ門にすぎない、今までの佐千子の、とりとめのない形のないまとまりのない朝夕にくらべて、何とつゝましくさゝやかに垣を結はれた靜かな家の生活となつた事であらう。さうした二人の生活に佐千子の心は由井氏――否未知の異性そのものゝ世界へ一歩一歩となじんでいつた。女性のしほらしい、頼りを求める女心がはじめて佐千子をうるほして來た。

お慶さんが上京して、島田に結ふて、佐千子の新居を訪れて來たのは、それから間もなくの事であつた。川端氏は病氣で赤十字病院に入院してゐたので二人はつれだつて見舞にも行つたりした。

お慶さんは、皺になつた白紙に包んだお札を手に握つて川端氏の枕元に寄つて二人は結婚式の用事を打ち合せてゐた。

「お互に何んとどこまでも自分たちでやつてゆかねばならぬ開拓者の私たちだらう」

お慶さんの横顔を見てゐて佐千子はひとり心につぶやいてゐた。

お慶さんは結婚式の日まで佐千子の家に居た、そして川端氏が一まづ退院になつた處で形ばかりの式をあげて澁谷に家を持つた。

然し佐千子がお慶さんの新らしい家を澁谷の奥にはじめて訪ねた時、川端さんはまだ病氣で家のなかは陰氣に重くるしくお慶さんの存在はあはれな程暗つぽく見えた。こちらの六疊で火鉢をかこんで佐千子たちの話してゐる處を蒼い顔して川端氏が厠に通つて行つた外家のなかは森としてゐた。佐千子は何んだか氣がつまるやうで早々にいとまをして外に出たが驛まで送つて來たお慶さんから聞く處によると二人は結婚式をあげたゞけで今はたゞ川端氏の病氣のなほるのにつとめてゐるといふ事であつた。

　それから半月程たつた或る日、佐千子の家には寺井さんが來て、佐千子に丸髷を結ふてやるといふので二人は縁の日向に出て丸髷をのせてみたり赤手柄を卷いて見たりおもしろさうに笑ひはやしてゐた。そこへお慶さんが蒼い顔してはゐつて來た。

「どうしたの、顔色がわるいのね」

「どうもしないけれど」

さういふお慶さんの聲は浮かぬ聲であつた。

佐千子は少し變だとは思つたけれど、よくお慶さんにはさういふ事があつたから佐千子はひどく氣にもかけないでゐた。

佐千子の髪が結へた處でお慶さんは寂しく立ち上つて

「又來るわ、少し氣持がわるいから」

さう言つて歸つて行つた。

一日たつてお慶さんは再び佐千子を訪ねてきた、顔色はやはりよくなかつた。

「此間相談に來たのだけれど…あなたがた、あんまりにぎやかにしてゐるから私は言ひ出せなくなつてしまつたの」

さう言つてお慶さんは川端氏との此頃の夫婦生活について話をした。

「私はからだが不具（かたわ）ならしいのよ」

お慶さんは重い口をきつた。

「何故？」

佐千子は驚いて目をみはつた

「だつて川端がさう言ふの」

さう言つたお慶さんはその說明をした……それは佐千子が結婚後、由井氏に聞かされた事にふれてゐた。由井氏は然しそれを不具とは言はなかつた、はじめはさういふのだと佐千子に言つてきかせた…で佐千子は急にわかつた顔になつて

「それは川端さんが御存じないのよ、だれだつて、私だつてはじめは同じ事よ」

さうして自分の聞いたゞけの事をかくさず佐千子はお慶さんに話したのであつた。

「さう、さうなの…でも私は特別らしいわね、あんまり苦しむのですから」

さう言ふお慶さんの顔はだんだん晴れてきた。二人の間の長火鉢

にはしん〳〵とお湯がたぎつてお茶はもう出がらしになつてゐた。
然しその次ぎに佐千子がお慶さんを訪ねた時、佐千子はまあ何といふ變りやうをお慶さんの家で見た事であらう。
やゝもすれば意見めいた年輩者の口調を出したお慶さん、佐千子とちがつて物に動じない、感情をそのまゝ出す事の少なかつたお慶さんが、どうしたのか囀る小鳥のやうな明るさ、氣輕さ、若々しさにみちて、何と幸福さうに起ちはたらいてゐるそれは家となつて居たらう。
「一體どうしたの?」
佐千子は思はずさう問ひかけたい氣持がしたけれど、なじみのうすい川端氏に遠慮してだまつてゐた……。
やつと健康になつた川端氏はどうもまだ用心して丹ぜんを着てゐたが手づからお茶をいれて丁度來合せてゐたその弟の人にも佐千子にもそれをすゝめた。大きな湯呑についでそれを自分の前にもおいた。そこへお慶さんがお菓子を持つてはゐつて來たがいきなり川端氏に向つて
「アレ、わたしにやくんにや」
とお國言葉をわざとつかつて皆を笑はせたがおよそ佐千子が知つてから此方のお慶さんとして、かうした冗談を異性に向つて突刹に言へるやうな人と思ひもよらなかつた佐千子はたゞ驚いて明るいお慶さんの顏をながめた。そして譯は分らないながらも佐千子はかうしたお慶さんを好いた、どうかかういふ快い明るいお慶さんにいつまでもなつてゐてもらひ度いと思つた。
川端氏が歸る弟さんを送つて出た後で二人は火鉢をかこんでくつろぎ話し合つた。
「ほんとにあなたの言つたやうだつた、私不具でもなんでもなかつたわ。」
お慶さんはそれを言つた。そこに此家の明るい光があつたと佐千子はさう思つた。
「でもねエ」
此事は佐千子が言つた。
「あんな事つまらないのね、あんな事が世のはじめからあんなに讃美されて來たんでせうか……」
お慶さんはチラと笑つた。
「ウム〳〵さうよ……でも私一寸わかつたわ……たとへば」
さう言つて お慶さんは 火箸を取つてかけてある 鐵瓶に一寸觸れた、輕く物のふれる音がチャとして二人の間に消えた。
「まあかう言つた刹那の感じたつたけれど」
それを佐千子もうなづいた。……かうして結婚してからも人に話せない祕密の世界にもふれて困る事は相談し合つてゐた二人であつた。

粗忽者の涙

―放浪記―

林芙美子



五月×日

世界は星と人とより成る。

嘘つけ！エミイル、ヱルハアレンの世界と云ふ詩を讀んでゐるとこんなくだらない事が書いてある。何もかもあくびいつぱいの大空に、私はこの小心者の詩人をケイベツしてやらう。

人よ、攀ぢ難いあの山がいかに高いとても、
飛躍の念さへ切ならば、
恐れるなかれ不可能の、
金の駿馬をせめたてよ。

實につまらない詩だが、才子と見へて、實に巧い言葉を知つてゐる
金の駿馬をせめたてよ……………。

窓を横ぎつて、紅い風船が飛んで行く。
呆然たり、呆然たり、呆然たりか……。何と住みにくい浮世でござりませう。

故郷より手紙來る。

―現金主義になつて、自分の口すぎ位ゐはこつちに心配かけないでくれ、才と云ふものに自惚れてはならない。お母さんも、大分衰へてゐる。一度歸つておいで、お前のプラプラ主義には不賛成です

五圓の爲替を膝において、おありがたうございます。

私はなさけなくなつて、遠い古里へ舌を出した。

六月×日

前の屍室に、今夜は靑い灯がついてゐる。又兵隊さんが一人死んだ靑い窓の灯を横ぎつて、通夜する兵隊さんの影が、二ツぼんやりうつゝてゐる。

「あら！螢が飛んどる。」
井戸端で黒島さんの妻君が、ぼんやり空を見てゐる。
「ほんとう？」
寝そべつてゐた私も椽端に出てみたが、もう何も見えなかつた。
夜。
隣の壺井夫婦、黒島夫婦遊びに來る。
壺井さん曰く、
――今日はとても面白かつた。黒島君と二人で市場へ、盥を買ひに行つたら、金もはらはないのに、三圓いくらのつり錢とたらひをくれて一寸ドキッとしたね。
「まあ！それはうらやましい、たしか、クヌウト、ハムスンの飢ゑと云ふ小説の中にも、蠟燭を買ひに行つて、五クローネルのつり錢と蠟燭をたゞでもらつて來るところがありましたね。」
私も夫も、壺井さんの話は非常にうらやましかつた。

梟の鳴いてゐる、憂欝な森陰に、泥沼に浮いた船のやうに、何と淋しい長屋だらう。
屍室と墓地と病院と、淫賣宿のやうなカフエーに圍まれた、この太子堂の家もあきあきしてしまつた。
「時に、明日はたけのこ飯にしないかね。」
「たけのこ盗みに行くか……。」
三人の男たちは路の向ふの、竹籔を背にしてゐる、床屋の二階の飯田さんをさそつて、裏の丘へたけのこ盗みに出掛けて行つた。
女達は街の灯を見たかつたけれど、あきらめて、太子堂の緣日を歩いた。
竹籔の小路に出した露店のカンテラの灯が噴水の樣に薫じてゐた。

六月×日

ほがらかな空なので、丘の上の絹のやうな緑を戀ひして、久し振りに、貧しい女と男は散歩に出る話をした。
鍵を締めて、一足おくれて出ると、どつちへ行つたものか、男の蔭は見えない。
焦々して、陽照りのはげしい丘の路を行つたり來たりしたが、隨分おかしな話である。
あざみの莖のやうに怒りたつた男は、私の背をはげしく突くと閉ざした家へはしつてしまつた。
「オイ！鍵を投げろッ！」
又か……私は泥棒猫のやうに、裏所からはいると、男はいきなり、たわしや茶碗を私の胸に投げつける。
あ、この瓢輕な粗忽者を、そんなにも貴方は憎いと云ふのか……
……私はしよんぼり井戸端に立つて、蒼い雲を見た。
右へ行く路が、左へまちがつたからつて、馬鹿だねえと云ふ一言ですむではないか。
私は自分の淋しい影を見てゐると、ふつと小學校時代に、自分の影を見ては空を見ると、その影が、空にもうつゝてゐるあの不思議な世界のあつた頃を思ひ出して、高々とした空を私は見上げた。
悲しい涙が湧きあふれて、私は地びたへしやがむと、カイロの水

囀りのやうな郷愁の唄をうたひたくなつた。

あゝ全世界はお父さんとお母さんでいつぱいなんだ。お父さんとお母さんの愛情が、唯一のものであると云ふ事を、私は生活にかまけて忘れてをりました。

前垂れを掛けたまゝ竹籔や、小川や洋館の横を通つて、だらだらと丘を降りると、ポッポッ！　ポッポッ！　蒸汽船のやうな音がする。

あゝ尾の道の海！私は海近いやうな錯覺をおこして、子供のやうに丘をかけ降りた。

そこは交番の横の工場のモーターが唸つてゐるきりで、がらんとした廣つぱ。

三宿の停留場に、しばし私は電車に乗る人のやうに立つてゐたが、お腹がすいて、めがまいそうだつた。

「貴女！隨分さつきから立つてゐらつしやいますが、何か御心配ごとでもあるのではありませんか。」

今さきから、ぢろぢろ私を見てゐた、二人の老婆が馴々しく近よると私の身體を四つの瞳で洗ふやうに見た。

笑ひながら涙をふりほどいてゐる私を連れて、この親切なお婆さんは、ゆるゆる歩きだすと、信仰の強さについて、足の曲つた人が歩けるやうになつたとか、悩みある人が、神の子として、元氣に生活に樂しさを感じるやうになつたとか、天理敎の話をしてくれた。

川添ひのその天理敎の本部は、いかにも涼しそうに庭に水が打つてあつて、紅葉の青葉が、塀の外にふきこぼれてゐた。

二人の婆さんは神前に額づくと、やがて両手を擴げて、異様な踊りを始めだした。

「お國はどちらでいらつしやいますか？」

白い着物をきた中年の男が、私にアンパンと茶をすゝめながら、私の佗しい姿を見た。

「別に國と云つて定まつたところはありませんけれど、原籍は鹿兒島縣東櫻島です。」

「ホウ…隨分遠いんですなあ…。」

私はもうたまらなくなつて、うまそうなアンパンを摘んで、一口嚙むと、案外固くつて、粉がポロポロ膝にこぼれ落ちていつた。

何もない。

何も考へる必要はない。

私はつと立つて神前に額づくと、プイと下駄をはいて表へ出てしまつた。

パン屑が蟲齒の洞穴の中で、ドンドンむれていつてもいゝ。只口の中に味覺があればいゝのだ。

家の前へ行くと、あの男と同じ様に固く玄關は口をつぐんでゐる。私は壺井さんの家へ行くと、はろばろと足を投げ出して横になつた。

「お宅に少しお米ありませんか？」

人のいゝ壺井さんの妻君もへこたれて、私のそばに横になると、一握の米を茶碗に入れたのを持つて、生きる事が厭になつてしまつたわと云ふ話になつてしまつた。

「たい子さんとこ、信州から米が來たつて云つてたから、あそこへ行つてみませう。」

「そりやあ、え〻なあ……。」
そばにゐた傳治さんの妻君は兩手を打つて子供のやうに喜ぶ。眞實いとしい人だ。

六月×日
久し振りに東京へ出る。
新潮社で加藤さんに會ふ。詩の稿料六圓戴く。
いつも目をつぶつて通る、神樂坂も今日は素的に樂しい街になつて、店の一ッ一ッを覗いて通る。

隣人とか
肉親とか
戀人とか
それが何であらう
生活の中の食ふと云ふ事が滿足でなかつたら
畫いた愛らしい花はしぼんでしまふ
快活に働きたいものだと思つても
惡口雜言の中に
私はいじらしい程小さくしやがんでゐる

兩手を高くさしあげてもみるが
こんなにも可愛いゝ女を裏切つて行く人間ばかりなのか
いつまでも人形を抱いて沈默つてゐる私ではない
お腹がすいても
職がなくつても
ウヲオーと叫んではならないんですよ
幸福な方が眉をおひそめになる。

血をふいて悶死したつて
ビクともする大地ではないんです
陳列箱に
ふかしたてのパンがあるが
私の知らない世間は何とまあ
ピアノのやうに輕やかに美しいのでせう

そこで始めて
神樣コンチクショウと吐鳴りたくなります。

長い電車に押されると、又何の慰さめもない家へ歸へらなければならない。
詩を書く事がたつた一つのよき慰さめ。
夜飯田さんとたい子さんが唄ひながら遊びに來る。
俺んとこの
あの美しい
ケッコ　ケッコ鳴くのが
ほしいんだらう……。
壺井さんとこで、豆御飯をもらふ。
六月×日
今夜は太子堂のおまつり。
家の縁から、前の廣場の相撲場がよく見えるので、皆集つて見る

「西ー前田河ア」

と云ふ行司の呼ぶ聲に、緣側に爪先立つてゐた私達はドッと吹き出して哄笑した。

知つた人の名前なんか呼ばれると、とてもおかしくて堪らない。

貧乏してゐると、皆友情以上に、自分をさらけ出して一つになつてしまふ。

みんなよく話をした。

怪談なんかに話が飛ぶと、たい子さんは千葉の海岸で見た人魂の話をよくした。

この人は山國の生れか非常に美しい肌をもつてゐる。やつぱり男に苦勞する人だ。

夜更け一時過ぎまで花弄をする。

六月×日

萩原さん遊びに來る。

酒は呑みたし金はなしで、敷蒲團一枚屑屋に壹圓五拾錢で賣る。

お米がたりなかつたので、うどんの玉をかつてみんなで食べる。

酒の代りに燒酎を買つて來る。

平手もて
吹雪にぬれし顏を拭く
反共產を主義とせりけり

酒呑めば鬼のごとくに靑かりし
大いなる顏よ
かなしき顏よ。

あゝ若人よーいゝぢやないか、いゝぢやないか、唄を知らない人達は、啄木を高唱してうどんをつゝき燒酎を呑んだ。

その夜、萩原さんを皆と一緒におくつて行つた夫が歸へつて來ると、蚊帳がないので、部屋を締め切つて、蚊取り線香をつけて寢につくと、

「オーイ起ろ起ろ!」ドタドタと大勢の足音がして、麥ふみのやうに地ひゞきが頭にひゞく。

「寢たふりをするなよお……。」

「起きてゐるんだらう。」

「起きないと火をつけるぞ!」

「オイ!大根を拔いて來たんだよ、うまいよ起きないかい……。」

飯田さんと萩原さんの聲が入りまぢつて聞へる。

私は笑ひながら沈默つてゐた。

七月×日

朝、寢床の中ですばらしい新聞を讀んだ。

元野子爵夫人が、不良少年少女の救濟をすると云ふので、圓滿な寫眞が新聞に載つてゐた。

あゝこんな人にでもすがつてみたなら、何とか、どうにか、自分の行く道が開けはしないかしら……私も少しは不良ぢみてゐるしまだ廿二だもの、不良少女か、私は元氣を出して飛びおきると、新聞に載つてゐる元野夫人の住所を切り拔いて私は麻布のそのお邸へ

出掛けて行つた。
折目がついてゐても浴衣は浴衣だけど、私は胸を空想で、いつぱいふくらませてゐた。
「パンおつくりになる、あの林さんでゐらつしやいますか？」
どういたしまして、パンを戴きに上りました林ですと心につぶやきながら、
「一寸おめにかゝりたいと思ひまして……。」
「そうですか、今愛國婦人會の方ですが、すぐお歸へりですから。」
女中さんに案内されて、六角のやうに突き出た窓ぎわのソファーに私は腰をかけて、美しい幽雅な庭にみいつてゐた。
蒼つぽいカーテンを通して、風までが高慢にふくらんではいつて來る。
「何う云ふ御用で……。」
やがてづんぐりした夫人は、蟬のやうに薄い黒い夏羽織を着てはいつて來た。
「あのお先きにお風呂をお召しになりませんか……。」
どうも大したものだ。私は不良少女だつて云ふ事が厭になつて夫が肺病で困つてゐますから、少し不良少年少女をお助けになるおあまりを戴きたいと云つた。
「新聞で何か書いたやうでしたが、ほんのさう云ふ事業にお手助けしてゐるきりで、お困りのやうでしたら、九段の婦人會の方へでもいらつして、仕事をなさつては……。」
程よく埃のやうに外にほうり出されると、彼女が、眉をさかだてなぜあの様な者を上へ上げましたッ！と女中を叱つてゐるであらう事を思ひ浮べて、ツバキをひつかけてやりたくなつた。
ヘエー何が慈善だよ、何が公共事業だよだ。
夕方になると、朝から何も食べない二人は暗い部屋にうづくまつて、當のない原稿を書いた。
「ねえ、洋食を食べない……。」
「ヘエー」
「カレーライス、カツライス、それともビフテキ？」
「金があるのかい？」
「うん、だつて背に腹はかへられないでせう、だから晩に洋食を取れば、明日の朝まで金を取りにこないでせう」
始めて肉の匂をかぎ、ジユンジユンした油をなめると、めまひがしそうに嬉しくなる。
一口位ひは殘しておかなくちや變よ、腹が少し豐かになると、生きかへつたやうに私達は思想に靑い芽をふかす。
全く鼠も出ない有様なんだから――。
蜜柑箱の机に凭れて童話をかき始める。
外は雨の音、玉川の方で、ポンポン絕へ間なく鐵砲を打つ音がする。深夜だと云ふのに、元氣のいゝ事だ。
だが、いつまでも、こんな蟲みたいな生活が續くのかしら、うつむいて子供の無邪氣な物語りを書いてゐると。つい目頭が熱くなる
いゝイビツな男とニンシキフソクの女では、一生たつたとて、白いおまんまが食へそうもないね。



女人聯盟の發表、その他

——社會時評——

神近市子

一、議會終了す

第五十六議會は、三月二十五日をもつて終了した。

今度の議會は、普選が實施されてからの最初の通常議會であつたこと、大資本閥の背景をもつ政友會が買收と威壓とによつて得た多數を擁して可なり露骨な反動政策を行なつて國民全部の反感を買つた事、政權をめぐつて既成政黨間に醜くい鬪爭が繰返しされた事、所謂政局が安定せず各種重要の法案が多くは審議未了の運命に立至つたこと等々によつて、少なからず國民一般の政治的關心を買つた。

ことに婦人にとつては、公民權が國民全部の支持を得て衆議院に於いては今一と押しといふところまで漕ぎつけ乍ら、委員會で否決されて何時とも知れぬ將來に保留された事、議會に於て無產階級運動の代表者であり、その前衛を承つてゐた山本代議士が反動團體の刺客の爲めにたほれたこと、會期の終りになつて無產階級の政治的進出を阻まんが爲めに立案された小選擧區制案が提出され、それがいかに辛うじて喰ひ止められたか——これらわたくし共の生活に密接な關係のある大小幾多の出來事は、今日の社會組織の表裏を瞭出して私共の政治意識の進展に實に好個の實物教育となつてくれた。

かうして、政治が通俗的の興味をまし、國民一般が何等かの意味でそれに關心をもつやうになつたことは、國民の文化がある程度まで全部的に行わたり又社會の教育者として、新聞雜誌が愈々完全にその職能を發揮した結果も預つてゐることは無論のことである。しかしそれより以上にそれは今日の社會的機構が大多數の民衆にとつていかにたへがたく忍びがたきものとなり、その事が自然に民衆の眼を政治に向けしめ始めたかといふことの證據でもある。

民衆のかゝる重大な覺醒期にあつて、田中內閣が存在してゐるといふことには、相當の意義がある。人生では最惡の教師が結果に於いて最良の教育をしてゐることが屢々見出される。最惡の政治も民衆の獨立心と反抗心とを刺戟して、社會運動をより深刻により徹底的たらしめる教育者であることがある。

田中内閣の下で社會運動がより盛んでありより深刻に發展しつつある事は事實である。何人もその事實は否定することはできない。無智、無能、無神經で、目的の爲めには手段を選ばぬ豪膽さを有してゐる田中内閣は、民衆の苦痛である。けれどそれがある爲に今日の政治と政治家の生活とを民衆によりよく暴露し、民衆がそれによつて政治意識に必要な刺戟をうけるとすれば、この内閣は又民衆にとつてはなくてはならぬ貴重な敎程であつた。

二、濟南事件の解決

議會が終了して四日後の二十九日には、濟南事件が解決した。日支兩國の代表者の間にとり交はされた交換文書が發表された。

この文書は實際に兩國間にとり交はされたもの丶全部ではなく、その大部分は何故か秘密にされてその一部が發表されたに過ぎないのださうである。そして民政黨あたりではそれ、もつて屈辱協定であるとして大いに反對の氣勢をあげてゐるのであるが、國民一般がその煽動にのらず平靜であることは、これ迄の支那を中心とする問題が起つた多くの場合とは大變異つてゐて殆んど隔世の感がある。

濟南事件はどうして起つたか？　支那の國民革命が進展して波瀾が東三省に及ばんとするのを見た××は、火事泥式にそのドサクサまぎれに東三省に關して有利な條件を獲得しやうとして、居留民保護の名の下に國をあげての反對を押しきつて出兵したのであつた。

しかし乍ら、豫期に反して滿洲における日本の威令は少しも行はれず却つて獨在自主の意氣に燃へつゝある國民政府の新人たちに一歩を制しられた感があつた。いたるところに排日の氣勢はあがり日貨を停滯して、日本の不景氣を深酷なものにした。

加ふるに日本の民衆は、日清日露の戰を戰つた民衆ではなかつた。彼等は國家内外の事情についてその當時よりはるかに多くを知り、昔のやうに政府乃至は支配階級のするところを無批評に又無感情に看過する國民ではなかつた。反對に、無名の出兵に對しては手ひどく非難し、卽時撤兵を主張してやまなかつた。

かうして内外に信を失ひ鼎の輕重を問はれてしまつた今となつて、政府は撤兵するより外にとるべき策はなかつた。そしてかくして約一億の國家の金を全く無要に浪費した結果、世界の前に殆んど凡てを讓歩してやうやく今日の協定を見たのであつた。

民政黨が政友會を非難することは、それ故に理由あることである。その點で民意を代表してゐると云つて差支へないのであるが、しかしそれが出兵の動機とその目的とについては口を緘して、今回の協定そのものにケチをつけて國民の感情を反政府的なものにしてやらうと企てゝゐることは、驚くべき時代錯誤的な考へ方で、同時に又最も蟲のいゝ考へ方である。

三、公娼廢止案について

今日まで、社會政策に類する議案が議會に呈出されそれが一般に論議されるといふことは極めて稀れであつた。

今回は普選による云はゞ最初の通常議會である爲めであつたのか、又は益々加はる生活の不安が民衆の自覺を促がし世情不安の樣相がそれを必要とした爲めであるのか、今年はそれに類する法案議案の幾つかの提出を見た。

その中で公娼廢止の議案は　社民黨の安部磯雄その他の諸氏によつて提出されたものである。公娼といはず私娼といはず、賣笑制度

が人間の社會から驅逐されるべきであることは云ふを待たない。
公娼廢止運動の最初の着手者は、矯風會と廓清會とであつた。この二つの團體はこれまでは請願運動の形式によつてこの運動を長く可なり執拗につゞけて來たのであつたが、その運動の熱心な支持者である安部氏が議席を得られた今日、この案が議案として現はれ、その説明者として安部氏を議會の壇上に見ることは、まことに當然なことゝ云はなければならない。



市政淨化デー

四、女工の監禁

職工が要求を提出して目下爭議中の東京モスリンが、女工が該爭議に參加することを恐れて女工全部を寄宿舍に拘禁してゐることは、いつもくり返される『惡』ではあるが、しかし看過することはできない人道問題である。工場内の寄宿舍に於ける女工たちの慘めな生活については、わたくしがこゝに改めていふ迄もない。

女工たちは、募集員の手によつて農村から連れ來られると監獄部屋も同樣な寄宿舍に投り込まれ社會とは絕對に隔離され、そこで搾取虐待の限りをつくされてゐるのは世間周知のことである。しかもさうした彼女たちの爲めに世のいかなる慈善家篤志家が、彼女たちの生活を改善しやうとするどんな努力をしたことがあらうか？かうした女工たちの生活を當然のものとして疑ふことを知らないこの人々の無神經さは、又驚嘆にたへたものである。

女工たちの寄宿舍生活が、食住ともに慘めであることは右の通りである。その事については時と機會を捕へて抗議されなくてはならないのであるが、それと同時に彼女たちの行動を束縛し彼女たちを全體として使用する會社の意志のまゝにしやうとする企圖については、又嚴重な抗議がなされなくてはならぬ。

個人の理由なき監禁は、今日でも警官に發見され次第徴罰に附せられることになつてゐる。しかも團體としてのかゝる監禁が公然と世に行はれ、何人もこれを問題としない程に普通なことになつてゐることは、考へて見ると不思議である。女工たちは前に云つたやうに社會事業家や慈善家によつては見はなされてゐる。或は故意に見過しにされてゐる。彼女たちを救ひ出すのは、彼女たちの仲間であ

るプロレタリヤのみである。女工たちは仲間の勞働者と協力して階級としての自己を解放するより外に、救はれることはできない。

　しかも嘗ては岡谷に於けるが如くに今は又東京モスリンに於けるが如くに、その協力すら全部的に阻まれてゐるのである。或は今後は更に多く阻まれる事だらう。彼女たちは今日のまゝでは自分たちの手によつて自己を解放すべき行動をとる事はできないのである。

　社會主義婦人はいかに多くを自負してゐても、結局これら無產階級婦人の自己解放の實行に關しては反對に指導されるより外はないのである。彼女たちに先づ出來ることは、今日の上述のごとき無道殘虐な制度について抗爭して、少くも勞働婦人をしてその自己解放運動にとりかゝることを得せしめることではないであらうか。

五、女人聯盟について

　女人藝術社が今回本誌の讀者を中心とする女人聯盟なる組織を持たんとしてゐることは、わたくしにとつては種々の意味から興味あることである。わたくしは、よほど前からかうした緩漫な組織でもそれを持つことは必要であることを考へて來た。

　わたくし共日本婦人が後れてゐることの一つは、團體的な訓練を全然缺いてゐることである。團體的訓練は、欲すればすぐに得られる經驗ではない。それは長い間の雜務と働きかけの努力によりて始めて得られるものである。そしてその一步が今こゝから始められやうとしてゐるのである。前途の多難と多事とは想像に餘りがある。

　それにしても、本誌が創刊當時の新鮮な魅力を失つてしまつたことについて、遺憾に思ふものは恐らくわたくしのみではあるまい。戀愛に關する談義も一回は相當に意義もあり識者の興味も引くであらう。しかも言ふべきこと書くべきことの多くある時代に、戀愛論のくり返しのみに熱中するといふことは、わたくしは不贊成である。

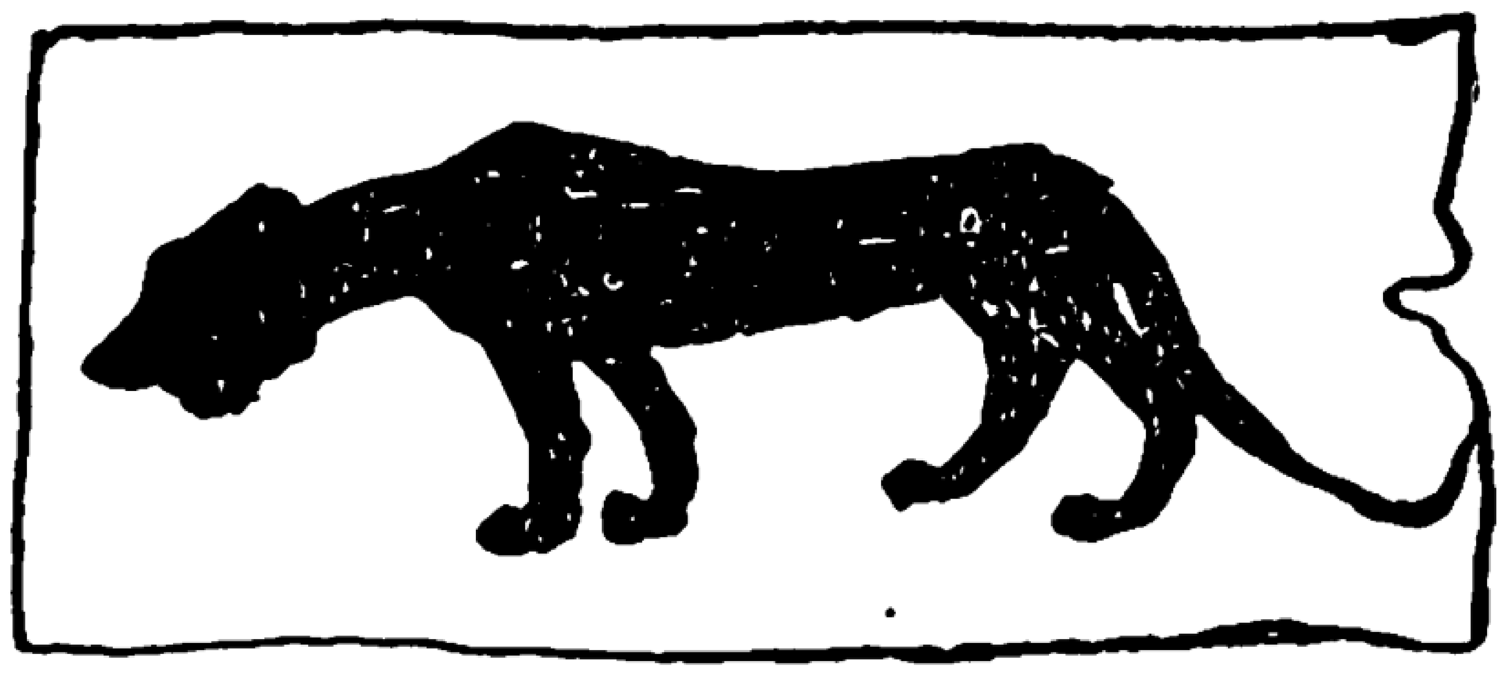
　いふ迄もなく、この種の雜誌の經營は困難なものであらう。わたくしにも、それは想像できないことはない。その爲めにのみ私共は雜誌の變態的發展に對しても甚しい批評はさけて來たつもりである。

　けれどもそれが一旦緩漫ではあつても何等かの形で組織に類したものをもつことゝなり、雜誌が幾分でも指導的なものとなる場合は、その責任はまことに重大なものとなる。わたくし共が、今日この點について本誌創刊以來幾分でも關係を持ち來つた人々の發言と批評とを求めたいと思ふのはその故である。

　長谷川氏が本誌を創刊された時、『賣る爲め』にこれを計畫されたのでなかつたことは事實である。出して見て又『賣りたい』と考へられたことも當然であり又是非さうなくてはならないのであるが、しかもその爲めに最初の企圖を見失つてしまふやうなことがあるとすれば、それは餘りに不見識だと云はなければならない。

　現在のやうに複雜な世相になつては、狹い正義の白道は仲々に發見しがたく、反對に過つた反動の曠野はあらゆる誘惑をもつてわたくし共の前にある。わたくしが最も恐れるのは、本誌並びにそのつくる聯盟がその誘惑にまけて豫期せずして反動的な役割をつとめることになりはしないかといふことである。

　雜誌を賣るといふことが、必ずしもその質を低下することを强要しないといふことは、『戰旗』『文線』等の發展を見れば明らかである。わたくしは本誌が今回の發展を機として、發刊當時の軌道の上に立歸るべき努力をなされんことを心から希望する。



ちか子

深夜作業は如何に婦人勞働者を虐げたか

永島暢子

一、深夜作業廢止まで

燦亂たるローマの文化は、奴隷の血と肉との慘苦の上に咲き出た毒花であつた如く、資本主義制度下に於ける近代文明も亦、人による人の搾取、プロレタリヤの膏血の結晶ゝ以て購ひ得たブルヂョアの禮讃の文化であつた。東洋の一小島として、僅に世界地圖の一地點を占むるに過ぎなかつた我が國の、明治維新以後、異常の經濟的發展を遂げ、一躍所謂世界列强に伍して强國の名をかち得た歷史は、やがてプロレタリヤの血と涙の歷史、資本家の飽くなき搾取の歷史に他ならない。我國富を背負ひ、輸出貿易の約八割を占むる紡績産業も亦、資本家の手腕と機械の偉大さに依るとは、支配階級の巧みなる僞瞞であつて、事實は、かよわき婦人勞働者の骨肉を涸らす事によつてのみ繁榮を齎らした産業である。日歩はつくが夜歩はつかぬ、濡れ手で粟をつかみとる事には拔け目のない資本家の且、極度に勞働日を延長し利潤を得ん爲に、深夜作業を行ふは、資本主義勃興時代には、いづれの國にても見られる現象であるが、我が國に於ても夙に深夜作業が、紡績工業の繁榮を握る唯一の鍵とされてゐた。けれど、午後十時より午前四時までに至る深夜作業の弊害が、遠く明治十五年頃、工場法が審議され出した頃から問題となり、度々その廢止案が討議されたのであつたが、當時勞働者の力弱く、資本の上向過程を辿りつゝあつた我産業の、社會的にも政治的にも、經濟的にも資本家の心のまゝの搾取にさらされつゝあつたその時代に於ては、産業振興の美名の下に、それ等はいつも漫談ほどの效果もなく、幾多の勞働者は産業の下積みとなつて死んで行つた。しかも明治四十四年の議會を通過するまで三十年の歲月を閲し、資本家階級の意志によつて、骨を拔かれ精神を拔かれ、殆ど白痴化された工場法が、實施されるまでにも尙且五年の月日を要し、しかも少年及勞働者の深夜業は、大正二十年までの存續を留保されたのであつた。けれど漸次勃興し來れる勞働運動と、國際關係等より來れる外部的牽制、並に資本の發展に伴ふ內部的矛盾は、大正十二年に工場法を

改正せしむろ手段をとらしめ、深夜作業も、増錘準備の期間として三ケ年を附して廢止の方向に進んだが、それはそのまゝ空しく高閣に埋もれ、十五年に至つて漸くその改正の效力を生じたので、即ち今年六月三十日限り、規定によつて保護勞働者の深夜作業が廢止されるに至つたのである。

かよわき婦人勞働者の、死へまでの勞働によつて、世界市場に乘り出した我紡績産業の、その隆盛は、必然的に他國との市場獲得の衝突を來し、英國、印度紡績業者より、殊更に劣惡なる勞働條件にて生産したる日本紡績の世界市場に王座せんとするを排撃されたりした。また資本家の讓歩と、勞働者の自覺とに俟つて資本主義を維持せんとするかの國際勞働局にても、大正八年に少年及婦人勞働者の深夜業廢止の決議をなし、我國政府及資本家も眞先きに賛意を表しながら、決行せず、爲に各國より猛烈なる批難を買ひ、今後の世界市場への發展も危まれた等の事實もある。かうした種々の關係は、ブルヂョア自由主義者、人道主義者の間に、或は一等國としての體面を保つ上から、或は人道的同情心から同情視されるやうになり、廢止の意見を散見する樣になつた。昭和二年國際勞働協會婦人委員會にても、それの即時廢止が決議され、資本家や社會局筋二三の人達に多少の刺戟を與へたかの觀があつたが、委員會自身、大衆的のものではなく、且實行運動の熱意がない爲に、それも亦卑なる決議に終つてしまつた。がしかし深夜作業は、決して國家體面の上から、美くしき袖にて拭ふ同情の涙から、感傷的語調を以て解決さるべきものではない。深夜作業に命を以て直面しつゝある勞働者の、その廢止によつて、自らの權利を獲得する要求を要求として戰ふ鬪爭によつてのみ、完全なる廢止がかち得られるのである。

勞働婦人自身の要求運動も勿論あつた。日本勞働總同盟が、先に關東紡績勞働組合と共に、一、保健上より見たる夜業の弊害、二、賃銀及生活上より見たる夜業問題、三、風紀德操と夜業禁止、四、夜業の必然的結果としての寄宿舍制度の弊害、五、國際信義と夜業禁止、六、國家の産業政策より見たる夜業禁止等の理由を以て廢止請願運動を試みて以來、各組合や各無産婦人團體は、演說會、請願運動、街頭署名等の示威運動をなしたのであつたが、民衆の聲に對しては極度に難調であり、恩惠的政策によらざれば、國家の美風は保たれずとする支配階級の意志と、紡績業の婦人勞働者は、事業の性質上十四五歲より二十歲位までの比較的年少者であり、且プロレタリア化されざる農村婦人が多くその九割までが寄宿舍に起居して、その日常を工場側に監督拘束され組合への組織力も弱く、爲に一致せる勞働大衆としての要求を大になし得ず、また組合指導者の方針も、勞働者の要求を勞働者の中への滲透をはかるより、支配階級への叩頭運動に重きをおいた誤まてる運動方法の爲に、深夜作業は規定の如く、來る六月三十日まで荏苒放置されたといつてもよいであらう。

二、紡績業に働く婦人の健康

利潤の前には、一切の犧牲を惜まざる資本主義的産業の、肉彈としての勞働者の資格はまづ第一に健康である事を要する。されば女工募集に際しては、工場の細心の注意を拂ふ事甚しく、應募者は居村に於て一度身體檢査をされ、入社の際は再檢査に合格して初めて採用される嚴格さであるのだが、各工場に於て、女工の罹病率は實に夥しい。曾つては顧みられなかつた勞働者の健康狀態は、「衞生事業の費用は最も有效なる投資である」との巧妙なる資本家の態度

によつて幾分留意されるやうになつたが、岡山縣下の某工場の例にとつて見ると(大正十五年度調べ)一ヶ月平均職工男二百三十五名、女七百四名中一ヶ月受診者男八十一名女二百五十三名の例がある程しかく不健康の狀態にある。殊に勞働者病として名のある所の感冒、消化器病、眼疾、脚氣病はまた紡績勞働者をも惱ます病氣であつて、呼吸器病は、女工病との異名のある程、猛威を極め、鹿兒島縣下の或地方にあつては、女工は必ず肺結核にかゝり命を失ふものとて怪しまぬ程であるといふ事實さへある。さきの岡山縣下某工場の統計を手にしても、感冒の罹病率千分比二〇三・二あり、東京府下某製麻會社にては(十四年一月調)女工八百四名中患者百七名を出し、七八月の酷暑の候にも一日必ず二三名の罹病者を出してゐる。内務省社會局調査によりては女工の感冒罹病者の約八割七分は紡績勞働婦人が占めてゐるが、溫度の調節の宜しからざる中に過度の勞働を强ひられ、身體が衰弱してゐるので、感冒の罹病者絶ゆる事なく、一二月には罹病者最も多く、漸次衰へ七八月の勞働の辛き時期にまた上昇を辿る樣である。また消化器病は、女工の疾病患者合計七萬四千六百五十七名中、その病氣に罹つたのは一萬七千三百八十八名の多數を示し、織物工場消化器病患者一萬四千九百八十五名中紡績工業に從事する者が三千四百三十二名を示してゐる。(大正十三年度)これも一工場の例について見るならば、前の岡山縣下の某工場では、千分比二九・八より九八・一の罹病率を示し、感冒にしろ、消化器病にしろ晝勤者より夜勤者に罹病者が一割以上は多い。以上は單に婦人勞働紡績業者の健康を想像する爲に掲げたのであるが、今手許にある統計のうちにて最も簡單に女工は病氣に對して如何なる狀態におかれてゐるかを掲げる。大正十二年度社會局調査によるものにて、職工五百人以上の工場の疾病、傷害の統計であり、頻度は千人に對して表はしてゐるのである。

		男	女	計
實數	傷害	20,542	5,698	26,240
	疾病	39,009	135,239	174,248
	合計	59,551	140,937	200,488
千分比	傷害	344.9	40.4	130.9
	疾病	655.1	959.9	869.1
	合計	1000.0	1000.0	1000.0

其他眼病にしても脚氣病にしても紡績女工は罹病者多く、且その治癒率の惡いのは、いつの統計でも見られる所であるが、私達は更に呼吸器病、結核に對して考察を加へて見よう。

巷間傳へられる所の女工の結核については資本家は餘りに世間は敏感であると笑つてゐる。然し大正五年度第一回の工場監督官年報を見るに、工場法施行により各工場にて千名の淘汰を行つたが、幼年工の他は全部病人であつた。愛知縣下に於ては、解雇者三十九名中肺結核又はその疑ひあるもの三十名、肋膜一名であつたのがある。これを暫く往時の昔語とするも、十二年度社會局調査によれば、全工業勞働者の結核患者數一千七百十八名中、紡績工場勞働者は九百九十三名を占めてゐる。呼吸器病にても、患者總數三萬三千七百二十四名のうち、紡績勞働に從事する者二萬一千五百三十三名、織物女工四千五百九十二名にて、總數の約八割は殆ど紡績勞働婦人が占めて居り且、女工の罹病率は男工の七倍半に當るといふ。

常になる樣で常にならないのは統計である。統計の任に當る人の如何によつて、出來上つた統計に差異を生じて來る事はいふまでもないが、殊に我が國の、資本家の鼻息をうかゞふて彼等に對して不

利な事は發表せぬ官廳の統計であり、勞働者の命を意に解せざる資本家の申請を基礎としたものであつて見れば、充分の信用はおけないのであるが、一般を推察する資料とはなるであらう。

歸村職工より調査する事は、在工場者について見るよりも、一層勞働者の健康狀態が判然とするのであるが、名古屋市の某紡績工場の工場長はいつてゐる。「最近は昔の樣に病氣が重るまで働かせる事は稀だ、少し結核の疑ひがあると早期に歸す樣にしてゐる。そのまま死ぬのも多いが、また治つて働きに來るのもある。」そこで大正十二年度社會局調査による疾病による解雇者の狀態を見よう。卽ち解雇されたもののうちに治癒した者七千二百七十二名五八・九%は治癒し、一千六百五十七名一三%は未治癒者であり、二千六百七十九名、二一・七%は死亡し、七百二名六・三%は結果不明である。尙石原修博士のを引用する。「田舍の村落から募集されるもので、調べの出來たのに一府二十七縣であり、まづ全國で二十萬人位は、毎年工場に出稼ぎする。二十萬人として計算すれば、そのうち十二萬人は出た切り歸つて來ず、殘りの八萬人は歸る事になつてゐるが、歸村者のうち一人は必ず病人であり、而かも重病である。まづ八萬人のうち一萬三千人は病人であり、そのうちの四分の一卽ち三千人は皆結核に罹つてゐるともいへる。」三重縣に於ても出稼ぎ職工の病氣による歸村者のうち男の約三倍半女は病氣に罹つてゐる事を十二年度の工場監督官年報で發表してゐる。

この狀態は何によつて招來されたか。凡そ健康の良不良、若しくは衛生上適當不適當を考察するには、結核に對する罹病率、死亡率を以て檢察するを以て捷徑とするとは岡實氏の言であるが之を以て見ても紡績勞働は如何にかよわき婦人勞働者の肉體を蝕みつゝあるかを推察する事が出來るであらう。

三、深夜作業と健康との關係

勞働科學研究所の石川知福氏は、深夜の勞働は晝間勞働に比較して、身體機能、少なくも體溫調節機能が衰退してゐるために身體の抵抗力弱く、諸種の病氣に犯され易い事を明言した。農商務省調査によるといふ、某紡績工場寄宿舍女工七十人、社宅幼年女工十一人につき夜業晝業を通じて十二日檢査した所、夜業七日間に於て一人平均百七十匁の體重を減少し、晝業五日間に六十九匁回復し、尙百一匁を應償せざるうちに再び夜業に入るといふ、深夜作業の身體に及ぼす影響はあまりにも有名である。それ故に、或人達は、それなら女工は二年とは命は持つまいと嘲笑を以て答へるのであるが、宇多弘道氏もかゝる實驗に疑ひを持ち、夏季の候に五十三名について檢査した所、夜業一週間後の體重一人平均百十三匁を減じ、晝間にて回復し得ざる量、百一匁とほゞ商工務省統計と同じ結果を得たのであつた。尙更に秋季をえらんで再檢査を行つた所、夜業一週間後の體重の減量九十一匁三分、晝業一週間後は完全に應償したる上尙十五匁の增量を見たのであつた。こゝに於て夜業の弊害は、季節によつて異る事を實證したのである。（勞働科學研究一ノ二）やはり勞働科學研究所の八木高次氏は、大正十一年八月三日より二十一日まで、連續十九日間に勞働條件のほゞ同一なる總部寄宿舍女工五十三名を選んで、一日平均氣溫攝氏二九・七度、濕度八〇%の作業場にて檢査した。初め晝業三日間次に半交替　（一晝夜）次に夜業七日間、交替日及休養日（二晝夜）次に晝業五日間交替日及夜業第一晝間に及ぶといふ順序である。その結果を十人平均に於て見た所によると、晝業

半ば、即ち檢査第一日目にてはかつた體重より、第五、第六日目頃には幾分減り、半交替日(夜業第一日)には稍上昇し、以後三日間即ち夜業前半に逐日著明に減少し乍ら第四日目に至つて極度に減少する。それが五日目には少量を急激に増加し、翌日また約同量を減じて第四日目と同じ體重を保ち、最後の第七日目に又増量して、それから交替日を經て晝業の半ばまで増加の傾向を保つて行く。そして晝業二日に於て最高頂に達し、また漸次減量に赴く即ち、夜業の中央に波谷を生じ、晝業の中頃を波頂とする週期の大なる一波狀線と、晝業の終りに波谷を生じ、交替日、又は夜業第一日の晝間を波頂とする週期の小なる二つの波狀曲線を描くのが普通の樣である。夜業だといつても、初めより終りまで體重が減つて行くのでもなく、晝業期間を通じて増してのみ行くのではない。而して夜業時の最低量と、晝業時の最高量との差は、約一千瓦あり、その應償の程度は、各人の體質、食物環境によつて一樣ではなく、時には完全に應償したる上尚増加し、また充分應償しないうちに夜業に入る人も少ないけれど、概して發育旺盛な年少者は夜業の影響を最も強く受くると同時に、晝業に入るに及んで囘復も亦速であり、成年に達した勞働婦人にありては、夜業の影響を受くる事も緩漫であるが、囘復も完全に行はれる事が少ない。また作業の影響は肥滿者は最も強く感じ、春秋は比較的好調である事が實證された。然らば、晝業のみに從ふ時はどうであるか。之も八木氏の研究によると、綛部女工にて二ケ月前より晝業のみに從事したる者六名について、ほゞ同じ條件の下に檢査したのであつた。而して前週最終に四萬二千七百瓦あつた體重は、交替日に至つて約三百瓦増加するが、作業第一日には二十瓦を減少し、翌日には四十瓦を増加し第三日目には、百三十五瓦を減少してゐる。以後二日間に百十瓦、五十瓦た増加して作業週期は終り、次の交替日には、二百七十瓦の増加を見、第一の交替日の體重に比して三百十五瓦高いといふ事になる。之は決して晝業の勞働條件のよいといふ證左にはならず、體重の増量は主として交替日に於てなさるゝ事も考へねばならぬが、晝夜交替作業に比しては、良好の波狀曲線を描いてゐるといふ事が出來る。

人間の生きんとする本能は、何にも増して強い。嘗ぼつとして起る無產階級運動は、正しく強く生きんとする希望への勇躍であり、荒れ狂ふ反動勢力も亦ブルヂョア斷末魔の呻きにすぎない。生命の灯の弱り行く時には、あらゆる力を驅りたてゝそれの維持に努むる事は、この深夜作業に影響されたる體重の増減の描く曲線によつても、あまりにも悲壯にまざ〳〵と見る事が出來やう。しかし問題を應償が完全に行はれたとてそれで止めてはならない。紡績產業に働く勞働婦人は、決して成長した身體の持ち主ではない。これから長き春秋を約束されたる十四五歳より二十歳位までの發育期にある人達が多いのだ。この發育期にある人達を、深夜作業は如何に蝕んだか。如何なる結果を生んでゐるか、本邦學生標準體重及身長と比較して見よう。

職名 種類	年齢	十二歳	十五歳	十七歳	二十歳
學生	身長	一三〇	一四六	一四九	一五〇
	體重	二七・二九	四〇・〇七	四七・二一	五〇・三八
紡績	身長	一四〇	一三八	一四三	一四四
	體重	四五・八	三六・七	四五・三	四六・〇
織物	身長	一三七	一四〇	一四二	一四四
	體重	三四・〇	三九・五	四四・九	四八・〇

（大正十三年度栃木縣調査單位身長糎體重瓩）

幼少の頃には寧ろ立ち優つてゐた健康が、工場に働く事によつて身心の發育を防げられ年を重ぬるにつれて、發育不良を示す勞働婦人に反し、欲するまゝの日光と睡眠と、榮養と休養とを得る事の出來る學生との比較を見た時に、私達は押へがたき憤りを感じる。學生階級、それは資本主義社會に於ては、有産階級の子弟と同異語である。社會制度の缺陷は斯くも無産階級にとつては切實なる問題であるのだ。

四、深夜業廢止と勞働婦人

かくも利潤の蓄積には、勞働者の血肉を惜しまなかつた資本家も、深夜業廢止の期間に先立つて、大部分の實行を見ようとしてゐる。資本家階級は人道的に目覺めたか？と思つたら鬼に笑はれる。從來紡績業者の夜業廢止反對の唯一の口實は、生産の減退を防ぐための準備として、或期間繼續する事であつた。しかしこの數年來は消費方面は稀に見るの不況にあり、輸出方面も亦振はず、二割三分の繰短をなしつゝあつた折柄とて深夜作業を廢止したる工場には、一割五分の繰短が緩和される關係上廢止が工場にとつて有利であり、且一般に增錘計畫にあるに反し、消費、輸出方面に活潑に行はれず供給過多が豫想され、また〳〵七月以後繰短が決議されはしないかと見られてゐる現在の狀態であるので、深夜業廢止は、少しも資本家にとつては傷手ではないのである。

然るに資本家は、勞働時間の短縮を口實とし、卽ち之まで十時間乃至十二時間の勞働時間だつたのが、八時間半の勞働時間となさゞるを得ない規定なので、賃銀の低下、並に産業合理化による勞働者の整理、勞働條件の改惡を以て答へやうとしてゐる、例へば東洋紡績四貫島並に三軒家工場は、一、日給者の賃銀引き下げ、二、晝学門工の時間延長、三、交替日を少なくする、四、請負の日收を減らす等を實行しやうとし、また長崎紡績・大日本紡尼ヶ崎工場では、受負賃銀二割減で挑戰して來た。而して一方機械の改良を企てると共に、大日本紡大垣工場の如く一萬錘當り使用人員は平均四百十八人であつたのが、二月一日深夜業廢止後は平均三百十三人九に減少せしめ、勞働者の勞働を苛酷ならしめてゐる。

殊にはまた常時十人以上の使用者なく、工場法を適用されざる、小工場に働く勞働婦人の虐使に對してはより一層の看過は許されない。この時に當つて勞働者並に勞働組合は何を爲すべきか。國威發揚、産業振興の美名に惑はされて、支配階級にのみ利潤を貢ぐる事を斷乎として拒否しなければならぬ。最近は、行き詰れる日本資本主義は狂暴に反動化して、一切の被壓迫階級の要望を押へつけやうとしてゐる。昨今起れる大小の爭議は、彈壓の爲に不滿に充ちたる解決を餘儀なくされ、振ひ立つ勇敢なる勞働者は、生存を脅かされる迫害をうけてゐる。いかに右翼勞働組合が、合理的解決、合法的運動と自惚れたとて、資本家の懷を少しでも脅やかした時には、彈壓の魔手が美事に下る事は、右翼勞働組合指導の爭議でも知る事が出來る。勞働組合は深夜作業廢止に先立ち左の要求を揭げて一齊に果敢に闘爭の火蓋をきらねばならぬ。

一、賃銀低下反對、二、徹底的工場法の改正、三、解雇反對、四、八時間勞働の獲得、五、解雇手當、最低賃銀法の制定、六、同一勞働による同一賃銀の獲得、七、團結權、罷業權の確立、

（二九、四、三）

下町行脚 淺草

K―M―H

どつかへ行きたい、どつかへ行きたい、どつかへ行きたいで、集つた連中三人、すなはち姦しい。だがMもHもKもおとなしい事この上もなく、ほがらかに、まだ寒いと云ふのに、たうたうたらり、向つたのは淺草、Mも Kも、「肩を張らなくてい丶われー。」(H)

淺草の觀音樣には相變らず鳩ぽつぽが日向ぼつこして御利生願ひの慾ばり連がうぢやうぢや。何年振りかで來てみたら露店商人がやモダン坊連が來たよ。といつた。淺草に洋服が鬼門とは初めてしつた。水族館の木馬に乘りたかつたが身體の大きなKが斷られるから嫌やだーと悲鳴を上げるので止した。Kの身體が大きすぎるから惡いんだよ。(M)

池のはたで乞食の浪花節の樣な演說の樣なものを、一ぱいたかつてゐる人の肩ごしに見て、そしてきいてたら子供の木馬に乘つても叱られない位小さい二人がふんがいしてはやくいきませうよそんなものはつまんない、そこでK一人てえばつてエヘン(K)

花 敷の前まで來ると「アラー一寸」Hは肩をつかまれると、すつかり逆上して狂犬到來かと小さい體のピンカツさをしめすのは此時と逃げ出す。(H)

近眼で何を見ても美しく見えるところから

日本橋 ―2―

時雨

角の荒物屋が佐野吾八さんの代にならないずつと前――私たちまだ宇宙にブヨ〳〵魂が漂つてゐた時代――そこは八人藝の〇〇齊といふ名人が居たのださうで、上げ板を叩いて「番頭さん熱いよ」とうめ湯をたのんだり、小唄をうたつたりすると、どうしても洗湯の隣りに住んでる氣がしたり、赤兒が生れる泣聲に驚かされたりしたと祖母がはなしてくれた。

この祖母が、八十八の春、死ぬ三日ばかり前まで、日髮日風呂だつた。さういふと大變おしやれに聞えるが、年寄の居るあはれつぽさや汚ならしさがすこしもなく、おかげで家のなかはすがやかだつた。瘦せてはゐたが色白な、背の高い女で、黑じゆすの細い帶を前帶に結んでゐた。小さいおちよこで二ッお酒をのんで、田所町の和田平か、小傳馬町三丁目の大和田の鰻の中串を二ッ食べるのがお定りだつた。

祖母のお化粧部屋は藏の二階だつた。階下は美しい座敷になつてゐたが、二階は庭の方の窓によせて疊一疊の明りとりの格子がとつてあり、大長持やたんすその他の小引出しのあるもので天井迄一ぱいだつた。中央の疊に緋毛氈を敷き、古風な金の丸鏡の鏡台が据てあつた。

三階の棟柱には、彼女の夫の若かつた時の手跡で、――安政三年長谷川卯兵衛建之――と美事な墨色を殘してゐる。その下で八十の彼女は日毎に、六ッ折りの裾に繪をかいた障

詩人になつたかどうか知らないが、どんなおつかないものが來てもHはすまし込んで、何よう？　近眼でないKとMはお交際いが大變だ。お酒も呑まないうちに威張るない！（M）

M、Kとが右へにげればHはすまして左のこわいもののゐる方へむかつていとも、ピンカツに逃げだす。後をふりむくのもこわくヒイヒイ云つてゐるのにおひついたH、一體何なのよそんなにはしつていやな人達ねえ—に貴ゝは何のために逃げたのときけば、あらあんた達がこわいひい一つて云ふからこわいんだと思つてよに口あんぐり。（K）

兎に角、三人共憂うつになつて、水族館のメリゴーラウンドを見てゐたが、このまゝ歸へるのも變だし、Hは見當がつかないので、MとKに腹をこしらへさせれば、元氣になるだらうと、Hが酒を樂しみにとつておきの壽司屋、都すしに行く、たいまい九拾錢、う、おゝ安う……二階に上つてこれ丈け？」洋服女が三人、壽司屋は開ビヤク以來ださうな。

窓の外は待合、いきなれじめて、Hは、MもKもすつぽかしてしまひたくなつたが、學校の先生みたいに責任があるので、都ずしを出ろといりあひの鐘、ぼん……あゝ淺草はいつ來てもいゝところだ、ところで、ポッポ船に乗つけてようと駄々をこねられて、言問まで和製ヴエニスとしやれる。點々對岸の灯が夜霧にかすんで、いゝないゝなのレンパツ、どゝいつやぼでもやりくりや上手で會費壹圓

子屛風を廻らし、黒ぬりの耳盥を前におき、殘つてゐる齒をお齒黒で染めた。銀鍋ほどのいゝ、いゝ、わりがらこに結つて、小楊子の小々太い位なのではあるが、それこそ水の垂れさうな鼈甲の中差と、みみかきのついた後差しをさした。鏡台の引出しには「菊童」といふ、さらりとした薄い粉白粉と、しようゑんじがお皿に入れてあつた。鷄卵の白味を半紙へしいたのを乾かして、火をつけて燃して、その油煙をとるのに、元結でつるしたお小皿をフラフラさせてもたせられてゐたことがあつた。ある時、お皿の半分だけしか眞黒にならなかつたが、アンポンタンらしい理屈を考へた。どうせ、毎日おばあさんが拭いてゆくのだからと——今思へば、それが眉墨であつたのだが—

祖母は身だしなみが惡い女を叱つた。

「おしやれではないたしなみだ、おれは美女だと己惚れるならおやめ。」

文化生れの此人は、江戸で生れはしなかつたが、江戸の爛熟期の文化文政の面影を止めてゐた。萬事がのびやかで、筒つぽのじゆばんなどどんなに寒くても着なかつた。

ある年九月廿日、芝の神明樣のだらだら祭りに行くので、松藏の伜に、あたしは祖母の横に乘せられてゐた。紺ちりめんへ雨雲を淺黄と淡鼠で出して、稻妻を白く拔いた單に、白茶の唐織を甲斐の口にキユッと締めて、單衣には水色太白の糸で袖口の下をプップッかがり、その末が房になつてさがつてゐるのを着てゐた。日陰町のせまい古着屋町を眺めながら、ある家の山のやうに眞黒な、急な勾配をもつた大屋根が、いつも其處へ來ると威壓するやうに目にくるのを避けられないやうに、まじまじ見詰めながら通つた。

祖母は伊勢の大庄家の生れで、幼少な時、童のする役を太神宮に奉仕したことがあるとかで、神明樣へは月參りをした。よく此人の言つたのに、五十鈴河は末流の方でもはひつてはいけない、ことに女人はだが——夏の夜、そつと流れに身をひたすと、山の陰が抱い

でこれ丈盛り澤山ぢやあ、Hの手腕もうまいものだと、H自ら禮讃を隅田川に流したわけさ――。(H)

九拾錢のおすしで腹六分目だが先生に引率された生徒はおとなしいものと通り相場がきまつてゐる。今日一日はH先生の云ふ事を聞く約束だから仕方がない。ぽつぽ蒸汽で氣嫌を直して言問の船付き場でストーブにあたり乍ら、はめ硝子から夕暮れの隅田川を眺めてゐると、放浪の旅にでも出たやうに侘びしい氣持だ。Hさんどつかへ行かうよ、とまたしても云ひ度くなる、言問の吹きさらしの自動電話に入つて社長さんに元氣のいゝ行脚聲といふのを聞かせる。Hは例によつて船つき場の番人と仲よく話をして待つてゐたが、歸りに曰く、あのおぢさんが好きになつたわ。Hの船ちんが外の人と同じだつたのは今でも不思議で仕方がない、大きいのと小さいの間にはさまつて一人前に恰度いゝのはMだけだ野次喜多はいつでもぴつこなものだつて?次は御自慢のどぢようやのだんだよ。(M)

M、一人前に恰度いいのは自分だけだつて?誰も知らないと思つて一人でいい氣になつてゐるな。KMHと背の順にならんで歩いてゐる、之はしごだ、HがKとMの内に這入ると谷間だ、谷間になるとHはあはてゝはしごの方にかけだす。しかしこのはしごはひどいびつこだ、人なみなはづのMは、Kとの差

てるやうに暗いのに、月光は何處からか洩つてきて浴る水がキラリとする。瀬が動くと、クス〳〵と笑ふものがあるので、誰?と低くきくと、あたしだよと答へるのは姉さんで、そつと這ふやうにして上陸る――

その折かうも言つた、香魚は大きい、とつてきてすぐ燒くと、骨がツと放れて、その香のよいことと――

あたしは先年、神路山が屛風のやうにかこんだ五十鈴河のみたらしの淵で、人をおそれぬ香魚が鯉より大きく肥つてゐるのを見た。昔は、そのおちこぼれが、伊勢の人に香よき自慢の香魚を與へたのであつたらう。

――歸途は、めつかち生芽とちぎ箱がおみやげ、太々餅も包まれてゐる。で、この祖母の道樂は――彼女の摑んでゐた道德は、一視同人といふことで、たま〳〵の外出はその點で彼女を自由にさせ、くつろがせたものと見える。また、彼女の氣性を知つてゐる者たちは、逆らはずにその儘に彼女の厚意をうけいれた。

「御隱居さん、今日は松田ですか?」

俥の上と下で、歸りのお夜食の寄りどころが定まつた。お夜食といつても五時になるやならずであらうが――そこで。京橋ぎはの(日本橋の方からゆけば京橋を渡つて左側)料理店松田へ寄つた。巾の廣い階子段をあがつて二階へ通つた。

「松さんはよいものをおとり。」

顏馴染の女中さんは、ニコニコしてなるたけ涼しいところへ座らせやうと、莫座の座ぶとんを持つてウロ〳〵した。どの廣い座敷も、みんな一ぱいなので、やつと、通り道ではあるが、緣側についたてで垣をつくつてくれた。

八十に近い祖母と、六ッ位の女の子と、松さんとは親密に車座になつた。祖母のお膳に

いくらもないお姫さまがオホヽと笑つて降りる位なはしごだ．MとKの差は大きい、望に燃えてる若者がやつとこさと足をひろげなければ登れない位なはしごだ、大きい方が天に近いだけいいよ。ポツポ蒸氣は今日の先生のHがけちつて、言問まできつきやのせてくれない、Mときたら、つまんないな十錢分だけのせてよ、五錢ぢやつまんないな、と鼻をならしてゐたつけ、(K)

もう、どぜう屋、どうも和製ヴエニスで、停滞してゐる。丁度夕飯時なので、駒形のどぜう屋はワンサワンサのハツピ連、天降りの洋服娘、ピクピクしたが、何くそ！と、眞中に座る。「よう別ピン」「モダンガール」。何でもいゝや、Kが御不浄へ行つた留守に、どぜう鍋、なます鍋二人前、めんどくさくなつて、三人で二人前を食つてしまふ。こんな處は、只ニヤニヤしてゐるに限ります、どうも、おこりんぼ娘Mは、あんまり、醉つぱらひに冷かされるので、横つ面張り飛ばしてやらうと思つた。Hニヤニヤ笑つてゐるが内心、お靜かにお靜かに、こんなところは、こんなところに卷かれるだよ、ワンツウスリ！一氣に安來節へ、「どんなの？」「私嬉しいわ。」どうもHもやり切れない。(H)

どぜうやが一杯で、白い腹を見せたどぜうが思ひ切り食べてゐられなかつたのと、ほんとは先生今日はお酒を呑んでHとMとを迷子

は大きな香魚の鹽燒が躍つてゐる。松さんは心おきなく何か一生懸命に話したり頤つたり、食べたりしてゐる。あたしが所在なくしてゐると、若い女中が來て、噴水の金魚をごらんといつた。

松田はいろんなことで有名になつてゐるが、噴水と金魚もたしかによびもののひとつであつたのであらう。あたしは餘念なく眺めてゐたが。

「孃つちやん、早くこちらへ來て――」

と顫へた聲で言つた女中さんに引つぱられて祖母の居る場處へかへつた。

と、どうしたことか、他の女中がお膳をはこんで裏二階の方の室へ席をうつさうとしてゐるところだつた。近くに居た支那人の一團が、喧しくがやがや言つて席を代へさせまいとしたが、祖母はグングン傍を通つていつた。

別の部屋へかはつてからも、隣席の人たちが妙にあたしを見て、首をひねつたり、何かいつたり、うなづいたりした。歸りには、松田の人たちに守られて、俥のおいてある裏口の方から出された。

「大丈夫です、みんな表階子の方ばかり見張つてゐますから。」

と送り出した人たちは言つた。松さんは大急ぎで俥をひいて駈出した。

「おそろしや〳〵、この子を支那人が掠はうとして――」

と、俥ををりると祖母は家の者に言つた。

赤ん坊のころ、若い母親の不注意から、釣らんぷの下へ蚊帳を釣つて寢させておいたら、どうした事か洋燈がおちて蚊帳の天井が燃えあがつた。てつきり赤ン坊は燒け死ぬものと誰もが思つたが、小さい布團のまま引摺り出されて眠つてゐたといふ子は、支那人の人浚ひの難からも逃れたのだつた。そのアンポンタンが、どうした事か音に好ききらひが激し

にするわけにゆかなかつたので、大分氣嫌が惡いんです。御心配には及びません。根が詩人で人がいゝんだから、安來節の割引きへ入つて、ヘナチヨコとかいふ人の四ツ竹節が初まつたら、すつかりいゝ氣持で一緒になつてヨイヨイ。こゝでもKは背が高いので大威張り。何故つて御存じですか。淺草の民衆劇場は立つて聞いて見るんですから。見物が註文を出す、野次をとばす、一緒になつて唄ひ出すのですからとても愉快です。一緒に唄ふまでの勇氣は流石に出なかつたが、唄い度いなとは思ひましたよ。だが矢張こゝは三十分ばかりで切り上げました。白十字のお茶の番です(M)

どぜうやの不平と、安來節の足のいたさをくどこうと思つてゐたらこんどは白十字のお茶の番ですとせかれてしまつた。どぜうやのMのふくれつつらとHのにやにや顔とKの中途半端な顔は駒形に二三匹のこしてきたきみの惡いどぜうの白いおなかの中へおいておくことにして、淺草で今日何が一番たかくてまづかつたかといへば、白十字だ(そんなに澤山方々へは行きやあしないんだけど)、すつぱいすつぱい口のしびれる様なホツトレモンだ。

「何、地廻りが何だと、妙な事をぬかすな。歸りは一緒だ、池の端ではなしをつけろ」に目玉をぱちぱちどうなる事かと洋服に太いステッキをついたこわい小父さん(靑年だらう

くつて、蕎麥屋のおばあさんを困らしたが――

丁度ここに、いつぞや「婦人公論」へ書いた短文をはさまう。

隣家の蕎麥屋で粉をふるう音が、コットンコットンと響いてくると、あたしは泣出したものです。丁度住居藏の裏が、せまい露地ひとつへだてゝ、そばやの飛離れた納屋があつたので、お晝過ぎると陰氣なコットンコットンがはじまる。神經質な子供だつたと見えて晝寢してゐても寢耳に聽附けて泣出したのです。兩親や祖母が困つたと言つてゐたのは、後日できいた思出でせうが、そのふるいの音も厭だつたに違ひありませんが、その家全體が子供心にきらひだつたのではないかと思はれます。どうも暗い小さなそばやらしかつたのです。「利久」といつて、主人になつた息子とお媼さんだけで、そのお媼さんが、骨だつた顔の、ボクンとくぼんだ眼玉がギヨロリとしてゐて、肋骨の立つた胸を出して、大肌ぬぎで、眞暗なところに緬棒をもつてこねた粉をのばしてゐると、傍に大釜があつて白い湯氣が立昇つてゐたり、また粉をふるつてゐる時ほ――宅の物置のつづきのさしかけで、角の小さな納屋の窓から、そのお媼さんの皺がれた肩から、汚ない濡れ手拭が肩掛のやうに結びつけられてあつて、白髮まじりの毛がそそけ立つて、斑にはげた黑い齒で笑はれると、とても泣かずにはゐられなかつたのです。夏の、重つくるしい風のない藏座敷のなかに寢せつけられて、そのコットン、コットンをきくと屹度泣出した覺えはあつても、それが火のつくやうな泣方で、手もつけられなかつたときくと、今ではそのお媼さんに氣の毒な氣がしますが、ぢきにその媼はコレラで死んでしまつて、その店もなくなつてしまひました。

ある時、祖母の從兄だといふおぢいさんが伊勢から訪ねてきたことがありました。おぢ

か？）が他の奴と云ひつこしてゐる。はて、なぐりつこかなと思つてるまに片一方はプイと外へ出た、まて逃るのか、いそいでコーヒーの代をはらつてとんで行く、五秒六秒、コーヒーを持つて來て驚いた女給の目玉がまばたきを一つしないまに、ドアをがちやん、ステツキをドカンと歸つてきた。あいつさてはなぐつてきたな、いやにはやいな、Hが便所から出てきて、どうしたの？ときく、けんかよ。今日は幸はせでした、淺草の六區の池の端で地廻り？のけんかもみました。(K)

　貴女の留守にけんかがあつたのよ、ヘエ！それはそれは…樂んだ白十字も、共同便所の感じしかしなくて、足が疲れたから、これでかへりませう。Mは田原町で、愛弟に甘栗五十錢、青バスで上野へ行つて、一寸つけ口、左の會計の通り、Hはキセルですよ。

　さよふなら、よかつたわれえ、で池のそばでの、さわぎも、けろりと忘れて、めでたしめでたし、でも會費をチヨウカする事、壹圓拾壹錢也、左の會計を御笑覽あれ。

—三人分—　—會費壹圓—

三十錢　省線目白より上野まで。
三十錢　地下鐵にて淺草へ。
九十錢　都すし。
三十錢　淺草より言問へ往復
八十五錢　駒形どぜうや（ナマズ鍋ドゼウ鍋）

いさんはもう九十歳だといひました、祖母は八十ばかりでした。この二人は人世五十年以上逢はなかつた様子でしきりに懐しがつてゐました。わたしはそのおぢいさんの赤とんぼ位のちよん髷が、光つた頭にくつついてゐるのを、西洋人を見るより珍らしく見てゐました。二階の廣間で御馳走をして、深川でもと藝者をしてゐたといふ二人の血びきのおたきさんといふ女を呼んで、人交ぜしないで御酒を飲んでゐましたが、やがておぢいさんが太鼓をたゝき、女のひとが三味線を彈いて、祖母が踊りはじめました。子供は行くのではないといはれて、そつと梯子段のところから覗いてゐると、しまひには二人の老人が浮れて、伊勢音頭を踊つてゐるかげが、庭にむかつた、そとの暗い廊下の障子にチラチラと動いてゐました。その手ぶりのよさ——わたしは最近伊勢の古市までいつて、備前屋で音頭を見せてもらひましたが、とても〳〵、幼目にのこる二人の老人のあの面白さは、面影も見ることが出來なかつたのです。

　こんな事を書いたらまだいくらでもあるでせうが、町で生れた子には、自然からうけた印象のすけないことがものたりません。

　利久の納屋はあたしの家の物置と一ッ棟で、二ッに仕切つて使つてゐた。丁度庭裏の井戸のところに窓があつて、井戸をはさんでの釜場になつてゐた。

　激しいコレラの流行つた最終だといふが、利久はお媼さんがコレラで死ぬとすぐに倒産れた。萬さんといふ息子は日雇人夫になつたが、其のち、角の荒物屋へ酔つて來てゐた。焼酎をうんと飲んで死んだと　荒物屋佐野さんの十三人目の、色の黒い、あぶらきつた背蟲のやうに背を丸くしたおかみさんが宅へ知らせに來た。佐野さんは時々面白い話をした。おかみさんをとりかへるたんびに、だん〳〵悪くなつて、こんな汚ない女にとう〳〵

四十五錢　安來節　割引。
五十五錢　白十字（紅茶一レモンティー一ソーダ水一）。
二十一錢　上野まで青バス。
二十五錢　新宿H驚谷K（これキセル）大塚M。
　計　四圓拾壹錢也
右の通り御座候
そこで、白いハンカチを振つたわけさ、もちろん淺草の空へ。（H）

甲信春の旅

東京―甲府―松本

小池みどり

四月六日午後〇時二十分新宿發松本行の汽車の中に折からの春風に誘はれて咲き出した女人藝術の花七ツ、甲府信州に行く講演旅行だ。信州や甲府はまだ寒いからと女中さんに無理やりに着せられた綿入れと。おなじく綿入長じゆばんを重ねて、暑い〳〵と汗をかきながら扇をつかつてゐる社長さん。でも羽織だけは出る時内密で鞄の中に入れてきたのよ」と汗をふく。新らしい洋服をきて女をあげた編輯長素川女史、先づれむ相な顔をしてクッションに腰をかけおもむろに自分のファッションスタイルを見まわす、仲々お似合です。

なつてしまつたといつた。さういはれても怒らずに、おかみさんは、糊を煮てゐた。お天氣のよい日、朝の間に、御不浄の窓から覗くと、襟の後に手拭を疊んであててはゐるが、別段たぼの油が着物の襟を汚すことはなささうな程、丸くした背中まで抜き衣紋にして、背中の弘法さまのお灸あとや、肩のあんま膏を見せて、たすきがけでお釜の中のしめ糊を搔き廻してゐた。のりとした看板がかけてあつて、夏の午前は洗濯ものの糊つけで、よく賣れるので忙しがつてゐた。平日でも細い板切れへ竹のガンクビをつけたのをもつて、お店から小僧さんが澤山買ひに來た。

コレラは門並といつてよいほど荒したので、葛湯だの蕎麥がきだの、すいとんだの、煮さうめんだの熱いものばかり食べさせられた。病人の出た家の廁は破して菰をさげ、門口へはずつと繩を張つて巡査が立番をした。

深川藝妓だつたおたきさんもコレラで死んだ。背の高い、反り身な、色の白い、額の廣い女で、祖母の姪だけに何處かよく似てゐた。辻車に乘つて來て、氣分がわるいと言つた。それなら早く歸る方がよいだらうと、その車で出たが、車屋がすぐ引返してきて、お客樣がどうも變だとおろした。

門から這入つて、庭を通つて來て、渡り緣に腰をかけたが、今出ていつた時とは、すつかり相恰が變つて、額が紫つぽく黄色く、眼はポクンと落ちくぼみ、力なく見開いてゐる。なぜ引返したといつても辻車では仕方がなかつた。住居は遠くもない鐵炮町なので、車夫は澤山のお札をもらつて病人を送つていつた。

幾日かたつた。おたきさんの開いてゐた氷屋の店は、ガランとして乾いてゐた。軍鷄屋をはじめたのがいけなくなつて氷店になつたのだつた。道樂ものの兄が二人ゐたが、その一人と母親とが傳染て、二三日のうちに三人とも居なくなつてしまつた。

學者的れえと聲が一つとぶ。林芙美子さん御自慢の御亭(後にていろ〳〵)が驛まで來て、「何卒よろしく」と望月さんにあづけた。あづけられた百合子さん。大事な預り物よ芙美子さんは、こわさない樣にそうつとそうつと、にかしこまりました。

中本さん眉毛一つ瞼毛一本動かさずにすましてゐる。笑へばオツホツホツホ。一つワツハツハツハハと笑はしてやりたい。尾上菊子と小池みどり口ばかり動かしてゐる喋つていなければ食べてゐる。玉子玉子と玄冶店名物、毛拔きずしの玉子ばかりさがす。

中央線はのろい。土手にふきのとうが顏を出してゐる。すみれが咲いてる、たんぽゝが咲いてる、つくしんぼが一ぱい生えてゐる。取りたいなあ、窓から降りて摘草をして歩いていても、走つてゐるこの汽車よりは早そうだ。夕方五時すぎ甲府につく。停車場の前で山梨日日の寫眞班の人が來て寫眞を撮る、社長さんを尊敬して前に差し出すと社長さんは暴力團長を前に出してその後に入つて仕舞はふとする。とう〳〵前におし出されてしまつた。夜歡迎會に招かれて三省樓なる料亭に行く、美くしい女の人逹がお酌する。甲州音頭と踊りをみる。芙美子さん陽氣に酔つて踊りが濟むと一人々々藝者と握手をする。素川さんとても御酒が強いのれと社長さんが感心すると、「ウ、ンうそうそ皆ながらなのよ」とべ

この西川屋一家も以前は大門通りに廣い間口を持つてゐた。蕎麥屋の利久の斜向ひに——現今でも大きな煙草問屋があるが、その以前は、呉服用達しの西川屋が居たところである。そこの主人はあたしの祖母の兄で、早くから江戸に出てゐた。先妻に縹緻よしの娘を生ませたが、奥女中上りの後妻が繼兒いぢめをするので、早くから祖母の手にひきとられ、年下のあたしの父の許婚となつた。

後妻は由次郎、鐵五郎、おたきさんを生んだ。父親が歿なると、男振りのよい伜たちは直に店をつぶしてしまつた——尤もそれには御維新の瓦解といふものがあつた故もあらうが——二人の伜はありつたけの遊びをして、由次郎はコレラでなくても長くは生きないやうになつてゐた。

鐵さんが鐵公になつたころは散々で、もう仕たい三昧の果だつた。賭博場を轉げ歩き、藝妓屋の情夫さんになつたり、鳥料理の板前になつたり、俥宿の帳附けになつたり、頭の家の厄介になつたり、遊女を女房にしたりしてゐるうちに、すつかり遊人風になり金がなくなると、蛆蟲のやうに縁類を嫌がらせた。

この男、あたしの目に觸れだしたのは、越前堀のお岩稲荷の近所に何にかに圍はれてゐたころだつた。染物屋の張場のはづれに建つた小家で、茄子の花が紫に咲いてゐた。白つぽくつて四角い顏のお婆さんが、鐵の惡口をグショ〳〵と祖母に語つてゐた。でも、その時分鐵さんは、父に用事を言ひつけられると、ヘイ、と分明り返事をして、小氣味よく小用をたしてゐた——尤もむづかしい仕事ではない、家のなかの雜用だが——彼は見かけだけは稜々たる男ぶりだつた。ちよつと類のすくない立派な顏と體をもつてゐた。面長な顏に釣合つた高い鼻、大きなきれの長い眼、一口に苦味走つた男だつたが、心根は甘かつた

んかい。林さん「素川さんは三三九度の樣な手つきでのむんだもの野暮くさい」となぢれば、中本さん同情して「三三九勞する」
四月七日　朝起きるがいなや社長さん重壓といふものが如何に堪え難いかを知つたとつく〴〵慨歎する。何だと思つたら宿のお布團の事だつた。夜半から雨で御嶽行はだめ。お湯なしでは居られないお湯好きのきれい好の社長さん、宿屋の小僧をつかまへて朝は何時から沸いていますかと聞くと五時から。それですつかり喜こんで雨が降つて、皆な寢てゐる間にちやんと起きてお湯に入つて身じまひをしながら、どうも何だかお湯がきたなかつた樣だと心配しだす。おとみさん（菊子さんの衣裳の世話をしに來た女中さん）すまして、宿屋のおふろといふものは朝かへるものですから朝はきたないのですだから宿屋のおふろはなるたけ……皆まできかずに「大變だ〳〵」と湯殿に飛んで行つた社長さん入つて居た女中さんにちよいと出て下さいといつて腰から下ざあ〳〵と水をあび「あゝ濟々したと歸つて來たのをみて皆その元氣に口あんぐり。午後から雨が上つたので。二手に別れて市中にビラ撒きに出る。城跡に行つた一行「長谷川先生では？」とお坊さんにおつかけられてとど櫟山館の觀音樣の會に招じ上げられてしまふ。講話に來て居た籾山半三郎氏「御講演は末に編物手藝の方ですか」に皆ぶんぶんの顔

ものと見える。母親が、夜になると忍ぶやうにして勝手口からたづねてくると、祖母の膝の前にうづくまつて憲みを願つてゐる。その女が歸つてしまうと祖母は溜息をついて、

「ゑらい女をもらつてしまつて、あの女のために西川屋もつぶれた。あの女の心がけがわるいからだが――」

だが、奥女中姿の補褂で嫁に來た時はうつくしかつたと、不便がつて貢いでゐた。

ある日祖母は、例によつて私をつれて、山の手の坂のある道を行つた。富坂といふところだと松さんは言つた、露路へはひりながら、しどい場處ですといつて番地と表札をさがしたが、西川鐵五郎の家はどうしても知れないので空家のやうな家で聞くと、細い〳〵聲で返事をした。

「此處でございます、此處でございます。」

祖母は松さんに手をとられてはひつていつた。疊もなければ根太も剝いである。

「御隱居さん」

戸棚を細目にあけてさう言つたのは、二三日前の晩、袢纏を紐でしばつて着てきて、臺所で叱られてゐた女だつた。

「座るところはなくともよいから出ておいで。」

祖母はさう言つたが、やがて、モゾ〳〵と半裸體の女が這ひ出してきた。

「やれ〳〵、まあ！」

呆れた祖母は、俥に乘せてきた包みを松さんに取りにやつた。

「お前をそんなにして投りだしておいて、鐵の人非人は何處へいつた。」

といふと、褌ひとつで戸棚から、

「面目も御座いません。」

をする。夜七時、講演會は滿員、堂にあふれる人波。素川さん女人藝術の立場についてと壇上にたち話につまつて野次られると目玉をくりくりとまわして天井をにらんでにやりと笑ふ。最初の最初の最初だとえばつてゐる。林さん感激して涙がポロポロこぼれるので詩が思ふ樣に讀めない。今井邦子女史、生卵子を飮むからコップをと舞臺裏で世話をする男の人に頼むとハイとばかりに煙草と間違へたか灰落しを持つて來る。卵子と煙草との違ひはコップと灰皿の違ひになる。今井さんの傑作一つ、仁德天皇の皇后盤之媛は萬葉第一のやきもちやき、いやおやきもちの方で……皆な大悅こび、おやきもちおやきもち、邦子さんの又の名をおやきもちと申し上げ奉る。

時雨女史の甲府所感、始めての講演とは思へないたしかさしつかりさ、さすがにと一同感服、中本さんの獨唱も見事、菊子さんの踊りも奇麗皆夢を見て居る樣な顏をしてる。菊子さんの踊りを見たいと思ふばつかりに背中の骨が折れ相になる。

四月八日お午近く甲府にさよならをする。着いた時に撮つた寫眞を見せられて皆口あんぐりこんな不美人ばかりぢやないのに、ずい分ひどいなと思ふ。松本に行く汽車の中で何がをかしいか皆ふざけ出す。蜜柑の皮のなげつくらから、病膏肓に入るで、おこつた林芙美子さんおべんとうのごぼうのにたのをポンポ

と這出してきた。そして、祖母が救ひに來たのだと知ると、一昨日の晩女が、死ぬやうな病氣で、どつと寢てをりますといつたのは、二人ともすつかり忘れてしまつて、裸でも元氣な調子で、兎も角やりきれないといふ事を、小供のあたしにも面白くきかせるほど巧みにしやべりたてた。

「よし、よし。貴樣はのたれ死しやうと勝手だが、女子はさうはゆかぬ。」

祖母が居るうちに、米屋からは米がはこばれ、炭屋からは炭がきた。松さんが運んだ包みから出た着物を女は着た。

鐵さんは景氣よく根太のつくろひをして、戶棚の中に敷いてゐた花莚をおき、松さんは膝掛けを敷いて祖母とあたしの居るところをつくつた。

こんな處へ來ても、人ぎらひをしない祖母は、てんやから食物をとつて、みんなで會食した。酒が廻ると鐵さんは、どんなふうにして大屋をこまらせてやつたとか、疊は買つてしまつて、根太は薪のかはりに燃したと雄辯にまくしたてて叱られた。

家にかへつても何にも言はないので、祖母はあたしを可愛がつた。妹は外でおとなしく、歸るとすぐ告げ口をするので、猫かぶりだといつて、いつもおいてきぼりにされてゐた。言ひつけ口は厭ひだが、決してもの事を隱しだてするひとではなかつたから、歸るとすぐ其晩か、遲くもあくる夜は、松さんの倖が荷物ばかりを積んで、再びなまけ者の住居を訪れるのだつた。

「無駄だけれど——」

と言ひながら母は布團やその他のものを積ませた。

だが、鐵さん自身が淺間しい姿で、地蟲のやうに臺所口につくばつた時、祖母は決してゆるさなかつた。同情の安賣りはしなかつた。取次ぎが、ぜひ御隱居樣にお目にかゝりた

ンなげると、素川さんのおニユウの洋服にあたつてしみがつくのでいやだ〳〵と奴鳴る。とう〳〵社長さんたまりかれて「そんなにさわぐとあとでつかれても知りませんよ」に皆おとなしくハイ、

大變だ、松本だと百合子さんがどなる、小池みどりあはてゝ靴をはこうとさがすがない不思議と思つてよくみると芙美子さんの小さな足が大きな私の靴の中でおよいでゐる。

おかしいやら、あはてるやら、あんまりみかんの皮などをなげてさわいだばちと社長さんに叱られた。先生芙美子さんが惡いんです。「あんまり退屈だから小池さんの靴をはいて時雨さんの所へ遊びに行こうと思つたらもう松本なんですものいやんなつちやつたわ」松本から淺間の宿へ行く途中の自動車で林さん手ばなしのおのろけ。「私松本は好きよだつて家の宿六が兵隊に來てゐたから」宿につくまで笑ひ通し、中本さんの苦しいしやれ一つまつたく淺間しい。

松本の講演會はよいお薬り、奴鳴られたり野次られたり、寒い寒い舞臺裏でふるへて、今日だけ綿入れがありがたいと家の社長さんの小さな聲、會後座談會が近所のカフエの二階であつた、記念の寫眞を撮つた時ドカンとマグネシウムをたいたのでかべにひびが入つた。しかしそれは決して私の體の重いためではないのです。皆樣、松本にはもつと　白い

いと申ますと傳へたとき、臺所の敷居に手をつくやうなことをせず、表から來いと言はせた。

彼女は卑屈を嫌つた、が決して貧乏を厭ひはしない。ところが、哀れな鐵さんは、卑屈をいやしまず貧乏を鼻白んだ。彼は何時までもウジ〳〵屈んでゐた。祖母は堪らなくなつたと見えて臺所口へゆくと酌柄に水をくんで鐵さんの頭からあびせかけた。

「とつとゆけ、用があらば伯母の家だ、表からはひれ。」

さう怒鳴つた。でブツ〳〵口小言をいつてゐた母が、却て氣の毒がつて小錢を與へたりした。

鐵面皮な甥は、すこしばかり目が出ると、今戸の澁金の盃物をぶるさげたりして、唐棧のすつきりしたみなりで、膝を細く、キリッと座つて、かまぼこにうにをつけながら、御機嫌で一杯いたゞいてゐた。そんな日にはいやに靑い髭だと思つた。

この男、晩年に中氣になつた。身狀が直つてから、大きな傭宿の親方がはりになつて、帳場を預かつてゐたので、若いものからよくしてもらつてゐるといつた。それでも若い衆におぶさつて、一度逢ひたいからと這入つて來た時に、みぐるしくはなかつた。大きな男が、ろれつの廻らぬ口で何か言ひながら、はひ〳〵して顏を出した時、みんなびつくりした。

「お前なぞ、そんないい往生が出來るなんて――よく若い者が面倒見てくれるな。」

父がさう言ふと、

「全く――裸で湯の歸りに吉原へ女郎買ひにいつたりした野郎が――全く、若いものがよくしてくれます。」

と言つた。逢ひたいにも逢ひたかつたが、世話になる部屋の若い者に禮をしてくれと賴

おはなしがあるのですけれどそれは内密々々云はない方がいゝ事だけです。

――それはお風呂のカンパイ、ちよつと生田花世女史の講演に出た母性愛のためと、留守中に御本が出來てくるお祝ひと、花世女史の枕許にわざ〳〵春月氏の詩の軸をかけてくれた宿の親切、それらのお悦びをかねて、金盥でお湯をくみあげて女史に浴みさせたのです。みんなの嬉しがること、女人群像の蓮華の花、しかもお釋迦の誕生の四月八日！だが、幾度も龜の甲ぼしをして遊びすぎたのでみんながぜをひいてしまつた。なにしろ信州は、まだコタツがあるのだから――アルプスには雪があつて、樹が咲いてをつた。着いた時室へはひると、あら芽が出るわといつたのに、素川女史、そつと女中さんに寢る時、火を入れて下さいだと。

諏訪から東京

尾上きく子

雨あがりの諏訪についたのはお晝少しすぎ布半ホテルと云ふから洋風なのかと思つたら、とほされた部屋は三間とも日本室で例のさむい國獨特のこたつが眞中に陣取つてゐました。六時までは自由時間だと、こたつにつかれた足を入れ（もう松本ですつかりこたつとは親友になつたので）目の前の靜かな湖を

むのだつた。

さて、

イッチク、タイチク、タエモンドンの乙姫さまが、チンガラホに追はれて・・・

などと、大きな聲で唄ひつれてゐたアンポンタンも小學校へあがる時期が來た。そのころは勝手なもので、六歳でも許したものだつた。尋常代用小學校といつても小さく書いてあるだけで、源泉學校だけの方が通りがよかつた。重に珠算と習字と讀本だけ、御新造さんも手傳へば、お媼さんもお手助けをしてゐた。

引出しが二つ並んでついた机を松さんが擔いて、入門料に折を添へ母に連れられて學校の格子戸をくぐつた。先生は色の黒い菊石面で、お媼さんは四角い白つちやけた顔の上品な人で、昔は御祐筆なのだから手跡がよいといふ評判だつた。御新さんはまだ若くつて、可愛らしい顔の女だつた。

格子戸をはひると左に、別に障子を入れた半住居の座敷があつて、その上の二階は客座敷になつてゐた。先生は怖いから大變年をとつた人だと思つたが、多分三十位だつたかも知れない。お媼さんは先生のことを秋山が秋山がと言つた。

翌日からみんなと机をならべるのだつた。お晝すこし前になると、おみやげのお菓子を配つた。今朝登校のときに松さんがもつて來た大袋四ッが持出されて、うまい具合に分配されてゆくのだつた。世話やきの子供が幾人かで、全校の生徒の机の上に、落雁を一個二個づゝ配ると、こんどは呑せんべを添へて廻る。その次は瓦煎餅といふ具合にして撒ききるのだ。

母の覺え書きがあるから記しておかう。

うつとりとながめながら、しかし口は體と反對にまだ〳〵なか〳〵つかれずけなしながらもお茶菓子をさかんに食べる、こたつの心持のよいあたゝかさに眼をほそくしながらも上にかゝつてゐる巾がおしめのやうだと云ひ出す、實ににぎやかです。中本さんの鋏で林さんに髮をカアルしてあげると、プッツリ切りそろへてあつた前の毛を一つ〳〵まきあげたので實にものすごいものになり、知らぬ間に立派な「頭髮のパアパリズム」を作つてしまつたら、どんなに美くしくなるかと目をほそくしてゐた林さんの憤慨は非常なものでした。だがそれにもこりず森川さんがぜひかけてくれとおつしやつたので得意になつてゐると、プッツと私の足に何かゞささつたのです、みると實に馬鹿々々しくも妻楊子なのです、私はにじみ出る血をふきながらいたさと、そして、さゝるならもうすこし氣のきいたものにしてもらひたかつたのと兩方で思はず雨をふらしました。しかし皆はつめたくも大聲で笑ふのです、實にくやしい。私の雨も晴れた頃生田さんが森川さん小池さん逢をボオトにおさそひになりました。私は行きたくつてもをどりの地方との打合せがあるので殘念ながらガラスごしに湖を上つてゆくボートを眺めただけ。

　間もなく地を引く方が二人ゐらつしやるので次の間へ行つてうち合せをしてると林さん

於保手習初メ
金五十錢に砂糖折。
外に子供衆へ菓子五十錢分。
其ほか覺。

一月年玉分	五十錢
七月盆　禮	五十錢
試　驗	七十錢
月　謝	三十錢
年　暮	玉子折
年　玉	五十錢

　外に暑寒。

　なんと安價なものではないか。しかし、お豆腐は一丁五厘であつたのを、お豆腐やの前で讀んだから知つてゐる。お米のねだんは知らないから書くことが出來ない。

　試驗が割合にかかるのは、試驗といふことは學校へお赤飯を食べにゆくことだと思つたほどだから、お手數だつたと見える。近所の小學校の校長たちがむづかしい顏をして控へてゐる前へいつて試驗されるので、なる可く級の中から出來さうなのが前の方にならび、他校の校長の眼の前でやつた。前々日に下ざらひは出來てゐるのであるが、秋山先生の弟子煩惱は有名で、自分の方が終日ハラ〳〵してゐた。みんなその日はめかしていつた。三枚重ねを着て、さしこみのついてゐる鼈甲の簪や、前がみざしをさしてゐる娘は、裾を折返してキチンと座つてゐた。男の子は長い袖の黑紋附の羽織・袴を穿いてゐた。

と望月さがどてら姿て、しかも林さんは手ぬぐひをかむつて（例のコテで捲きあげた、百日鬘のやうな前髪をなほすための水てぬぐひ）はいつていらつしやつたので、地方の女の人たちはなにしろ大變おどろいたとみえて、うまさうにスパ〱すつてゐた煙草もやめてすくんだやうな顔をしたので、私はもう苦しいほどお腹の中で大笑ひをしました。

最後の夜だから私逹も大變氣のりがして、素川さんの「女人藝術について」をはじめとし中本たか子さんの「新感覺派」林ふみ子さんの「詩のパアパリズム」望月さんの「私の空想」（この夜はいつも以上に生々とお心持が大變よさそうにお見うけ致しました）小池さんの「詩の朗讀」生田さんの「新女性の文藝」女人藝術の社長と紹介された叔母さん（時雨）は女人藝術には社長なんてありません。みんな部長で、みんな小使ですと訂正してから「所感」これで第一部は終りました。私は第一部の終り頃から熱が出て何となく心持惡くそれに今夜はうまくをどりたいと思つてゐたのにをどれさうにもないので大變さみしい氣がして皆さんに御心配かけ大變わるかつたと思つて居ます。宿へかへつてからも先へ失禮して皆様のたのしさうな笑ひ聲をきゝながらそれでも御馳走はうんとたべて、何もしらずにやすんでしまひました。

黒いぬり盆へお赤飯とおにしめが盛りつけられた。出來ない男の子は、食べてしまうとそつと釣にいつて、いつまでも歸つて來なかつたりした。校長さんたちの分は、大皿のお刺身などがとつてあつた。

洋算などは、大概なところで秋山先生が一人に答へをいはせ、

「出來たか。」

といふとみんなが手をあげる、それで濟みなのだつた。他の老人の校長などは居ねむりをしてゐた。

暮のお席書きの方が、試驗よりよつぽど活氣があつた。十二月にはひると西の内一枚を四つに折つたお手本が渡る。下の紋は、壽とか、福とか、むづかしくなると、三字、五字、七字——南山壽とか、百尺竿頭更一歩進とかいふのだつた。

課業はすつかりやめてしまつて、その手習にばかりかかる。そしてお墨すりだ。

——あたしのは丸八の柏墨だ。

——あたしのは高木のいろは墨だ。

——だめだ、いろは墨は、弘法様のでなくつちやいけない。

そんな事を各自に言つて墨を摺る。短かくなると竹の墨ばさみにはさんでグングンと摺る。それを大きな鉢に溜めてゆくと、上級の子がまたそれを濃く摺り直す。

——かうやると好い香になると、梅の花を入れる子もあつた。早く濃くなるやうにと、墨をつけて柔らかくしておくものもあつた。

——ばりこになるよ。とそれを嫌がるものもある。

商家の町なので年の暮はなんとなく景氣がよい。學校へも、お砂糖の袋だの、みかんの箱だの、炭俵だの、供餅だのが澤山もちこまれる。お席書がすめばその日から休みで、か

翌日は大變よく晴れて、湖水の色もすつかりあかるく遠くには雪のアルプスの勇ましい姿さへ見る事が出來ました。わかさぎ、カリンのジャム等おみやげをそろへ、いよ〱歸途です。甲府まで汽車にのり、あとは富士を一めぐりしながらふじ驛まで電車です。今さらながら美しい富士の姿、きれいな川、滿開のさくら、ねむい目を一ぱいにひらいて、「銀座々々とかよふ奴ア馬鹿よ」等と東京をまちながら大うかれです。富士驛に赤帽が居ないで、澤山の荷物に困つてゐたら、大變親切な青年驛員さんがゐて助かりました。車中林さんの元氣は大したもので「ていろくにあへるから」(ていろくと云ふのは小池みどり孃作の新語、やどろくと亭主とをまぜちやつて、亭六〱といつてゐる。やつと皆が氣がついて、それから林さんに亭六先生といふ名を奉る)「カリンジャムなめさせるの?」等と云ふ皆の質問も「アハヽ〱」とお酒の力をかりずに元氣なのです。まして東海道線にのりかへて正宗の二合びんをかゝへた時はもう云ふまでもありません。のんではぬれ手ぬぐひでお顔をおふきになる「なんのまね?」とお聞きするとその御返事にすてき「茶ぶだいもお盆もないから顔をふいてがまんするのよ」と林さんは醉ふと食卓をキレイにして拭く癖があるのださうです。

第一回講演旅行はたしかに成功しました。

へりには蜜柑がもらへる。

二枚書いて、一枚は學校にずらりと張りつけ、一枚は家へもつて歸る。親たちは、居間や、客間や、又は、あたしの家などは玄關へ自慢で張る。

この秋山先生も書もらしてはならない人だ、學校そのものもまた! そして年の暮のことどもも——

柏黑の「丸八」は大傳馬町三丁目の老舗(しにせ)で、立派な土藏造くりの店だつた。紀文に張りあつた奈良茶の家だのなんのときいてゐた。「大晦日草紙」とかいつたやうに覺えてゐるが、くさ双紙に、若い旦那の色里(いろざと)通いを、惡玉がおだててゐる繪があつて、お嫁(よめ)さんが泣いてゐるのを見たとき、丸八の先代のことだとかいつた。後に、春の繪の本を見たら、香宇といふ大盃に張りあふ高總といふ大盃のことがあつた。それも多分「丸八」のはなしだとかいてゐた。その事實は知らないが、とにかく、そんなにまで豪奢(ごうしゃ)な、派手なことがあつたうちと見える。(つゞく)

前號、二頁目十二行目にこの新道には名がないといつたが、昨日古い手紙類をかたづけたら祖父のおゆづりのはさみ箱の底に、通油町北新道長谷川卯兵衛と書いてあつた。猶又よく思へばうまや新道ともいはれてゐた。



喪

東おさむ

魂までくれたあの眼！

ある寒い日の會場で、探し求める目を互に遠く見かはしはしたが、それが永久の別れになつてしまつた。

一ぱいにふくらんだ悲しいさびしさ——僅かの機會を得て、人を掻きわけて彼が來たとき、私は待ちきれずに低く彼の名を呼んだ。

××さん——

激動したその一瞬間の彼のおもは！　水のやうな寒さが來た、死に約束された沈默が——

私は死にたいと思つた。求めてやまない眞實がうちつけられた、佗しい幸福を感じた。

三月ある日彼は變死した。あの日、私にだけ死顔を見せてくれたのだと心に言ひきかせはするものの、なぜ、あの時、へだてを破り、遠慮の殼をぶち破してしまはなかつたのかと、悔んでも〳〵盡ない怨みである。自ら許すことの出來ないこの苦痛。あのもの言ひたげな、あの凝りかたまつた表情が、いつになつたら私の目から消やうか——

心に喪章をぴつたりはりつけて、ただ生てゐるといふのみの私は、眼はあいてゐても黑く、すべてが空虚だ。私はあの人の胸に生きて、無力な、弱い、自分の鬪志をも合せて、力弱く生きて貰はうと思つたのに——

——無言の約束を信じながら、嘘はつて一日でも生てゐられる私だと思ふと腹立たしい。

地獄の反逆者

＝人生記錄＝2

松村喬子

パルチザン小波と新高

かるたはその後よくなつて二月程働いて二三日前から惡くなつて休んでゐた。

「かるたさん御かゆでも食べない、こしらへてきませうか」

雜誌を一生懸命で讀んでゐたかるたは歌子が入つてきたので紙の隅を一寸折つて本をふせた。

「オーキニ未だ別にお腹もすきまへんよつて後程、一緒に頂きますわ」

「そう、ぢや亦、水野さんでも來たら何かおごつてもらひませう」

冗談とも本當ともつかずさう云つて歌子は笑顏をみせた、

「今夜はひまらしいのネ」

「エ、誰もお客はないのよ、作榮さんが今日お釜から。マーさんが今居る限りよ」

「さうお、では亦、おやじの御氣嫌も惡い事ですやらう」

「惡い〳〵、怒鳴りちらしてるワ」

その時、客が揚つたしく表の廣間に、三四人の足音が聞えたので歌子は一寸立ちかけて

「又後できますワネ、もし呼ばれてゐないと惡いから」

「エヽ本當に來とくれやすナ」

客は皆始めての客らしく、仲居と主人の相談で、一流どころが四人揚つた。歌子はホットしてのがれた事を嬉こんだ、今夜はもう一人でユックリと眠り度い、一人になつて、よく考へ度いと思つたから。

一度叱られてから歌子は反つて圖々しくなつた。平氣で餘り體が惡くないのに、休んだ、それとなく小町が忠告にきても「さうですれ」と「さうですか」より外口を利かないでゐて、少しも改める樣な事はなかつた、然し、どこが惡いといふ點を見出さない主人の方でも、呼びつけて叱る事も出來なかつた。

その頃から急に仲よくなり出したのは新高と川柳と小波だつた。外の娼妓は寄らずさわらずに附合つてゐた、

パルチザンの小波がこゝへ來た當時から、室が近い關係もあつて何かと親切にしてくれた。パルチザンの名も彼女は、一番我まゝものでで主人でも誰でも、氣に入らぬ事があれば、口答へする、くつてかゝる位の事はやつたし、一度この客は金を持つてゐるナと見れば、どんなにしても金をまきあげる、そんなこんなで、パルチザンと名をつけられたのだと自分で歌子に話した事があつた。

新高も一すぢ繩で云ふ事をきく女でなかつたので、主人の方でも叱るより奉つておく方であつた、まるで腫物にさわる樣にソーッとしてゐた、彼女は線香と共に臺灣から抱えられてきたのであつた。

新參者ではあるし下の風通しの惡い、然も臺所にくつ付いた暑い室にがまんして入つてゐたが、何しろ風は一つも通らないし一日火を燃いてゐる臺所からは熱氣がきて、とうていがまんがならないので、歌子の室へきては遊んでゐた。それに彼女が大阪の南地にゐた關係もあつて話が合ふので、ひまさへあれば、歌子の室へ來て、卵のないのろけ話をしては歌子を笑はせてゐた。

始め歌子から話しかけたのであつたが。

「新高サン、あんたえ、難波新地

の橋君に居た事があるでせう？」
「ハアあるわ」
彼女は驚ろいたと云ふ顔付で、どうしてこの女が知つてゐるのか？この人は誰だつたらうと思ひ出さうとしたがどうしても思ひ出せなかつた。
「さうれ、私は知つてゐるけれど、あなたは私を知らないでせう、あなたが深原さんと云つて、よく芝居が好きで、お茶さんに頼まれりやキット月芝居の變る度毎に道頓堀の各座はみんなかゝさず行つたものよ、さうすると、あなたはキット來るのですもの。「あの人ら私達の樣な芝居極道やナー」とその頃の一番仲よしだつた秀勇さんと話した事だワ、だからよく私知つてゝよ」
「さう〳〵私芝居が好きでなんでも見に行つたもんやワ」
「ずゐ分腕つこきで有名だつたから名前もチヤンと覺えてゐるのよ、その頃私まだ、娼妓になつて間もない頃て、秀勇さんに色々と敎へられながら、不思議な事や感心する事ばかりでゐたのだけれど、深原と云ふ名が、いやに私の印象に殘つてゐたのよ」
「そして新派の靜間はんが人氣のある時分で南座に山長はんと一座してはる頃だつしやろ。私、今思ふと馬鹿らしいけど、あの頃、靜間はんが好きで〳〵、どうしても靜間はんに極道してみたいと思つてずゐ分と苦勞したんやワ、そして、とう〳〵思ひが叶つて、京都へ遊びに連れて行つてもらつた時は、さすが私の樣なすれつからしも、初心な生娘みたいに、羞しい氣がして、おとなしかつたんやワ、それから夢中になつて了つて、神戸へ芝居がかゝると神戸へ逢ひに行くし、京都へも逢ひに行くし、大分金をつかふたんだつせ、その頃、私の處へは寶塚の醫者で大分お金持のお醫者と株屋のハーさんと云ふ人が通つてゐて月々百圓づゝもらつてゐたのやけれど、みんな、室見舞や、座ぶとんになつて了つて、今おもふと、あの金があつたら、今こんなに苦勞する事ないと思ふワ、半年、それでも靜間はんとの仲も續いたやうナ、金が出なくなつたんで、私の方から靜間はんとは切れたのやけど、私の方に金がないと云ふ事を知つてからも靜間はんはお茶屋から、度々呼んでくりやはつたんやワ、私も素人でないから、三度に一度は無理をしてお茶屋の拂ひをするのでだん〳〵苦しくなつてきて借金も僅かになつてゐたのが、亦少し殖えたりして、とう〳〵手を引いて了つたんや、今靜間はんはどうしてはるのやらうナー」
「さうれ、新聞で一寸見たのだけれど、「靜間小次郎は松竹の事務員になつた」とかの記事を讀んだやうに思ふわ」
「さうお、もう役者をやめはつたんかいナ、私も、それから後、一生懸命になつて働いて、すぐまた三百圓程の借金にして了ふたんやけど、そして、もう四ケ月か五ケ月で廢められると言ふ樣になつたの、そしたら、その頃から家の人が來だして、始めそんな好きやなかつたのやが……」
新高はその男と家を持つたので、ウチの人ウチの人と呼んでゐた、その人の話をする時は、なんとも云へない可愛いゝ顔をして、黒目勝の大きな瞳をクル〳〵させた、二十八としては老けてみえるデツプリとした體であつたが、細面の鼻立の好い口元の小さい、キリツとした顔で、怒つた時はずゐ分鐵火肌になるが普通の時は餘り口數を云はぬ女であつた。「またウチの人が始まつたナ」
歌子は笑つてゐた。
北區で若い衆の五拾人もつかつてゐる福岡と云ふ人と深くなつて、人の意見も聞き入れずとう〳〵その人に身受けされた、けれども遊び人の女房としてはあまりにやきもちやきであつた彼の妻の爲めに、二人はかくれて家を持たねばならなかつた、女房がやけばやく程、彼は深原が戀しくて子分の中の四五人打明けて出入はさしてあつたけれど、外の者には誰にも知らさないで時の來るのを待つてゐた、そして何かを口實に女房を出す約束で一年程暮してしまつた、太腹で苦勞人の深原は、子分に對してもよく氣をつけてやつたので姐御として、女房より慕はれてゐた。女房のお秋より遙かに、愛は深原のおあさの方にある事は自分自身でもよく知つてはゐたが、そ

して、博徒風の自分の情がヒステリーの強かケサ／＼したお秋より、夫として理解し得るし、彼も一生の利害關係でも自分を捨てないと云ふ確信を持つては居れど、かげの者としての物足りなさと、女房として、家におさまつてゐるお秋に對するひけ目から、機會ある毎に福岡をせめた、早く女房を追出して自分を家に入れてくれる樣にと。その中に、お秋は病氣になつて別府の溫泉へ一ヶ月の豫定で保養に行つた、その留守中にとう／＼入り込んで了つてすぐ家を引拂つて了つた、そして、今度は女房としての地位が反對になつた、お秋は大分憤慨して、そのまゝ家を出て了つて料理屋の女中になつた、自分の身が幸福になつたので、おあさはお秋の事はすぐ忘れて了つてゐた。さうして三年の月日は流れた、精神的にも物質的にも可なり惠まれて、幸福に暮してゐたが、翌年の冬博徒連の大頭株が集まつて開いた賭博に充分の自信を持つて望んだのであつたが、それがつまづきの元でその後は焦れば焦る程駄目になつて行つた。その上日頃餘り仲のよくなかつた松島の親分との繩張爭から喧嘩が大きくなり血の雨が降つて、子分の三人も犧牲者が出て、その家族の養い料や、家庭の生活に困つて、離れ度くない、別れ度くないと思ひつゝも、自分から身を引いて、再び泥沼の中に入つてその場の金の用立をした。そして、この榮樓へ來る迄、九州の炭坑町から臺灣迄渉り歩いて、きたのであつた、九州の炭坑夫町の飲食店は、表面だけで、炭坑夫を相手の淫賣宿であつた。春を賣る事は、娼妓以上であつた、そこには檢黴もなければその道の醫者さへなかつた。公然の營業でないから、收入も好い加減に飲食店の親方にごまかされて僅か五百か六百の金で慘目な殘骸を、ドブ池の中にあへいでゐなければならなかつた。一足踏み込んだが最後、ヅブ／＼と下へ引きづり込まれて、とうてい、上へあがる事は出來ないのであつた。「私も始め、ウチの人もある事だしするので金は借りたけれど藝者になりに行くと云つたのよ、そしたら、「澤山金が入るのなら、九州の炭坑町なら、すぐ借金がぬける事だしするからそこへ行きなはれ」て紹介人に甘くだまされたのやわ、そして行つてみたら全く僞りで、娼妓よりひどいのやらう、それで私も考へたんさ、一そこんな位なら娼妓の方が好い、鑑札持つて公に商賣した方が體など助かる、娼妓なら、五日目の體の檢査に依つても、惡い時は治してもらへる」どうかして早く夫の所へ逃げ出して了ひ度いと起ると寢る時迄その事を考へてゐたので、或る時、若い坑夫を唆かして、「お前さんと一緒に逃げ樣か」と持ちかけてみた、少し足りない男だつたのですぐ乘氣になつて承諾した。そして、坑夫や酌婦が逃亡するのを防ぐ爲め、無賴者を十重二十重に網を張らしてあるこの町を巧みにのがれ山の中や森の中を通つて、やうやく、下關近く迄出た時、不幸にも、殺人犯人の非常線にかゝつて、擧動不審で捕へられ、男の口からすべてを白狀して一週間も拘留されて、再び元の坑夫町へ連れて行かれる處を、とう／＼話をつけて臺灣へ娼妓になつて行つたのであつた。「始め、臺灣なんか行く事は夢にも考へてゐなかつた、けれども、內地では、抱へてくれる樓主がなかつた、それは、「足ぬけする樣な大それた女は……」と云ふので臺灣ならば、船でなければ內地へは來られないから、樓主も抱えて行く氣になつたらしいのだわ」

新高はそんな話をして、好んで吸つたバットをうまそうに一ぷくすつた。

「でも臺灣へ行く時モウ一度ウチの人に逢ひ度いと思つたワ、だけど、その隙が無くてとう／＼船に乘せられた時、大阪の方の空をみて、之で五ヶ年間內地へは歸れない、ウチの人とも逢へないと思ふと、悲しくなつて、親が死んでも泣かん私やけど、心細さと逢い度さに、泣いて了つたの、こんなに苦勞してゐるのに、ウチの人は知らずに、反つて私を恨んでゐるやらうと思ふと情けないわ、それでも、五ヶ年間歸れないとあきらめて、働いてはゐた時、こゝのおとうさんや番頭や紹介人が、臺灣へ（こどもし）を抱へに來たと云ふ噂

がパット出たので丁度幸ひだと思つて、それに、紹介人をよく知つてゐたので頼んで大阪へ連れて行つてもらふ様頼んでみたの、そしたら、こゝのおとうさんが甘い事云ふて、だまして、こゝへ連れて來てくれはつたんやヮ、後でいくら考へても仕方のない事やけれど、今迄の私のしてきた事は、皆、考へなしのする事、馬鹿な事ばつかりで、情けないと思ふわ、始め欺されて九州へ賣られ、臺灣へ賣られ、六百圓の借金が、こゝへ來た時は、三千圓に殖えてゐるのやものナー、そして、その金が自分の手に入つたのは、全部でたつた七百圓しかないのよ、後の金は皆、なんだかんだといゝ様に取られてゐるのやわ、然し私ばかりぢやない、皆、その手に乘つて、いつも借金を殖やされてゐるのにやナ、」

　大ていの樓主がさうである様に、木浦も、自分の條件に叶つた女であれば、少し位借金が高くとも、連れてきて自家におく事にした。こゝへ來て始めて、言葉のすべてが嘘であつた事、始めに逢つた折の様な優(やさ)しい物の解つた樓主ではない事等が解るのであるけれど、もう其の時は、すでに他へは住替の出來ない高い借財の爲めに、泣寝入にならなければならなかつた。見えない重い鎖はさうして、體を縛つておいて、働ける迄働けるだけこき使はれるのである。だから、少し位年を取りすぎてゐても、日本國中時としては支那邊りまで渡つて來た手におへない莫連者(あばずれ)も、木浦の前には一匹のおとなしい馬車馬にすぎなかつた。

「地獄もこゝは三丁目で一番罪の深い者の落ちる所やから、もう仕方がない、」

と、捨鉢的に云つた秋子の顔は、苦しい笑ひ顔であつた。

川柳と羽衣

　川柳も、五年程前からこの家に働かされてゐる女であつた、始め田舎藝者に賣れてゐた彼女を木浦が見に行つた時、年の若い、美人の川柳を、一目見て連れてくる氣になつた、だが、連れて歸つて見ると、顔の美人のわりに、色々の缺點があつた、頸にるいれきが出來てゐて五ヶ所、ジク〳〵膿(うみ)が出てゐるので、客は二度とこなかつた、そして娼妓として一番禁物の、情熱家であつた、「顔が美人だからキツトこの女は賣れるだらう」と云ふので、この家としては、珍らしく遠い處迄、仲居をつけて毎日治療にやつてゐた。けれど、好きな男の爲めに、その時逃げ様とした。樓主の怒は極度に達して「恩知らず」と云ふので、その時は大分叱られたが、「るいれき」が治つて飛田から名古屋へ移つてからは、川柳は、どん〳〵と商賣が出來出したので、チヤホヤして、大切にされてゐた、然し、頭の好い彼女は、そして、以前に虐げられてゐるので、歌子などの今の身をよく察してゐた。

　パルチザンの小波も、長い間の酷使に、此の頃病氣ばかりしてゐた、けれど、パルチザンのニツクネームのあるだけに病氣で休んでゐても、古いなじみ客が澤山あつて、小使には不自由なかつたし、元來、主人にも、決して、まけずに口返しする方で、我まゝの、お天氣屋さんで　朋輩も、一月おいてゐた、體の悪い時は、いつも、太郎べヱと云ふおとなしい妓を妹の様にして使つてゐたので、身のまわりの世話はこの太郎べヱがやつてゐたが、何かの相談事はいつも歌子に持ちかけてゐた、東京に父や母が居て、母親が死んだ時、七年間もこの樓に居るのに、葬式にやつてくれなかつたので樓主を恨んでゐた。その反動が歌子と同じ氣持に引き込まれる動機となつた。さうして、多少でも、反感を持つて、何かを考へてゐる程の者が、歌子の室か小波の室へ何時とはなく集まる様になつてゐた、多少、皆思つてゐても、どうにもならない事としてあきらめてゐる者も澤山あつたが、あきらめてもあきらめ切れぬ連中は、いつも集まつて不知〳〵の間に、ぐちを云ひ合つてゐた。

　夏から秋口へかけては病人が多く毎日、四五人の休みはあつた。歌子の室の隣りでも、羽衣が病氣でもう五日程寢てゐた。かるたと小波の看病に商賣はそつちのけの歌子は、羽衣の室へも行かなけれ

ばならなかつた。

羽衣の病氣は、彼女が長春で藝者をしてゐる時、子供ができて、まだ産褥にある體を、無理に座敷へ出されたり、家の用事をさゝれたのが元で、卵巣を手術した、その後の生々しい腹部の傷跡がまだ赤くふくれて、みゝずがはつてゐる樣になつてゐるのに彼女は娼妓にならなければならなかつだ、藝者として子供を生んだ事は、人氣を失くするとで、その手術の費用を、娼妓になつて主人に返濟しなければその時の彼女には返濟の方法がなかつた。二十の春、榮樓へ、五千五百圓の前借で來て、手術後の疵の未だ充分癒え切らない體を、幾度も〳〵倒れながら、苦しみあへいで働いてゐだ。然し、幾度も〳〵倒れてる中、朋輩は寄り付かなくなつて了つた。そして、彼女が苦しんでゐる室の前を只、人事として通りすぎてゐた。

一日の間に二三度づゝ急にさし込んで來て、齒を喰ひしばつて、痛みに堪えてゐるこの種の病人には、醫者さへほどこす術のないと云ふのに、まして歌子が、側に付いてゐて、腰の邊を押さへる位では、どうにもならなかつた。そして、病人と一緒に泣く位のものであつた。小波も羽衣もかゝるたも、この同じ樣な病氣で、歌子は三つの室を變る〳〵泣きながら、回つて歩いた、病人と一しよに大きな聲で泣いた。

「可愛想に、親からもらつた立派な體を持つてゐながら、普通人間としての生活をさへしてゐればこんなに迄病氣で苦しみもしまいのに……。早くこんな女郞屋がなくなつて了へば好い」

作榮も肺病になつてゐる。それに平氣で客をとらせてゐる。本人も平氣で客に接してゐる。歌子は病人を見ると急に、一日も早くこんな稼業をなくして了へと云ふ心持が湧いた。

さうだ、この事だつた、私が今迄考へてゐた事は、それとなく皆に聞いてみ樣?。

歌子は三人の病人を看護しながら、張店にも出かけなければならなかつた、店はやつぱり寂しい不景氣な日が續いて、樓主の御氣げんは益々惡く、毎日ガミ〳〵と仲居や豆衆は當りちらされてゐた。店に座つてゐる娼妓は氣をくさらして、主人の機嫌の惡いのに、ビク〳〵してゐた。

十二時になつても客は四人程しか上つてゐない樣で、皆、二三人づゝ色々の話をしてゐた花扇と紫とが、紹ざしを刺しながら、話をしてゐた時丁度その側で、腹卷を編んでゐた小町は、花扇の話を引取つた。

「今の娼妓さんは之で樂になつたんだつせ、それに此家は嚴しい事は嚴しいけども亦、應揚な處もあるんだつせ、他の樓ではお茶ひいたら絕對に御飯を食べさせない處もあるのやけど、こゝの樓では、どんなに晩おそく藥所へ行つても食べられる樣に出しつぱなしてあるし、いつでもおうどんやおそばやつたら食べさせてくりやはるよつてナー、それだけでも他の樓よりは有難いと思はんならんわ」

熱心に編んでゐた腹卷の棒を一寸頭にさして油をつけてから下へおいた。小町は決して卷煙草を吸はなかつたので、長煙管で白梅の刻みを器用につめて火をつけた。

花扇はその煙りを視ながら、一寸小町に遠慮しながら云つた。

「それには譯がおますのやとナー前の代に何か、遺言があつて、そんなに御食だけは、やかましく云はらん樣になつたとかきゝましたわ」

「あんたそんな事、何處から聞いてきたんや」一寸制してみたが、此の女が知つてゐるのなら自分で話した方が好い樣に思つてすぐ語り出した、一寸帳場の方へ目をやつてから一段と聲を低くして、大坂時代から居る古い連中もこんな事は知るまいと言ふ顏付で。

實際知らない連中が多かつたので、皆が一樣に小町の語り出すのを待つた。隅の方で一かたまりになつて、さんざのろけを云ひ合つてゐた染奴もかつ彌も等しく耳をすました。

「先代、つまり今のお父さんのお母さんが生きてゐやはつた頃は難波新地が今の樣にお茶屋でなく、女郞屋と揚屋ばかりだつたんや、そこでこゝの家もやつぱり女郞屋

をやつてゐやはつたんや、その頃は家も餘り有福でなくもつと〳〵酷くつて今のおかあちやん（おかみ）なんか嫁に來て間もなくから引子のかわりをやらされて居やはつたそうや、そしてお婆さんが餘り嚴しいので幾度實家へ逃げて歸らうかと思つたか解らへんと私に話しやはつた事があるわ、その度に、おとうちやんに止められて辛抱してきやはつたのやと。元々、おとうさんが見染めて、どうしてもあの娘を嫁にもらつてくれなけりや死ぬと迄駄々をこれて貰ははつたおかあちやんで、若い時は、そりやあ別嬪さんやつたそうなー今でもあんな緻縹の好いおかあちやんやから、嘸美しかつたやらうかいナ、それでも若い時はそんな嚴しいお婆さんにかゝつて苦勞してやはつたのやで、何んでも話さへ解れば、決して無理な事は云ははらんのやわ。私等が何でも頼みに行けばキット聞いてくりやはるし、お父さんに話しにくい事でもないしよて物でもくりやはる人や。話は外へ行つたが、そんなて、そのお婆ちやんの生きてはる頃は娼妓さんも可愛想な程ひどい目に逢はされ通して、お茶でも引いたら、翌日一日御飯を食べさゝずにホーツておいて、御飯の番をして居て外の娼妓さん達にも自分でお給仕してやらはつたさうやわ、お母ちやんにさへ、庭で客を一人でも揚げない晩は、御飯を食べさしてくれんので、客のない晩は、お婆ちやんに内密でお父さんからお金を貰つてソットかくれて、うどんを食べてゐやはつた時も何度あつたか解らなかつたそうだつせ、」

それ丈け話して、亦しても亦一段と聲を低くした。そして、帳場の方を見る。熱心に聞いてゐた連中は聲がト切れたので、一様に小町の顔に視線が集まつた。充分聲が聞えない者は膝でにじり寄つて先を待つた。

「そしたらナー、お婆さんは死ぬ前病氣になりはつた時、御飯の食べられない病氣になりはつたんやと。いくら欲しく共一粒も咽喉を通らない病氣やそうナ、そして、『ア、米が食ひ度い〳〵』と云ひ通して死ぬ際になつてお父さんを呼んで『どうか、わしが死んだら、こどもしに御飯だけは充分食べさせてやつてくれ、どんなに賣れぬ人でも、御飯だけはひもじい目をさしてやつてくれるナ、いつでも食べたい時に食べさせてやつてくれ』と只そればつかり云つて息が切れたんで、それからは遺言によつて、こゝの樓では、あんなに、いつも臺所へ行けば御飯が食べられる樣になつてゐるのや」

話しが終ると一同はホットした樣に大きな息をついた。一言も話しをする者がなかつた。三分程も沈默が續いた時、染奴が口をきつた、

「姐ちやん向ひの西川樓も今でもそんなんやさうだんナー」

「さうお、西川樓が？」

「エ、やつぱりお茶ひいたら、その晩は御飯を食べさゝずにおくので娼妓さん達は、お腹が空いて寢られないから、何かしら買食ひをする、そうすると月末の支拂が困る、借金になると云ふ風で、月末のお拂は、小間物屋もお醫者さんのお拂ひよりも一番多いのは食べ物屋のお拂ひやさうだつせ、やつぱりお婆さんがおヒツの番をしてゐて、食べさゝん樣にしてゐやはるので、仕方なしに、色々のものを取つて食べるのやさうやわ、それも、お婆さんは足が惡くて、いつも床に付いたきりで動かれへんよつて、おヒツを枕元においておくんのやと」

「その婆が眠つてる時に、ソーツと行つて持つてくればいゝのにナー、あて（私）やつたらさうするわ」

花扇はいかにも腹立たしそうに云つた。

「そんな事出來まつかいナ、いつも床に就いてゐる樣な婆やつたら、眠つてゐても、すぐ目を覺ますやらうし、「もう引ける頃やナー」と思ふ頃は、キット目を覺ましてゐまんがナ」染奴の代りに小町が返答した。

「フーム、どこの婆も、婆は根性が惡いと定つてけつかるナー」

花扇ははき出す樣に云つた。

――今の世の中にも!!それは遠い昔話と思つて聞いてゐたのに、そんな人間の棲む處があるのか？それでも皆がまんしておとなしく働いてゐるのか――

歌子は疑はずに居られない事實

を聞かされた。そして、それ程されても、默つて働かされてゐる弱い人達、それはやつぱり自分達の仲間の友達だ、と思ふと、歌子はもう、どんなに叱られても好い、あのおそろしい顔付で睨まれたり、口ぎたなく罵られてもかまはない、強くなつて、そして、同じ樣に苦しんでゐるお友達の爲めにも、少しでもこの苦しみの輕くなる樣な方法を考へなければならないと思つた。

頁ちやん

「歌子さん、お客さま」

ア、今頃來なく共好いのに——

「頁ちやんよ、キツト」

「お樂しみ」

「後で行きまつせ」

皆が後からあびせるひやかしの言葉も今夜は別に何の感興も浮ばなかつた。

今の歌子の心には頁ちやんの事よりも今夜聞かされた四川樓の話の方が重大であつた。そして、折角、考へて居た「方法に付いて」の好い案を中途で邪魔されたと云ふ腹立しさに、プン／＼して階段を揚つた。階段の中程から帳場の樓主の顔も、おかみの顔もよく見えた、客さへ來れば、抑んで居る樓主の顔へ、唾でもかけてやり度い樣な氣持で、足音も荒々しく上つたので、おやぢの顔は急にゆがんだ。

「歌子の奴、此の頃、客さへあればプン／＼怒つてゐやがるナ」

心の中でさう思つたやうだ。

歌子は二階へ上つては來たものゝ、そして皆が勝手に、頁ちやんだ頁ちやんとひやかすので、ついその氣にはなつてゐたものゝ、張店の方の玄關口でなく、裏から上つたらしい客を、誰も見た譯ではなかつたから判つきりと、それを頁ちやんに定めて了ふ事は、早すぎると思つた。だが、この際、外の客より、まだ頁ちやんであつてくれる事を心中で祈りながら室の前迄來て急に足音を忍ばせた。室の中には、客と、仲居が入つてゐる。仲居が何か云つてゐる客の聲は聞えない。歌子は、ソツト、隙間からのぞいてみた。そして、安心した樣にすぐ中へ入つた。そこには皆が想像した通りの頁ちやんの水谷が火鉢の側に、長火鉢には不似合の形で座つてゐた。海水浴で眞黒になつた健康そうな皮膚に白い水兵の着る樣な服でニコ／＼しながら、仲居の話を聞いてゐた。歌子の顔を見るなり。

「しばらく、御ぶさた致しました」

丁れいに叩頭した。その言葉は客が娼妓に對する言葉とはちがつてゐた、

「おかへんなさい、避暑に行つていらつしたのやですつてね、いつ歸つていらつしやいましたの」

歌子が返じもきかない中に仲居が、言葉を入れた。

「歌子さん、もうお泊りにしといてもよろしやろ、もう十二時すぎてますから、十圓にしてもらつときますわ」

歌子は水谷を見た、いつも水谷のくせで、すぐ財布を歌子に渡すのであつた。渡し乍ら歌子に答へた。

「今日一寸歸つてきたの、そして兄さんに許しを受けてきたの」

「さう、でしたら泊りにして好いのネー」

「ぢやおしげさん、泊りにしておいて下さい」

おしげさんはいそ／＼と去つた。

「洋ちやん、僕今夜、ビールが飲み度いナー」

子供が欲しいものをねだる時の樣にせがんだ。歌子の本名は洋子と云つた、いつも歌子に子供の樣にあまえるのが、歌子は何んとなく可愛いと思つた。

「まあビール、何か嬉しい事でもあるの」

「ううん、さうぢやないの、友達とカフエーへ行つて僕、皆にビールを飲め／＼つて進められたのだけど、亦洋ちやんに叱られるからと思つて飲まずに來たので咽喉がかわいてしかたがないの、さう、一本で好いから許してくれる」

最後の言葉は賛意を求める爲めの力を入れて傾いて云つた。

「さうね、ぢや一本だけになさいネ」

優しい姉が弟に對する如くてあつた。

戀仲と云ふには餘りに子供らしさが有りすぎた、多くの男性に接して、男の裏も表も、知りすぎて

ゐる歌子にとつてはまだ二十一か二の數へる程しか女を知らない水谷では、段が違ひすぎる、物足りなさもあつた。が好きは好きであつた、他のどの男より一等好であつた。愛したかつた、色街の戀は、利害關係から「愛する」と云ふよりは「愛される」方をとつた。どんなにきらいな男からでも愛される事は、利益があつたから。然し、歌子は理屈ぬきで愛してゐた。戀とはちがつた意味で。

　ハニカミヤの亘ちやんは、帝大の三年生で休みに歸つた時はいつも歌子の處へやつてきた、父のない、兄と姉と嫂と妹の家族で、兄に連れられて始めて榮樓へ來た時、歌子の寫眞を見てどうしても、上るのだと云つて兄を手古摺らしてから、大ヒラでいつも兄へ斷つてやつてきた。兄は先づ第一に歌子に弟を托した。

「まだ勉强中だから、餘り心を亂さない樣にしてやつて下さい。每日來ても僕が責任を持ちますが、休みが終つて學校へ歸つたら、亦の休み迄はお互ひに手紙もやりとりしない樣に、まだ何しろ柔かなハートですからあんまり刺戟が多くつては學問の方へ影響するといけませんから」

　そんな事で亘ちやんは休み中はいつも一晩おき位にはやつてきた、それが榮樓中の評判になつて冬の試驗休みの前など手紙を歌子の許へよこすのに、洋ちやんの亘よりとか書いてあるので、「洋ちやんの亘ちやん、亘ちやんの洋ちやん」としていつも水谷が來ると室の中は滿員になつた。ハニカミヤの亘ちやんは室へ他の朋輩衆が入つてきて、色々なヒヤカシの言葉を浴びせかけると、眞赤になつて只ニコ〳〵してゐるばかりであつた。そして室の外へは一歩も出ないで便所へ行く時も湯殿へ行く時も二人切りでなければ行かなかつた。二人になつて話などする時はいつも定まつて友達の話、學校の話、それに歌子のまだ知らない樣な洋樂の歌を、いつも解る迄歌へるのであつた。熱心になつて歌へた。歌子は水谷に逢つてる時だけ娼妓對客としての感じが少しも起らなかつた、それが一番嬉しい事であつた。名古屋の男のすべてがいや娼妓を買ひにくる男その自體が、何を目的にやつてくるか？勿論、性の對照物として、存在するものかも知れないけれども、そして、それより以外に何ものもないと男は思つてやつてくるのかも知れないけれど、女として、娼妓にだつて、時には、人間としての心が動く、普通人より以上人間味を有してゐる。ずるい意地ぎたない、低級な話ばかりしかしない客の中に、無邪氣なこの靑年は歌子の一番可愛い靑年でなければならなかつた。時には姉になつてみたり戀人になつてみたりして慰められてきた、だが今夜はこの靑年獨りに全部の心を奪はれてゐられない氣がした、いつもはしやぐ歌子が、沈み勝な何か考へ事でも有りそうな態度になりがちなので水谷は尋れた。

「洋ちやんは何か今夜は心配事があるのネ」

「あなたにもそれが解る？」

「僕にだつて解るさ、洋ちやんは僕を子供と思つて何も話してくれないのだもの、いやになつて了ふれ。少し位僕にも話してくれたつていゝぢやないの、もしかして僕の樣なものでも役に立つ事があれば利用しても好いよ」

　歌子は一寸意外なおもひがした。今迄餘りに子供扱ひにしてきたこの男から、こんな言葉を聞かうとは思はなかつた。そして何となく賴母しく思つた、いつも主人に叱られてゐる事、今夜話に聞いた事等を話してみた。終ひ迄だまつて聞いてゐた水谷は、

「さう、洋ちやん達にはそんな苦勞があるのネー、そうしたら、僕の姉さんなんかまだ〳〵幸福だナー」

「まあ、この人は、そんなに今迄私を幸福だと思つて見てきたの、あなたの姉さんなんかと比較して」

「だつて、そんな洋ちやんの心配さうな顏は今夜はじめて見たんだもの」

　いくら世間知らずのお坊ちやんでも、餘りに單純すぎるこの靑年が、むしろ腹立しく思はれた。

「でも僕の姉さんは兄キが餘り遊ぶから、嫂さんが、いつも嫉妬をやいて喧嘩ばかりしてゐるのを見せつけられてゐるので、どこの男

も、こんなに遊ぶのか知らと思つてお嫁に行くのがいやになつてゐるらしいの、それで、たくさん、お嫁の貰ひ手が來るのだけれど、どこへも行かないの」

「でもそんな事位でお家に居られる丈け幸福だわ。私達を御覽なさい、金の爲めに家を出て、こんな商賣をしなければならないのですもの――だけど、こんな話をしてゐれば切りがないし、何んだか悲しくなるから、もうこの話はよしませうね、そして、ビールでも飲みませうよ」

先程から、運んであるビールもまだ栓がぬかずに、そのまゝにしてあつた。歌子はなれた手つきで、栓の上を栓ぬきで、二三度叩いてからぬいた。そして、盃洗にコップを一寸つけてから水谷にさした。一二杯二人で飲んでゐたがいつもの樣に面白そうな笑聲や外の娼妓の言葉で云へば、ハイカラなオペラの歌はいつ迄たつても聞えて來なかつた。

「僕がお金を自由に使へるのだつたらナ、第一に洋ちやんを廓から出して自由な體にしてあげるのに僕の財産は有るにはあるのだけれど、兄哥が保管してゐて、まだその高も知らしてくれない、僕が學校を出たら、すぐ洋行させるんだつて、だが僕はもう洋行なんかしなくも好い、それよりか、こんな處に苦しんでゐる人を出して上げた方が、意義があるナー

今洋ちやんに聞いただけだけれど、ほんとうにそんなに、體の弱い人達があるのなら、實際可愛想だナー」

「有難ふよ、私はまだ體が達者だから、少しはましだけれど、あの羽衣さんやかるたさんを御覽なさい、あんなになつたのも、皆、男が惡いのよ、あの人達だつて、始めつから體が弱かつたのぢやないの、だからあの人達の爲めにも、廓なんかへは、あんまり足を入れない方が好いのよ」

「だけど、亦たとへ僕の樣なものでも來なくなつたら、それだけ、賣れなくなるでせう、そしたら賣れないと云つて、樓主に叱られやしない、僕は洋ちやんの處へ來るよ、來てももう決してそんな、そんな體に惡い樣な事は決してしないからネー」

「エヽ、あなたの氣持はよく解ります、あなた一人が、……同情してそんな氣になつて下さつても……同じ事だ」

「ぢや、客に皆、そんな事は斷つて只遊んでだけ行つて下さいつて云つたら好いぢやない」

「そんな譯にはゆかないわ、何で來るか、何の商賣かつていはれますもの」

「アヽさう、男つてみなそんなものかナー」

「エヽそんなものよ、あなたはまだほんとうになんだから、そんな事はないけれど、三十五六から四拾越した人で、何か知ら性的に刺戟を求めてる人は――。そして金で買つてゐると云ふ事が第一に頭にあつて、こんな處の女は特種の、研究材料と思つてる人や、御自分の都合のよい樣に動かす事の出來る品物と間違へて居て、自由にならなければ、どんなにか口ぎたなく罵つたりするか……」

水谷の知らぬ範圍にまで話をすべらして了つて、ハツト氣がついた歌子は、そこで口をつぐんでしまつた。

「モーこんな話は止して、何か亦面白い歌でも唄ひませうよ」

話を變へやうとつとめて陽氣な聲で云つたのだけれど、水谷は唄ふ事なんか出來そうでなかつた。

「ではお湯へでも入りませうか」

「エヽ、でもネ、一寸財布をしらべてお金が餘つてゐたら、羽衣さんとかるたさんに何か食べさせてあげて下さい」

「マア有難う御座います、よく氣がついたのネー、かるたさんも長の病氣で休んでゐるので、嘸よろこぶでせう、ぢや何か取つてやりませうね」

歌子は立ち上つて、普通の客に出すゆかたでない、水谷にと思つて拵しらへておいた浴衣を箪笥から出した。すなほに立つて、服をぬいだ水谷の、若々しい運動に鍛えられた丈夫さうな體の後から、ゆかたを着せかけた

「一寸歸りにかるたさんを見舞つてやりませうねー」

水谷は返事の代りに、一つ大きくうなづいた。彼としては勇氣を出して一生懸命でかるたの室へ入つた。

「かるたさん、艮ちやんが來たのよ、お見舞に」

室の電燈は、木浦が自慢する如く、明い方と暗い方と兩方つく樣に出きてゐた：スキッチを一寸押せば、暗い方は、ハイカラなアンドウに暗く燈る樣になつてゐた、かるたはいつもその五燭位のアンドウの方を好んでつけてゐたので、二人が入つて來た時、明るい方へ燈けかへて蒲團の上へ座りながら、

「おこしやす、どなたかと思ひました、久しぶりに見えましたんどすなー、毎日歌子はんが待つてはりましたんどつせ」

御世辭ばかりでなく、さう云つた。水谷は只笑つてゐるばかりで何と返じしてよいか分らないらしくモヂ〳〵してゐた。

「まあ一寸お座りやすナ、きたない室どすけども、たまには私の室へもきてくりやはつてもよろしふおますやらうナー」

「今ネ、艮ちやんが、あんたも長い病氣で、忿屈だらうから、一寸寄つて見ようかと云つたので、來たのよ、それから、今夜は少し、お金があるから、何かかるたさんの一番好きなものを取つてあげようと云ふので、それも聞きにきたのよ」

「オーキニ、もうそんな心配はせんとおいとくれやす、いつも頂くばつかりやよつてに、それに私の病氣は、いつもの事ですよつてにナー」

「あのあんたの好きな、コキールでも云つておきますわネー」

「エヽもうどうぞそんな事、ほんとに、よろしふおますわ」

かるたは遠慮らしく辭退した。

「好いわよ、あんたもたんとひやかしてくれるのだから、うんとおごつてもらつといて下さい」

冗談に輕く云つた。水谷は何も話す事がなくていよ〳〵手もちぶさたにかしこまつて座つてゐるので、歌子は氣をきかして立ちかけた。

「艮ちやん、歸りませう、それに餘り長く居てあんまり二人の仲のいゝ處を見せては病人にも惡いからネー」

二人が室を出るとかるたは淋しそうな顔をして見送つた。

「では後で伺ひますわ」

靜かに戸を締めて出た。室へ歸つた歌子はすぐ赤、隣の室へ顔だけ出した。

「羽衣さん、何か食べない、餘り毒にならないものなら少しは食べないと、體がよけいに弱るから、今ネ、私の方で注文するから、何か欲しいものを 云ひなさいな」

晝から少づゝ痛みもとれて、大分元氣になつてゐた羽衣は、人一倍勝氣な故か、痛みが去つて後はいつもケロリとして、活發に話をした。

「オーキニ姐ちやん、艮ちやん來てはるのやナー、さつきから、どうも艮ちやんらしいと思つて聞いてゐましたんや」

靜かに、上を向いて寢てゐると羽衣の白い顔が、絽の赤い模樣の夏ぶとんとシツクリと合つて、よけいに美しくみえた。一寸あまえるクセのある羽衣は、子供子供した言葉で。

「姐ちやん、あて(私)果物が食べたいの、それから洋食も」

「うむ、食べなさい、洋食はあまり油つこくないものにしてネー」

「エヽ何でもよろしふおます」

「さう、そしたら、私の方で見計つて注文しますよ」

「えゝ姐ちやん、お願いしまつさ」

「ぢやさう云ふ事にして、少し起れる樣だつたら、ソッと遊びにおいでよ」

歌子は室で淋しがつてゐる水谷の事を思つて、室の中へも入らずに、そのまゝ引かへした。そして、それ〴〵の注文を書きつけてベルを押した。

「お呼びですか」

豆衆が外から聲をかけた。

「はあ一寸入つて下さい、之を帳場へ通してネ、帳場は何か御勝手に注文して下さいつて」

いつも食べ物を注文する時は一人前よけいに取らされて帳場へ下さればならぬのが、この樓の習慣であつた。注文品の來ぬ迄を二人は湯へ入つて待つ事にした。もう二時に近いといふのに、張店には、歌子が揚つてから、客が三人連れの一組と一人客の二組揚つた限りで、十三四人は殘つて座つてゐた。宵の七時から張店に座りつかれて

居眠りしてゐる者もある、饒舌りつかれて足をなげ出してゐる者もある。まだかるたを取つてゐる連中は、源平に別れての勝敗で一生懸命になつてゐる。樓主はこのかるたと講談本を店で讀むのが一番きらいであつた。それは、彼女等が、夢中になるから。客が揚つても、その時の氣持が、かるたに敗けた時は客に當られるから、講談本もその時の小說に依つて彼女等の心理が、客に對する商賣氣が無くなると云ふのであつた。それでも、長い店張りの所在なさに、大目にはみてゐるが、何か事件が出來ると店張りで本を讀む事と、かるたを取ることはいつも叱言に入れられてゐた

發育しきつた立派な體を持つ彼の脊中から腕へとたん念に流してやつた、そしてなんとなくそのガツシリとした體の中に、強つかりとした×××××なつた、歌子は只無言の中に××××××××。水谷も亦無言のまゝ腕に×いた

その時、足音がして客と娼妓の話をしながら、湯の硝子戸の外へ立つたけはいがした。水谷は慌てゝ湯の中へ飛び込んだ。歌子は入つてきた浮舟と話しをしてゐた。

浮舟の客はすぐ出て行つた。歌子も水谷に出る事を促したが、湯槽から一寸に出さうにないので、浮舟と一緒に脫衣場で長襦袢を着て待つてゐた。水谷はやうやく出てきて、着物を引かけるとソソクサと室へ歸つて了つた。

「あんたは暑いのに、あんなにいつ迄も入つてゐて、どうしたの」

「だつて洋ちやんが、あんな事するから――」

二人は笑つた。けれど歌子はフツト考へた。

自分達の方がかへつて羞しい樣な氣がして。何の欲求もない只無意識の中に男の體を抱く丈けにすぎないのであつたが、血の氣の多い若い青春の男である、無關心な筈はなかつた、けれど、彼は、脊に話された事・體の爲めに惡い、病氣になると云つた言葉を思ひ出して、つとめて、〇〇をさけてゐるのであつた。つとめて平氣を裝つてはゐるもの丶、平氣で眠れる筈はなかつた。歌子も常習として〇に入ればすぐ〇〇される、そうして機械的な勞務が終へて洗滌に行けば、自分の役目が濟むのであるから、……歌子から催促した。始めは拒んでゐたが……

朝の迎えも終つて、お午迄の花をつけておいて水谷は、歸つた。かるたと新高は水谷の歸るのを待つて室へ入つてきた。

「昨夜はおたのしみ、」

二人は一樣にそんな言葉を歌子に浴せかけながら、まだ、取り亂したまゝの室の中へ座り込んで了つた。

「何か好い話はないやらうかナー私も大阪へ歸り度いわ、家の人とも一度逢ひ度いし」

「朝からおのろけだつか?」

かるたが新高にさう云つたのを歌子は笑つて聞いてゐたが、急にまじめな顔になつて、小聲で云ひ出した。

「之はほんとうにまだ內證にしておいて下さいよ、私が考へついた事なんだけれど――」

歌子は思ひ切つて話し出さうとしてゐる。

「私も一人前に此の頃チョイ〱叱られる樣になつて少し人間らしく考へる樣になつたのよ、人間には反抗心が出るからネー、私も今迄一年餘りこの榮樓で働いてきたが、その間に、人がよく呼びつけられて叱られてゐるのを只人事として見てゐたのをすまないと思つてゐるわ、それに古い連中に色々の昔からのこゝの家の事を聞かされてこゝの家の惡い事もたくさんつかんだの、さうして、何んとかいゝ方法を皆で考へ出さうと思つて、昨日からもしきりにそれを考へてゐるのだけれど」

「さうどんな事?」

新高は、バットに火をつけてうまさうに一ぷくすつてから、改めて歌子の顔を見て先をうながした。

（つゞく）

× × × ×

講演會報告

女人藝術の仕事について——現代生活の思想、藝術、實際のあらゆる方面に、時代の尖端を歩かうとする女人藝術の行き方について、一概に輕はずみなお先走りと見ないで、深くその本質にまで理解を透徹して貰ひ度い。眞實に私たちの仕事を愛して見て下さる方には素晴らしく自由で朗らかで、進歩的である。同時に、一面また大地をしつかりと踏みしめてゆかうとする努力を認めて貰へるでせう。破壊と、建設との過渡期に生きる女性の——人類の——悩みは、決して簡單な相で現はせるものではないのですから——。(素川絹子)

ジユール・ロオメンのキネマ・シナリオ「ドノゴオ・トンカ」は、一都會の發生を科學的に構成しそれに加る社會への建設的、積極的な意志を持つてゐる。

これは近來の文藝作品の中で、最も顯著な様式(スタイル)を持つものであるといふのは、心理描寫や情緒を飽く迄排撃して、これに代るに科學的要素を持つてゐることだ。

近來の文藝が科學的要素を含有する事が多くなつて來た。例へば、潜在意識、醫學的要素、經濟的方面、力學的要素等々……に立脚して來た。この科學的要素も、次第に力學が重要性を帶び、これが藝術を支配する様になつて來た。何故に文藝が力學的に傾いて來たか。それは我々の生活が機械に支配され、機械の美感を生じて來たからだ。そこで、文藝に於てももはや心理描寫や情緒を盛る器は顧みられなくなつた。代りに、力學的要素を含む文藝が擡頭して來た。云々(中本たか子)

理窟のないほがらかな人生に生きたいものだ。それは野を走る獸のやうにも、空を飛ぶ、鳥のやうにも、清純で、直情でありたい。

昔から、「詩をつくるより田をつくれ」と云ふ言葉があるが、私は田もつくり、詩もつくつてほしい。人生から詩が忘れられたならば、あとには、ヤスつぽい人生が殘つてしまふばかり、朽ち果てた浮世のオーケストラを聞いてゐると、あらゆる階級人を抹殺してしまひたくなる。(林芙美子)

現代に生きる人々は凡て何等かの意味に於て不安であり憂鬱である。そしてこの不安、この憂鬱から様々な運動が生れる。そして凡ての人々が現在の人間の生活をもつとよくしようと努力する。殊に普選が實施せられてからは多くの人々が政治に依つてよりよき生活を來らせようと考へるに至つた。併し乍ら人間のこの不安な、憂鬱な生活は姑息的な制限を伴ふ制度の改革などで一掃されるものではない。卽ち、いかなる制度と雖も、それが强權に立脚してゐる以上は、吾々のこの不愉快な生活はいつまでたつても、どこまで行つても無くなるものではない。强權を基とする政治はある一部の人に功名を遂げさせるためのもので、一般平民勞働階級に何の幸福ももたらすのではない。(望月百合子)

中府での『時代と文藝』松本での『文藝運動の意味』上諏訪での『新文藝の情熱』この三つの講演で、私は大體次の内容を盛つたつもりである。現在、時代は力を情熱を必要としてゐる。社會運動の方に於いても諸文藝運動についても必要とされてゐるものは强き生活力とひろまぬ態度とである。又、人と人とのかたき結束である『ジエルミナル』中の主人公の如き熱望的活動によつてはじめて多數者のダンタイ的行動は進出的コースをとる。天才、もしくは有爲の人材はいつ出現するか、どこから現れるかそれは分らぬ、しかし熱望的諸運動は、たしかに好箇の機運をつくり得るこの意味に於いて、『女人藝術』の運動を注目し理解し協讃してほしい云々。(生田花世)

讀書力の深い土地に來て内容の乏しい漫談をするのは自分の迂愚を語るやうなもので、せめて劇の女の話ぐらゐ考へておけばよかつた。信州に緣のある劇の女としてふと思ひ浮ぶのは八重垣姫とか濡衣とか、山本勘助の妻おかつとかである。そのいづれもが貞節——古い意味のたゞいたづらに從順なのではなく活々した女だが、それは都會劇場の作者の空想によつてつくられた女である。もつとこの郷土の、その土地の息を呼吸してゐる女人の魂を知りたいと思ふ。で、男に代つて語つてもらつたより、女人自らが言つたものを知りたい。あの情熱の女和泉式部でも、才人清少納言でも彼女らは自ら言ひ自ら訴へて、いつの時代にも生々と人の胸に生てゐる。生活を知らないで生活は書けない。女人は女人自身をみづから語るべきではないか。(時雨)



白木蓮

松下文子

白木蓮の下
梢　晴れて
地は　あかるし
花　噛（かむ）りつゝ
捨られし人
風にふかれぬ。

追憶

光りを一條とめた
ロマンノーズ、
豐な頰、
ベルベットの感觸　鮮な頰。



濃い眉と
黑百合の蕊のやうに、
反つた睫の下には、
黄色く熟れ切つた心臓と
堅い反省の
押し合つた目が放心してゐる。

この若い學者の
プロフィールの畫面へ、
牛乳と枯草と
クレオソートの匂ひを重ねると、

『明日のないニヒリストだ
氾濫した炎の中へ
心を　くべて失へ』

彼の口唇は口唇の側で熱するのです。
山葡萄のやうに甘酸かつた。

その時の耳、
耳は一房の櫻(はな)の蕾。



やがて肩の上に落ちかゝりました。

鳥の羽かげが
額をかすめると、
口唇は　あはてゝ、
シダの繁みに、かくれて失ふ。
鼻と頰は瀬戸物のやうに
冷く決心します。

『バラの塊りを蹴散らせ。
有るかも知れない眞理のために』

つき出されて、
寒い月夜を飾りました。

笑ひです。
彼の笑ひは、さう、
畫布へ、
アネモネの花を
投げて、投げて下さい。
繋いだ花の糸を
搖さぶつて下さハ。



虹が降る。
いきなり、花中に飛び込んだ。

蜥蜴の尻つぼのやうに
跳躍する眉を見上げたつけ。
腕の中は明るかつた。

笑ひの裏は憎悪です。
ナイフの尖のやうな目
黒い蜘蛛の足が二本
額をつかむでゐる。

あげ業蝶と、からす蝶を、
頰に叩きつけてやれ。
青黒い口元には、
やもりの顫律を匂はせてやれ。

愛は地に砕けました。

けど、このプロフィールは、
今は、そして來年も、
金蓮花と矢車草で
飾つてあるんです。

國境を越えて

―若きコムニストの赤露通信―

菊池小夜子



第一信

同志和田龍子女史

一九二×年×月十七日の午後八時三十分、私は東支鐵道の起點滿洲里の國境停車場にほど近き一同志の隱れ家で、うす暗い石油ランプをたよりにこの第一信を書く。

私がどんな思ひで、モスコー行のあの秘密命令を受取つたか、おそらくはあなたといへども理解しなかつたでせう。正直なところ、私はまつたく蘇生の思ひで、あの危險な、また重大な任務を一も二もなく甘受したのでした。勿論、私は十一日の深夜同志Mがあわたゞしく私の隱れ家へ飛び込んできて、

「今夜警察の樣子が變つてゐる。また檢擧をやるかも知れない。それに黨の命令で、君はモスコーに行かなければならない。だが今夜中に旅券を手に入れることはむづかしいから旅券なしで、今夜にも東京を立つてくれ。……これがモスコーに出掛けるのに必要な書類と金だ。しかし、君の身邊は今誰よりも危險だから十分注意してやつてくれ給へ。」

と、突然この仕事をおしつけられた時、私は自分のモスコー行が危機に立つ日本の黨の運命を左右する重大な任務と意義あるものであるといふことは十分知つてゐたのだ。そして、M同志がいふやうにこの仕事の遂行者が誰よりも危險な地位にさらされるであらうことは私にも明白なことだつた。それに私は自分がはたしてこの重任を引き受ける用意があるか？……若し用意がないならもつと適當な人物にゆづつた方がよいかも知れない。と思はないでもなかつた。

しかし、今私は正直に白状するが、スパイの追跡を逃れるため三日

とたたず居所を變へて轉々とする一年に近い陰慘な生活から、完全に救はれるといふ希望が、なによりも私をよろこばせたのでした。といへば、あなたは私を意氣地なしと笑ふであらうか？しかし、砂を噛つても戰ひ拔かんと、殘壘を死守する勇敢な同志の、日夜その陣列から、後から後から引き去られて行くのを見ることは、われわれにとつて事實淋しいことに違ひなかつた。だが、それにもまして私を不愉快にさせ、いらだたせたのは、過ぐる三日の朝、自分の機關の同志が二名までも引き拔かれたことであり、どうしても自分の身邊にスパイが入り込んでゐるとしか思はれてならない數々の事實であつた。

私は活動的な同志TとYの引き拔かれて行つたその夜から、指導部の誰か一人に會ふのでさへ百倍の苦心をしなければならなかつた。私はだんだん病的な猜疑心のとりことならざるを得なかつた。それからといふものは、私は誰を見てもスパイだと思はれて仕方がなかつた。私は後に誰かゞ立つてゐたり、傍を誰かゞ歩いてゐたりすると、決して自分の隱れ家に入らうとはしなかつた。私の神經はすつかりいら立つてしまつた。

×月八日の夜、私は市街でスパイの包圍と追擊に逢ひ、今少しで捕へられるところであつたので、私は外部との連絡をまつたく斷念し、あなたが斡旋して下さつたあの隱れ家に閉ぢこもらねばならなかつた。活動的な黨員にとつて、黨生活からの隔離が一日だつて耐へられることではないといふことは誰よりもあなたの御承知の筈です。私は狂人の樣に黨指導部か誰か活動的な黨員との聯絡をつけようとあせつたが無駄でした。

トルストイの小說ではないが「生ける屍」としての生活は、なるほどローマンティストにこそふさはしいものであらうが、コムミニストにとつては決して有難いものではない。

この焦燥と陰慘とから自分を救ひ、あまつさへ名譽ある大任遂行のよろこびを與へてくれる黨の命令を、かうした復雜な氣持から、私がよろこび勇んで引き受けたのになんの不思議があらうか？……要するに、私のこの仕事と出發とが第三者にとつてどんなに英雄的に見えようとも、主觀的な立場からいへば、そんな昂奮的なものでも英雄的なものでもないといふことを、いまあなたには私の正直な告白によつてきつと理解して下さるでせう。

滿洲里の旅舍にて

同志　青木　賢造

第二信

同志和田女史

×月十八日

私は冒險的な旅の疲れで、翌日の日暮近くまでぐつすりと寢込んでしまつた。驚いて飛び起きてみると、すでにパンと牛乳(モロコ)と腸詰肉(カルバス)

が私の枕許に置かれてあつた。私はあわてゝ食事をすますと、同志Lがやつてきて手をさし出した。

「君に關する電報はすでにモスコーに打つた。七時頃になると、一人の同志が馬車で君を迎へに來て、いつしよに國境を越す。ここが滿洲里で、ここが露支の國境線だ。君はここを越してマチエフス驛まで行き、そこで汽車に乘るのだ。」

と、同志Kは、壁上の地圖を指先でたどつて示しながら親切に敎へてくれた。そして自分はこれからある會合に行かなければならぬからこれで失敬するが「君は國境で珍らしくも日本婦人同志Eの出迎えをうけるであらう。」といひ足した。「日本婦人の同志Eとは誰のことだい？」と、私はすぐさまききかへしたが、彼は「逢へばわかる。」とのみ言ひ棄てゝ、また握手して室を出て行つた。

婦人同志E？　あなたはこの婦人の本名をご承知であらうか？私は自分の知るかぎりのすべての同志婦人の名を頭に浮べてみたが、Eと名乘る婦人を思ひ出すことはできなかつた。

そこへ一人の見るからにキビ〳〵した白面の靑年が入つて來て、まづ黨員證を私に示した後、ロシヤ語と英語と半々で何か言ひながら、快活に私の手を握つた。そして重い私のトランクをさも輕々と兩手に持ち、私の出發を促すのでした。

靑年同志は外に待たせてあつた馬車の中から大きなシユウパをもち出して私に着せ、古い大きな黑の襟卷で私の頭から頸まですつかりくるみ私が馬車に移ると毛布でさらに脚の方まで包み、左右の腕を互ひに組んで、いかなる動搖にもふり落されない用心をした。そして、彼はポケットから二挺のピストルを取り出して、一挺を私に渡すと、自分は右手にピストルを握つて、萬一の場合に備へた。馬車は全速力で走り出した。

老練な馭者は頭上に鞭の輪を描いてパチリパチリと烈しい音を立てる。二頭のたくましい馬はものに狂つたやうに立て髮をなびかせて疾驅する。馬車は飛ぶが如く、寂しい夕ぐれの滿洲里の街を走り拔けて、遂に漠々たる曠野にさしかゝつた。

馬車が全速力で進行するにつれ、左右に展開するは雪に蔽はれた國境の連山、前途は茫々たる平野、文字通り人煙を絕つて、人の影、犬の影さへ見えない。道ともわからぬ路は高く低く、凹地の水たまりは凍結して、馬車の重い轍の下にメリ〳〵と音を立てる。北滿の風は身を切るが如く、車輛のはね飛ばす砂塊りは、忽ち馬車を蔽ひ、視界を奪ふ。

一時間も走らせたと思ふ頃、丘のやうに小高くなつてゐる平原の上に、ニヨッキリと大きな月が蒼白い顏をのぞかせた。馬車は美しい國境の月光を浴びて繪畫のやうな平野をはてしなく走り續ける。

しかし、私も同乘の靑年もヒシ〳〵と迫る寒さに身をふるはすのみで一言の言葉さへ交へない。たゞ時々顏を見合はし微笑するのみ、さらに堅く腕を組み合すのみであつた。それから幾時間走り續

けたであらうか、私は突然不圖月光の下に、前方から赤軍三騎、馬を飛ばして近づいてくるのを見た。

同乘の青年同志は、先頭に立つた一人に一通の書つけを示し、何事か語ると、馬上の赤軍士官は、後に續く若い二人をさしまねいた。私は驚いた。その一人は支那の同志Kであり、他の馬上の婦人は、まさしく日本××黨の婦人鬪士竹内野枝子であつた。

滿洲里を立つとき日本婦人同志Eといひ、逢へばわかるといはれた婦人こそ、五年の昔、まだ若かりし私の胸を燃やさせ、しかも風のごとくいづこともなく姿を消した彼女の軍裝であつた。

私はしばし言葉さへ發することができなかつた。彼女は私の驚きをみてとると、ニッコリと微笑み、靜に馬から下りた。そして私の方へ手をさしのばした。私は不覺にも興奮し、我知らず情熱をこめて、彼女の手を堅く握り返した。他の同志達はこの珍奇な會合を豫期せるもの〻如く、溫い好意の微笑を送るのみで、誰一人聲も立てない。

彼女は乘りすてた馬を同乘の青年に渡すと、こんどは彼女自身代つて同乘した。馬車は三騎の赤軍兵士に、その前後を守られて猶も先へ先へと走りつゞけた。

車上の二人も無言であつた。

私はあまりにも突然の出來事のため、適當な言葉さへ見出し得なかつた。

間もなく、遠くへ一軒の小舍が現はれ、鐵道の線路も見えはじめた。それは八十六驛と稱して露領最端の國境停車場であつた。

赤露の最端八十六驛にて

青木賢造

第三信

一九二×年×月十九日

われらの一行は、熱い茶と黒パンで腹をこしらへ、暖をとるため、馬車を下つて八十六驛の小さな電信室に入り、骨の髓まで冷えきつた體を溫めた。

赤軍兵士と同志青年は、身をふるはせ、蒼褪めさへしてゐる私の顏をのぞき込んで。

「寒い(ホロードナ)か？」

と聞いた。私が「ダア、ダアー」と答へてうなづくと、一同はどつと、笑つた。

彼女と私はそのとき始めてはつきり口をきくことができました。

「あなたに關する電報は昨日モスコーから受取りました。その時同志Kは青木と名乘る青年こそ、あなたの假名であると知らせてくれました。あなたも隨分變りましたわね…わたしはあなたが大會に列席し、無事に大任をはたされんことをこころから望んでゐます。それで、わたしも國境越へのあなたの警護隊に加はつたのです。」

他の同志達は、二人の會話がなんのことか解らぬながら、時々二

人の顔をみては愉快さうに笑ひました。そして傍らのテーブルで、電信機をカチ〳〵いはせてゐる一技手となにかしきりに打ち合せをしたり、黒パンを噛つたりしてゐた。見ると、壁の上には、赤軍と×××の軍隊とが戰つてゐる十月革命の繪や、バリケード内で金屬工が鉛の砲彈を鑄造してゐるパリ、コンミユンの石版畫が飾つてある。そして、赤星の章のついた兜形の軍帽に、赤い短い肋骨のついた外套をきた赤軍兵士が、電報を受取つて出て行つたり、忙しさうな樣子でなにか報告してゐたりした。窓から見える八十六驛の屋上の赤旗は、自分が疑ひもなくすでに勞農ロシアプロレタリアの祖國へ、一歩足を踏み入れたことを語つてゐる。

あなたは同志竹内野枝子のあの勇敢な姿を忘れはしないでせう。彼名の名はいまも日本の勞働者と勞働婦人とに親しいものとなつてゐる。彼女は××紡績工場に働いてゐた生粋の勞働婦人でした。白色テロの犧牲となつた革命的勞働者を父として、その血を享けつぐ彼女は、生れながらに革命的でなければならなかつた。

彼女は當時W大學の學生ばかりで組織されてゐたわれ〳〵の研究會に、×××新聞社で活動してゐた同志KやHと、時々その研究會に出席しました。彼女はいつでも非常に眞卒な魅力ある同僚的素朴さをもつて、みんなを愉快と生氣との中に引き入れて行くことに妙を得てゐました。それで若い革命的情熱に燃えてゐるその學生達はこの明敏な、やさしい、しかも誰に向つても決して、その革命理論と實際の問題における偉さを鼻にかけるやうなことのない彼女に好意と尊敬とを抱かずにはゐられなかつた。彼女が出席した日の研究會は、いつでも一層緊張し、昂奮し、彼女の出席の重なるごとに異常の進歩をみせました。彼女は研究會の後で、よく二三の同志の眞面目な私的生活やその家族との間に起つた事件を紹介し、それについての鋭い批判を加えました。わけて、彼女はわれわれ學生の中に多く取り殘されてゐる小ブルジョア的精神や生活樣式を容赦もなく曝露し、その反省と揚棄を實踐においてなすべきであると主張しました。私はいまでも男のやうな力强い言葉と情熱とをもつて語つた彼女の生氣ある言葉と姿とをよく憶えてゐます。

「家族制度といふものは元來ブルジョア的なものです。わたし達はこの家族制度を破壞しなければならない。家族を破壞せんがために家庭を破壞し、革命に成功せんがために、婦人大衆をその家庭から追放しなければならないでせう、婦人大衆を家庭から追放するといふことは家庭奴隷としての彼女等を解放する第一歩です。しかも、婦人を家庭から追放するといふ無慈悲な仕事を、資本主義がいま容赦なくなしとげてゐてくれます。」

「家族の手に成長せる子供は、多くの場合非社會主義的です。だから、兩親の愛は百害あつて一利もない。わたし達は青年に向ひ、婦人に向つて、みづから進んで勇敢にプロレタリアの階級を擁護する革命的意識を有する父母を敬愛することのみ教へなければならな

い。階級意識を持たない兩親は却つてコムニストたる子女からよろしく敎育さるべきであらう。しからざる場合は、彼等はその家族から決定的に別れ、家族を黨と置き換えなければならぬ。」

「資本主義社會にあつては戀愛もまた、その自由と歡樂とを確保することはできない。戀愛の形而上的價値を認めないわたし達は、同志的愛と結合のほか戀愛なるものを否定しなければなりますまい。…勿論、妻たり、戀人たる以上に、同志として堅く結合され、しかも、その同志的結合が、かへつて解放運動を益する場合にのみ、わたし達も戀愛と性欲とを享樂することが許されもしませう。しかし、多くの優秀な同志が、日夜わたし達の陣列から奪ひ去られつゝあるとき、それもまつたくオトギバナシにも等しいはかない慰めに過ぎなくなるでせう。」…E.T.C.

かく語り、かくいきどほれる彼女のあの魅力的な瞳の輝き、顏に流れる一沫の暗影——私はいまもはつきり腦裡にその面影を描くことができます。

それから間もなく、私は彼女に對する自分の苦しい胸中を打ち明けました。しかも彼女はまつたく無雜作に、その健康な肉體と潑剌たる情熱とを、一夜なんの遠慮もなく私にゆだねたまま、その翌朝いづこともなく姿を消したのでした。彼女のその夜の仕業は、私にとつても深い謎でした。『性的生活の放肆はブルジョア的であり、崩壞墮落の現象である。プロレタリアートは擡頭しつゝある一の階級である。彼は麻酔への、或は刺戟劑としての酒やアルコールによる泥酔に優るものを、その階級的地位から、共産主義的理想から、即ち、鬪爭への最も強い刺戟として受取ることができる。』と、かく豪語さへし、超然としてわれわれの性的苦悶を打ち眺めてゐた彼女——その彼女の自由奔放、ほしいままなる一夜のなまめかしき姿態と行動とを理解するに私は非常に苦しみました。私は自分にボルシエビーキの鐵則の重さを引き受ける用意ができた頃、彼女の大膽不可思議の行動をおのづから會得したのでした。

私は彼女が部屋を立ち去るとき、

「あなたがもしも自分の意志と生活とを、黨全體の意志と運命とに從屬せしめるようになつたら、わたしはあなたと結婚しないものでもありません。」

といひ残した「ことば」も、その後私はプロレタリア運動に全身的に投じてから、黨の激務に追はれ、すつかり忘れて居りました。

約一時間餘り、電信室で休んだ後、私と彼女とはふたたび馬車に身を投じ、やはり前後に赤軍兵士の護衛をうけながら、闇を冒し、寒風を衝いて進みました。深夜の寒氣はいよいよきびしく、道の凹凸はますますはげしく、車體の激しい動搖のため振り落されまいと互に組んだ左右の腕は、思はず堅くなり、二人の脚は、包まれた毛布の中でほとるやうにさへ感じました。私は彼女の自分への最後の

「ことば」を思ひ出したのです。

月を失つた馬車は、たゞ老練な馭者に全身を托して、茫々たる曠野を走るばかり、三名の赤軍兵士の黒い影のほか、私達は闇に眼をすえるのみ。

「わたしがあなたとのあの「約束」を、いま果たさないとしても、もはやあなたは咎めはしないでせう。ソヴエツト・ロシアはそれ以上の愉快、自由な生甲斐ある生活をあなたに與へてくれるでせう」

「日本の黨は、いま非常な困難の下に立つてゐる。戰鬪的コムニストを死刑に處する殘忍なる悪法によつて悩まされるコムニストの困難なる立場を田中政府の攻勢と暴壓と迫害とに力付けられつゝ攻撃する左右兩翼の社會民主主義者――わたし達は彼等を敵として、プロレタリア前衛の意志統一を具體化せる現實的協力をもつてあくまで黨組織の再建のために努力のすべてを捧げませう。……わたしはあなたがコミンタンの決議と指命とを得て無事に日本の黨へ復歸されるやう命をかけて守るでせう。」

彼女は昔ながらに革命的な勞働婦人でした。彼女は車上で、かういつてさらに堅く私の腕を脆し、厚い手袋をつけた左手で、私の手を握りしめ、歸途をマチエフスカ驛まで必ず出迎え、再び國境越えの警衛に加はることを約束いたしました。

それより行程約一時間にして、やうやく一行はマチエフスカ驛に安着しました。わたしは入國者検査の勤務に當つてゐる同志の家に宿をとることになり、まづペエチカの傍に椅子を持ち出し、體を温めながら、大會列席のため滿洲里から來る同志二名を、明日こゝで待ち合せることや、その他種々の打ち合せや、親切な歡へを受けた後、彼女をも加えた一行に分れねばなりませんでした。

私が彼女と明日の面會を約して、埃りに塗みれた顏や手を洗ひ、熱い茶を飲んで、綿のやうに疲れた體を寢床に投げ出すと、窓の外に東の空のほのぼのと紅をさしはじめるのが眺められました。

マチエフスカ驛にて　青木生

第四信

同志龍子女史

×月二十日

それから五時間ほど寢たであらうか？　目を覺ますと、狭い室には、他に數個の粗末なベツトが竝び、その上には勿論もう誰もゐなかつた。室の一隅には、マルクス、レーニン、トロツキイ等の寫眞が飾つてあつた。赤星章のついた軍帽が銃の上に忘れられて掛つてゐた。

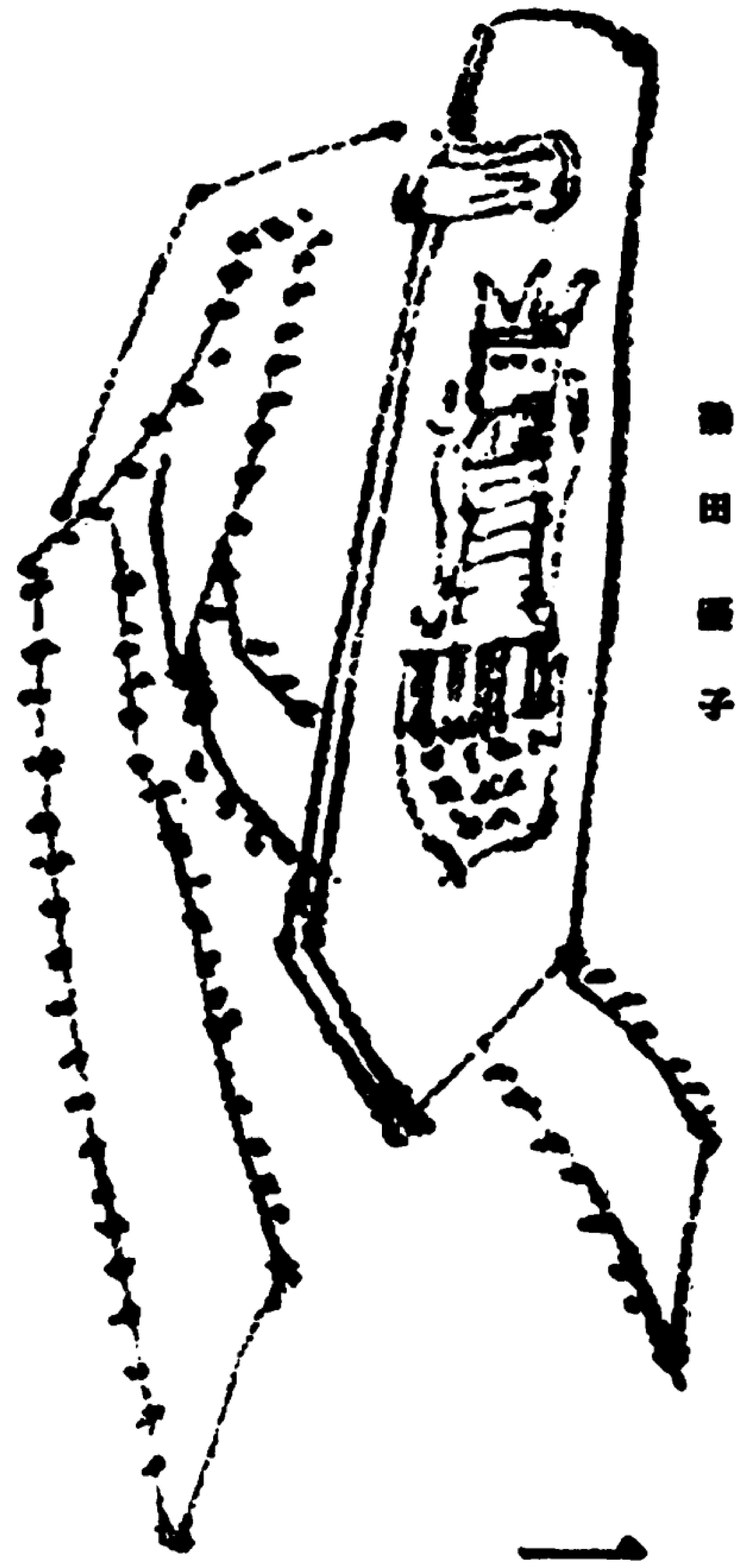
やがて、二婦人の手でさやかな朝食の卓が設けられて、折柄訪れた彼女も加へて、婦人三名、主人の青年 赤軍兵士二名と、久しぶりでにぎやかな卓をとりかこんで、茶と黒パンとカルパスとに舌づゝ

みを打つて晝食をすませた。
　しかし、食事後、私も彼女も目の廻るほど忙しい仕事を持つてゐたので、勿論二人は靜に語り合ふなどといふ贅澤な時間は持ち合さなかつた。
　私は滿洲里から來た同志と逢つたり、日本の黨へ安着の報告を送つたり、長いシベリヤ鐵道で不自由をせぬため、色々な品物を買ひ込んだり、荷物を整へたりしなければならなかつたし、彼女は赤軍兵舍へ出掛けたり、モスコーに長文の電報を打つため驛に行き、私のキップを手に入れて來たりした。
　出發の午后六時になると、三名の同志は、私のトランクを持ち、赤軍兵士は銃を荷ひ、三名の婦人は私と竝んで停車場に出掛けた。驛には早や滿洲里や上海の同志が私のくるのを待つてゐた。彼等同志達は不案內な私のために席をつくつたり、荷物をあづけたりしてくれた。
　私は無事國境を越え、このマチエフスカ驛まで護送してくれた親愛なる同志達と堅い握手をした。彼女はなにもいはなかつた。闇の中から鐘が三度ひゞいて、間もなく列車は動き出した。彼女は默つたまゝ私の列車を見送つてゐた。
「有難う(スパシイボ)！」
　私は同志と彼女にこれをくり返した。
　かくて私の危險な國境越えはをはり、入露三日目の夜は來た。私は愛すべき彼女とロシア同志の親切な待遇を追懷した。
　行き違ふ赤や黃の、何十輛となく續く宣傳列車は、流石に私のこころを早やモスコーにあらしめ、大會の昂奮した光景を眼前に髣髴せしめるのであつた。
　夕闇に明滅するマチエフスカ驛の燈火も、だん〴〵遠のいて、やがては眞黑の闇の中に呑まれて行く。
　私は國境の丘の上に、月光を浴びながら馬上姿で現はれた印象深き彼女の勇姿と、
『資本主義社會では戀愛もその自由と歡樂とを確保され得ない。』
と、いつた彼女の力強い言葉を樂しみながら、一路赤都モスコーに向つた。

シベリア鐵道にて
青木堅造

　わたしが同志青木から受取つた赤露通信は、第四信でひとまづ消息を絶つた。しかし、彼はさらに興味あるコミンタン第×回大會出席の感想や、歸途のローマンティックの物語を寄せるでありませう。
（一九二九・四・一作）

[illegible]田[illegible]子



二つの道

戸川靜子

日曜日の朝だつた。文三から、珍しく薄い手紙が届いた。美佐緒はそれをぢつと握りしめながら、彼女が彼の手紙を手にする時に襲はれる痛みを、今も又、激しく感じるのだつた。

彼女は手紙を持つたまゝ、疲れ切つた重い氣持で、座敷の中をうろ〳〵と、鏡の前へ坐つて見たり、新聞を讀んでゐる母親の傍へ並んで、一緒にのぞき込んで見たりした。

迷ひ抜いたあげく、彼女はピンの先で封を切つて、息をつめて讀み下した。

僕は明日國へ歸らうと思ふ。そして歸つたら、父に貴女の事を話して、事を決めて來たいと考へてゐる。しかし、さう歸つて早々話すわけにもゆかないだらうから、まあゆつくりするつもりだ。

僕は貴女が非常におとなしくなつて、この夏見たいに、妙に神經質でなくなつたのが嬉しい。あんなに突つかかつて來られたのでは、心配で歸る事も出來ない。何時貴女が飛んで行つてしまふかもわからないもの。

兎に角、今、僕は貴女を信じてゐる。そして安心して故郷(くに)へ歸る。

讀み終えて、美佐緒は靑くなつて顔をあげた。彼女は彼の此の考違ひに對して、どう說明したらいゝのかわからなかつた。しかし今となつては、二つの道の一つを撰らばなければならなかつた。

大聲をあげて、わつと泣きたいのを漸く堪えて、彼女は立つて臺所へ逃げた。母親の眼を背中に感じながら、臺所の冷い硝子に額をぴつたり押しつけて、彼女は、自分の歩いて來た道た、ぢつと目を

つぶつて、思ひ返して見るのだつた――。

暑いと云ふのには間があつたが、何となく蒸し〳〵する夕方だつた。美佐緒は、爲替の仕事を終へると、活動を見にゆくつもりで、母親にことわつてぶらりと家を出た。

もう七時近かつた、寫眞も何をしてゐるのか知らなかつた。しかし、身體に暇が出來れば、文三に對する自分の氣持の變化に責められて、この身體さへ持ちあぐねてしまひさうだつた。さうした苦しみ、襲つて來る味氣なさをまぎらすには、ぽかんと馬鹿になつて、活動でも見てゐられれば、それに越した事はなかつた。

ぼんやりと、歩きながら　横丁を曲つたとたんに、池名が危くぶつかりさうになりながら立ちどまつた。

「やあ、何處へお出かけ?」

「活動を見に。」

「それや……」

「それや、何? 結構? 結構でもないの。今日はお歸りが遲かつたぢやありませんか。忙しかつたんですか?」

「少し、ね。だからこんな用を仰せつかつたんです。」

池名は廣告用の手紙を百通ばかり抱えてゐたが、それを持ち上げて見せると、しみ出るやうな淋しい微笑を片頰に浮べた。色のあせた背廣を着て、素足にセッタばきの彼を、美佐緒は侘しい氣持で眺めた。活動へでも誘はうかな――ふと、彼女はさう思つた。が、思つた瞬間、彼女の頭を文三の鋭い眼が通つて行つた。彼女は默つて頭を下げた。

「行つてらつしやい。」

池名は大股に歩いて行つた。

思ひがけなく、美佐緒は彼と池名とを思ひくらべてゐる自分に氣がついた。彼女は比較しようとする自分を憎んだ。お前はそんなに氣まぐれものか、と、文三に責められるやうにさへ考へた。けれど美佐緒は、二人の男の生活の違ひを思はないではゐられなかつた。

彼女は活動を見る氣にもなれないで、ぼんやり家へ歸つた。

喫茶店を開いてゐる姉が、休み日に遊びに來た時には、美佐緒は姉に文三の樣子を聞く事を忘れなかつた。

文三さんは殆ど一日店へ來たつきりよ。學校がなくなつたもので、身體のもつてきどこがないのよ屹度。うちにゐないと思ふと、「紅百合」へ行つてるし。だけど、みんな卒業して直ぐに勤める人なんてないらしいわ。コーヒーを飮んだり、お酒を飮んだりしてまはつてゐるうちに、どうにかなるんだらうね。

さう言ふ姉の言葉の中に、美佐緒は彼女がまだ姉の店で働いてゐる頃の、文三の姿をはつきりと思ひ出すのだつた。

自分がゐる爲に彼がさう度々店へ來るんだ、と考へてゐた彼女は、救はれない失望を、姉の此の言葉から鋭く感じるのだつた。

私はこんな事はどうしても言ひたくないと思つてゐたんです。口に出して言はないでも、貴君には解つてゐると思つてゐました。ですけれど、私は今日姉からちらと聞いた貴君の毎日の生活から、どうしても其の事を貴君に言はないではゐられなくなりました。

私が店をよして兩親のところへ來ようと、はつきり決心したのは、何時だつたか、貴君が洩らした言葉からなんです。

貴君は（もし君が、本當に結婚するつもりなら、永くあゝしたところへ彼女を置かない方がいゝね）と、K氏が言つた、と私に話しました。私は、貴君も又、それを望んでゐるのだと思ひこみました。私だつても永く店にゐる氣はありませんでした。

第一に、店の繁昌の爲に私が上手く動けば動く程、貴君の眉のひそみ方は繁しくなり、貴君が店で過す時間が多くなるのです。他のお客と貴君との間に立つて、私の立ち場は惡くなり、貴君の生活も又苦の多いものになるからでした。

第二には、その爲に貴君の勉强のさまたげになりはしまひかと云ふ恐れでした。學校の成績などについては考へてはゐませんけれど、兎に角卒業したなら、私達が一緒になる爲にも食べて行く方法を講じなければならない筈の貴君だと、私は思つてゐました。そして其の爲には、貴君は少しでも勉强の時間が要る筈でしたから。

私はとう〳〵店をやめて、こつちで働く事にしました。働かないでも、と貴君はお思ひになるかも知れませんけれど、たとへ兩親のところであつても、唯ぶら〳〵と毎日を過してゐるのは、働く以上に辛いものに、私は考へられましたから。

私のしてゐる斯うした金の計算などは、私にとつて不愉快な仕事には違ひありませんけれど、それを堪えるだけの希望を持つてゐました。貴君と私との生活の上の一階段として、私は働く事に誇りさへ感じてゐたのです。

私は今明瞭と言ひます。私が店から兩親のところへ歸つて來たのは、貴君の爲でした。貴君の生活のためでした。それだのに、貴君は私が店にゐた時と同じやうな毎日を、送つていらつしやるのです。

その手紙を美佐緒が出してから三日目だつた。

神樂坂の明るい通りで、ふと二人は言ひ合ひらしい話し方をした。

「此の頃、とても焦々して困るのよ。」

美佐緒は出來るだけ靜かな氣持で、さう彼に言ひ出した。

「だからさ……」

「だから？」

變なはにかみ笑ひをしてゐるらしい彼の横顏をみつめて、彼女は吃驚して聞き直した。

だからさ、斯うすればいゝ。などと云ふ言葉を彼から聞かうとは思つてゐなかつた。彼女は、先だつての手紙を讀んだ文三が、彼女の焦々してゐる原因を知つて、彼の生活態度や彼の抱負、二人で歩んで行くための道について、彼女が充分うなづけるやうに話して貰へる、と豫期してゐたのだつたから――

「だから、何？」

美佐緒は息をつめて、もう一度聞きなほした。

「一緒になつちまへば、そんなに焦々しなくなつちやふさ。」

彼は當然の事のやうにはつきり言ひ切つて、あとは笑ひにまぎらしてしまつた。

「貴君は此の間の手紙を、ちよいとした私の嫉妬ぐらゐに思つてるのね。私の眞實の望なんてものを、一寸も考へて呉れないのね」

「知つてるさ。だから一緒になればそんな事はどうにかなると思ふのさ。」

ほんのかすかだつたが、美佐緒は彼に對して憎しみを感じた。彼女は慌てゝ、それを意識するのを恐れるやうに、口早にしやべつた。

「一緒になる事位誰にだつて出來るわ。それや出來てよ。これからだつて、あんたの下宿へ行つてしまへばいゝんでせう。だけど、私達は人間ですものねえ――」

犬にだつて其の位のことは出來るぢやないの、と言ひたいのを、彼女は唇を噛みしめてこらへた。彼女は小さい頃に、二匹の犬が繋りながら、各々が勝手な方向へ走らうとして、喧しく泣きたてゝゐたのを、子供心に不愉快になつて、眺めてゐたのを思ひ出した。

「男と女が一緒になるだけが結婚なら、私は厭ねえ。第一どうして食べて行くつもり？　お父さんに私達の食料を貰つて、それで夫婦生活をする？」

彼女は思ひつ切り侮蔑の意味をこめて言ひ切つた。流石に文三も顔の色を變えた。そして火の様な眼付きで彼女を見据えた。

「だつて、さうぢやないの？　一緒になればどうにかなるつて言ふけど、どうにかなるものなら、一緒にならない前にだつて、どうにかなるわけでせう？」

と言ひかけた美佐緒は、險しい顔つきをしてゐる文三を柔んわりと眼で迎へて、笑ひ出してしまふのだつた。

「そんなこわい顔をしないで。ねえ、K氏などにも頼んで見た？」

「うん、奥さんも親切にさう言つて呉れてるんだ。履歴書も持つてつてあるし、君がさうつけ〳〵言ふ程、だらしなくもない筈だ。」

その言葉を、今までのやうに正直に信じ切れない何かゞ、彼女の胸に沈んで來るのだつた。

電車の中で肩を並べながら、美佐緒は、文三の愛が彼女の望んでゐたものとは異つてゐるのを、ざつと考へて見た。しかし、彼女にはそれをつきとめてしまふのは、餘り慘め過ぎるやうに思はれた。

ふと、文三は彼女を腕で押した。

「なあに？」
美佐緒は、今まで彼の存在を忘れてゐた自分をあはてゝかくすやうに、微笑みながら彼をみつめた。
「僕はもう降りるよ。」
「え、こんなところで？」
「あゝ。だつてもう我慢が出來ない。」
文三は妙なしかめ顔をして、身體をゆすつた。美佐緒は吃驚して彼を眺めた。漸く彼女は、先刻共同便所へ這入らうとして、電車の來たまゝに、あはてゝ飛び乘つた彼を思ひ出した。
「どうぞ、降りて頂戴。」
文三は次の停留場で、そゝくさと降りて行つた。
暗い露路へ、あはてゝ曲つて行く彼の姿を見送つて、美佐緒は一人で笑つた。
けれど彼女は、その時彼から、不思議な嫌惡を覺えるのだつた。

せゝこましい郵便局の腰掛けにちゞまりながら、事務をとつてゐる美佐緒を襲ふものは、果もない苦しみだつた。
彼女は唇を噛みしめて堪えやうとした、すると胸のあたりからぢーと押し上げて來るものが、涙を誘ふのだつた。
――文三に承諾をしてからまだ二年にならない自分が、もう彼を愛する事が出來なくなつたとすれば、餘りに薄い慘めな愛し方ではないか。では自分は眞實に彼を愛したのではないのか？　ときのはづみで、さう思つただけではなかつたのか――と、美佐緒は繰り返し考へるのだつた。最初、文三の申し出の手紙を讀んだ時に、彼女は、彼のはつきりした態度に驚嘆さへしたのだつた。彼ならば、もしこれと同じ態度で世の中へ向つて行ける彼ならば、自分は幸になれる……と彼女は信じた。
今彼女は其の幼い愚かな彼女を顧みて、鋭い責を感じるのだつた。
美佐緒はしかし、文三に望を持つてゐた。彼を愛する事が出來た。

貴君と、私とは、今、二つの並行線を歩いてゐます。もし、これがどうしても一つの線になれないとすれば……言ひたくはありません、こんな事。でも言はないではゐられないんです。そして、やつぱり貴君を愛してるんです。けれど、此の間のやうな貴君を愛する事は、私にはどうしても出來ません。
此の間のやうな貴君をねえ――さうぢやありません？
貴君は、私が何時も口ぐせのやうに言つてるのを御存じでせう？Kさん達のやうな生活をしたくはない、親や兄弟に口すぎをさせて貰つて、そしてあの人達は何をしてゐるんでせう？
考へただけでも身震ひが出ます。
貴君のどうにかなる、と云ふ言葉で、私はひどく痛めつけられま

した。私の氣持を知つてゐる筈の貴君が、あんな事を云ふのは、貴君の氣持にゆるみが出たのではないでせうか？

兎に角、私は貴君に考へて見て頂きたいと心から望んでゐます。

夜は美佐緒にとつて苦惱の何時間だつた。彼女は夕御飯をすますと、日比谷の圖書館へ通ひはじめた。

氣儘に、古いものも新しいものも、お構ひなしに小說を讀んだ、難しい評論なども讀んだ。三時間ばかりを其處で過すと、美佐緒は日比谷公園に沿つて、濠端を歩いて歸るのだつた。

しつとりと汗ばむ皮膚へ、ひんやりとした空氣があたつては散つてゆく中を、彼女は思ひつきり息をはきながら歩いた。

向上(あが)つた氣持が、文三から受ける肉體的の嫌惡の情を忘れさせてしまふのだつた。そして、その時だけは、美佐緒には、まじり氣なしに彼が愛せるやうな氣がした。

文三の手紙には、彼の就職についての言葉が書かれるやうになつた。しかし、夏も過ぎて朝に晩に涼しい風が吹く頃になつても、それらの言葉の結果は、香しくないやうだつた。美佐緒は段々に落ちついた氣分になつて、彼を守る事に慣れて來るのだつた。

しかし、文三は、手紙の最後にこんな事を言つて來た。

——貴女が、手紙で妙にヒステリックな事を言つて來る時を數えて見ると、屹度、月の中頃になる。だから僕はそれが貴女の病氣のせいだと思ふ——

美佐緒は氣を拔かれた人のやうに一瞬間、ぐつたりしてしまつてゐた。彼女は、文三を憎んだ。彼も又、普通の男と同じやうな事を平氣で言ふ人間だつたのだ。彼女は彼に對する望をきつぱり捨てなければならないと思つた。

——私の月の病氣は、中頃ではない事をはつきりと申し上げます。貴君は、私が一所懸命に言つてゐる言葉を私の病氣のせいにしてしまはふ、と考へていらしやる。

私はもう決して何にも申さない事に致しませう。その方が私にも、貴君にもよさゝうで御座いますから。では、さやうなら——

美佐緒は冷え切つた氣持の中に、消えがたい辛さが殘るのを、思ひ切つて、その手紙をポストへ落した。

美佐緒は少しばかり元氣になつた。そして不思議になごやかな氣持になるのだつた。

——過去をぢつと思ひ返してゐる美佐緒の頰は火のやうにあつかつた。そして、硝子の冷さは少しも感じられなくなつて行つた。

美佐緒は漸く其處から身體を離して、自分の机の前へきちんと坐つて見た。何分か、何時間か、彼女は机の前に坐つてゐた。激しい

悔が、彼女の胸をしめあげて、亂れ切つた頭の中は、何を考へてゐるのかさへわからなくなつた。

文三を愛せなくなつた事、正直にはつきり言ひさへすればよい、とは考へるが、しかし、文三の今の氣持を思ふと、彼女は又思ひ返さなければならなかつた。

お前はひどい女だ、お前は彼を今まであやつつてゐたやうなものだ。と、人に責められても罵られても、彼女には答える事が出來ない筈だつた。たとへ彼女の氣持が何處から斯うした道に來たかを說明した處で、それが何にならう。それを誰が信じて與れやう。彼女を愛してゐる筈の文三でさへ、彼女を深く觀ようとはしなかつた。

美佐緖はぢつと固く眼をとぢて、文三の手紙を握りしめた。固くとぢたその眼から、絕え間なく涙が出て來てしようがないのだつた。

彼女は、又、一つの道について考へた。

此の儘にして置いて、文三と結婚する。自分の犯した過であれば、自分で仕末するのは當り前だ、と云ふなら、彼女は一生涯を苦しみながら、彼と一緖に步めばいゝ、それでいゝのだ。

否、それでいゝのか？　文三に對して、より大きな惱みを與える事にはならないのか？――いやだ。決してそんな事は出來ない。――

美佐緖はきつぱりと心を決めて、机の上へ紙を擴げるのだつた。

貴君はひどい考へ違ひをしていらつしやいました。私が貴君の前でおとなしくなり、何一つ貴君に言はなくなつたのは、私が貴君を愛さなくなつたからです。貴君に自分を理解して貰はふとしなくなつたからです。貴君と同じ道を步かうと望まなくなつたからです。

私は貴君とは結婚する事は出來ません。決して私は貴君とは一緖になれないのです。最初に、貴君と一生涯を一緖に步かうとした私も眞實なら、今、これを書いてゐる私も眞實なのです。

私は、隨分貴君に惡い事をしたわけになりますでせう。けれど、私にはこれ以上僞る事は出來ないのです。愛する事が出來ないのに、愛してゐる樣な顏をしながら、今まで通りの交際を續けてゐると云ふ事は、慘め過ぎます。

私はこれ以上、何も申し上げる事はないやうな氣がします。

この手紙を、貴君のお故鄕宛に出します。多分、貴君がお着きになると同時に、これをお讀みになる事と存じます。

何とでも、貴君のお氣のすむやうに、私を憎み、罵つて下さい。多分、それは私の受けるべき當然なものでせう。

美佐緖は封をして宛名を書く時に、激しくむせび泣いた。彼女の涙は、此の二年間への最後のたむけだつた。

彼女は窓へ寄つて、空を眺めた。激しい感情は段々彼女の胸から去つて行くやうだつた。やがて、美佐緖は靑い空へ顏を向けて、胸を張つて、自由に、息を思ひつきり深く吸ひ込むのだつた。

女人聯盟へ御加入下さい

女人藝術は愛讀者の皆樣と親睦をはかりますために**女人聯盟**を設けました。別にむづかしい規約はなく誰方でも自由に加入が出來るのでありまして、月極讀者は直に聯盟員であることは勿論ですが、直接購讀者でない方でもお申込になれば名簿に記入いたし聯盟員になれます。どうぞ右の愛讀者券にお名前を御記入の上皆樣奮つて御加入下さいませ。御加入の上は左のやうな方法によつて聯盟員の皆樣と本誌との親睦を增し御便宜をはかる事にいたします。

一**通信部**　讀者のために通信の便を設けまた御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄に掲載いたします。

一**支　部**　五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部へはいろ〳〵便宜をはかり直接購讀者のために販賣の方法を講じます。

一**講演部**　本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます

一**質問部**　東京における學校、職業方面、圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尚ほ交渉の便をも圖ります。

女人藝術は私達全女性の文化のために貢獻せんことを希うて生れましたところの、女人ばかりによつて作られる唯一の雜誌でございます。日に月にめざましい進歩のあとを示してをります女性の歩みにつれ、この女人藝術も常に些でも時代の思想感情に先んずる所がなければなりません、そしてこの女人藝術は小さくとも決して私器ではなく全女性の公器と思つてをります。それで皆樣が女人藝術についての御忌憚なき御感想や御希望を伺ひ度く存じます。どうぞ左の欄へ御記入の上本社へお寄せ下さいますやうにおねがひいたします。

愛讀者券

美點と感ぜらるる點	缺點と感ぜらるる點	希望

住所

氏名



火

上田文子

時　現代

所　都會住宅地

人　主人

息子

娘

妾

小間使

書生

泥棒、A、B

A

眞黑な闇の中に、大きな家屋の全輪劃が、影繪の樣に浮き上つてゐる。

眞冬の夜、十二時過ぎ――

（狂暴な北風がこの一幕を通して、騷々しい伴奏をつとめる、犬の聲、火の番の木の音なども折々、これに伴ふ。）

巡査の佩劍の音、ガチャリ〳〵と聞えて遠ざかる。泥棒A、B、登場。（屋外を歩む人影はすべて家屋の外廓と同じく、シルエットの感じで照明したい。）

A 大丈夫、大丈夫。行つちまやがつた。

B あゝ、痛え！ 向脛、すりむいちまつた。

A 飛び降りた拍子にか？

B うむ、あわてたもんだから――（膝につばをつけてゐる。）

A おりや又、おつこつた音が大きいんではら〳〵したよ。おめえ存外素人だな。お巡りなんて耳の早えもんだぜ。

B 大丈夫、この風だもの。ところでこの家にや犬はゐねえんだらうな。

A 居ねえ〳〵。そりや晝間、物貰ひに來た時にちやんと見といた。

B 有難え、おらあ、犬と來ちや、から意氣地がねえんだから。

A 厄介な野郎だな、ぢやそろ〳〵取りかゝらう。まあ、こつちへ來ねえ。（裏の方へ行き、戸のすき間からのぞく。）いけねえ、いけねえ。未だ起きてやあがる。

B 成程。燈（あかり）がかん〳〵ついてらあ。女中が大勢居眠りしてるぜ。

A 誰か未だ歸らねえんだな。まあ、いゝや、まさか徹夜でも居めえ。今の中にそおつと、裏の方のしまりでも見て置かうぜ、

B よし、よし。（二人の影消える。）

（以下、屋内の事件に關係なく、二人の影は繞つて適宜に出沒する事。）

B

家の上層の一部明くなる。

孃の部屋。

孃、手紙を書いてゐる――

戸が開いて書生が顏を出す。

書生 お孃さん。

孃 あら！

書生 來ちやいけなかつたんですか？

孃 早くこつちへおいでよ。大變な事が出來ちまつたんだよ。

書生 何です、例の一件がばれでもしたんですか？

孃 どうもさうらしいのさ。今朝つからお菊がいやにじろ〳〵私の顏をみてゐるんだよ。お前、手紙を失くしやしないかい？

書生　さあ、何しろ澤山だから、よく調べてみなきや解らないが――
――困つたな、そいつあ――ひよつとすると小間使のお光の奴が机の引出しでもひつかきまわしたかもしれませんね。

娘　光なんぞに引出しなんぞかきまわされる覺えがあるのかい、お前は。

書生　冗談ぢやない。あいつが奥さんの密偵ならつて話しですよ。

娘　ふむ、どうだか、あんまり信用は出來ないね。だけどあれに手を出すのはおよし、兄さんに決鬪を申しこまれるよ。

書生　よく何でも知つてますね、貴方にあつちやかなはない。(間。)ところで、いよ〳〵一件がばれたんならどうなるんでせう、一體、放逐ですかな。

娘　お前がかい。いやなこつた。大丈夫だよ、私がついてるから――

書生　貴方がついてるつたつて、お父さんにや奥さんがついてますからね。

娘　奥さん〳〵いふもんぢやないよ。ありや妾ぢやないか。母さんが死んだと思つてい丶氣になつて近頃ぢやすつかり奥さんづらして。癪にさわつてなりやしない。

書生　そら！貴方がその意氣だから、奥さんの方だつて貴方を煙つたがつてますよ。だから、今度こそ、い丶しほにして、貴方の勢力牽制運動を開始すると僕あ思ふな。

娘　ふむ、勝手にするがい丶。まさか今時座敷牢でもあるまいし、(間。)ま、い丶よ、安心しておいで。知れたら知れたでいつそさつぱりしてい丶、私はきつとお前と結婚する樣にしてみせるよ。

書生　結婚ですつて、(鼻で笑ふ。)

娘　何だい、人の眞面目に言つてゐることを茶化したりして。

書生　だつて、貴方が僕と結婚してくれるなんて、夢すぎるからなあ。

娘　何が夢さ、私は今迄何度だつて誓つてるぢやないか。今だつて、お前に手紙を書いてたんだよ。

書生　絶縁状ぢやないんですか？

娘　莫迦にしないで讀んで御覽よ。(レターペーパーを渡す。)

書生　字丈けみてゐると貴方はとてもやさしさうですね。「戀しい貴方、私の生命の貴方。一つ屋根の下に住みながら、斯うして離れてゐなければならない時の長さは私をいらだ丶せます――

娘　およし。誰が音讀しろと言つて？

書生　まあ〳〵、貴方の手紙は仲々名文ですよ。ね、斯うして僕はいつもひとりで節をつけてよむんです、幾度も〳〵ね。「更でも無情な木枯らしに吹きあらされて散つてゆく落葉の樣に、私の心はわびしいものを――今、私は又、貴方に囁くべき報せを――悲しい報らせを書かなければならない、愛人よ、貴方の目にうつる乙女の影は日毎にやせてゆくことでせう――

娘　莫迦！、およしつてば！（引つたくる。ヒステリツクに）お前には私の心もちなんかまるで解つてくれないんだ。お前は私を翫弄してゐる（泣き出す。）

書生　（急に眞面目になつて。）お嬢さん、貴方こそ解つてくれないんですか、僕はこんな冗談でも言つていなきや居られないほど弱いんです。貴方と別れる日が目睫に迫つてゐるとこの手紙には書いてあるぢやありませんか！

娘　別れるなんて——だから、お前は薄情だつて云ふんだよ。私はお前と別れる位なら死んじまふ（間。）お前、エロツプーンくれないか。

書生　何故、だつて貴方は先刻、どこまでも頑ばるつて言つたぢやありませんか。

娘　頑ばる丈は頑ばるけれど、考へてみると泣く兒と地頭だからね。

書生　（氣色ばんで。）ぢや地頭の仰せ次第ぢや僕を逐つぼり出してしまふつもりなんですね。ふむ、莫迦みるのはおれ一人か。

娘　莫迦、そんなことさせる位なら、誰れがこんな思ひするもんか。（手紙をびり／＼引裂く。）お父さんが本當にお菊のいふなりになつて、私達の戀愛をみとめないんなら——

書生　そりやそれにきまつてますよ。お父さんにすりや貴方なんぞより若いお妾さんの方が餘程可愛いゝもの——うちの財産だつて、皆あの人にやつちまひたいんでせう。

娘　だから——さうとすりや私にだつて覺悟がある。

書生　手を切る覺悟ですか？

娘　父さんやお菊をいじめてやるのさ。肉身の子より妾の可愛い父親なんか子供にとつちや仇も同様だ——

書生　復讐手段、成程。

娘　冗談ぢやないよ。私さうなつたら、この家に火をつけてやらうと思ふ。着物氣違ひのお菊や名譽道樂の父さんがどんなに泣きつらするか——考へた丈でも痛快ぢやないか（笑ふ。）

書生　（手に殘つた一枚の方のレターペーパーをよむ。）そして、私達はその火の中で死ぬのです。われ／＼の戀愛の自由を束縛したものにむかつて復讐した後で相抱いて死へゆくのです——成程、すばらしい戯曲の大詰めですね。

娘　本當のことだよ。噓だと思ふと間違ふよ。

書生　よろしい。その時には何時でも情死します。爆裂彈を抱くのと同じ貴方だと知つて居乍ら、こゝまで來てしまつた僕です。今更、貴方を離れて生きる道はありません。信じて下さい。

娘　有難う。（間。）河野さん、貴方、もうお小使ひないんでせう？

書生　え、いゝえ、さう貴方から貰つちやすみません。

娘　いゝのよ。もつてらつしやいよ。（金を押しつける。）

書生　だつて——

娘　いゝんだつてば！

（玄關のベル鳴る。）

書生　あ、健二さんが歸つて來た。

娘　兄さんかい、――又、酔つて來てくだまくんだらう――私はあの人も嫌ひさ。（娘の部屋暗くなる。）

C

玄關が明るくなる。

書生、二階から降りて來て戸を開ける。

息子、のめる様に入つて來る。頭に繃帶してゐる。可成り酔つてゐる。

書生　お歸りなさい。おや！　どうなさつたんです、その頭は？

息子　はゝゝゝゝ、頭だつて、ふむ、この繃帶かい、これにやわけがあるさ、大ありだあ！きかしてやらうか。（玄關へごろりと横になる。）

書生　あ、そんなとこへねちまつちや困りますよ。どうなすつたんです。大變に酔つちまつて、喧嘩でもしたんですか？

息子　（寢たまゝ。）喧嘩、あゝ、喧嘩もしたさ、なぐられもしたさ、そいから、酒のんで歩いた丈のはなしさ、あゝ、咽喉（のど）がかはく、おい、水一ぱいくれ！

書生　水なんかいくらでもあげますがね、ま、部屋に行つてからになさいよ。今夜はもう晩いんですぜ。何時までこんなとこでしやべつてゐられると、又、きつとお父さんにどなられますぜ。

息子　どなられる！　親父に。結構だね、早く出て貰ひ度いよ。おりや今夜、親父にいふことがたまつてるんだ、親父が出て來るまではこゝは動かないよ。おゝい、誰でもいゝ、水をもつて來てくれ――水くれないぢや死んじまふよ。

小間使　（目を擦り乍ら登場。）あら、若旦那様、何時お歸りになりまして――まあ怪我なすつたの？

息子　光かい、水一ぱいくれ、死にさうだ！

小間使　あら！　いやだ。（去る。）

息子　（寢たまゝで。）河野君、僕あしみ〳〵君達の境遇が羨しい！羨しくつてたまらないよ。

書生　若旦那、くだを巻いちやいけませんよ。

息子　くだなもんか。僕は今日つて今日、心からこんな家に産れたことを呪はずにやゐられなかつた。口惜しいよ。自分ばかりいくら人間なみな事をしやうと思つても、世間がさせてくれないんだからね。おれなんぞいくら頑ばつたつて結局ブルジョアのドラ息子以上にや評價してくれないんだ！　何處へ行つても蝙蝠あつかひされるんだ！　いやだ！　いやだ！　（ぼろ〳〵涙を漏す。）

書生　一體、どうしたんです、今日何かあつたんですか、學校で？

小間使　（水を持つて來る。）さ、召上れ、あら！　何を泣いてゐらつ

しやるの？

息子　（水をのんで。）光、お前もみてくれ、こんなに怪我しちまつた！

小間使　まあ、ひどいこと、お痛かありません？　どうしてそんな怪我なすつたの？

息子　誰れのせいだと思ふ。親父だ、親父だ！皆親父のせいだ！僕がこんな不當な怪我をさせられるのは。資本家の伜といふ極印が今日僕の額に捺されたまでだ！　親の因果が子に報つたんだ！

書生　だつて貴方はいつもプロレタリヤの味方だつて言つてお父さんと喧嘩してゐられるぢやありませんか。學校でもたしか、何とか會の會員だつたんでせう。それに何故——

息子　何故、なぐられたつていふのかい？　はゝゝゝ、だから蝙蝠あつかひされたつて言つてるぢやないか。いくら自分丈、プロレタリヤの味方のつもりでゐても向ふぢやさうはとらないんだ。無理もないや。蛙の子は蛙と相場がきまつてるんだ！

小間使　ぢや、貴方、旦那様の爲にお怪我なさいましたの？　まあ、お可愛相に——

息子　さうさ、みんな親父の爲だよ。實は今日、學校で、僕の仲間の連中が十何人つて退學處分になつたんだ。皆例の會の方の奴さ。會は餘程前に解散されちまつてゐるんだがね。ところで、その中にどう探しても僕の名前がないんだ！

小間使　まあ、よかつたこと。

息子　何がいゝもんか。僕は口惜しくつてならなかつた。主腦の連中は別にしても僕と一緒にビラまいて歩いた奴等が皆、無期停學を食つてるのに、僕ひとり何の譴責も食はれないなんて筈があるもんか。僕は生徒監のとこへかけあひに行つた。ところが、生徒監の奴。言を左右にしてどうしても僕を處分するといはないんだ。をかしい——と思つて考へてみると解つた。親父が賴み込んでゐるんだ。親父やあれで景氣のいゝ時分賴まれてあの學校へ金を出したことがあるんだからね、そんな義理で親父に泣きつかれてみると私立學校の悲しさ、僕はどうすることも出來ないらしいんだ。畜生！　そこで僕は言つてやつた。よろしい！　ぢや僕は何時までもこゝに席を置いておく、その代り外部と連絡をとつてどんな行動に出てもその時後悔なさるなつてね、生徒監の禿の奴、目をぱち〱させて、たつてお望みなら、お父さんに御相談した上で退學處分にして上げるつて言やあがつた。

書生、小間使　（笑ふ）。

息子　そこ迄は大出來だつたんだ。それからすぐに飛出して、放校處分を食つた奴のよつてゐる酒場へ行つたんだ！　奴等は案の定そこによりあつて前後策を講じてゐた。そこへ僕は威勢よく飛び込んで行つたもんだ！　お目出度うつてね——と、どうだらう、思ひもかけない冷い目がかたまりあつておれを睨んでるのに出會

した。スパイ何しに來た！　その中の一人が酒にうるんだ目を据てうなつた。奴らは誤解してゐるんだ！おれが仲間の秘密を學校當局へ密告した――うらぎつたと信じてゐるんだ。おれは驚いた、怒つた、聲をからして辯解した！だが、誰ひとりおれのいふことに耳をかすものなんかなかつた！奴らは皆、蛇みたいに執念深くおれを呪咀した、罵つた。スパイと、背信者！　吸血鬼の子！あらゆる讒誣がおれを圍んだ！一つのグラスが飛んで來て、おれの額にくだけた！　目の上にこぼれて來る血をおさへながら、僕はたつた一人冷嘲の渦をぬけ出した！

小間使　（島波、書生をみる）。

書生　（頷いて去る）。

息子　（氣づかず）切る樣な夜風が傷にしみてづき／＼脈をうつて痛む――それより、淋しい悲しい！　やりきれない。僕は仲間から捨てられたんだ！　僕は一體、何處へ行きやいゝんだ！　うちなんぞ――こんな腐敗したうちなんぞ、僕の家ぢやない！　どの階級へ行つても僕は拒まれるんだ！迷子だ！　迷子だ？　獨りぼつちだ。（泣く。）光、お前、未だ、そこにゐるね。泣いてゐてくれるんだね。

小間使　貴方がそんな目にあつていらつしやるのをどうして私が泣かずにゐられるもんですか。貴方は本當にいゝ方ですのに。（感傷的に。）どうして世の中はそんなに貴方をいじめるんでせう。

息子　（ヒロイックに）負はされた十字架だよ。僕が金持のノラ息子で、自動車道樂でもして喜んでゐられる人間なら、決してこんな目に會やあしない。（間。）光、僕は本當は今夜うちへ歸り度くなかつたんだ。唯、お前が――お前が待つてるだらうと思ふと歸らずにはゐられなかつたんだよ、光、もつと顏をおよせ、（接吻する。）お前も不仕合はせな娘だね。お前を――お前の樣な可愛さうな人間を皆、救つてやらうと思つて、僕は苦しんで來たんだが――

主人　（登場。）

小間使　あら、旦那樣。

主人　晩く歸つて來て何時までくだをまいてゐるんだ！早く、二階へ行つて寢ないか！

息子　（起上る。）お父さんですか、御覽なさい、貴方の小刀細工のおかげで僕は名譽の負傷をしましたよ。（笑ふ。）

主人　今、その話しは河野にきいた。莫迦！何處の國に學校へ退學處分を請求に行く奴がある。非常識な――まあいゝ、明日又よく言つてきかせる、今夜はもうぐず／＼言はずに寢ろ！

息子　寢ません。貴方は何故、學校に泣きついて僕の放校處分をゆるして貰つたんです。こんな不肖の息子の爲に何故、そんな殊勝なことをしたんです。

主人　親の心子知らずといふのは貴樣のことだ！　貴樣の爲にどれ程おれが心配してゐるか――

息子　お待ちなさい、そんな世間なみな親子の人情なんざこの家ぢ

や通用しない筈です。妾の呉服屋の拂ひにや苦情を言はないでも僕が丸善で買ふ本の代ぢや始終、文句の絶えない貴方ぢやありませんか。名譽でせう、え、お父さん、名譽の爲でせう。貴方は紳士ですからね。他人の汗と血をぬすんで金をためた模範的な紳士ですからね。成程、體面といふものがありませうよ。いかに氣に入らない息子でも、思想問題で放校處分なんざ、お仲間の資本家に對しても面目ない話しでせうからね。はゝゝゝ

主人 （默つてゐる。）

息子 （急に激昂して。）あゝ金なんぞ、皆なくなつちまふといゝ、こんな中味の腐つた家なんか燃えつちまふといゝ！僕あたまらない、たまらない、このまんまぢや窒息して死んぢまふ、

主人 （悲しげに息子をみてゐる。吐息する。）

小間使 ま、貴方、お父様にそんなことおつしやつちやいけません、もう晩う御座います、さ、さ、お部屋へ參りませう。（手を執る。）

息子 （よろ〳〵して立つ。）

主人 （去る。）

息子 悲しき思想の對立！　おゝ、おれも何時かハアゼンクレエフエルの息子の樣に父にピストルを擬さなければならないのか！

（二人去る。）

（玄關暗くなる。）

D

湯殿口の所で。

泥棒A、B、懷中電燈をつけ、頻りに錠をこじあけ樣と努力してゐる。

B どうだ？　未だいけねえか。

A 駄目だ！　錠（かなかね）は直きはづれるんだが、内に未だ餘程しつかりしたしまりがしてあるらしいや——仕方がねえ、二階の方をしらべて見樣。

（物干しを足場にして屋根に上る。以下前と同じく影の樣に出沒する。）

E

書生部屋明るくなる。

書生床に入らうとしてゐる。

小間使 （登場。）あゝ、眠い！

書生 坊つちやんのお伽ぎでお疲れさま。

小間使 今日のお芝居、鳥渡長かつたわね。

書生 ふゝむ、今頃は羽蒲團に埋まつて、レーニンと握手してゐる夢でもみてゐるんだらう——いゝ御身分だよ。お蔭さまでこつちあ半分徹夜だ！

小間使　救つてやる、救つてやるつて、口癖だけど、家に使はれてる人間は救はれないわね。人使ひがあらくつて、横柄で、あんなに喧嘩ばかししてゐるけど、する事は旦那にそつくりだわ。(間)あ、さう言やどうして、二階のモガ。奥さんはあの(笑ふ)手紙みてしまつてよ。

書生　ブラン通りさ。二階ぢやばれたと思つて大騒ぎだ。しかし、ありや古いや。鳥渡しても火つけだの心中だの、断髪の手前も甚だアナクロニズムなことをいふぜ。ヒステリーだね、一種の。

小間使　へえ、うちへ火つけるつて、兄妹丈あつて似た様なことをいふもんね、若旦那は若旦那で二言目にや、こんなうちは燃えつちまふといゝつて、先刻も旦那にそれを云ふんで、私はら／＼したわ。

書生　その方のは、マルクスボイの慣用語だよ。實行なんかしないから大丈夫だが、妹の方のはやりかねないからね。何しろ、のぼせて來ると無茶苦茶だ！

小間使　そんなにしたのは貴方の罪さ。でも、息子だの、娘だのに火つけなんぞされちや旦那も浮ばれないわね。隨分骨折つてためたお金だらうのに。

書生　僕は又、そのうなつてるお金の内から少々手切れに頂戴して引退りたいのさ、こゝのうちを。

小間使　(ふいと立つ。)さ、寢様や。

書生　おい、手をお出し(紙幣を手に置く。)わけまへ。

小間使　お嬢さんの。ふん、お禮は申しませんよ。

(書生部屋暗くなる。)

F

泥棒A、B、再び物干に出る。

B　駄目だな。

A　こんなぢやねえと思つたが、いけねえな。何しろ、皆、二重戸にしてあるんだから、あれぢや入れねえや。殘念だな。

B　引上げるのか？　忌々しいな。

A　仕方がねえ、もう一軒の方へ行つてもいゝや。だが、待ちな、何しろ今夜あめつぼう寒いや、(外物置の戸を開ける。)おい！こゝがあいてるぜ。

B　そんな處、何にもありやしめえ。

A　盗るものを探すんぢやねえよ。(懐中電燈で中を照らす。)澤庵の樽に、紙屑籠、しめ／＼、ちやんと炭俵が置いてあらあ！おい、ちよいと中へ入んな。次の仕事へかゝる前にこゝで火の御馳走になつて行かうぜ。

B　うむ、大丈夫かい？

A　びく／＼するなよ。そこいらにバケツがあつたつけな。

B　うむ(井戸端のバケツをもつて來る。)これかい？

A　それ〳〵。さ、入つて早く入つて戸を閉めなよ。火おこすから

B　（中に入り、戸を閉める。）

G

階下の主人の居間、明るくなる。

寢床二つ。一つの床の中に妾がねてゐる。主人の床はから。

次の間で頻りに何かごと〳〵する音。

妾、ふと目を覺まし、物音に驚いて主人の夜着の袖をひつぱる。間、主のないのに氣がつく。そろ〳〵起き上つて、次の間の襖の方へよつて行く――

居間暗くなる。

H

物置の内部明るくなる。

バケツに炭を山盛りにして、かん〳〵火がおこつてゐる。泥棒A、B、（此處で始めてはつきり照明される。）火にあたつてゐる。

B　成程、こんな寒い時には、斯うやつて休んで行く方が、公園のベンチでから風にふきつさらされてるより餘程ましだ。

A　せつぱつまつた時にや、こいつへ火をつける法もあるんだぜ。火事場かせぎつてな。火事だ、火事だ！　騷いでる間にうちのものをかつさらつて逃げるんだ！

B　ひでえ事をするもんだ？――

A　變な面するなよ。今夜やるつて言やあしねえや。（間）てめい、未だねつから素人だな。相棒になるなんて大きなことといふから、拾つて來てやつたんだが、一向度胸がすはつてゐねえ樣だぜ

B　お察し通りさ。大きなことは言つたが實は、こんなことをするなあ、産れてから今日が始めてなんだ！

A　何だ！　始めてだ、冗談ぢやあねえや――ぢや又、どうしておれの話しに乘つて來たんだ！公園のベンチなんかにころがつてやあがつて――

B　食へねえからよ。うちにゐるとかゝあががあ〳〵わめく、餓鬼がピイ〳〵泣く、やりきれねえから、外をうろついてたんだ。

A　おや〳〵、ぢやあ、てめえ、失業者つて奴だな。近頃、流行(はやり)の、

B　おもて歩いてると、食物の匂ひがめつたに鼻に來てやりきれねえのよ。もつとも先刻、おめえにそば食はして貰ふ迄今朝から何にも食はねえんだからな。

A　情けねえ野郎だな、そいつあちつと見損つたよ。おらあ、手前の目つきをみて、こいつ、素人ぢやねえと鑑定したんだがなあ――今夜はまが悪い筈だ、素人なんぞひつぱつて來ちまつた。

B　仕事にあぶれても約束丈あくれるかい？

A　仕方がぬえ、無駄骨は折らせねえ。安心してゐな。

B　有難え！

A　それさへ貰へりや仕事なんぞしねえ方がいゝんだらう。しやうのねえ野郎だ！

B　なに、さうでもねえ。こんな大きな家にとぐろを卷いて、うなる程金もつてやあがるくせに、おれ達の餓死するのを高見で見物してゐる野郎なんざ　仇(かたき)も同樣だ！　金位、盜んでやらなきや、溜飲(りういん)が下らねえ氣もするのよ。

A　さうとも。殊にこの家の主人なんざ、貧乏人の生血を絞つて身上をふとらせた奴だ！　こんな奴の金、取つてやらなきや、先祖の鼠小僧に對しても申しわけがねえ——と、言つて來てみたところで、そんな奴丈に用心もいゝや。くだらねえ！（間。）ところで、てめえ、もとの商賣は何だ！　ちつと身の上ばなしでも聞かせろよ。

B　はゝゝゝ、泥棒になる迄の身の上ばなしか。聞かせるとも、いくらでも聞かせらあ。おいらの親父や帽子職人だつたんだ。兵隊だの學校の生徒の帽子だのこしらへる——

（物置、暗くなる。）

I

主人の居間と次の間明るくなる。

次の間に主人、ブリキの箱蓋の上に火消壺をのせ、その中の火を一生懸命におこしてゐる。

妾、襖越しに猶のぞいてゐる。間。

主人、火消壺をもつて立上り、居間と反對の方へ去らうとする。妾、突然、襖を開けて飛び込む。

妾　まあ、あなた、あなた、何をなさるんです！

主人　しつ！　靜かに、靜かにしろ！騷ぐと承知しないぞ！

妾　だつて、あなた。（顏をみる。）あなた、あなた、强かりして下さいよ、氣でも違つたんぢやないんですか、こ、こんな火消壺なんぞに火を熾して、今頃何處へ持つて行かうとなさるんです？

主人　靜かにしろといふのに！誰か起きてきたら如何する！考へに考へぬいた上でする事だ。默つてみてゐろ！

妾　默つてみてゐろつたつて——貴方、これが——貴方、本當に氣はたしかなんですか？後生だから氣を落付けて下さいよ、よう、旦那、旦那つてば！

主人　莫迦！　お前こそ氣を靜めろ！　おれは正氣だ。お前に話したところで始まらんから今迄默つてゐたんだが、斯うなつちや仕方がない、何もかも話してきかすから——その代り決しておれの計劃を邪魔するなよ、これより外に道がないからこそ最後の手段をとるんだからな。

妾　貴方、自分でうちへ火をつけ樣となさつたんでせう、どうして、そんな怖しいことを——私には解らない、解らない！

主人　お前には解らないだらう――だがおれには解りすぎてゐることだ。お菊、今までかくして來たが、實は、今、おれは破産しかゝつてゐるんだ。

妾　え――そ、そんなことが。

主人　本當とは思はれないだらう！、いや、お前ばかりぢやない、仲間の奴だつて未だ誰れ一人おれがそんな危機に立つてゐることを知つちやゐない。だが、事實はどうにもならん所まで切迫して來てゐるんだ。お前達に云つて聞かしたところで解らん話しだから精しくは云はないが、實はある鑛山(やま)へ手を出しておれは非常な負債を負つてしまつたのだ、商賣の方がうまく行つてゐれば決してそんな方へ行くんぢやなかつたが、震災後の不景氣を食つて、金の融通が苦しくなつてゐたもんだから、つひ――つひ、くだらん奴の言ふことにひつかゝつて。取りかへしのつかない事になつてしまつた。今、おれの全財産の殆ど全部は、その方の抵當に取られてゐる。その外に、會社の方の金も十五萬ばかりつかひこんでゐるんだ！

妾　まあ！

主人　今のおれの手に殘つてゐる財産と言つては後にも先にもこの家一つだ。

妾　この家一つ――それより外何にもないんですつて、まあ、何てことでせう。旦那、私、何だか夢の樣にしか思はれませんわ、（泣く。）

主人　ま、泣かないで後をきいてくれ。ところでさういふ狀態におちいつた今のおれに殘されてゐる方策は、この家を處分して、會社の負債を償ふより外はないのだ。會社の金さへきれいにして、今迄通り取締りの位置を保つて行かれゝば、外の方の失敗は又、どうでもして埋めあはせて行ける――おれは今、何より、早くこの家を手放して金がほしいのだ！

妾　急に買手つてないもんでせうか？

主人　ある位ならこんなことは考へない。捨て賣りにでもすると言つたら又、考へる人間もあるかも知れないが、この家を言値のまゝで――十五萬も拂つて買はうといふ相手が、さうおいそれとあるものぢやない。といつて決算期はもう目の前に迫つて來てゐる

妾　で、貴方は、家へ火をつけて、保險金をとらうとなさつたの？だつて……

主人　まあ、きいてくれ、この家にはお前も知つてゐる通り十萬圓の火災保險がつけてある。その外に物品保險も五萬圓つけてある。おれはうちを燒いてそれをとらうと決心したんだ！、なあにもう隨分長いこと御奉公してゐるんだ。貰ひ火で燒けたと思へば保險會社だつて仕方がない。おれはその代り、疑はれない樣におれの一物も出さないつもりだ。道具や着物なんぞは金さへ出來れば何時だつて買へる、この際ほしいのは金だ！　それと一緒にお

れの名譽だ！　折角、何十年來、骨を折つてこしらえ上げた財産を、名譽と一緒に棒にふつてたまるものか。おれは破産した金持が、社會からどんな冷酷な待遇を承けるか目の痛くなるほどみて來てゐる。どんなことがあつてもおれはそんなみじめな道をふむのはいやだ！

妾　そりやそれに違ひありませんけれど――でも、貴方、もし、火つけしたなんてことがばれたら、財産や名譽どころか、罪にならなければならないんでせう。

主人　だから、おれは、それを絶對に解らない樣な方法でやらうと苦心して來たのだ。そして、やつとこれならといふ萬善の策を考へ出したんだよ。御覽、こりや臺所にある火消壺だ。まづ、おれはこの裏へこんなにひゞをいらしたんだ。

妾　まあ！

主人　ところで、消炭をおこし切つた奴をこの中へ入れるんだ。そして、こいつの蓋をはずして臺所の揚板のすき間のあいてる上へ置いとくんだ。十に十、壺の裏へ燃えぬけた火が、椽の下に落ちるだらう、下には下でビール瓶のつとが澤山置いてある、石油の罐もある。石油の手を拭いた新聞紙もおれはあすこに落して置いた、どうだこの風だ！　三十分とたゝない中にこの家は燃え上ると思はないか。――しかも誰がどう調べたつて極めて自然な失火とより見えない方法だ。

妾　まあ、よくそんな怖しいことが考へられましたね。私、怖くつて――いやです、いやです、そんな怖いこと！　思ひ直して下さい！　外に何とか思案して下さい！　そ、そんなことしたら、この家にあるものは皆燒けてしまふぢやありませんか、簞笥だつて、鏡臺だつて、着物だつて、帶だつて、みんな、みんな、(泣く。)

主人　解らない女だな。こゝのところさへきりぬけりや又着物なんか幾らでもこしらへてやると言つてるぢやないか。お前だつておれが破産したなんて言はれちや、昔の朋輩にも面目ないだらう。

妾　(曖昧に。)えゝ、そりや。(間。技巧的に。)でも旦那がもし牢へでも行く樣になつたら、私、猶更世間へ顏向けが出來ませんわ。

主人　だから、萬々そんなことにならない樣に用心してゐるといふのに。

妾　いくら用心したつて、そんなことが知れないでゐるもんですか、知れますとも、きつと知れますよ。旦那、あなた、本當に、魔がさしてゐますよ。

主人　(吐息する。)しかし、おれにはこれより外にこの難關をきりぬける法はない！

妾　ないつたつて、貴方、この場合ぢやありませんか。

主人　この場合だからこそ非常手段を用ひるんだ(再び、立ち上る。)

妾　まつて下さい、貴方――貴方はちつとも私が可愛くはないん

ですね、

主人　莫迦なことをいへ、

妾　いゝえ、さうです、情がないからそんなことをしようとするんです。考へても御覧なさい。もし貴方が牢へでも行く様になつたら、私つてものはどうなると思ふんです。

主人　だから――

妾　（冠せて。）いゝえ、私、お金のことなんぞ言つてやしませんよ、貴方が破産するか、赤いものを着るかつて最中に、誰がお金のことなんかいふもんですか。私のいふのはこのうちの人達のことです。健二さんや桂子さんのことですよ、あの人達ときたら、ふだんから私の事をまるで親の敵みたいに思つてるんですもの、貴方がそんなことにでもなつたら、みんな私のせいにしてしまつて、どんなに私を憎むか解りやしません、殺し位しかねませんわ――そんなこと、貴方はちつとも考へて下さらないで――あんまりです、あんまりです。

主人　大きな聲をするなよ。大丈夫、大丈夫だよ。可愛いお前をそんな破目におとす様なへまなことを誰れがするものか――なあに、火つけこそしたこたあないが、商賣上のかけひきぢや法律の目をくゞつて危い橋を渡つたこと何度あるか知れないお方だ、お前もおれの女ならもう少しおれの腕を信用してくれてもいゝぢやないか。

妾　信用なんか出來ません、外のことゝは違ふんですもの。どうしても貴方がそんなことをなさるんなら、私、大きな聲を立てますよ。旦那が氣違ひになつたつて――

主人　飛んでもない！　そんなことをされちや、おれの計劃はめちや／＼だ！

妾　めちや／＼にした方がいゝんです。貴方に赤い着物なんぞ着せる位なら、私、いつそ首をくゝつて死んでしまひます。

主人　困つたな、

妾　やめて下さい、やめて下さい！　私が可愛いと思つたら、ね、ね、旦那！（居間暗くなる。）

J

再び物置の内部明るくなる。泥棒、B、話をつゞけてゐる――

B　でまあ、おいらも親父の業をついで、堅氣な職人で通して來たんだが、近頃の様に大きな工場がどし／＼建つてきて、安い品物を澤山出す様になつちやかなはねえや、おれ達のお店にしてゐた古い問屋すじがみんなそつちへ商賣をとられてしまつて――殊にや、こゝんとこの不景氣で震災以來のくりまわしがいよ／＼きかなくなつたとみえて、ばた／＼戸を閉めてしまふ始末よ、――さ、さうなるとそのお店で食つてたおれたち下請けの奴らあ上つたりだ、今日にもさしつかへる有樣だから、仕方がねえ、店をしまつ

て、工場でも土木の方でも何でも構はねえ、やとつて貰はうとかゝるんだが、意地の悪いもんでどこへ行つてもおれみてえな志願者があふれる程居やあがつて、何年経つたつておいらの順がまわつて來さうもねえのよ。と云つてうちにも生きものが待つてるんだ、乾干にするわけにやいかねえから毎日、日雇ひ仕事をさがして歩くんだが、うまく行つて働かせて貰へる日は月の中、半分とねえ始末さ、それでも食ふや食はずでゐても秋迄はまだよかつた――この寒さになつて、しみ〴〵貧乏が身にこたえて來た。女房、子を殺して自殺したなんて、よく三面記事にやあるけれど、他人ごとぢやねえ、こんなことしてゐる位ならいつそ死んだ方がましかも知れねえ――先刻、お前に聲をかけられた時も、實はそんな事を考へてぼんやりしてゐたのよ。

A　成程、そこでおれがもちかけたはなしに乗つて來たつてわけか。

B　死ぬよりや、餘程ましだと思つたよ。おれ達みてえに働いても働いても食へねえ人間が、こんな大きな家に住んで贅澤してる奴のものをちつとやそつと頂戴したつて、何が悪いことがあるもんか。こんな盗人が悪いなんて奴あ、本當にひもじい思ひをしたことがねえ奴にきまつてらあ！

A　怖しく氣が強くなつたんだな。まあ、さう思つてせい〴〵勉強してみな。泥棒だつて一つの商買だよ。はたでみる様に楽なもんぢやねえ。こゝの親父みてえな奴あ、おいらのやる事を、眞晝間しやあ〴〵やつてる丈のことよ。さあ、その勢でそろ〴〵出かけ様。この向ふの横町にもう一軒、見當つけといた家があるんだ。

B　あゝ、いゝ心もちにあつたまつた。近頃、こんなかつかいふ火にあたつたことがねえ。

A　(下をみて。)おや〳〵バケツの底が燃えぬけてゐやあがる。うつちやつとくと火事にならあ御恩返しだ、消してつてやらうな。

B　いゝぢやねえか。こんなうち、火事が出たら出たにしとくがいゝや。

A　さうでねえよ、こんな邸にや保険金つて奴がこて〳〵つけてあるもんだ。下手すると焼けぶとるよ。ま、火事場かせぎの外あ、やみくも火なんぞつけねえ方がいゝ。

B　成程、金持ちなんて、どうころんでも、損しねえ様に考へてろもんだな。

A　井戸端に洗濯水がのこつてゐた様だつたな。

B　よし、(外へ出る。)

(物置は明るいまゝ)

K

主人の居間明るくなる。

妻　ぢや、私のいふことをきいて下さるんですね。

主人　(力なく頷く。)

妾　まあ、有難う。それでやつと落ちつきましたわ。

主人　落ちついちやゐられない。火災保險がとれないとすると――今度はおれが首をくゝらなきやならないかも知れない。

妾　ま、縁起でもない！（陽氣に。）大丈夫ですよ。きつといゝ考へが出ますよ。ぢや消してしまひますよ、この火、（水さしの水をもつて來る。）

主人　（默つて、床の敷いてある部屋へ歸る。）

妾　（水をかけながら。）まあ、怖いこと、こんな火でも使ひ樣によると家を燒くかも知れないなんて。うつかりしてると、折角こしらへて貰つたものを皆、灰にしてしまふところだつたわ。おゝ、鶴龜々々、こゝのうちももう見きり時だ。

（物置でも二人水をかけて火を消してゐる。（物置の方の火、殆ど同時に消える。妾、火消壺をもつて出てゆく。）

泥棒A　さて、これでよし、お次ぎの仕事にかゝらう。用心して外を歩くんだぜ。

B　うむ、今度こそ金の顏が拜みてえな。

（物置の内部暗くなる。泥捧A、B外へ出て退場。）

主人の居間に澁面つくつて腕組みしてゐる主人の妾のみ殘る。稍、長い間――主人の居間暗くなる。

再び、もとの闇の中に、建物の輪劃丈、浮き上つて見える。

――幕――

一九二九、四、九、夜

略歴

辻山春子



明治卅六年一月十二日佐世保市に生る、平凡な、しかし意地の惡い子供として育つ。父の職業上、佐世保市、八幡市、直方町、福田市と移轉。

小學校から直方高等女學校、福岡女子師範第二部と進み、大正九年四月から小學校の先生になる。二年半で病氣退職、その後養生しながら好きな藝術の道に精進する。

大正十五年四月愛慾の苦しみの後遂に結婚する。その後も家政や育兒のかたわら、芝居の國への憧憬を捨て得ず、あぶなつかしい足どりで獨り藝術の道を進んでゐる。

「こゝろ」「血潮は荒ろる」を震災前出てゐた表現に、「流れ星」を大阪演劇聯盟の「舞臺評論」にその他「或る囚人」「秋ぎり」を九大劇研究會の「戲曲と舞臺」に發表した。



みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリット
望月百合子譯

第一章——五

『あそこが病室です』とブルウサ夫人は木の間の白陶壁の家を指ざして言つた『日當りのいい美しい小さな細長い部屋は設備が行き屆いてゐる、そこには六つの寢臺が有ます。そして其兩端は消毒室と手術室になつてゐます‥‥彼處にローザを入れませう‥‥あとで見に參りませう病人は一人しか居りません‥‥それから、あれは學校です、託兒所と言つても良いわ。今、彼處から出て來たのは次長のジエルミネ夫人です‥‥遊戲室もあの同じ建物の中に有ます』

彼女は、出迎へに來て會釋した婦人を指した。それは肥つた白髮の婦人で、動作のテキパキした恰好さうな女だつた。

『ジェルミネさん、マドモアゼル・アルディです。この方がいまに私達に新らしい娘をつれていらつしやるでせうよ。アニックさんは御存知ね‥‥この方達に家を見せて上げて下さいませんか？その間に私は子供達に『今日は（ボンジュール）』を言つて來ますから‥‥ではのちほど』

彼女は出來る丈避難者達を、他の人々と一緒に訪づれる事を避けた。それは一方餘りに冷淡さをむき出しにした好奇心と、他方眞面目な同情に對してさへも感じる卑屈さとを避けるためであつた。

彼女は一人で避難者達を訪ねるのを好んだ。彼女はその人々の健康や精神狀態や仕事に就て質問した‥‥彼女は一言で一つの微笑でその人々を安心させることを知つてゐて慰めたり力づけたりした。

『何んてよく整つてゐるでせう。何んて靜かでせう、何んといふ休

息でせう。全くの避難所ですわ!』とアルデイは叫んだ。

彼女は見に來たことを喜んだ。……狩り出された獸のやうなローザはこゝに、お産をする庇護所を見付けるだらう……母親になりさへすれば、かうした女達の賢い用心深さと、注意とは、速やかに彼女達を愉快に生活させるやうにするであらう。

『こゝには幾人位はいれますの?』とアニックがジェルミネ夫人に訊ねた。

『二十人ばかりです、それ以上は不幸にしてまだ收容出來ません。いつでも一杯なんですの。この三倍も大きい家が必要ですわ、そして各區に同じ家が澤山なければ……』

『こんな場所をみつけるのは、むづかしうございます、まあ、アニック、ごらんなさい……』

一番大きな家はルイ十六世式の古い建物で、庭園に向つて窓の列を並べてゐた。そこには部屋——母親達は各々に自分の部屋を持つてゐた——だの、大食堂だの、裁縫だの帽子造りだのの仕事場になつた廣間だの、順番に料理をする臺所だのがある。アカシアやマロニエの木立の點々する綠色の廣い芝生は、子供達の遊び場になつた。木の間がくれに、附屬建物の明るい正面や、赤い屋根等が見えた。白髮の園丁が小路の手入れをしてゐた。

『召使としては、家中で、只あれだけです……あれと私とで、一切の管理をして居りますのよ!ブルウサ夫人は、私共のところに來る不幸な女達が各々、共同勞働を負擔することを望んでゐられますので。御覽の通り、私達は撰つて若い女ばかり收容して居りますの、十五歲でもう母親になつた娘も居りますよ!十三歲の母親なんてのも一人居りますの……その娘はいま病室です。昨日女の兒を死産いたしましてね。一番年嵩なのは二十七歲です。ほら……あの子供達を守してゐる大きなブロンドの娘です。あれの子供はあそこで、輪まわしをして遊んでゐます……ですが學校と病室を御覽になる前に庇護所の事務をお目に御ませうか?』とジェルミネ夫人が言つた。

アニックは、大きな家を通り抜け乍ら今更らに友達が實現した善事に驚ろくのであつた。秩序や清潔や殊に、壁から顏に反射する親しみ深い平和な空氣は、靜けさと希望の中で生活が建直されつゝあることを證明するものだ。到る處で、臺所から仕事場に到るまでみんないそ〳〵と働らいてゐた。活々とした表情が眞直に物を見る眼をかゞやかせてゐた。時としては、扉を開ける前に扉の向ふで高らかに唄ふ聲が聞えたりした。それはブルウサ夫人が自ら敎えたやさしい音律の古い唄で、その唄のメランコリイも陽氣さも子守唄のやうに昔の詩のやうに、健やかなものであつた多くの部屋々々には、小さな花束や綠色の小枝がかざられてあつてお庭や森を思はせた。

ジェルミネ夫人は所長室で帖簿を見せ乍ら言つた。

『貧困や惡の垢の下から、きれいな魂は想像もつかない程速く現はれてくるものでございますよ!少くとも、社會的實涯があんまり深

く、消し難い創痕を刻みつけてしまはないかぎりは！』

『社會的賣淫とはよく仰有いましたわ。規則を設けたり、衛生狀態を改善したりするやうに見せかけ乍ら、社會は事實上、大きな賣淫媒介所ですら。社會が、いま貴女方がこゝで再び浮び上らせよと努力してゐらつしやるこれ等の難破した女達をみんな、本當の敎育も保護をも與へずに、最初は男達の腕に、終ひには漬泥の中に投げ込むのです』とアルディは言つた。

『こゝに來たときの彼女達を御覽になつたら‥‥、出て行く時は、全く新らしい生活へ出發するのでございますよ』

『どの位、出て行くやうになりますか？』とアニックが訊ねた。

『大抵皆です。私達は行く處や、仕事にや夫さへも彼女達のために見つけてやります。‥‥彼女達は身のふり方がつかなければ出て行きません。出來れば子供をつれて行きます。それが出來ない時は、七歳になるまで子供の生活を私達が保證することになつてゐます‥‥さつき子供達の寢室を御覽になつたでせう。四十人分の寢臺がありますの‥‥今のところその中三十七臺が塞がつてゐます』

『私設の救護所は、お役所風をふかす他の公設救護所よりかようございますわね』

『さうで御座ますよ。それに私共では少くとも母親がいつでも自分の子供に會ふ事も、引取ことも出來ますの‥‥ですが、中には孤兒も居ります。かう云ふ兒達には大抵の場合、親を見付てやります。本當の親よりもいい親を。その爲には私達は孤兒院に相談します』

『それはアムブラ夫人の御事業でせう』とアニックは言つた、更らにアルディに說明した。

『ヴェルサイユの貴女の御近所に住んでゐられるブランシュさんのお友達です　‥‥ブランシュさんはアメデエの一番古くからの友達ですの‥‥アメデエが先週、その人達のことを貴女にお話しましたけど、覺えてゐらつしやいません？』

　そのときジェルミネ夫人が言つた。

『ブルウサ夫人がいらつしやいました。あの方は私よりよく貴女方に御說明申上げるでせう‥‥この方々は家を御覽になりました。附屬室の方が殘つてゐるばかりでございます』

『有難うジェルミネさん。お疲れにはなりません？否(ノォ)？私達の入所薄や表を御覽になつて？どう非難して良でせう、え？男性の罪に對して！病室を見に行きませう。そしてお終ひに學校を見ませう』

『全く大したものですわ』とアルディが言つた。

『まあ！私共の學校は、駄目なんですよ‥‥小さな子達には合唱を敎へます。それは規律を敎へるためにはいい手ほどきです。もつと大きな子供達には、母親達が引とるにしても、養子にやるにしても、讀み書きを敎へます。ですが、あんまり早く、子供達は私達から離れて行つてしまひます‥‥』

『でも、若しその子供達が大きくなるまで貴女がお世話なさること

が出來たら！　その子供達みんなに、メレットや貴女のやうなお母さんが必要なんですわ！何故つて、小學校の先生方の立派なお仕事も、學校の敎へも、家庭のお手本なしでは…』とアニックが言つた。

『全くです！』とアルディは吐息した『敎育は躾の一部分表面的部分！でしか有ませんもの！そして其基礎になる道德は、大抵の男達女達にも！にとつて、單なる言葉の上の問題でしかないのです』

『さうです。美しい言葉と、汚い行爲の…傳統的であれ、革新的であれ、宗敎的であれ、世俗的であれ、唇の宗敎から、心の宗敎までは遠うございますわね…』

『それは世俗的道德が若すぎて、宗敎が古すぎるからですわ！最初から偶像崇拜の習慣がついてゐる人々に、すぐ思想に忠實になることを要求することは出來ません。道は遠いのですもの。テイプラクイまでも遠いのですわ…』とアルデイが元氣よく言つた。

　その時、一行は病室のある建物の閾に來てゐた。白衣をコケットに着こなした一人の看護婦が彼女達を待つてゐた。

『醫學の學生で、小さな女の子の母親です』とブルウサ夫人はアルディの耳に呀やいた。

　アニックは看護婦と先に立つて消毒室から寢室に這入て行つた。

『ミラさん――私達の看護婦の名です――は、今自分の運命と母親であることゝに非常に滿足してゐますの』とブルウサ夫人は耐壓浸漬器の前に立止り乍ら言つた『相當な家の娘ですが、ある惡い奴の約束を信じたのです。私はあの女を姙娠するより前から知つてゐました。私達の扉は、他の扉があの女のために閉まつてしまつた時に、開かれたのですよ。そんなわけですが、彼女は何も口惜んではゐません、あの女は、私達から別れて行く時は、望み通り、看護婦として獨立できることを知つてゐます。ともかくも、立派に娘を育て乍ら、生活を得ることは出來るのですよ…それに、子供のことでは申分ない母親です…自分の赤ん坊に對して愛も誇りも感じないやうな過失の母親ではないんですよ…あゝ！若しそれがどんな搖籃であつても、その周圍に、世間の同意と、法律の助力とがあつたなら、若し母性といふものが、どの出產も喜びとして迎へられる程に、尊重されたなら、私はこの店を閉じることが出來るでせうに、私達は出產の危機で苦しんでゐますのに、國家は眞先に立つて墮胎でなければ、マルクス主義を强制するのですもの！』

『だが、墮胎をすれば殺人罪に問はれます。私にはそれが分りませんわ…勿論墮落をいいとは思ひませんけど…何故つて私はどんな形の自殺も不贊成ですから…併し生れたばかりの嬰兒を生かさうと生かすまいと自由ですわ…母親のお腹の中にゐる子供は全く母親の自由ですもの』

　アニック程自由な氣持ちを持たないブルウサ夫人は言つた。

『それは極端です！　併し私はアニックの大膽な言葉を聞いても、ちつとも驚きませんよ。アニックは卒直主義だから。でも私はアニック

を知つてから三年になるけれど、そしていつも變らずに愛して來たけれどまだ時時、アニックの醫學生の樣な言葉には慣れませんね』

　アルディは肩を一寸上げた。

『でも貴女も私と同じ御意見ですよ！ 科學や、アニックの正確な言葉は、神祕と危險を持つた僞善よりもよろしいですわ。若し物心がつく年頃になつたらすぐ――子供は早くから物心がつくものです！―どうして、何故、ものごとが、起るか、殊に人類の永續が何によるかを敎へたら、恥ずべき訴訟も、病氣もなくなるでせうに！そして性道德や、規律や、健康がもたらされるでせうに！迷信の代りに宗敎が！……カトリック敎は、葡萄の葉とヴェールとで原始的裸體を變形させることで、どれだけの害惡を流したことでせう！私は、私達の自然史が、花の器官と繁殖とを描寫し、人間生活の祕密に幕を閉ざすのを思ふと！ねえ？』

『さうです。それや馬鹿げてゐますわ』とブルウサ夫人も言つた。

『私が、この重大な問題を、初めて生徒達に話した時――それは十五年前、イヴリンででしたが――父兄達は私の處に怒鳴つて來ました。いまでもその時言はれたことを覺えてゐますが、その中の一人はかう云ふのでした。

『貴女は氣狂ひか墮落女かだ！』そして視學は私に警告を發しました。けれど結果はどうでしたか！ブルジョア階級の息子達は、青春に惱む頃になると、いかゞわしい場所に行きます。そしてすつかり女に對する感情を汚されてしまふのです……娘達は娘達同志で下らない遊びをし始めて、それが息子達の手に落ちるのです……けれど田舍には、少くとも自然のお手本があります。この點では、獸は人間よりもいい敎訓を與へます』

　二人の女は、かくも速く、かくも完全に友達になつたことに感激して、互にみつめ合つた。

『よく分りますわ！』

『おや、アニックがゐませんね！』とアルディが言つた。

　ブルウサ夫人は寢室の扉を押して、『こゝにゐますよ』と言つた。彼女は看護婦と一緒に、たつた一つ塞がつてゐる寢臺をかこんでゐた。その寢臺には蒼白めた小さな顏が、枕の上に三つ編みの髮を亂して、休んでゐた。二人はその娘の話をきいてゐた。彼女は恐ろしく無知で、どうして小さなくせに、家族雜居の中で、兄から墮落させられたかを話してゐた。それから十一歲で、酒屋の女中になり、酒倉で主人と遊ぶ習慣がついてから、どうして病氣になつてしまつたか、お腹に何があるか知らなかつたといふことを……。

『それは、旦那さんが、いつものやうにやさしく遊ばないで、私を酒樽の上に押し倒してて、迚も痛い目に遭はせた日からです……』

『だけど』とアニックはアルディと、ブルウサ夫人が丁度そこにはいつて來たとき訊ねた『ぢや誰もあんたに、そんなにして遊ぶやうになる前に、それが惡いことだ、そしてかう云ふことになるつてこと

を言はなかつたのね？……』

小娘はアニックを無邪氣にみ上げた。

『えゝ！お母さんが一遍、兄さんとさうしてふざけて遊んでゐるときに不意に私をつかまへて……でも私はお母さんがお父さんと一緒にもつとひどく體をゆすつてゐるのを見てゐたものだから、信じなかつたの……』

『だがいまは、お前は私を信じるだらう？』

とプルウサ夫人が命令的に言つた。

『えゝ、きつと！私はお腹を割かれたとき、あんまり恐かつたんですもの』

死んだ子供については、彼女は何んにも思はなかつた。彼女は只クロロフォルムの麻酔にも拘らず、手術の恐怖を覺えてゐた。そして吐息した。

『あゝ！ラーラ！もう決してしません……』

アニックは夢みるやうにそこを離れた。アルディやプルウサ夫人の顔に表はれた厭惡よりも、もつと激しい同じ怒りが、彼女を摑み、全身を浸した。滿潮のやうな苦さが、あらゆる肉體的恐怖を彼女から一掃し、更らにまた彼女に迫つた。彼女は拂ひのけやうとした。と同時に自分の上にのしかゝつたルポオの顔を押しのけたあの混亂の瞬間を思ひ出した。

彼女は思ふまゝを口に出した。

『だがこの娘はあの主人の名前を言つた……そんな奴は追究する價値がある！』

『たとへその男に妻があり、子供があつたにしても、私達はさうする處だつたのです……けれど私が調べ始めた時は、既にその男は死の床にゐたんです……何かの災難で……偶然と云ふものは時として都合よく物事を運ぶものですね』とプルウサ夫人が言つた。

『いいえ！私はアニックと同じ意見です。こんな罪惡は最も見せしめになる罰を加へらるべきです……若し正義があるなら……幸ひにこゝに未來があります！』とアルディは丁度その前に來た學校を指ざし乍ら呟やいた。

小さな男の子や女の子の群は芝生の上で遊んでゐた。……

『これがそれを殺すのを待ちませう！私達にとつて、日毎に成長するこの父無し子達の群は何んといふ新兵達でせう……この子達は今日まだ、金庫のまわりを護つてゐるブルジョア社會の苛酷な警戒のために、家族からも相續からも放棄されてゐます！相續は、怠惰と搾取の第一のものです！みんなからそれを取り去らなければなりませんわ。けれど私は、昨日貴族院で、馬鹿者達の多數黨が、大家族や、徴兵、税金には遠慮しない私生兒等に對する扶助案を否決し得たことを思ふと！何んて慘なことでせう！……辛棒してゐるうちには勝つでせう。いまにあの出しやばり屋共も法律を變へずにはゐられなくなるでせう！……』

アニックはアルディに微笑を向けた。激しい信念が、大河となる泉のやうに力強く彼女の中に沸騰した。そこに、止むを得ない屑であるとは云へ、がつちりと、健やかな苗木のやうな成長する子供達をみて、彼女は希望の熱情を感じた‥‥唯一許され、認められてゐる法律上の親子關係に對立して、それと平等に私生的親子關係を引き上げなければならない！

彼女自身が第一番に手本を示すだらう。彼女は好みに從つて、自由に愛すだらう。そして子供達を産んで、その子供達にこそ本當に生命を與へるだらう――自分の名前も與へるだらう。彼女は誇らかに、いつかは可決されるだらう法律を實行するだらう。その法律を造り上げるためには、彼女はジヤクマンを推した。彼女はその必要と正しさとは、早かれ、遲かれ認められ、實行されるであらうことを疑はなかつた。

『子供は必ず公式に母親の名前を持つべきものでせう。さうすれば戸籍がその記述でつまり『父不明！』の文字で卑しめる者達に對する偏見は消滅するでせう。それから、出來るだけは義務として父の名が戸籍簿にも抄本にも記入されるでせう』とアニックは結論した。

樣々なことを多く經驗して來た年長のベルウサ夫人は、やゝアニックの飛躍をゆるめるやうに言葉をはさんだ。

『若し子供が不義のものであつても？』

『殊に』

『では父親の詮索の強要に氣をつけなさい！もつとよく組織された社會が、母親達に、男がゐなくてもいい程の、誇りと資力とを直ぐから與へるやうになるには、まだ／＼時間がかゝりませうが、それをどうします？』

『私としては、父親の名前が記入されることなんか絕對に必要ではないんです、それはジヤクマンさんのお考へです。』

『では、母權主義なの？‥‥それなら、母權主義でやつてごらんなさい！少くともゼロノフは反對しないでせうよ。若し最初に母系制度が行はれた時代があつたことが本當だとすれば、私達は出發點に歸ることになるのでせう！』

『過去の經驗に依つて集められた荷物をみんなもつて！』

とアルデイが言つた。彼女の眼はかゞやき、聲調は高まつた。

『進歩です！これが、常に人類が同じ所を通つてどう／＼めぐりをする、切れ目の輪だと主張するのは盲です。いいえ！未來に向つて行く道は、死んだ宗教の表象や、自ら尾を嚙む蛇には似てゐません。その道はきつとぐる／＼まわつてゐるでせう。けれどそれはだんだん高くなつて行きます！それは螺旋形です。‥‥‥時としては九折路をどう／＼めぐりするやうに思ひますけど、それは間違ひです。進歩したのです。高く登つたのです！』

彼女達は默つて學校の窓に沿つて步いた。

この老女教師は熱心に、古代文明以來、よぢ登られた激しい苦惱

を、想像した……女丈夫や女王達をもつアジアや、女も男も平等であつたエヂプトや、市民をもつスパルタや、遊女達をもつアテネや、ローマやその貴婦人達や、かうしたあらゆる有史以前及び有史以來の時代を……それから北方から、腕力の強い蠻粗人達を轉がして來た暗よりももつと野蠻な暗の中に、キリスト敎の黎明の靑白い微光を消してしまつた處のカトリツクの貞潔と僞善が侵入すると共に——奴隷時代が來たのだ。ヨーロッパ人はすつかり墮落してしまつた。長い地獄であつた。その地獄の上に、革命の太陽は十八世紀間かゞやいた！……それから步調は速くなつた。百年足らずの中に、女と市民の權利が、男子の權利の特典に對立してオリムプ・ド・グウジュに依つて形作られ、世界中に深くも轟き渡つた。そのために至る處、フランスの三分の一を除いては、地平線が俄かに幽閉されてゐる者の前に展がつた。世界の半分は、前衞軍が犧牲になつて戰ひ、苦しみ、思想と體とを獻げたこの思想を受容れて、皆に平等の權利を認めたではないか？イギリスに於て、スイスに於て、デンマルクに於て、イスランドに於て、フインランドに於て、女は選擧人であり、市會議員であり、代議士であつた。獨逸は、チエッコ・スロヴァキアも、オースタリイも、ハンガリイも、ベルギイも女に投票權と同時に政府の事務にその門戶を開らいた。大戰前既に三十六州が婦人に參政權を與へてゐたアメリカでは、一九二〇年以來、聯合法律が女權主義の決定的勝利を確定した。たゞヨーロッパに於ては、ラテン系の國だけがその舊習を固守してゐた……

アルディは最初の火の手が迸り出た國が最も非進化的であるのを悲しく思つた。大戰中のフランスの女の偉大な勞苦は、空しく、あらゆる仕事に於て、兵士の努力を倍加させたのみだ！

やさしく、彼女は希望をこめた視線で、一步先を快活に行くアニックを包んだ。太陽は彼女の柔らかな卷毛と、栗色の首すじを黃金色に。染めた可愛い大きなアニック！

『つまり』とプルウサ夫人は結論した『創痕は、要するに聖書物語りなんです！アルディさんの仰有る通り。原罪といふ不條理な物語りをもつパイセルの傳說は、棄てしまふべきものですわ。試みたり、罰したりするあの意地惡な神の發明は、いつも私に反感を持たせました。惡の木にしたつて、假りにイヴだけが禁斷の木の實を第一番に嚙んだために、罪があるとしても、イヴは男が持たなかつた好奇心を十分拂つたんです！……失はれた樂園？併しまあ、魂の罪のためには何んて好都合な計略でせう！そんなものは惡魔のところに探しに行けば、すぐ見つかりますよ、あんなエデンなど！……』そして更らにアルデイに微笑を向け乍らつけ加へた『イヴがそこにアダムをつれて行くのを待つてゐる間に、いつでもそのローザを私のところに寄越して下さい。寢臺の用意は出來てゐます。いまは彼女が來るのを待つばかりですから』

婦人彙報

△京都帝大の結婚媒介

京都帝大學生主事岸與祥氏は學生の將來のために今度結婚媒介を始めた。大學での結婚媒介は全く新らしい試みだけに大學内でも一般社會からも非常に注目されてゐる。割合に好成績で、近く九大でも同樣の方法で結婚媒介を始めるとのことである。

△カフエー取締を建言

夜遲くまでカフエーを開けておくために、靑年や學生をして身を誤らしめることが多い。この際カフエーの時間を一層制限することを當局に建言してはどうか、といふことが目下丸ノ内電氣クラブに開かれてゐる六大都市靑年團役員會に、大阪市靑年聯合團から提案された。若しこの案が通過すれば六大都市のカフエーから實現してこれを全國的に押し廣めようとするのである。

△文理科大學に五人の女大學生

本年度から愈々大學に昇格した東京、廣島の兩文理科大學は來る四月二十日から授業を開始することになつた。女子の多數の志望者の中から成田しも、西田松代、赤木志津子、加藤とき、趙慶喜の五名の女性が東京文理科大學の入學試驗に合格した。

△文筆派出婦人會

婦人の新職業として「文筆派出婦人會」なるものが生れた。文藝春秋社菊地寛氏が主宰するもので、十二名の女性が斡旋方をつとめるとのことである。因みにその仕事と定價表は、

△口述筆記三圓(半日半額)△編輯校正三圓(同)△原稿淸書一枚拾錢△臓書整理三圓(半日二圓)△手紙及封筒執筆及發送二圓(半日一圓半)△飜譯一枚三十錢から五十錢△原稿代讀一册五圓から十圓△名家訪問引受十圓

△國際聯絡婦人委員會組織

婦人運動の國際的聯絡機關が必要になつてきて、昨夏以來全國的團體の代表や有志が準備會の數を重ねた結果、政治、保健、敎育、勞働、社會事業、社會運動等に屬する各方面の代表十八名を委員とする國際聯絡婦人委員會が組織された。辻松子女史を委員長に、ガントレツト女史を副委員長に、市川女史を書記に、德永女史を會計に推薦したし、この八月サンフランシスコに開く米國社會事業大會出席者の件と、六月ベルリンに開く萬國婦人參政權協會二十五年紀念大會の件について相談があつた。

△公娼廢止法案否決

十九日本會議に於ての安部磯雄氏提出の公娼制度廢止に關する法律案は委員付託に廻されたが、二十二日委員會にて原案否決された。

△二十四で下院議員に當選

倫敦、ノースラナークシヤ選出保守黨下院議員サー・アレクサンダー・スプロツト氏死去による本日の補缺選擧に於て勞働黨候補ジエニー・リー孃が壓倒的最高點をもつて當選した。リー孃は坑夫の娘で本年二十四才の若年、熱心な政事學徒である。

△五年勤めた娼妓は解放

松本市外横田遊廓貸座敷業者は今度五年以上勤めた娼妓を毎年四月無條件で解放することになり、四月五日まづ第二柏來樓娼妓石島菊枝外九名の前借金總計六千圓を樓主側から棒引とし解放することゝなつたが、解放後歸宅出來ぬ事情ある者には赤羽松本署長が就職を斡旋し十名とも全部解放後の進路が決定した。無條件解放は長野縣では始めてである。

△商賣出來ぬと泣く花魁

新宿遊廓鈴岡樓抱え娼妓新田とみといふ花魁は三年前前借千三百圓で住み込んだがいつも自分の懐に入る玉代は妓夫、やり手などが結託して分配してとみの手には五錢か十錢の僅の金しか入らなかつたが最近此事を知つて妓夫やり手を對手に大喧嘩それ以後はとかく同女對手に登樓する客に邪魔をされるので近頃では全く商賣も出來ない有樣で困りぬき三月廿一日新宿病院へ行くとて逃出し警視廳へ馳けこんだ。警視廳では同女を歸樓させ樓主を呼び出して取調中。

△女學生が空中密航

米國オークランドのグエン・ホントンと呼ぶ十六歳のハイスクール女生徒は大飛行機パトリシアンに乘つてオハマまで密航に成行したが婦人の密航は同孃をもつて嚆矢とする。パトリシアン號は先週ロサンゼルスからリンドバーグ大佐がオークランドまで試驗飛行をした十人乘りの飛行機である。

△太陽光線療器

府立第六高女では女學生達の保健のために、同校々舍の屋上運動場に太陽光線療器を備付けた。太陽光線療法は紫外線療法であつて二尺四方位の窓にレンズ筒を取付け、そのレンズより光線を通し、

赤外線を遮斷し紫外線のみを患部にあて之によつて治療するのであるとのこと。

△英國總選擧立候補婦人

來る五月三十日を以て擧行される英國下院總選擧には女性で立候補する者が多數ある模樣で、しかも二十代の女性が多い。これは現保守黨内閣のフラッパー・ボートによつて婦人の選擧權が擴張されたことによるもので、今回の總選擧は女性の力によつて甚大の影響を齎すものと見られてゐる。今のところ此等女性のうち立候補若くは選擧運動に携つてゐる主な人は十數名に上つてゐる。即ち、イーストグリンステツト區から立つのはバーバラ・ブリス孃、父親に替つて立候補するのだが同孃はギルトン大學經濟學部を卒業した人である。現議員として再び立候補するものはアイザィー伯爵夫人があり、これは令孃ギンネス夫人の後援で出馬する。オクスフォード大學を卒業したシルヴア・ノルトン夫人は自由黨から立候補、二十五歳のアイダ・スインバーン孃、またリヴアプールの小學教師で二十四歳のスチユワード・バーネル孃、同じく小學教師で勞働黨から立つジエユーリー孃があるが、この人は祖父も父もスコツトランドの勞働運動で有名である。次にギリシヤ首相ヴエンゼロス氏の姪ヘレン・シリジー孃はノーサンプトン工場地から。だがその中で最も注目されてゐるのは自由黨首領ロイド・ジョージ氏の令孃メーガン・ロイド・ジョージ孃でもちろん自由黨から出馬する。

△東京モスの爭議惡化

東京モスリン株式會社の吾嬬請地の吾嬬工場では四月一日全從業員二千四百名が怠業狀態にはいつてゐたが、三日には工場閉鎖を斷行し更に四日夕刻職工七十二名に懲戒解雇を宣告した上、さらに女工約四百名の解雇者を出さうとしてゐる。爭議團側の要求條項は

一、現行賃銀支給の舊制復活
二、深夜業禁止に關する保證
三、寄宿舍設備の改善
四、慰安會開催
五、食事改善の決定
六、小南工場等の責任自決

爭議の原因は昨年十一月會社が賃銀支拂制度を改正して半日給制度としたので爾來職工側の不滿は堪えず四月二十五日要求書を出して會社に一蹴された事による。會社は爭議勃發以來全女工に歸國を強要し、寄宿舍の窓硝子にペンキを塗つたりして挑戰してゐる。

△外國婦人と結婚すれば免職

トルコでは最近外國婦人を細君にする者がだん〳〵増加してきた驚いたアンゴラ議會は「外國の女と結婚せんとするトルコ官吏は速に依願免官の手續きをとること」といふ官吏雜婚禁止法を可決したその結果外國婦人と既婚の官吏連も早速辭表をださねばならぬ悲劇が持ち上つてゐる。

△紡績工場を調査する英國婦人

△日本で最も樞要な産業、紡績工業を見ると工場監督には昨年たつた一人女子大出の落合せつ子氏だけが監督監補として任官された有樣だが、英國婦人で昨年十二月から日本へ來遊して、つぶさに紡績工業工場を調査し、五月上旬歸國する婦人がある。それはフレダ・アトレイ孃でロベドン大學にてローマ史を研究しマスター・オヴ・アーツの學位をとつた婦人であるが目下麻布笄町の日本造りの二階家に自炊しながら各紡績工場に行つて勞働事情や工場の設備その他に亘つて調査中である。

△教育界に四十年
力女史の光榮

東神奈川にあるミッション・スクール・捜眞女學校の名譽校長クララ・エー・カンバルス女史は日本へ來てすでに四十年、教育、宗教事業のため盡して來た功勞により藍綬褒賞を賜つた。同女史は明治二十三年一月來朝してから幼稚園小學校をおこし、關東學院にも盡力した人で本年七十三歳である。

△苦學して專檢合格の八十人

日中は女中、交換手、給仕、女工その他となつて働く女性を收容する愛國夜間女學校本科簡易科の本年卒業生の中には卒業前すでに專檢にパスし、尚ほ文檢に志してゐる人もある。その一人は臺灣銀行簡易保險局の事務員で母と弟を養ひながら昨年九月に專檢にパスし、首席で卒業した。一人は株式取引所に勤務して一家を養ひながら四年間通學し、二番で卒業した人は帝國火災保險につとめて勉強した特志の婦人である。卒業論文の中には「婦人參政權の是非」といふ題で「婦人參政權は熱烈な多數婦人の要求であると叫ばれてゐるが、自分の周圍に見る婦人はそんな要求をしてゐる人は更に見ない、パンのみを切實に要求してゐる」と、無產婦人の生活を如實に語つたものもあつた。

編輯後記

「全女性進出行進曲」に振つて應募して下さい。これはメーデー歌のあるごとく、勞働歌のあるごとく全の女性を鼓舞する元素だと思ひます。賞金はすくないが、各社が應援して下さるに見て〻意義あることを認められてゐます。元氣のあふれたものがほしい。田園で偶然に口に出たのでも、雜巾がけをしながら出たのでも、それが詩でないとなんていへませう、どんな字の恰好でもいいから、思はず溢れだしたものをよせて下さい。新興日本の新女性の意氣をこの行進曲の作歌に示して下さい(時雨)

『女人藝術』内外のことは益々多事多端となる。しかしこの間に、内部のものはいろんな意味でいい訓練を積みつゝある。そして私もまたさうだ。すでに私たちの道は險阻つれならぬ行程をたどる。かういふ風になると益々しつかりしてと相共にいましめ合ふ。しかし一面大に浩然の氣を養はうとあつて今月は、甲府、松本、上諏訪に向ひ、ヨキ以上の效果をおさめ眞摯なる、同感と共鳴とを得て、一行何れも欣々力づけられたことであつた。あの土地の人々の好意に對して心より感謝せずには居られない。信州はじめ甲州は讀書のさかんなる土地である。若き人々の批評には嚴正なものがあるのだ。『女人藝術』一行がその批評の前にたつて見たことは愉快な事だつたのだ。(花世)

松本行の汽車の中からおろす番の人に出したみんなの寄書の葉書を御紹介します。「よき聽衆とよき辯者、若さはげによきものとよろこびに絶えず。女人藝術よ、若人よ、幸あれ、時雨」「今井邦子と私達は西へ東へ、西にも雲東にも雲、花世」「歌を唱はふとすれば聽衆(力學的に願ひます)私壇上にゐるのも忘れて(今度は理論拔ですよ)と申しました。中本。」「盛會で喜んでゐます、文字通り聽衆堂にあふれ……です、百合」「今日はおしやかの誕生日です。女人講演はおしやか樣より一日早く生れました、いい景氣。素川」「御嶽へは雨でゆかれませんで大變に惜しい。ぶどうはしはだらけの顔で店頭に秋の頃をと語はてゐます。みどり。」「昨夜は素振しい盛會、櫻は今がさかり道は思ひがけないお花見で一同およろこび、菊子、」以上、みんなほんとに滿足しました(みどり)

女人藝術の最初の講演會が、非常な成功だつたので、みんな嬉しがつてゐる。種々お骨折頂いた甲府、松本、上諏訪の皆樣へ一同に代つて厚くお禮申上げます。しかし、私自身は山も好きだし、お湯もきれいなのに關はらず救はれ難い憂うつだつた。出掛ける前に忙しくて準備の出來なかつたことを幾度か言譯したが、熱心に來て下すつた方に對して、無責任の批難は逃れられない。編輯のことなどは、やつぱり出來上つて雜誌で見て貰ふに限る。一冊が全部だと思はないで雜誌を愛して下さる氣持を希望したい。口不調法の私はこゝで、今後かういふ無責任を繰り返さない誓をすると共に、お禮とお詫をいたします。(素川)

全女性行進曲、女人聯盟の反響は大きく、編輯室は活氣に滿ちてゐます。愛讀者の方々の本誌に對する御感想や希望などそれは隨分新鮮な面白いものが多く、參考になるものが多くありますが、誌面の都合で掲載することが出來ないで殘念です。(秋子)

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割增の事。

昭和四年四月廿日印刷
昭昭四年五月一日發行
(毎月一回 一日發行)

發行者 長谷川時雨
編輯者 素川絹子
印刷者 生田花世
印刷所 日淸印刷株式會社

東京市牛込區左内町三十一番地
發行所 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京七五八二五

大賣捌 東京堂 大東館 北陸館 東海堂

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和四年四月十七日印刷納本

第二卷 第五號
定價金四十錢（送料金一錢五厘）